ほんわかエルフのダイアリー

氷桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ほんわかエルフのダイアリー

【Ｎコード】
Ｎ８５６９Ｌ

【作者名】
氷桜

【あらすじ】
素の能力と容姿は平均的なエルフ娘、でも魔術と精霊術のバージョンアップが大好きで好奇心旺盛。意識を失った時には神をも越える力を発揮すれど田舎の村じゃ浮きまくりっ、付けた自称はトゲエルフ。とある事情でエルフ里を出ることに。心機一転選んだ職業は冒険者。どこか天然娘の未来はどっちだ！

初ページ目

ほんわかエルフのダイアリー

初ページ目

とりあえず、こんな気が抜けたサイダーのようなタイトルにしておけば読むような酔狂な者など居ないだろう。
この日記帳にはわたしが創った魔術式なども載せて行く予定だから万が一、何らかの理由で日記帳がわたしの手を離れてしまった時を考て、極力他人の興味を引き付けないようにと気を使ったタイトルにしておく方が無難だろう。

わたしの名はリアファリナ、精霊術と魔術を修め武者修行の旅に出たトゲエルフよ。

うん？トゲエルフとは何だって？
簡単に説明するとね、少しばかりトゲトゲしく育ってしまったエルフという意味よ。
まぁそれはもうどうでも良いでしょう？　この日記を読み進めることで追々理解してって欲しい。

さて記念となる最初のページには、わたしが里を飛び出した所から、この街にたどり着い

た所までを書くとしようか。
そうだ、せめて日記っぽく書き始めるわね。

その日、世界は広くどこまでも青く、山々は新緑に萌え、紅く沈む夕日は美しかった。

こんなこともあろうかと準備してたこともあり、持って行く荷物は通称四次元ポシェットと愛用の双剣を腰に吊るだけ。
わたしはエルフにしては珍しい魔導師で、魔術式や魔法具を創り出す職業に就いている。
手荷物は魔術式で無限に物を詰め込めるように創ったポシェットへ詰め込んである。

「さてと、これで生まれ故郷ともおさらばだと思うと、感慨深いモノがあるわね。」

両親に別れは？とチラリと考えがよぎったが、すぐにそう思った自分をちょっと笑った。

「ま、やっかい払いが出来てちょうど良い頃合だったでしょうしね。」

そう言ってクルリと振り返ると、そこにはものすご～く怪しい機械が重なっている。
機械。この世界には科学知識が全くといって広まっていない。
エルフの里はご想像の通り、辺鄙な森の中に在る。
そんな中で科学知識を駆使した機械を創る魔導師のわたしが溶け込めるハズもなく。
この旅立ちは必然だったと言えるだろう。

それでもお互い見ない振りで過ごせば平穏だったこの村に二日前、山賊達が襲い掛かって来たのだ。
総勢３０名程だったが、わたしがセキュリティーのために設置したストーンゴーレム達に軽くなぎ払われてしまったので、村に被害はなかった。
おそらく、それで終っていれば、わたしは村の人達に感謝されたのだろう。

ストーンゴーレム達は、それまで魔道エンジニアを自称したわたしが調子に乗ってあれもこれもと魔術式を詰め込んだ歩く戦略兵器で、普段は岩に偽装しており村人さえも気付いてなかったようだ。
何のドラマもなく駆逐されて終わりになるはずだった対山賊戦は、

彼らの中に一人の精霊
使いが混ざっていたことで、わたしに取っての悲喜劇に変わった。

ゴーレムは、あらかじめ組込まれたアルゴリズムに従って決まった
行動を取るように創ら
れてる。精霊術で攻撃を受けたゴーレムは、対精霊使いの攻撃アル
ゴリズム通り、魔術式
『対精霊空間』を起動させた。

『対精霊空間』
これは一定範囲に居る精霊を追い出し、呼び出せないようにする魔
術式である。
この魔術式の前では精霊使いはタダの人となってしまうのだ。

この世界には精霊が呼び出せない領域というものが少なからず存在
する。
自然の風が吹かない洞窟の中では風の精霊が呼べない。
石畳などの人工物で作られた道では地の精霊が呼べない。
闇の中では光の精霊が呼べない。
それはなぜか？
思うに、この世界ではそういった謎に対するナゼナゼの深堀が全く
為されてないようだ。

でも、わたしは違った。
この世界にエルフとして生まれ、”向こうの世界”に存在しない精霊というモノを知った時、
そして魔法という新しい概念と技術がこの世界に存在すると知った時に。
ある意味執り憑かれたと言って良いだろう。
それらを欲し、そしてより深くより深くそれらを求めた。
そうして精霊についてのアレコレをほぼ解明し利用するまでに到っているというわけだ。

話を戻そう。
『対精霊空間』に恐れおののいたのは実のところ山賊ではない。
わたしのゴーレムを敵に回した不幸な精霊使いは、はたして己が死ぬ前に精霊が呼べなくなった事を気付けただろうか？　今となってはどうでもいい事だけど。

そう、ここはエルフが住まう村なのだ。
わたしがそうであるように、エルフと言えば精霊使い。精霊使いと言えばエルフ。
そんなエルフ達が『対精霊空間』をどう見るかなど、ちょっと考えれば判リ切った事だ。
ゴーレムを創った時、わたしはそこまで思い至らなかった。
自分の新しい発想の実現化とそれがもたらす効果しか考えて居なかった。

襲撃者を返り討ちにしたわたしに村人達が見返りとして与えたものは畏怖の眼差しだった。

とりとめ無い記憶の反すうを止め、わたしは今までに創った作品を最後にひとつずつ眺め

「それじゃまたね？　ふふ、アデュー、わたしの可愛い子供たちv」

わたしの魔術式は特殊だ。この世界に同じ物が他にもあるのかは解らない。

その中からひとつを選び起動する。

『飛翔』

この魔術式は風を操って魔道の翼で飛ぶのではない。

術者の周りに力場を張りその推進力で空を翔るのだ。

わたしは研究室兼自宅としていた洞窟を飛び出し一気に大空へと舞い上がる。

あっと言う間にエルフ里が小さくなっていく・・・・

わたしの住まうエルフ里はティルトの村と言う。
はじめに切り開いたご先祖様がティルトという名だったらしい。
ティルトの村はラクト山脈の東側に広がる名も無い森の中に在る。
その森を眼下にわたしは大空を西へと、子供の頃から何度も眺めていたラクト山脈の峰を
目指して翔んだ。

小一時間も翔んだだろうか？　わたしは生まれてからこれまで遠出はしたことが無い。
これまでの人生は、魔術式を創り、そして魔術式を編みこんだ作品達を創ることに情熱の
全てを傾けて来たせいだ。
生まれて初めて山の頂上から見下した雄大な景色は、記憶の隅にあるもう一つの人生でも
見たことが無いほどに色鮮やかで感動的だった。
もしかしたら、エルフという種族が持つ優れた感覚世界のせいで、余計に美しく観えるの
かな？とチラリと思った。

どれくらい見惚れていただろうか？　気付くと太陽は西に大きく傾いており、群青の空に
茜色が混ざってこれもまた言い知れぬほどの美しい景色へと移り変わっていた。

「やばっ！今日寝る所を探さなきゃ！村を出たその日の内に舞い戻ったらカッコ悪すぎ。」

わたしは気付けば太陽を追い掛けながら『飛翔』していた。
翔びながら、少しずつ昏くなっていく世界を飽きずに見続けてた。

太陽が完全に隠れた頃、眼下にはここまで続いてきた大地と、暗く広がった海とが分たれ
ている場所へとたどり着いた。
とりあえず何かないかと周りを見渡す。
西に向かって翔んで来たわたしの左手、南に目を凝らせば大きな河が見える、その向こう、

「あれは明かりかしら？　街かな？　き～まりっｖ　今夜はあそこで過ごそうっと。」

そうして、わたしはこの街へとやって来た。
アイゼンワード帝国の港街、アイゼリアに。

何かを期待していたわけじゃないけど、自分の胸が高鳴っているのを感じてる。
自分の人生で、新しい扉を開きこれまでとは違う一歩を確かに踏み

出したのだからっ！！

初ページ目（後書き）

はじめまして＾＾
少しずつでも投稿して行きます。

2ページ目

2ページ目

わたしの名はリアファリナ、精霊術と魔術を修め武者修行の旅に出たトゲエルフよ。

トゲエルフよ、トゲエルフよ、トゲエルフよ・・・・・

「トゲエルフよ。。。　ああぁぁぁ～　恥ずかしい～～／／／／／／／」

ナニがって？

「それって結局ツンデレエルフといっしょじゃないのーっ　／／／／／／／／」

そうなのだ、エルフの亜流を自他？共に認める　わたしは新種族トゲエルフとなって世界
に一大旋風を巻き起こすハズだったのだ。
それがまだ2ページ目にしてはや理論の穴に気付いてしまった。

「ダメだ、いくら考えてもツンとトゲの違いを、素人さんに理解してもらえそうにない。」

時間は少しのぼる。
この街、アイゼリアにたどり着いた夜、わたしは泊まる場所を探していた。

「もちろん宿屋じゃないわよ？　って誰に説明してるのかしら。」

そうなのだ。この世界にも通貨が存在しているが、生まれて初めて村の外に出たわたしに、
このアイゼンワード帝国内で流通する通貨など持っているハズもなく。
なので宿屋を探しても泊まれるハズもなく。最初から宿屋という選択肢は考えて居い。

わたしは空の上から地上を眺め、周りから見えない適度な高さにある建物の屋根を見つけ、
そこに人の気配が無い事を確認し着地する。
もう一度、人に見られない場所なのかをぐるっと見渡して確認すると、いそいそと野宿？
の準備をする。
寝袋でしょ、携帯食でしょ、パジャマは・・外で着替えるのは女の子としてどうなの？
最後に魔術式、『宿泊セット』を起動した。　魔術式の名前は創った時の気分だｖ

『宿泊セット』
これは一定範囲の内部からの気配遮断、外部からの識別妨害、気温

湿度保持、暴風と雨滴
遮断と、その上にな・な・なんと体力回復と精神回復にボーナスまで付いちゃうという、
風と水と闇の精霊を使ったわたしの自慢の魔術式だ。

わたしは身に着けた防具一式を脱いで寝袋にもぐりこむと、

「それじゃ、朝まで見張り宜しくねv」

脱いだ防具にそう声を掛けた瞬間、鎧は音もなくゆら～りと宙に立ち上がる。
この鎧は”生きた鎧”である。
ある程度の自己判断力を持ち、眠ることもなく見張り番に最適なのよ。

本来、この世界の精霊使いにしても魔法使いにしても鎧を身に着けることは無い。
精霊は金属を嫌うし、魔法使いは魔術式を起動する際に身振り手振りを行う必要がある、
らしい。よく知らないが。
そのため鎧は魔法使いの繊細な動きを阻害するから着用出来ない、
と聞いた。
この世界に広まっている魔術式と、わたしの魔術式は原理が全く異なるようで興味深い。

「まぁね、わたしの魔術式は独学だもの。」
そう言って立ったまま微動だにしない防具を見る。

わたしの”生きた鎧”は魔法生物だ。
わたしの意志を感じ取り、人より圧倒的に早いその反射速度でわたしの動きを妨げること
なく追従し、サポートしてくれる。
金属製ではなく、この世界に存在しないセラミック製のその鎧は強度はもちろんのこと、
熱に強く、酸に強く、毒無効で精神系魔術を受け付けない。
魔法生物ゆえに仮に傷ついたとしても自己復元してしまう。

そもそもその装甲は補助魔法の対刃、対衝撃、対摩擦、対魔法攻撃を儀式魔法で付与され、
永続効果としているので、ダメージを”通す”ことも難しいはずだ。
単純に戦士としての能力も高い。
創造主としての推測だが強さではアイアンゴーレムを軽く越え、ミスリルゴーレムに匹敵
するのでは?と予想している。
もっともこの世界にそんな種類のゴーレムが居れば、だが。

お休みの準備を整えると、今日最後の魔術式、『魔力セット』『体力セット』を起動する。

『魔力セット』
これはその名の通り、魔力上昇、知力上昇、集中力上昇、魔法詠唱速度上昇、最大魔力量上昇、魔法抵抗力上昇、魔力回復速度上昇を。

『体力セット』
こちらは筋力上昇、器用度上昇、敏捷度上昇、生命力最大量上昇、移動速度上昇、生命力回復速度上昇、攻撃速度上昇、をマクロ化して一気に掛けてしまう術式だ。

トゲエルフたるもの、一歩外に出れば７ｘ７人の敵が居て当たり前。補助魔法（バフ）が剥がれてしまうとただのか弱〜いエルフ娘が独りぼっちんと残るだけ。
これらのバフは２４時間は保持されるハズだが、わたしに取っての命綱なのだ。
だから寝る前と起床した時、つまり一日2回忘れずに必ず起動するようにしているのだ。

そうして、やはりというか使った魔力は大したことがないにも関わらず、生まれて初めての旅でそうとう疲れていたのだろう。
いつもより早く眠気が訪れている。

わたしは伊達メガネ（これがわたしの魔術式の秘密なのだが）を外して、誰にともなく、

「おやすみなさーいＶ」

目を閉じる直前に目に映ったお城は、夜の闇に薄く浮かび上がっていた・・・
空からの攻撃には無力な城だわねぇ。。。。と思いつつ・・・（ブラックアウト・・・）

「とりあえずこの街でしばらく過ごすにしても、生活の糧を稼がないとダメよね。」

わたしは今、おのぼりさんよろしく街の大通りや裏の小道をきょろきょろしつつ歩いてる。
何のために？　もちろん、釣りのためよ。

「よー、エルフのおねぇチャン。どっか探しモンかい？」

ちょっとだみ声で後ろから声を掛けてくる男がいた。

キタ！

その男の存在は少し前から気付いていた。
ちなみに今居る場所は大通りを少し入った小道を曲がった所で、大通りのざわめきさえ
ここまでは響いてこない。少し薄暗く閑静な佇まいとなっている。
前方にも数人の気配を感じた。
狙い通り事が進んでいることに満足し、わたしはニンマリしそうな顔を無理やりニッコリ
に変えると笑顔のまま振り向く。

「そうなの！　この街には初めて来たのよ、よかったぁ、少し道に迷って困ってたの。」

そこには普通の服装なんだろうけど着崩してどことなくヨレた感じの３０前後の男がいた。
「おー、そいつぁ大変だなぁ、俺はこの街に長いこと住んでるから何でも聞いてくれよ。」

小道の前方、今はわたしの背後となってる、から人の接近をしっかりと感じつつ、

「それじゃ～教えて欲しい所があるんだけどいいかな？」

「おぅ言ってみな！」

「あのね、わたしこの街に来たばっかりでどこに何のお店があるのか判ってないんだけど、何でも屋っていうか、雑貨を買い取ってくれるようなお店ってこの街にあるかな？」

「んー？雑貨屋ねぇ？　あーここから近い所にあるぜ？　案内するからこっちだ。」

そう言って男は馴れ馴れしくわたしの肩を抱いて大通りとは反対の方向へ歩き出す。

背後に迫っていた男達は二人組みで、一人はわたしよりも前を歩き出し、一人はわたしが通り過ぎるのを待って後からついて来る。前後を挟まれた形だ。

「ありがとう！親切な人に出会えてほんとに助かったわ。」

これは本気でそう思っているので声色で相手へ伝わったらしい。

わたしが歩きながらそう言うと

「そうだろぉ？ま、俺も朝から綺麗なおねぇチャンと一緒に歩けてラッキーだぜ！」

「ねぇ、親切ついでにもう一つ教えて欲しいんだけど。」

「いーぜぇ、何でも言ってみなよ。」

ここからが、本当にわたしが知りたい情報となる。

「あのね、わたし働く場所も探してるのよ、それでね、格好見て判ると思うけどこれでも腕に覚えがあるのよ？　そういう荒仕事を紹介してくれるお店とか、知ってるかな？」

大事な情報だから少し小首をかしげながら可愛らしさを演出しつつ聞いてみる。

「うはははは、おねぇチャン。その剣ちゃんと使えるのか？まぁ荒仕事なら紹介してやれねぇこともないぜ。」

男は下品な笑い顔を浮かべるとあごをしゃくった。

それが合図だったのだろう。後ろに居た男がわたしの両手を掴み後ろ手に拘束する。

と同時に周りからさらに3人の男が出て来た。合わせて6人。

「わりーな、おねぇチャン。
俺が紹介するのは仕事は仕事でも、おねぇチャンが体を使った荒仕事だぁ～。」

わたしの隣に立っている男はそう言うと、

「よーおねぇチャン、腕に覚えがあるんだって？男１０００人切りとかか？ぎゃははは。」

「腕を掴まれてちゃ御自慢の剣も役立たずだなぁあ？
お、そうだ！俺の剣を握って良いぜ？　へへ、ぶっとくて固いぜー？」

「うあっはぁぁ～、俺もネーチャンを押さえるぜー、
おぉっと間違えて胸揉んじまったーーーー。」

はぁ～。どうしてこうも下品なんだろ？
両手を拘束されたわたしを侮ってその中の一人がそう言いながら胸に手を伸ばして来る・・

3ページ目

3ページ目

わたしの名はリアファリナ、精霊術と魔術を修め武者修行の旅に出たトゲエルフよ。

いま、わたしはいわゆる冒険者の店の前に立っている。
剣と魔法の世界で旅と言ったらまずは冒険者のお店でしょー？　違うかな？

ちなみに”冒険者の店”では通じなかった。ちょっとショック。
この世界では”よろず紹介所”という名前だったのだ。

え？そんな事は良いから2ページ目の続きはどうなったですって？
んと。。。。なんだっけ？　あ、ごめん。思い出すからちょっと待って！

えーっと、たしか男共に囲まれたんだよね？
実はあの後5回ほど同じこと繰り返して情報収集してたから最初の方は印象薄くて。
あははは（汗

わたしの魔術式はオリジナルで、身振り手振り詠唱すらを必要としないって言ったけど、

つまりそういうこと。
わたしの両手を拘束して油断してる男共を『麻痺』で逆襲し、必要なことを聞いてからバイバイしました。
お別れする前に、「魔術を観るってタダじゃないのよ?」と常識を諭して、転がってる男共の懐からしっかりお代を回収しましたよ～ｖ。

もちろん、後から狙われたりするのイヤじゃない?
男共の体内の精霊力をちょっと弄り、そんな気が起きないようにしました。

最初は炎の精霊力を乱して一ヶ月ほど風邪に似た症状でダウンさせてたんだけど、3回目くらいには人間の男の体内にいる精霊力操作にもだいぶ慣れて来たせいか、余裕が生まれ、そうすると持ち前の好奇心と研究心が働き、もっと効率が良い形で。。。。。
つまりですね、えーっと。
男が恐怖に駆られ2度とわたしに悪さしようとか思わないような方法を見つけたというか。
ごにょごにょ。

『麻痺』で地面に転がして、さらに『体内の炎の精霊力低下』を掛

けてわたしの魔術式の
効果を十二分に見せつけた上で。。。。
えーっと、えーーーっと・・・・・
えーーーい、命名『不能・一ヶ月限定版』を掛けました。
次にわたしの前に顔出したら『不能・生涯版』を掛けるから（ニッコリ）と捨て台詞付き。

水・地・闇の精霊を使って体や精神を癒したり、命の精霊で傷を塞いだりと人体へ影響を
及ぼす様々な精霊術はメジャーだけど、無くなった腕だって再生したりも出来ちゃうのよ？
それに比べたら血の流れを制御して、男のあそこに一定以上の血が集まらないようにして
しまうことなんて、思いつきで試しにやってみたら実に簡単だった。

そんなことを5回ほど繰り返し、多少の小銭を稼ぎつつ”冒険者の店”を尋ねて回りました。
概念の違いやらで聞き方が悪いんじゃないか？と気付いたのが3回目で。。。
ようやく5回目で”よろず紹介所”を聞き出せたのだ。
お金と情報をもらえて魔術式の実験台までしてくれて、なんて親切な男共だったんだろう。
『麻痺』『不能』なんて苦労のうちにも入ってない。
そもそもミジンコ相手に苦労なんてする？

”よろず紹介所”のカウンターに座ってたのは、綺麗なお姉さん。。。。

ではもちろんなく、禿頭のおやじさんだった。

「あー、この街に住んでないヤツにおいそれと仕事は出せないぞ、お嬢さん」

と言われてしまった。

わたしがかつて読んでた小説では登録なんてすぐに出来たのに。

やっぱ現実は厳しいなと思いながら、それじゃぁと、交渉から入ることにした。

「でも仕事貰えないと先立つものが無くなって困っちゃうわ。

ねぇ、おやじさん、そこを何とかしてもらえないかしら？」

必殺！エルフスマイルでどーだっ！

「そうだな、とりあえずランク外として仮登録は出来るぜ？

もっとも、それで与えられる仕事は期限ギリギリで相手を選んでる

余裕が無いヤツばかり
になっちまうぞ。
場合によってはお嬢さんの手に負えない危険な山もある。
ま、大抵は誰もやりたがらない簡単な仕事か、汚れ仕事とかだがな。
」

「それで信用を積めば、あーそうだな。１０件。
そういう仕事を片付けてくれれば正式登録してやっても良い。」

「ありがとう！おやじさん、それで良いわ。　さっそく仮登録して
お仕事ちょうだい！」

ここはわたしの最高の笑顔を見せても良い所よね？
わたしはお店の中にいる他のお客へも無駄に愛想を振りまきながら
大げさに喜んでみせた。

「よし、これでおーけーだ。どうするよ？お嬢さん、今紹介出来る
仕事じゃ、これだな。」
そういって一枚の紙を渡してくる。わたしはそれを受け取って

「もちろん受けるわ。んっと、

モグラが大量に発生して畑を荒らすので非常に困ってます、退治して下さい。」

このおやじさん、なかなか巧いと思う。
モグラ退治なんて地面の下にいるから地味で、駆逐まで長引きそうだし、冒険者達が本気で取り組まなければ誰か死ぬほど切羽詰りそうな案件でもない。
そんな訳で優先度も低く、いままで放置されて来たのだろう。

かと言って、わたしのような見た目か弱いエルフのお嬢でも、命のやり取りになりそうな危険な依頼というわけでもない。
そして、信用ゼロのホームレスな小娘がまかり間違って失敗し、知らん振りして逃げ出しても誰かが死ぬほどの事態にもならない。
さらりと常識的に判断できる範疇で、初心者冒険者に合う案件を選び出した所が商売上手を感じさせた。

「おー行ってくれるかい？　んじゃサーモン市場通りを東に向かって街外れに行ってくれ。
そこで依頼主の家を訪ねてくれればいーぜ。
その紙を見せれば依頼主が目的地へ案内してくれるだろう。
終ったらまた依頼主の家に行って代金を受け取ってくれ。
あ、もしも払い渋ったらここに来てくれれば代わりに払うぞ。
この店は信用第一なんでな。　そんときゃこっちから客に筋を通す

さ。
んじゃそれで良いかい？」

「えぇ、判ったわ。　それじゃ、またね？」

そう言ってわたしは”よろず紹介所”を後にした。

「一回の説明で判ってもらえたのは久々だな。。。この店に来るヤツと言ったら。」
「ハハハ、その前にあんな綺麗どころが来るなんて、今日この店潰れるんじゃねぇの？」

わたしの後ろで客とバカ話をするハゲおやじの声が聞こえて来る。。。

「それじゃさっさと片付けますか。
サーモン市場通りはここから南ね。道に不慣れじゃ飛んで行くわけにもいかないなぁ。」

楽するために魔術式があるのに、使えない状況に出会うって魔導師として悔しいのよね。
むぅ。そのうち地上を楽に移動出来るように車を創ろうかしら。
わたしはブツブツ言いながらテクテク歩いて行く。

「あらら、モグたん、ずいぶんなご活躍ね。」

わたしの前には一面の畑がひろがっている。
ところどころモグラが穴を開けて、土が盛り上がってて野菜もだいぶダメになってる。

「モグラが居るって事はミミズが居て土が肥えてるって訳だから、薬系はダメね。
かと言って地面の下に居るモグラの精霊力を感知して一本釣りで単体の精霊力を弄るのもここでは面倒ねぇ。」

そうなのだ、精霊使いなわたしに取っては地面の下に居ようが関係なく精霊力が”見える”ので、モグラを捉えて簡単に片が付くと、ここに来るまでは甘く考えてた。
しかし、ここの土地は精霊力に満ち溢れていた。地面そのものにも野菜にも。
この中からモグラだけを捉えるのは、極彩色の中から一色を探すようなものだ。
わたしは早々にその方法は投げた。精霊力が多くてずっと”見てる”と悪酔いしそうになる。

「たしかモグラは自分の通り道を塞がれると、修復のために塞いでる土を外に押し出すんだっけ？　それで穴に捕獲用の道具を設置すると良いとかなんとか”向こうの世界”で聞いた気がするわね。」

ということは、土の精霊に協力してもらって穴を塞いで、塞いだ土が動いた事をトリガーに精霊に捕獲して貰えばいいか。

そう、精霊はさほど頭良くないというか、細かい指示が出来ないというか。
人の世に深く関わるつもりがないからか物体は識別しないし、何時という概念も無い。
特定の生物相手に何かをさせようとした時には、条件を上手く設定してやらないと精霊が自発的に何かする事は期待出来ないのだ。
つまり自動化は難しい。

「モグラを殺しちゃうのはこの畑の精霊力を乱すことになるし、土の精霊にとっても良くないわね。それならば。。。。
うん、魔術式のここをこうして、トリガーはこうで、捕獲時の土槛生成法はこうで、逃がさないように構造をこうして・・・ぶつぶつ。」

わたしは畑を見て気付いた点から土霊操りの魔術式を手直しして構成していく。

作戦、および、魔術式のシーケンスはこうだ。

?:モグラの通り道を一部塞ぐ。
?:モグラが穴補修のために土を動かすと土霊が場所を感知する。
?:その場所を含めた一定の大きさの空間に、土霊は土の檻を生成する。
?:土の檻は密閉せず、かといって逃げられない程度に隙間を開けておく。
?:設置したその檻は、一晩経った頃に回収する。
?:どこにモグラが居るかは判ってないので、とりあえず１００ヶ所ほど設置しておく。

必要な仕掛けを施してしまうと、後はモグたんが罠に掛かるのを待つだけとなる。
「暇ねぇ。。。でも街に戻って任務失敗だと思われるのもイヤだし。。。。
早く信用得て複数の仕事を同時にこなさせてくれないかなぁ？」

今日と明日はここで野宿することになるんだろうなぁと思いつつ、
わたしはぽかぽか陽気を浴びながらくつろいでいた。

結果的に、モグラ１７匹、野ネズミ１２匹を生きたまま捕獲し依頼主に届けた。
モグラはミミズを食べるので、野菜をダメにしたのは他に犯人が居る！と予想したわけだけど、これが大当たりだった。
そのための罠も同じように生成して設置しておいたのｖ

依頼主は大いに喜んでくれて、約束の報酬を5割増しにしてくれた。

わたしの初仕事はこうして期待以上の成果を上げて幕を閉じた。
いや、冒険者人生の幕開けと言うべきかな。

４ページ目

４ページ目

わたしの名はリアファリナ、里を飛び出して冒険者として生活したしたトゲエルフよ。

ここまで色々と悩んだのだけど、

「デレのないツンデレエルフです　って言うよりトゲエルフの方がぴったり来るよね？」

という心の決着にたどり着きました。

近況だけど、例の１０件で市民権ならぬ正式登録だけど、いま９件まで達成出来ましたｖ

全ての依頼で依頼主の期待以上の成果で達成したから、”よろず紹介所”のおやじさんのみならず、そこの常連達にも、近頃声を掛けてもらえたりと、結構存在感を出して来ているところなの。

わたしのエルフスマイルも地味に効いてるよねｖ

そして、ここ最近は安いけど宿屋に泊まっているのよ。
あ、誤解が無いように言うけど、わたしは普段も水霊操りで体を綺麗にしてるんだからねっ
野宿してたからって体臭が臭くなったり、口臭を臭わせてたりしないんだからっっ

さて記念?すべき１０件目の依頼はと言うと、
幻と言われた銀しぶ鯛とか言う魚を使った料理を出さなきゃお店を潰すぞと、街のグルメ
成金のハーマン氏から脅しを掛けられたとかで、その料理屋から依頼の鯛釣りだった。
そんなの、、、、そんなの、、、、漁師に言え～～っっっっ!!!

はい、漁師が受けられない理由もしっかりありました。
銀しぶ鯛を釣るためには、浅瀬と岩場が入り組んだかな～り複雑な地形の場所に行く必要
があるとかで、釣り船は必然的に小型船にならざるを得ない訳なんだけど、最近その辺り
は小型船ばかりを狙った海賊が出るとかで誰も行きたがらないんだそうだ。

かといって大型船ではその場所へ行けないし、中型以上では海賊は姿を見せないんだって。
小型船は船頭さんと釣り人さんが乗るともうあと一人二人しか乗せるスペースが無いとの
ことで、冒険者達も少数では海賊に対抗出来ないからって受け手が見つからず。
帝国騎士団や保安部隊は数回退治を試みたが姿を見せないので、根競べに負けてお手上げ。

依頼は表向き魚釣りだけど、裏事情が海賊との戦闘なので、わたしがこの依頼を受けるに
あたっては”よろず紹介所”でかなり反対された。
件の海賊退治に駆り出された冒険者もいて、その人達からも危険だから止めるようにとは
説得されました。
でも、わたしとしてはようやく冒険者らしい仕事だったので反対を押し切って受けました。
まぁ、相手見て敵わないと思ったらすぐに逃げろよ、とか散々言われたけどね。

「う～みよ～おれのう～みよ～♪」
わたしはだいぶリラックスしてるんだけど、なんなんでしょ？この暗い雰囲気は。

「だ・大丈夫だからお嬢さん、か・海賊が出たって、に・にげっ切ッテ見セるカラよ！」
船頭さん、そんなに硬くならないで。ほらちゃんと前見る！そのセリフもう２０回目だよ？

「お嬢さんが海賊に捕まるくらいならお店なんてどうでも良い。俺と二人で逃げよう！」
なんか歳若い料理人さんが、わたしの顔を見ながら変な決意を固めたみたい。

「最近の海賊は素人さんにまで迷惑をかけて、いけねぇよ。俺が若い頃は・・ぶつぶつ。」
と釣師さん、あと３０年若ければ海賊を蹴散らしてくれたのね。でもそのドス錆びてない？

「ねぇ、向こうに見える船、海賊船かしら？」
わたしは魔術式で『探知』を展開してるので遠くから快速艇よろしく近づいてくる船をいち早く見つける事が出来た。有る程度の距離まで来れば『望遠』でつぶさに見ることが出来る。

「どどど・どどっ　ドコ?どコだ?見えねー。ふ、ふひっ来やがれってんだ!」
「船頭さん、すぐに逃げてっ」
「ブッコミのマサと恐れられたこのワシの、ドスの錆びにしてクレルワー」

なんか後ろの人達がアヤシイんだけど。。。

ふむ、やはり海賊船ね。
どうやら帆走も出来るし、オールで漕ぐことも出来るタイプなのね。
海賊船というより、海賊艇というべきか。
今は帆を畳んでオールを使って力強く漕いでどんどんこちらへ近づいて来ている。
船首の衝角で体当たりするつもりなのだろう。オールの数から漕ぎ手は２０名ほどと見た。
でも、あれは?。。。。。わたしは目を細めてしばし考え込む。

それならっ
『幻影』『隠密』
この船の幻を作り出し適当な方向へ逃げ出し始めた。
こちらの本物の船には『識別妨害』を掛けて周りから見えなくしておく。

「さっ、今のうちにさっさと幻の魚ゲットするのよっv
わたしはあの海賊達とちょっと遊んで来るわね？」

『飛翔』

さすがに急ごしらえの幻影では思惑通りとは自動で動かせない。マニュアルなのだ（汗

海賊を殺すことも出来るけど。。。。殺傷用の魔術式も当然ある。
でも、わたしは、なるべく戦わず、そして、捕らえもせず終ろうかと考えている。
なぜなら、山賊と違って海賊は、漁村が丸々それを職業にしている事が多い。
なので目の前の海賊艇のように、いかにも少年といった者が混ざることがあるから。

「さすがにねぇ？　捕まれば縛り首だし、後味の悪いことはしたくないな。
依頼されてもないのに。」

幻影の船を海賊艇から距離を取りように適当に操る。
追いつかれそうになるとスイっと離れ、また追いつかれそうになると離れるを繰り返した。

そうして１０分ほど引き回していると目に見えて速度が落ちて来た。
先の見えない頑張りなんて続かないものよね。
わたしは『風の護り』を起動すると、海賊艇に近づく。

「海賊なんて割りに合わないわよ?」
ほんとは、やり方しだいで海賊稼業は結構美味い思いできるみたいだけどね。
それは言わないのがお約束だろう。

『麻痺』で無効化するのはここでは止めた。横波で転覆したり座礁したら死に直結する。
『小型雷球』
この魔術式はショートカットキーに登録してない普段使わない式なので、わたしにしては珍しく詠唱を行って起動する。

わたしの伊達メガネは魔法工芸品でもあり、このメガネを通して見ると仮想キーボードが
目の前に展開されているように見えるのだ。

もちろん仮想キーボードはわたしにしか見えない。
仮想キーボードにはショートカットキーが割当てられており、それぞれに魔術式やマクロを登録してあるため指一つで魔術式を高速に起動できるのだ。
他人から見ると指先一つで魔法を使っているようにしか見えない。
魔術式の詠唱短縮化を考えた際に”向こうの世界”で普及していた方法を応用したのだ。

この仮想キーボードは指で触れなくても、詠唱する意思を持ちつつ視線を固定すれば式を起動可能なので、たとえ両手を拘束されようが問題無いように創ってある。

魔術式の言葉通り、小型の雷球は海賊艇を縦断するように飛ぶ。
避けられるかどうかは運次第といった所だが、当たっても痛くて涙が出るくらいですむ。

しかし、海賊達はどうやら魔法での攻撃を受けるのは慣れてないらしい。
ほぼ全員が雷球を受けて痺れるやら涙目になってるやら。
わたしはそれを確認して、次の魔術式を起動する。

『雷球』

こちらはショートカットキーに登録してあるので即座に起動出来る。
先ほどの非殺傷の術式と異なり、もろに当たれば骨も残らず蒸発する。
見た目も威圧感バッチリで、一目見ればでその恐るべき効果を誰もが予想出来る物だ。

『雷球』は投げずに、わたしは右手の上にとどめたままで、こう言った。

「判るでしょ？貴方たちを皆殺しにするのなんて簡単よ。」

海賊から反撃されることを考えて風の護りを掛けたわけだが、海賊達は呆けてるばかりで
全く攻撃を返してこない。

「でも、殺さないで居てあげる。いつかそのことの意味を考えて見てね。」

わたしは海賊の中でも男の子をじっと見ながらそう言った。
一度だけチャンスをあげる。自分の人生は自分で決めなさい！男の子。

「ねー？釣れたー？」

「大物が釣れたぞー、海賊はどうなったんだー？」
と若い料理人さんが返答してきた。

「ああ、諦めてどっか行っちゃった。」
わたしは結果だけを言った。

「あ、あの、お・おれ、この料理対決が終ったら、のれん分けしてもらう予定なんです、
それで、もし、お嬢さんさえ良かったら、お・おれの、嫁さんになっななっ。」
はいはい、立ち上がると横波で船が揺れるからアブナイわよー？

「ふぉふぉ、このワシに恐れおののいたか。お嬢さんワシに惚れひゃらはきゃんにょ。」
おじいちゃん、途中から入れ歯が。。。。

「俺っちの船を襲うなんてふてーやろう共だったぜ、次来たら海の藻屑にしてやんぜっ。」
うんうん、まずは腰がヌけてるのを治そうね？船頭さん。

こうして見事１０件目を達成したわたしは”よろず紹介所”の正式登録メンバーとなった。
正式メンバーとなれば、世界中のどこの”よろず紹介所”でも利用出来るらしい。

そうそう。
元凶のグルメ成金ハーマン氏は、後で聞いた処によると、銀しぶ鯛勝負にて、さすらいの神の舌を持つ”味眉のシン”とか名乗る人物にグルメ失格の烙印を押されたとかで、なんかよくわからないけど、それなりの罰が降ったそうだ。

5ページ目

5ページ目

わたしの名はリアファリナ、冒険者として華麗に生きるトゲエルフよ。

「もう、いいんだ。。。。トゲエルフで。。。。」

迷いは晴れたヨ。
わたしはこの先もトゲエルフであり続けることを再確認したヨ。
善意で他人を助けたのに。。。わたしはまたもや悲劇に巻き込まれたのだ。

先日、銀しぶ鯛を見事ゲットしたわたし達が港に戻ると、ちょっとした騒ぎがあった。

「あれ～？なんか人が妙な方向に一斉に走ってるわねぇ？　事件かしらっv」

わたしがそう言うと、船頭さんも

「あっちは、2番桟橋の方だなぁ？」

と同意してくれてる。

「危険が潜んでいる可能性があります。船を急いで桟橋に着けてっ。出来るだけその2番桟橋から遠いところへ。
料理人さんはすぐに港を離れてお店に向かうこと。いいわね?
わたしは偵察と状況確認のためにあそこへ向かいますv
あとで、お店で合流しようねぇぇぇぇぇ・・・・・・」

言い終わらないうちに飛んで現場へ向かうわたし。顔が押さえ切れずニマニマしてる。

「なぁ、あれ絶対興味本位だよな?」と船頭さん

「素敵だv」「また、お店で逢いましょうねーーーーっ」と大声で叫ぶ若い料理人さん。

「白か、ばぁさんの若い頃を思いだすのぉ。ひょひょひょ。」と釣師さん。

エルフは聴力も優れているのだけれど、すでに興味ある方向へと意識を向けてたわたしは、
彼らの声を聞いてなかった。
もし聞いてたら、のちの大きな、おおきな悲劇を防げたのかも知れない。
この時のわたしはそれを全く気付きもしなかったのだ。

騒ぎの中心、それはすぐに判った。なぜ騒いでいるのかも。

「でで・デケェ　なんて大きさの鮫だぁ。」

「ウソだろ？　この船よりデカイぞ。」

港の中を悠々と泳ぐ巨大ザメ。
その大きさは水の中だろうことを差っぴいても全長２０ｍは有りそうだ。

「へぇ？この世界のサメって大きいのねぇ。」

わたしはすっかりノンビリモードに戻って、人の目もあるので『飛翔』は解除して近くの

桟橋から高みの見物に入ってた。

「いくらデカイと言っても所詮サメだしねぇ？　わたしが出る幕じゃないなぁ。
あとはあそこの漁師さん達やら冒険者さん達がどれだけ頑張るかダケかぁ。」

わたしはポシェットからカコの実を取り出し、口の中で噛み砕きながら成り行き見物。

「ちっ、そっち行ったぞー。待てー、大人しく斬られろっ。」

「なっ泳ぐのが早いっ、魔法を唱え終わる前に距離が届かなくなるわ。」

「くそっ、弓がはじかれるっ。」

「うぁっ、こっちクルナー。」

「頑張れサメー、いやっほぉー、バリバリと喰っちめーー。」

「なんだよ、あの冒険者ども全っ然、役に立ってねーぜ？」

「がはは、あの銛構えてんの、ｘｘｘんとこの息子だろ？なんだあ

のへっぴり腰は。」

「もっとバシっと決められねーのか？　おぃおぃ、サメにバカにされてんぞー？」

一生懸命だけど空回りしてるようにしか見えない冒険者達と、好き勝手言ってる野次馬達。

「それにしても、すごい人出ね？　みんなよっぽど暇だったのねぇ。」

そうなのだ、この辺りの桟橋は人・ヒト・ひと、凄い込みようでまるでお祭り。
こうしてる間もサメ退治に向かう人、何かを期待した顔でサメを応援してる人がどんどん
増えてきている。　と、そこへ

「大変よっ！　みんなっ！　サメを追い払いに行くわよっっ！」

なんだろう？
若い女性の声なんだけど、声の質というか、妙に通りが良い声が聞こえて来た。
そちらへ顔を向けると、後姿しか見えないけれど、サメの方、桟橋の先へと集団が駆けて

行くのが見えた。どうやら先ほどの声はあの中の一人だったようだ。
遠目にも小奇麗な衣装・装備を身に付けて、ひのふの・・・５人。
男が一人で女が４人？

「ふーん？　これは期待出来るかな？」

なんとなくそんな気がして、駆けて行く後姿をじっと見ていると、
これまでと違ったざわめきとも悲鳴とも言えないものが突然右手側からあがった。
わたしの周りの人も、すわっ何かが起こったか！？と右を見ているが、あまりに人が多く、
わたしの位置からでは何があったのかちっとも見えない。
ざわめきだけはまだ聞こえているし、徐々に大きくなって・・・る？

「落ちたー。」

「人が海にっ。」

「女の子だーー。」

女の子が海に落ちた？
向こうのサメがあからさまに方向転換し、わたしから見て右手の橋方向へ泳ぎだしたのが視界に映る。
カンだけど、野次馬のざわめきの具合とサメの進む方向からして、わたしから海に落ちた女の子まで１００ｍくらい？
サメから女の子まで２００ｍといったところか！？

『水霊よ、抱きとめて』『水上歩行』
わたしはすぐさま海へとジャンプすると、結構な高さはあったが水は柔らかく受け止めてくれる。そうして海の上に着地すると同時に、

『加速』
女の子がいるだろう方向へこれ以上ないほどの疾さで駆け出す。
この時点でサメとわたしの女の子までの距離はほぼ同じくらい。ややサメの方が近いっ！
女の子は波の狭間だろうか？　ここからでは見えない。

『加速』状態のわたしは１００ｍを5秒ほどで走ることが出来るが、サメも時速６０ｋｍ
以上で泳ぐはず。このままでは間に合わないっ
『飛翔』は走るよりも速いけど、女の子を助けるためのそのスピー

ドで水に接触したらを
考えるとこの場面では使えない。
女の子まで残り半分。サメと距離は互角だっ　わたしの方が少し速い。

女の子が・・・見えたっ

『魔力コストを増やして、距離増大、対象物を2つに』『水上歩行』
わたしはサメと女の子の両方に水上歩行を掛ける。海上に浮かび上がるサメと女の子。
しかし、サメの勢いは止まらない。海上を滑りながら女の子へと近づいて行く!!!
接触まであと1秒ほど。

『衝撃吸収』『加速』
女の子を対象にさらに魔術式を続けざまに重ねて起動し、走る勢いそのままで、わたしは
女の子に飛びつく。加速衝撃は魔術式が緩和してくれるはず!!
わたしの左手、巨大サメがその大きな口をさらに大きく開いているのが感じられる・・・
ふと、ジョーズのポスターが頭に浮かぶが、そんなのっ　怖くてそっち見れないわよっっ

まさにギリギリ。
この速度でこの距離でのニアミス。しかも相手の大きさはダンプカー並みっ
そしてさらに、わたしの先には左に曲がった桟橋があるっ
判ってた事だけど、ぶつかるっっっ
総毛立つのが自分でも解った。

『飛翔』
なんというか、高飛びの背面飛び？
そんな風に桟橋とその上の野次馬達をこれまたギリギリで跳び越す。
周りの音なんて一切聞こえない、そんな極度の緊張&集中だった。
空中に浮かび下を見ると、サメが桟橋にぶつかってたのが見えた。
その上に居た野次馬達もさぞビックリだったろう。
桟橋自体はなんらかの魔術式で強化されているらしくどこも壊れて無い。

サメは『水上歩行』が掛かっているので水に潜れない。
このまましばらくほっとけば溺れ？死ぬだろう。

わたしは何が起きたのか判ってない顔した女の子を抱きながら、空の上からそこまを状況確認すると、桟橋の上、野次馬集団の空いてるところへと優しく移動してから、柔らかく着地して女の子を開放した。
野次馬達のポカーンと口を開いたマヌケ顔と、泣きべそになりながらも礼を言う女の子が印象に残った。

望んだ訳ではないが、この事件が元で、わたしの顔はこの街に広く知れ渡ってしまった。
ふふん、そりゃそうでしょ。見た目は可憐なトゲエルフの美少女が、華麗に人助けをしてのけたのだ。これで一躍アイドルよねっv

その後、街の皆は、わたしを見かけると挨拶してくれるようになりましたとさv

「よー、パンチラねぇちゃんじゃねーか、今日も白なのかー？」

わたしのトゲがレベルアップしたのは言うまでも無い。

6ページ目

6ページ目

わたしの名はリアファリナ、人生とは逆風の中を歩くことだと実感しているトゲエルフだ。

「ふふふ、出来たわ！これでもうパンチラねぇちゃんとは呼ばせないっっ！アハハハハ。」

目の前の姿見には、深い青色のチュニックと白いミニスカート姿のわたしが映っている。

前回の事件でアイドルになるどころか、喜劇のヒロインになってしまったわたしは、
当然のことながら、逆境をバネに新たな魔術式を開発したのだっｖ

「この魔術式の開発にはなかなか苦労したのよ？　聞いてよ～奥さん。
女の意地、揺れるミニスカートはそのままにっっ！
不定形に変化するスカート内部空間を識別妨害拡張版とも居える特殊な空間で覆い隠し、
それによってミニスカ内部を見れなくしたのですっｖ」

これまで一定形状の固定空間に対して『識別妨害』を掛ける魔術式

は在った。
腰を中心に球状の形状で掛けるなら問題は無い。
その場合、オシャレなミニスカートも見えなくなっちゃうけどね。
しかし、これがスカート内部だけ、となると、とたんに話は変わってくる。

想像してみて欲しい、光が通過する際に都合が悪い映像をフィルターする魔道のガラスを
作ったとする。
でも、そのガラスの縁は揺れるスカートに合わせて常に変形し続け、
歩いたり、走ったり
左右前後どの方向へ動いてもリアルタイムに追従してズレ無く動かさなければならない。
さらに飛んだり跳ねたりすると、スカートの動きはまさに３Ｄ。
平面のみならず立体もカバー出来なければ不都合な物が見えてしまうのである。

ただでさえ、『識別妨害』は光を操作する高難易度で複雑な魔術式なのに、それなのにっ

この魔術式開発には、魔導師と女のプライドの両方が掛かっていたのだ。
わたしは、やりましたぁっｖ

「よーリア、今日はおまえさんにお客さんだぞ。先日の港での活躍を見たんだってよ。」

喜び勇んで朝一番に”よろず紹介所”に出向くと、おやじさんにそう声を掛けられた。

昨日までのわたしなら、またＰをからかいに男が来たのかと身構え、眉間にシワが寄ったハズだ。

でも、今日のわたしは違うわよｖ

「おはよう！　おやじさん（ニッコリ）
わたしにお客様なの？　どなたかしら？（ニコニコ）」

無駄に高いテンションと愛嬌をところかまわず振りまくと、紹介所内の酒場兼食堂で食事をしてた男共から声が掛かる。

「リアちゃん、今日はどうし「それがね、聞いて聞いてっｖ」」

「新開発した魔術式で、今日からパンツ女の汚名返上ですっｖもうスカートの中は覗かせませんからねーーーっだ。」

「「「「「　えーーーーーーーーっ！！！！！！！　」」」」」

「へへ～、スカートの中を覗いても、風でスカートが跳ねても、『識別妨害』で中身は見えないようにしたのよっv」

摺りガラス&モザイクよっ　とわたしは続ける。

「なんてこった！神よ、生きる望みは失われた。」な～んて言ってる男も居る。

ふふふ、ザマーミロだっv

「貴方が巨大サメを退治した精霊使いですか？」

と、そこへ女性の声が掛かった。

あれ？この声聞き覚えある、誰だっけ？

わたしはそちらに顔を向ける。

「はじめまして、わたくしの名前は
サフィニア・マール・リッテ・ナーシアス・エル・アイゼンよ。
貴方にお願いがあってここに来ました。お時間を頂けるかしら？」

うぁ～うぁ～　ＴＨＥゴージャス！って感じの美人さんがそこに居た。
髪は流れる黄金、瞳は空の晴れやかな青、スタイル抜群で、シンプルでも豪華な刺繍が
散らばめられた魔術師のローブドレスを着こなし、女性にしては背が高く、人間の女性
ならではの細身なのに腰からお尻のラインがとても、とっても綺麗な人だっｖ

・・・・でも、胸は勝った！
上げ底だけどね（涙
わたしのこの胸はナイショだけど『変身』でボリュームアップしてるのだ。
だって、だってエルフなんだものっ（滝涙

それに『変身』は『解除』されない限り効果は永続なのさっｖ
それに知られざる他の効果もあるのよ。
あ、いっとくけど、誤魔化してるのは胸だけなんだからねっっ

「アイゼン？」

「ええ、わたくしはこの国の第2皇女です。」

ロイヤル！わたしにもとうとうロヒヤルなお仕事がっっ
今日のわたしってば凄いカモっ　人生上向いてる時ってこういうものなのね！？

コホン。

「リアファリナよ。　それで何のご用なの～？オヒメサマぁ？」

冒険者たるもの、権力に負けたらアカン。
わたしは自分にそう言い聞かせつつ、皇女様？ハンッそれがなんボのもんよ的な態度で
わざと崩して話す。だって冒険者ってぇ人種はこういうハナシかたでしょ？

皮肉屋で、乱暴者、女性と見ればからかいの対象で、真面目に話そうとしない。
バカでエロで脳みそどっかに忘れたのか！って感じの。
テンプレな冒険者像をハズしたら、この世は舐められるだけよ。

内心、自分の顔が「¥ー¥」マークにならないよう気をつけながら。
だってロイヤルなんだモンっお金よっｖ　依頼を果たせばヒダリうちわですよっ！！

「貴方の精霊使いとしての腕を見込んで、ぜひお引き受けして欲しい事があるのです。」

「ふんふん、続けて？」

「この街から北東へ１０日ほどの距離にピネという村があるのですが、
そこで奇病が流行ってるらしいの。
原因については大体判ってて、その村から東に半日ほど登った山の沼地に、奇妙な怪物
が居るの。そいつが毒を撒き散らしているのよ。
毒は風に乗って村の人たちを苦しめる奇病の元になっていると思われます。」

「奇妙な怪物、ね。　いったいどんなヤツ？　数は？」

「それがはっきりしないの。小さいのや大きいの、形もバラバラで全然似てないらしい。
数は報告にあったのは１７体。でもこれは毒に汚染されている場所で調査が完全に出来な
かったらしいからもっと多いと思われます。」

「ふ～ん、それで？　わたしは何をすれば良いわけかなぁ？」

「わたくし達のパーティーと行動をともにしてもらって、その奇妙な怪物達を根絶する、
しかるのちに、毒で犯された沼地やその周辺の『解毒』や『浄水』で清めるの。
貴方、『解毒』『浄水』は使えるわよね？」

「ええ、問題ないわよ。」

「よかった。『解毒』に関しては、わたくし達のパーティーに所属している神官も使えるから、あなたの負担を軽減出来ますわ。」

「ねぇ？騎士団は何してんの？　そんな危ない怪物、とっとと退治しちゃいなさいよ。」

「それは一度行いました。『解毒』や『浄水』も併せてその時に。たぶん退治しきれなかった怪物が増えて元の木阿弥になったのだと思います。
だから今回は徹底的に、完全に、退治しなきゃならないのです。」

「怪物達の強さは？」

「それもバラバラなのです。動きは遅いらしいけど、たまに力が強いヤツが居ると聞いてます。前回退治に出向いた騎士隊で被害は軽微だったので、その程度だと思われます。」

怪物が毒を撒いてる、か。
ん〜？まぁこれに関してはまだ情報不足ね。
「で、どうでしょう？引き受けてくださいますか？」
「そうね、もう２つ確認させて？」
「はい、何でしょう？」
「どうして今回は騎士団じゃなくて、皇女様が出向くの？」
ロイヤルの仕事はきな臭い。これ常識！
「それは・・・」
「話せない？」
「いえ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・わたくしの、好きになった人に戦功と実績を
与えたいのです　／／／／」
その間はナンデスカ？
ん〜、ほんとの事を言ってそうだけど、それが全てじゃなさそうねぇ？

「リア、裏事情は確かにあるが、その件に関しちゃおまえさんが気にする必要は無いぞ。」

と紹介所のおやじさんから声が掛かる。

ふーん、おやじさんは知ってるんだ。後で聞こうっと。

「まーいいわ。それじゃ、パーティーの他の人達はどんな人達なの？神官が居るようだけど、皇女様は魔術師なの？」

「はい、わたくしは魔術を扱えます。どうしてそれを？」

「見た目でね。魔術師にありがちなカッコでしょ？」

ほんとのところ、この世界の魔術師のカッコなんて知らないから適当言っただけなの。

「わたくしのパーティーは、ゆ・・戦士が一人と、騎士、偵察（スカウト）、神官、魔術師で、

女性が４人居ますから、貴方が加わっても生活面で戸惑うことは少ないと思います。」

「ふむふむ。その戦士さんが男性なの？」

「はい、そうです。」

「聞いて良いかな？普段どんな戦い方をしてるの？精霊使いに期待する動きは？」

「はい、ゆ・・戦士は両手剣で、騎士が盾と細剣、スカウトは弓と短剣です。
わたくしと神官が後ろから援護する形で戦ってます。
それに、ゆ・・戦士は腕力が強く背も高くて、広い場所では矛を振り回したりしますv
貴方には精霊術の『癒し』『火炎』とか直接的な援護と、『風の護り』といった間接的な
援護をお願いしたいのです。」

「なるほどね。　ねぇ？村の病人達を治したりも今回のお仕事の内なの？」

「いえ。。。一度病気に侵されると、『解毒』や『癒病』では回復しないのです。
手足の痺れ、歩けなくなったり、目が見えなくなったり、耳が聞こえなくなったりなどの
症状を発症すると、もう全快は見込めないと聞いてます。
それにどうやら病気はうつると考えられてます。
この季節、海から山へ風が吹くので毒が村に届くことはないはずですが、なぜか発症する
人が後を絶ちません。なので、わたくし達は村には立ち入りません。
村の人達には申し訳ないことだけれど、勇気有る善意の人達にお世話はお任せとなります。」

「理由が解らず発症するか、それはやっかいね。」

「怖気づかれましたか？それも仕方ないことだと思います、しかし、それでもっ

今は優秀な精霊使いが必要なのです。どうか、どうか、そこを曲げてお願いします！」

皇女様ったらわたしの手を両手で包んで拝むように依頼してくる／／／／／

「いいわ、引き受ける。」

向こうでおやじさんが小さくため息をついてるのが見える。安堵？それとも？

「ありがとうございますっっ
それで、えっと、急で申し訳ありませんっ　もうじきお昼に出発なのですっ」

「あちゃー、その村って遠いんだよね？泊まってる宿を引き払って来るから待っててて。」

「はいっ　正午に北門でお待ちしております。それでよろしいでしょうか？」

「人命がかかってるから先に引き受けたけど、まだ報酬を聞いてないよ。」

「あっ／／／／／　報酬は往復の必要経費と、金貨2枚です。」

紹介所内にどよめきが走る。まぁ金貨2枚ならね、慎ましく暮らせば1年はもつ額だし。

「了解。これで良い？おやじさん。」

一応、紹介所のおやじさんの顔も立てなきゃ。

「ああ、国からの依頼については紹介料は別な形でもらってるんでね。それで良いさ。」

「それじゃ、後で北門で。」

「はい、お待ちしておりますわ。リアファリナ様。」

そう言うと、皇女様は一礼して出て行った

「うふふふふふ、い～～～やっっったぁぁぁあああｖ　初パーティー、初ロイヤル！」

わたしがそう浮かれて叫ぶと、

「よっしゃーリアちゃんの活躍を祈って乾杯だーー！」

まだ朝。。もうすぐお昼だけど、すでに出来上がってる人達からお祝いの声があがる。

「うふふ、ごっっめんねー？すぐにお出かけなのー♡　帰ったら祝杯あげようねー。」

そう言ってわたしは宿に向かうべく、紹介所の入り口をくぐって外にでると、

「ねぇ？なんで皆付いて来るわけ？」

なぜかゾロゾロと男衆も外に出てきてる。あ、おやじさんまで。

「いやぁ／／／／。。。おみおくり？」とその中の一人が言う。

わたしはピンと来ました。

ここぞとばかりに、左手の甲を口を覆う形で右ほほに当てながら高笑いをする。

「オホホホホホ、待っても無駄よー♡わたくしのミニスカートの中は見えませんことよ。」

あ、つい皇女様はいっちゃった／／／／／

そう言ったのに皆、中に入ろうとしない。

わたしはスカートを押さえ、ついモジモジしながら言う、

「ちょっとっ、スケベっ　見ないでよっ／／／／／」

「おいおいリア、俺たちゃおまえさんのお見送りだぜ？
それに、おまえさんの魔術式には全員興味があるのさ、なんたって詠唱いらずだからな。
それとも何か？自慢の新しい魔術式は見せられねぇのか？
ま、おまえさんが見せられねぇってんなら、諦めるがな。
しかたねぇさ、新しい魔術式なんぞ、そうそう簡単に出来るもんじゃねぇしな。」

いかにも残念だって顔したハゲおやじ。

「ぐぐっ　よしっそこまでいうなら見せてやろうじゃない！
わたしの見えなくなったスカートの中をねっっ／／／／／　魔法オタク舐めんナッ！」

「オタクってなんだ？」「知らんがなんか偉そうだ？」ふふん、みてろよーーーっ

『飛翔』
わたしは一気に１０ｍほど上昇する。どうだっ（エヘン）

下に居る、紹介所のハゲおやじを含めた男衆は、一瞬アホ面をさらし、

「「「「「うぉぉぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおぉあああああ」」」」」

きゃっ、すごいどよめきで驚いたわたしはとっさにスカートを押さえた／／／／／

「俺は・・俺はもう死んでもイイ」

さっき生きる望みが無いとか言ってた男がそういう。
ふふん、そうでしょそうでしょ。

やったやったぁ！　リアファリナ、リベンジ成功！！！！！！
男って存在に勝ちましたーーーっv

そうして宿の方に飛んで良くリアを見送った紹介所のおやじは、こう呟いた。

「確かに何がなんだか視認できないよう、解らなくなってたな、ありゃすげーわ。
でもよぉ、摺りガラスとモザイクってのがどういうモンなんだか知らねーけどよ？
白いスカートの中に白パンツと健康的な太ももの肌色がよ、遠めにゃ白と肌色だけが
見えちまって。。。。
ありゃぁハッキリ見えるより、かえってエロくなってんぞ？」

そう言っておやじは中に入った。
その背後では、
「エロフ、サイコー！」の掛け声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

7ページ目　ロヒヤルなお仕事

7ページ目　ロヒヤルなお仕事

わたしの名はリアファリナ、楽しい玩具（オモチャ）を見つけたかも知れないトゲエルフよ。

実のところ、わたしはお金に困ってない。
だって、安宿だし、装備は服も武具もお手製だし、エルフだからあんまり食べられないし。
きっとこの先もお金に困るようなことはないだろう。

「その分、食材の質と調理方法にこだわりたいわねぇ。」

さて、そんなわたしが皇女様のお仕事に浮かれてるわけは??
ひとつには、パーティーでの戦闘とか、他の魔法使いとの交流はもちろんある。
でも、でもっ　やっぱりお金ですっv

もうね、お金に困ってないけど、貯めるために集めてます。みたいな?

では、そんなロイヤルなパーティーとの旅立ちシーンから今回は始まりま～っす。
ついでに、浮かれ具合が判るよう、サブタイにもロヒヤル印を入れとくね。

北門にて。

「オヒメサマ～。待った？」

「ちょうどです。わたくし達も今来ましたから。」

そう言うと、皇女様はちょっと首をかしげて、

「あの～　リアファリナ様？　遠出をするからって言いましたよね？」

「うん、聞いたね。」

「でも、それなら・・・・コホン、失礼ですが、身軽過ぎませんか？」

「携帯食とか水とか予備の服とか？それなら大丈夫、必要な物は全部持ち歩いてるから。」

「え？どこにですか？」

「このポシェット。見た目と違ってすっごくいっぱい詰め込めるんだよ。
それに心配ないよ。わたしはこの格好でラクト山脈を越えて旅して来てるんだから。」

「・・・そうなのですか？」

うわ、まだ疑ってるね、その顔は。

「大丈夫、大丈夫。　それよりさ、そこに居る人達がパーティー仲間なんでしょ？
紹介してくれないかな？
せっかくだから、わたしから言うね？　名前はリアファリナ。見ての通りトゲエルフだよ。」

「「「「　トゲ？　」」」」

ありがとう。女性陣は全員そこにつっこんで来ましたね。
唯一の男性。。。というか男の子は知らん振り。
って言うか、学生服！？　え・え・え～っっっ？　まさかっ？？

・・・っと、とりあえず、男の子は今はおいておこう。

「うん、トゲエルフ。まぁ知らないのも無理ないよ。この街ではわたしだけみたいだし。」

ウソじゃないよ？　・・・・・・・・正確には世界に唯一人だけどね。

「そうなのですか、申し訳ありません。　わたくし不勉強なものでこれまでトゲエルフという種族の方は存じ上げませんでしたわ。」

「いいよ、いいよ、これから有名になるからさっv」

「はい。　それではこちらの仲間を紹介しますわ。」

「わたくしの右隣に居る女性騎士が」

「ルーシニティ・ファーラエル・リゾレングスだ。よろしくたのむ。」

「その右隣が」

「シャイア・アスコット、ミラー神に仕えております。よろしくお願いします。」

「その歳でもう侍祭なのよ。さらにその向こうが」

「オーリス。偵察（スカウト）よ。職業柄本名は名乗らないけど、気を悪くしないでね。」

「オーリスはとても優秀なのです。時々わたくしの侍女もして下さるのよ。」

「そして改めて自己紹介いたします。
わたくしはサフィニア・マール・リッテ・ナーシアス・エル・アイゼン。
この国の第2皇女です。」

「ヨロシクね～。それでそっちは？」

わたしは皇女様の左後ろに居る男の子に話を振る。

「この方は、ゆ・・戦士の・・・・ワタナベ・カズヒサ様です。
とても若く見えますが、この国の賢者に負けないほどの知識をお持ちで、
それに、凄く強くて頼りになる方なのです。」

そう紹介されると、気乗りしない風に男の子はこっちを見るが、何も言わない。

「あの？　ワタナベ？」

何も言わない男の子に、気を利かしたのか皇女様がきっかけを与えようとする。

男の子は、仕方なさそうに、

「ワタナベ・カズヒサだ。好きなように呼んでくれ。」

そう言った。

なるほど。ふ～ん？そうなんだ。それなら、

「よろしくね勇者様。異世界から来たんですね。（必殺エルフスマイル！）」

と、コナン・ドイルの有名な探偵がワトソン君にした最初の挨拶をパクってみました。

「「「「「　なっ！？　」」」」」

あ、今度は全員ハモった。
もっとも、これで終わりじゃないわよ。
最初にガッツ～ン！とわたしの優秀さを見せつけなきゃ。

「それまでの平和な世界から、突然このような世界に来られて戸惑っていらっしゃる
気持ちは解りますが、これも何かの縁というもの。
こちらの世界は気に入って頂けましたか？　あまりそう見えないのは残念ですが、
住めば都と言うでしょう？　きっとこれから好きになれますよ。
それに初陣だからって硬くなる必要ないですよ？
いざとなったら、わたし独りで片付けちゃいますから。
だから、そんな黒い冬服はお脱ぎなさいな。体調崩しちゃったら元も子もないわよ。
ね？　カ・ズ・ヒ・サ。」

そう、わたしは一気に言った。

「「「「　な・な、な・・・　」」」」

女性陣はわたしの話に着いて来れてないけど、目つきが怖くなりましたっv

ふと、男の子を見ると、

おや?顔つきが変わりましたね。

「・・・まさかこっちで、シャーロック・ホームズに出会うとは思わなかったな。」

あ、解ってくれましたか。

「ちょっとサフィニア、あんた何しゃべったのっっ　勇者だってバレてるじゃない!!」

と騎士(ルーシニティ)が言う、それって不敬罪じゃないの?　テンプレの幼馴染?

「言ってないっ　言ってないっ」

ぷるぷると顔を横に振る皇女様。　あ、口調が庶民的。

男の子は横目でそれを見て苦笑しつつ言う、

「あー?ニアはこう言ってるし、どうして判ったのか解説してくれ

るかな？
リア？・・・・微妙に、ニアとかぶるな。
ファリナって呼ぶけど良いか？」

「ええ、もちろんよ。」

こころよく快諾してから、わたしは解説し始める。

「どうして勇者だって判ったかと言うと、
この国が最近、『勇者召還の儀』を行ったってのは有名だから。
あなたの髪の毛、そして瞳の色。闇の精霊からの祝福の色よね。
でもね、この世界では闇の精霊が祝福を与えた生き物は存在しないの。
そう考えれば、あなたはこの世界の人間じゃない。つまり異界人。
だから勇者。」

「なるほどね。でも、まだ他にもあるよな？」

「あなたの着ている服、それ動物の死骸から出た油から作られているわね。」

「「「「　ええっ　」」」」

あ、女性陣が気持ち男の子から離れましたよ。

「大昔に死んだ動物が大地に還って、なが～～い年月を経ると、
大地の下に黒い油と
なって溜まるわ。その油を使って作られた繊維でその服は編まれて
いる。
でも、服が黒いのは後から染めているのね。それに動物の毛が編み
こまれているけど、
その動物はわたしが知る限り、この世界には居ない動物ね？
しいてあげるなら羊が近いけど、全く同じじゃないわ。どこか違う。
そして、毛が入った黒い長袖の服なら冬服だって考えるのが自然よ。
」

そう、こっちの羊と、あっちの羊は当然種類が違う。
言ったでしょ？精霊術で肉体だって再生出来ちゃうって。
それってつまり、ＤＮＡレベルで判別出来るくらい”識る”ことから始まるの。
もっともこの世界ではＤＮＡなんて体系付けられた科学・医学知識は無いわけだけど。
まぁ、わたしは最初からポリエステルとかウールとか知ってて言ってるけど。

「さらに、あなたのその左腕の・・・そう、それ、
さっきからチッチッチって一定リズムで動いてるわよね。わたし耳が良いの。
一日のうち、今がいつなのかを教えてくれる機械だよね。
あなた、背が高くて大人っぽいからここに居る女性と同じくらいの歳に
見えなくもないけど、ただの童顔じゃないでしょ？

ほんとは16か17歳くらいなんじゃない？」

実は詰襟に？って記章バッジがついてるからなんだけどね、アハハハ（汗

そして耳が良いのはホントだけど、ここまで腕時計の音は聞こえませんえへっ

Ωマークが見えたから機械式かな？とハッタリです。クオーツだったら困るかも？

「「「「　えええ～っ！　」」」」

驚く女性陣、あなた達、さっきからそればっかりよ。

「そこまで考えれば、いくら異世界だからって、その歳でそこまで小さくなった精巧な

機械を普通に持てるハズがない。（だってオメガだし）

裕福な家庭に育って、御両親に愛されてるのかな？って。

向こうの世界を忘れたくなくて、その黒い服が冬服にも関わらず着てるのかなって。

まだ涼しいとは言え、もうすぐ初夏だし。

ならば、この世界にも馴染めたとは言えないって考えたの。」

わたしがそう言うと、皇女様は泣きそうになって、

「わ・ワタナベ、わたくし、わたくし・・・・」

男の子、あらため、カズヒサは、

「いいさ、ん、ファリナも言ったろ？これも縁なんだよ。そりゃ最初は腹立ったけどな。
もうそこは自分の中で消化したよ。だからもう『召還してごめんなさい』は無しだ。」

カズヒサはわたしを見て、「もう終りかい？」と聞くので、

「そうね、後は、さっきオヒメサマが『戦功と実績を与えたい』って言ってたから、
きっとカズヒサは初陣なんだろうなと。
で、わたしがカズヒサって呼んだのは、オヒメサマがワタナベって呼んでたから対抗の
意味でひとつ、そして異世界人ならもしかしてカズヒサがファーストネームの可能性が
あるよねー、って思ってね。」

ウッソー、カズヒサが名前だって知ってましたからー。
そして、次男以降に「カズ」は付けないでしょう？　和（カズ）かもしれないけど。
長男かな？と思ったのよね。長男ならなおさら家族を気にするよね？
みんなもわたしの優秀さが解ってくれたかな？　トゲエルフなめん

なっ

ねね、このカズヒサとオヒメサマ、いぢり甲斐あると思うのわたしダケかな？

なんか旅が楽しくなりそう！

そして、まだまだ、いぢりネタは続くのだ。

ついでに話が長いので　ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥよっｖ

次回！

ハダカにひんむかれる勇者様！　トゲエルフよとうとう公然ワイセツに走ったか！？

果たしていぢりネタはなんだ！？　次までの宿題ですっｖ　（必殺エルフスマイル！）

だいぶヒントはあげてるのよ。（ぽそっ

7ページ目　ロヒヤルなお仕事（後書き）

Ｎｏーーー、自分の時間軸で書いてしまったよ（＾＾；；；
これは致命的なので直させて頂きます。
誤：昨日オヒメサマが
正：さっきオヒメサマが

8ページ目

8ページ目

わたしの名はリアファリナ、真面目にやるのは次回からよ！と誓うトゲエルフさね。

さて、女の子に囲まれた勇者様。
いったいこの世界の何を救うつもりなのか知らないし興味も無い。
でも待って！　これは無い、あり得ない。
世の為、人の為、わたしの為。このトゲエルフが今回ズバっと言うわよっ

北門で皇女様パーティーと合流したわたしは、王家マークの馬車に揺られて
ピネの村へと出発しました。
女騎士（ルーシニティ）が自慢するには、この馬車は普通の馬車よりずっと早くて、7日で着くのだそうだ。
揺れも少なくてとても快適！らしいのよね。

馬車は一日１５０ｋｍとして、ピネの村まで約１０００ｋｍ？
『飛翔』でも約１．５時間も掛かるのかぁ。

アイゼンワード帝国の外れもはずれなんだねー
御者は女偵察。ときどき女騎士（ルーシニティ）にかわる予定なんだって。
それ以外のメンバーは豪華な馬車の中で親睦会かねて談笑中なの。

「そっかー、あんたも大変だねー。ニア？
そういう理由でこの馬車に護衛がついてないのかぁ。」

「まったくよ。そりゃルーもシャイアもオーリス（オーリス）も強いけどさ。
仮にも勇者に何の護衛もつけないなんてっ。
そりゃ～わたくしも悪かったわよっ。売り言葉に買い言葉だったのっっ
う～左大臣め～。」

もうだいぶ皇女様（ニア）とも打ち解けました。言葉がくだけてます。

「ね～？ニアっていつもこうなの？」

と、わたしはコソっと隣の女騎士（ルーシニティ）に聞く。
あーもう、フルネームはメンドクサイから以下略称ですっv

「ああ、これでもまだ格好付けてるんだよ？」

と、いたずらっぽくルーの目線が動く。

「ニアって、あたしたちに話しかける時とは声の高さすら違うものねっ。」

こちらはシャイア、もちろん目線はルーと一緒。

「だーよねー。ラブラブ光線出てるもんね。」

わたしがそう言うと、そこへ、カズヒサが割り込む。

「なぁ？ファリナ？」

「ブフーッ、ちょっ　カズヒサはくふっ　は・ははっ話掛けないでっ、
せっ、かく笑いが収まったの、にっひっひ、あははははっ。く・くるしっ　アハハハ。」

だめーーっ　カズヒサ超おもしろい。
わたしはカズヒサを見てオオウケしている。なんでかって？

あれは馬車に乗ってすぐのこと、

カズヒサがある程度話をしてくれるようになって、わたしは新たに気付いた事がある。

「ね、ね、ね？カズヒサは異世界の言葉を話してるんでしょ？
どうやってこっちの言葉に変換してるの？」

「え？それも解るのか？」　とカズヒサ。

「もちろんよ、光と風と時の精霊がカズヒサの言葉を弄っているのが見えるもの。
時の精霊を操る術式は喪われたハズよね。それが『勇者召還の儀』の効果なの？」

「まぁ、ファリナは優秀な精霊使いなのですね。その通りです、『勇者召還の儀』は他にも様々な恩恵を勇者に与える、神より授かった術（わざ）なのです。」

「他にどんなのが出来るの？」

とわたしが言うと、カズヒサが答える。

「ああ、判ってる事では身体能力がかなり向上してる。それと剣で結構な威力の技が
使えるようになった。技は一度使うと次に使えるようになるまでおよそ１００数える
くらい待たないとダメだけどな。それがナゼなのかはよく判ってない。」

「ふ～ん？たぶんわたしが見れば判ると思うけど。後で見せてね。」

「ほんとか！？ナゾのまま残しておくのってなんか落ち着かないからさ、助かったよ。」

「プッ」そこまでカズヒサの話を聞いてたわたしは突然吹き出した。

「え？なんで笑うのさ？　俺の顔に何かついてる？」

「あはははははっ　カズヒサ面白い事になってるわよっ、自分で気付いてないの？」

「な・何？何が面白いの？」

カズヒサを笑ってるせいか、ニアの声がちょっと堅い。

「あ、あのね。」

それでは、涙を拭きながら判ってないカズヒサに教えてあげるとしましょう。

「カズヒサのね、口の動きとね、言葉の音がズレてるの。
ちょっと待ってね、モノマネして実演してあげるからっ。」

そういって、わたしは伊達メガネを通して見える仮想キーボードの

ショートカットに、
『音声遅延』それと『音声遅延解除』の２つを設定する。
さすがにこの作業はパソコンで設定するように、『ポチっとな』では済まない。

ショートカットはあくまで”見える”だけであり、実際に詠唱を短縮実行しているのは
わたしの頭の中なのだ。
ショートカットキーは、『力有る言葉を実行する際の決め事＝シーケンス』に過ぎない。
詠唱してこの世界に魔法の効果を現すのは、どこまでもわたしの意思力なのだ。

そのため、『ポチっとな』では設定できず、わたしの頭の中のショートカットキーと
一対一で対応している記憶野に徹底的に覚えこませる必要があるのだ。

なっが～～～い詠唱のオコトバを暗記するダケとも言えるけどね。
具体的な長さを具体例にすれば魔術式によるけど、寿限無と同等～１００倍程度かな。
ねー？誰か簡単に覚える方法見つけたら教えてね？絶対よ！

さて、準備完了！

みなさんには判り易く、文字で説明しまーーーーっす。

上の段が唇の動き＝クチパク『口パ』と表記するね。〇は唇を開いて一が閉じるだからね。
下の段はカズヒサの声で『音声』と表記するね。
文字がズレたら脳内変換してくださーい。え？誰にいってんの？

口パ：〇ー、〇ー〇ー一、〇ー〇ー一
音声：では、はじまりー、はじまりー

『音声遅延』を起動する。

口パ：〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー
音声：　　むかーし、むかし、あるところに勇者様がおられたそうな。

『音声遅延解除』でキャンセル。

口パ：〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇
音声：ずいぶんテンプレな昔話ねぇ？

『音声遅延』再度起動。

口パ：〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー
音声：　　魔法でこの世界の言葉を話せるようになった勇者様ですが、

口パ：〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー
音声：　　実はその魔法はギャグだったのです、なんて不幸な勇者様。

ロパ：○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー

音声：　　　　　　　でもでも本人気付いてなかったので問題ありませんでした。

ロパ：○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー

音声：　　　　　　　そこへ、一人の親切なトゲエルフがやって来て言いました。

『音声遅延解除』でキャンセル。

ロパ：○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○ー○

音声：ずいぶんマヌケな事になってるよ、と。

「さぁっ、判ってくれたかな？？　唇の動きと声に微妙なズレがあるのーｗｗｗｗｗ」

と解説をおわると同時に笑い転げるわたし。もうだめーーーーーーーーーっ！！！

（ただいま音声が乱れているので少々お待ちください。）

「まさか、そんな風に見えて聞こえるとは。。。」

あ、カズヒサが落ち込んでる。

「ダイジョブよ、ぷっ、ちょっ　ぐふっ　した　ふふっ　ふくぁっ
あはっ　じゅちゅ
だからっｖ　あはははっ。　（大丈夫よ、ちょっとした腹話術だから）」

「それのどこが面白いのよ。
たしかに唇と声はズレてるけど、気になるほどじゃないわよ。」

あ、ニアには全然ウケてないみたい。憮然としてる。

「確かに唇と音はズレてるが、そんなに面白いか？」とルー。

「神の術を笑うなんて不謹慎な。」シャイアは・・・あんた顔が緩んでるよ？

カズヒサは目ざとくシャイアの顔に気付き、シャイアに近づいて両肩に手を置いた、

「シャイア、ホントの事を言っ「ブフー」」

あ、シャイア、床ドンしてる。
これって気にしないと全然ＯＫなのに、一度気になっちゃうとダメなパターンなのよね。

あ～あ、カズヒサ、とうとう床にのの字を書いてるよ。。。。。

それ以来、トゲエルフはカズヒサを見るたびに笑い転げましたとさ。
どっとはらい。

そうして、しばらく笑い続けたわたし、まだ落ち込んでるカズヒサに言う、

「ま、ほんとは、言うほど唇と声はズレてないよ。とカズヒサをフォロー。」

ふー、やっと笑いを抑えられる程度には落ち着いたわっ。

「ね、カズヒサ、『あいつのあたまはあいうえお。』って言ってみて。」

「なんだそりゃ？　あいつのあたまはあいうえお、これでいいのか？」

「ふむふむ、やっぱりね。『あいつのあたま』はこっちの言葉に変換されるのね、
唇と声がズレるわ。　『あいうえお』は意味の無い言葉だから異界の言葉のままね、

唇と声が一致してる。」

わたしはそんな風にカズヒサに掛かってる『勇者召還の儀』の効果を一つずつ確かめて
退屈な馬車の旅を有意義に過ごしたのでした。

「さー、夕ご飯ｖ　夕ご飯ｖ」

馬車は野宿のために開けた場所に止まりました。
わたしはニコニコしながら誰よりも早く馬車から飛び降りて夕ご飯の準備をします。
だってぺこぺこなんだもの。
準備と言っても、携帯食だから、せめてスープを作るくらいだけどね。

「でも、その前にやらなきゃならない事が、言わなきゃならない事があるっっ。」

わたしはカズヒサに振り返ると、声色を変えた。

「脱げ。」　と学生服を着たままのカズヒサに迫るわたし。

「なんだあ?。」　やっぱり気付いてないのか、バカヒサが言う。
そもそも、女性が４人も居て、なんで誰も何も言わないのっ?
「あっ！　あ、あの、その服はカズヒサの故郷の思い出が詰まってる服なのっ
わたし達なら平気だからっっ。」
シャイアはわたしが何を言いたいのか判ったらしい。バカヒサをかばう。
「ザケンナ、ヒトが親切にやんわりと服を脱ぐように言ったにも関わらず、よ?
わたしの猫の額より狭い心も、ここらが我慢の限界よっっ。」
「それ、我慢してないだ「してましたっ。だから脱げ!」」
今はわたしのターンだっ　バカヒサにはしゃべらせません。
ここまで言えば、女性他３人も判ったらしい。
「その服はカズヒサのとても大切な物らしいのです。我慢して頂けませんか?」
「少しくらい汗臭くても構わないぞ。」
「・・・・・・。」
上からニア、ルー、オーリスの順よ。

「わたしには我慢で・き・ま・せ・ん。
やさしーく、季節柄冬服は脱いだら?と気を使ってあげたのに無にしおって!
トゲエルフの鼻の良さ、ナメンナッ
さー脱ぐのじゃぁバカヒサぁー。おりゃーーーーっ。」

そう言ってわたしはバカヒサに飛びついて服を剥ぎはじめる。。。。。。。。

「きゃぁぁぁぁあああああっ。」　おまえは女の子かっ!

あんまり抵抗しなかったところを見ると、カズヒサも気にしては居たらしい。

指の先に持っただけで、むぁん、と来るその学生服を掲げ、わたしは魔術式を起動する。

『全自動』
わたしの目の前に、１mくらいの水球が浮かぶ。
そこへ、ポシェットから柑橘系の果物から作った香水を取り出し、少し混ぜてから
学生服をポイッと放り込むと、水球はグルグル回りだす。時々反対側にまわったり、
学生服をぽーーんと空中に放り投げたかと思うと、ばっしゃーんと落としたり。
それをリズミカルに繰り返している。

『全自動』はね、洗い、たたき、すすぎ、で脱水や乾燥も自動でするのよ。
水の精霊が乾燥してくれるからシワにならずにパリッと仕上がるスグレモノなのっv

わたしはそれらを確認してから、

『水球』
あらためて別に水を呼び出し、その水を使い手を洗ってからスープを作り始めた。

カズヒサとニアを含めた全員、それをポカーンと見てた。

そしたら、わたしがこのパーティーの洗濯係に決まってしまいましたぁ。え～ん。
あ、まだご飯食べてないっ　次回までおあずけなの！？

9ページ目

9ページ目

わたしの名はリアファリナ、シリアスってトゲエルフのキャラだっけ？

やっと夕ご飯ですっv
作ったスープはミネストローネ風ですよ。
あくまでそれっぽいという別物。なんでとか聞かないでっ

わたしはスープを全員に配ると、

「暖かいうちに食べてねv　それでは、いただきますっ。」

そう言って、皆の呼吸が合ってなくても食べ始めるわたし。
これは家族でも無ければ仲良しクラブでも無いよ、というわたしの無言のメッセージだ。

さあって、夕ご飯を食べながら今後の予定を立てようかな。
実は『探知』に１０分ほど前から引っかかってる推定人数7名がここから３００ｍほど
向こうの森の中にいるのよね。
わたしはこの推定7名をあえて皆に知らせてない。

もちろん、向こうが敵対行動を具体的に取り始めたなら告げるつもりだ。
それまでは、このパーティーメンバーのお手並み拝見です。
わたしの予想ではこっちは6名だし馬車もある。
もしかしたら魔法を使っている所も見られたのかも知れない。
襲ってくるなら寝静まった夜中だろう。

「ね？ファリナ。」
「なーに？ニア。」
「さっき詠唱せずに魔法唱えてよね？」
「うん、使ってたね。わたしが創った魔術式なのっv。」
「「　あなたが創った？　」」　あ、シャイアもハモった。

「どうやって詠唱せずに魔法を発現してるの！？」　とニア。
「それは秘密。わたしが魔法を使うのは自由に見て良いよ。でもやり方は教えない。」

「あら残念だわ。でも・・・それならじっくり見せてもらうわね。」
「はいはーい。でもわたしもニアの魔法には興味あるから、ふふふふふ。」

わたしは他の誰かと魔法について語り合った事はこれまでにない。
わたしの魔術式は”知識”を基にしてはいるものの、その動力源や発動のキーとなる部分は
精霊術が占めている。
例えばこの伊達メガネ。キーボードが見えているのは、精神の精霊を利用した幻覚なのだ。

見えているのは『気のせい』と紙一重なのである。

”生きた鎧”がある程度の自己判断力を持つのは、精神の精霊を利用して創り出したわたしの2重人格部分で鎧のリモコン制御を行っているからに過ぎない。わたしの主人格の裏側で勝手に動いているから独立しているように見えるだけだ。

実はこれはとても危険な魔術なのだ。
幻覚という物が見えるだけで実害が無いと知ってなければ、精神の精霊との最初の接触で、
戯れに見せられた幻覚から傷つけられ、閉じ込められ、心の暗闇から抜け出せなくなってしまうだろう。
精神の精霊にはいくつもの種類が居るが、そのどれもが、最初の接触で自己崩壊するか、
精霊を制御できるかに分かれる。極端を言えば、デットオアアライブなのだ。
エルフの仲間内では精神の精霊との接触は禁忌だった。
だから他人に非詠唱＝伊達メガネの秘密を教えるつもりは無い。
生半可で付け焼刃な知識で接触すれば結果はあきらかだ。

「なぁ、ファリナ。」おっと次の質問者はカズヒサね。
「なぁに？カズヒサ。」

そう返事すると、カズヒサは真剣な顔をして、

「さっき、気になることを言ってたよな。」
「気になること？」　わたしはカズヒサが何を言うか大体予想していた。

「ラブラブ光線、それに、バカヒサだよ。」
「うん、それが何？」
「とぼけるなよ、光線って言葉はこっちの世界に無い。それに『バカなカズヒサ』なら
自動的にこっちの言葉に変換されて意味が通じるってのはさっき教えてくれたよな。
でも、『バカヒサ』は固有名詞だ。こっちの言葉には変換されない。
確かめたのさ。光線もバカヒサも、ニアはじめ誰も理解できてない。
意味が通じたのは俺だけだ。」

「へー？それで？ただの聞き間違いかもよ？」
「まだあるさ、左腕につけてる宝玉ブレスレット。それの表面に文字が浮き出てるよな。
俺はこっちの字を読めないからオーリスに頼んだんだ。
料理してるファリナの隣で、オーリスがその文字を読み取って教えてくれた。
ついでに、文字が変化するタイミングで指を立ててもらったんだ。
変化時間を俺がストップウォッチで計るためにね。
この世界には時計が無い。朝日が昇る時と、正午、それに夕日が沈む時に教会の鐘が鳴る
だけだ。正午を１２時とした時に、今は俺の時計で６時３０分だ。
なんで時計が無いこの世界で、俺の時計とファリナの宝玉の文字がほぼ一致するんだ？

なんで1分の長さがどちらもほぼ同じなんだ？」

「ファリナは・・・ファリナは、俺の世界を知ってるんじゃないのか？」

「へー？ずいぶんカシコイことしてくれるじゃない。」

「まぁな。これでも帰るために必死なんでね。」

わたしとカズヒサの間に擬音を入れるとしたら、『バチバチバチッ』だろうか？

それとも『ズゴゴゴゴ』だろうか。

わたしが何も言わないでいると、答える気が無いと思ったのだろう、カズヒサは頭を下げると、

「頼む！俺が帰る方法を知っていたら教えてくれっ。頼む、頼むっっ、頼むよ・・・・」

わたしは必死に頭を下げるカズヒサを見つめ、ふと自分が両肩を抱いているのに気付いた。

この季節、日が暮れてしばらくすれば涼しいを通り越し、まだ肌寒い。

『全自動』を見ると、すでにカズヒサの学生服は乾燥まで終って宙に浮かんでいた。

わたしは立ち上がって風の精霊が宙に保持している学生服を手に取ると、

「わたしは向こうの世界に行く方法をたった一つしか知らない。」

そう言って学生服を、頭を上げてわたしを見る半裸のカズヒサに押し付けて、

夕ご飯の後片付けをするために動き出す。

「それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・死ぬことよ。」

背後で、ニアとオーリスが息をのんだのが伝わってきた。

誰も何も言わない。わたしの『水球』を使った御椀を洗う音だけが響く。

残念ながら、ワレモノを『全自動』する術はまだ敷居が高く完成していないので手洗いだ。

ふと気になってカズヒサを見ると、

カズヒサは学生服をじっと、何かを考えながらじっと見ている・・・
・

「ワタナベ」　ニアはそう言ってカズヒサの手から学生服を優しく取り上げ、

背後に廻って学生服をカズヒサの肩に掛けてから抱きしめる。
少し涙目ながら、それでもしっかりカズヒサにすがりついてるその姿を見てると、
ニアのカズヒサへの思いの強さが伝わって来るようだ。

カズヒサはニアの手を取り、口を開きかけ
しかし、何かを言う前にまた口を閉じ、手を離した。

そうしてから、おもむろに学生服の袖に手を通しながら、わたしに話しかける。

「良い匂いだな。ライムに似てる。さんじゅうきゅ。」

それを聞いたわたしは、やっぱり神の術って凄いんだけどどこかマヌケだなぁと思いつつ。

「Ｙｏｕｒ　ｗｅｌｃｏｍｅ.」と返事を返した。

その後、静けさをやぶったのは、シャイアだった。

バシンッ　と自分の両ほほを叩いて、

「うんっっ　　ねぇ？ファリナ？」　とわたしに話しかける。

「はいなー？」

「ねぇねぇ、さっきの洗濯だけどさ、もしかしたら、人相手にも出来るの？

こう、水の玉が浮かんでたじゃない？それに飛び込んで泳げたりできるのかな？」

「出来るわよー、ふふふっ　お風呂の魔術式があるのさっv。」

「やった！！　ねー、後で入らせて！　やっぱり汗臭いままで寝るのは。。。ね？」

「良いわよー。」

すると、そこへ、

「よっし、じゃその前にイヤな事は片付けちゃおう！　盗賊が数人森にいるのよ。」

オーリスはそういうと、弓を手に取り、森と逆方向へ歩いていく。

「たぶん7人よ。」　わたしはオーリスの背中にそう声と『体力セット』を掛けた。

ニアは、わたしがそう言うのを聞いて、こちらを見る。

わたしにはギラリと擬音が聞こえるんだけど。。。

「人数まで判ってたんなら教えて欲しかったわね。もしかしてわたくし達を試していた？」

「人聞き悪いわよ。お手並み拝見よっ。」（必殺エルフスマイル！）

「まぁ良いわ、でも、次からはちゃんと教えてね。」　ちぇっニアには通じないや。

「それはそれとして」わたしはカズヒサに向き直り「殺せるのかしら？」と言った。

「やるさ。」　全っ然、やれるように見えないカズヒサはそう言いながら武具を学生服の上に身に着け始めた。

「そう、ひとこと助言すると、相手はカズヒサを絶対殺すつもりで来るわよ。

女性５人は生かしたまま捕らえるつもりだろうけど、カズヒサだけは殺すわね。

そして、わたしはいい歳しといて殺すつもりで来る相手に次の機会なんてあげる

つもりはないわ。生かして帰せばいつか自分に災いが降りかかるだけ。

分別つかない事への責任は彼ら自身に帰結すべき問題よね。」

そうしてわたしは、『魔力セット』と『体力セット』それに『風の護り』をここにいる

全員に掛けた。
いま構想中のグループ補助魔法が完成してないのが内心、滝涙だった。
あーもー、なんでわたしってばもっと早くグループ魔法創っておかなかったんだろう！！

「これも全ては空気をよまない盗賊達が悪い！」
わたしは怒りを盗賊達にぶつけることに決めましたっ

ニアとシャイアは、「「これ凄い（ですっ）」」と大興奮していた。

「いいわよっ。」とわたしが声を掛けるとカズヒサとルーが森へと一直線に走り出す。

あっと言う間に森までの半分を走り、すると『探知』している7人にも動きが出る。
どうやらこちらの動きを知り、迎え撃つようだ。

敵が森から姿を現す。なんで出てくるんだろう?
こっちが女ばかりだからって舐めてるわね。

「ディー・フロー・エルアライン・リー・アローテ、
猛き炎よ魔力を糧に敵を撃て！『ファイアーボール』」

ニアの先制攻撃が、出てきた敵の先頭3人ほどへ襲い掛かり二人を吹き飛ばすのが見えた。
へーーーーーー、あれがニアの魔術式なんだぁ。
もう盗賊なんてどうでも良いわよっ　いまのわたしはニアの魔術式

を解析するのに夢中だｖ

ニアがさっき走り出す前にいくつか魔術式を展開しているのは見えてた。
そして走りながら、それらの魔術式が周囲から魔力を集め球状になるのも感じてた。
どうやらその球状の魔力に、発現直前行った詠唱をもって炎を纏わりつかせ、
火球と成したようだった。

「でも、それだけなら狙った場所に誘導するための式が抜けている。あ、そうか、詠唱の第２節の構造体が盗賊達の座標ポイントに対して・・・第４節で生みだした爆圧効果を第５節が高めて、第１節の・・・・が、・・・・で爆発の威力を・・・
なるほどっ、だから第３節が・・・となってたのね、でも、それなら・・・ぶつぶつ。」

そんなことをしていたら、カズヒサが敵と接敵するのが見えた。その直前、

「ヒュン」と音がすると同時に敵の最後尾の男が矢で倒れる。
シャイアだ。迂回して横手から襲い掛かったのだ。良いタイミングね。
盗賊達は魔法と弓で先手を打たれ、あきらかにまごついていた。

そして、
カズヒサが両手剣を腰だめに水平に構えた瞬間、両手剣は白くまばゆく輝く！

「せいっ」カズヒサが掛け声と同時に剣を横に振りぬくと、白いエフェクトが宙を走る！

バシッ。。。と音が鳴ったと思う、良く判らない。
もしかしたら、わたしの頭の中でだけ効果音が鳴ったのかも知れない。
気付くと、立っていた3人が6つに分かれて居た。

直後ルーがまだ立っている最後の一人を剣で倒した。火球に耐えた一人だ。
それで、この戦闘は終わりだった。

「・・・大丈夫？ワタナベ？」シャイアがカズヒサに声を掛けている。
「・・・・・あぁ。」カズヒサは剣を背中の鞘に戻すとそう力なく答える。
「ワタナベ、無理しないで。」ニアが近づきながらそう言う。

カズヒサは自分の手のひらをじっと見つめている。
・・・こいつって事有る度に何かをじっと見て浸ってる事が多いわよね？
なので、わたしは言った。

「カズヒサ？ママーっヘルプミーって泣けば、わたしの胸を貸してあげても良いわよ？」

そう言うと、カズヒサは顔をわたしに向け、いぶかしげに見た後、ふっと薄く笑った。

「どうせ上げ底だろ？」

ぎゃふん！なななな、なぜ解った！

「おお・おまっ　な・な・なっ。」

カズヒサはわたしをほっといてニアに向き直ると、

「もう、大丈夫さ。　さぁこんな所からさっさと場所を移動して休もうぜ。」

女性陣４人を連れて馬車へと戻って行く。

人が去ると元々何もない静かな森である、静寂が戻ってくる。

わたしは何も言わず『闇牙』を起動し、俯けで倒れている男の背中を撃つ。

火球で吹き飛ばされそのまま倒れていた一人だ。

男はビクビクンッと動くがすぐに動かなくなった。

『闇牙』は黒いレーザー光線で、当たれば神経細胞にダメージを与え、
確実な死を相手にもたらす単体相手の殺傷用魔術式だ。
そして『水球』を作り、続いて水霊操りでまだ燃えている火を消化する。
それが済むと、わたしは歌の形式をとった魔術式を詠った。

『死は次なる生に続き　体は朽ちても魂は次なる世界へと旅立たん
　貴方の次なる人生に
優しさと喜びが訪れ　そしていつかこの世界へと還り　永久となることを願わん。』

男達の遺体は地中深くへ沈み、速やかに大地に還ることになるだろう。
わたし達はこうして世界を循環するモノなのだから。

わたしが馬車に遅れて戻ると、カズヒサは馬車にもたれたまま、

「よくわからんヤツだな。いったいお前はなんなんだ?」
「ただのトゲエルフなんじゃない?」

馬車を少し移動させ、そこで再度野営の準備を行った。
わたしの『お風呂セット』は大きめの『水球・お湯バージョン』の周りを『識別妨害』で中が見えなくした作りになっている。そう、摺りガラス＆モザイクさっ。
女性陣はお風呂の中へ入ってしまえばお湯の中が見られないことに気をよくし、カズヒサを首だけ出して挑発していた。

「ワタナベ～♪　せっかくだし一緒に入るか？」とルー。明らかにからかいムードだ。
「ワタナベ、あまりじろじろ見ちゃイヤよ。」とニア、なんか嬉しそうだ。
「女性の誘いをむげにするなんて神のご意思に反しますっ」とシャイア、どんな神なの？
「どう考えてもチャンスだろ（ニヤニヤ）」とオーリス。

わたしも一緒にお風呂に入ってるんだけど・・・・わたしはカズヒサから一番離れて、
女性陣の陰に隠れてカズヒサの目から逃れていました。

カズヒサってば、まぶたの上を指で押さえながら、お風呂のお湯をガン見してたから。
むむむ、カズヒサ、やるなっっ。

１０ページ目

１０ページ目

わたしの名はリアファリナ、トゲエルフのノンビリ旅の陰で、ピネの村は大変なことに。

それからもカズヒサは、故郷へ帰る方法を模索するため？にわたしに何かと話し掛ける日が続き、時々ニアが顔マッカにして引き剥がそうとする姿が見られたほかは、特に何のイベントもなく、平穏な旅が続きました。

お風呂タイムでは相変わらずカズヒサをからかって遊ぶ女性陣と、ある意味リフレッシュな時間と割り切ったのか、『お風呂セット』のお湯水球の前からどっかと座って動かないカズヒサ。

見えない状況を、より見え辛くすることで、かえって自身の妄想を掻き立てるその方法は割と有名どころではあるけれど、これも一つの知識、そして困難を解決する努力の一つ。

ごめんねぇ、ニア。バカヒサの妄想を食い止める魔術式には心当たり無いのよ。

わたしはもう一緒に入るのは止めていたけれど、何も知らない女性達に今更言うのもアレでしかないので、この秘密は墓まで持っていくことに決めました。

馬車の旅2日目はパーティーを支援するためのグループ支援魔法(バフ)開発に勤しんだ。
わたしのショートカットはマクロ対応なので、既に手持ちにある単体バフをメンバー全員
に次々と延々詠唱する方法でも実使用場面としては困らない。
でもっ、わたしの魔道エンジニア、もとい、クリエイターとしての美意識が轟き叫ぶのだっ
もっと美しくっ！と。

というわけで、魔術式のフレームは『魔力セット』そして『体力セット』を流用しつつ、
グループ支援魔法としての特徴を強く打ち出した味付けで組み上げる。
既存魔術式の焼き直しとは言え、思惑通りに行ったなら凄いことになりそうですっ
キタキタキターっ！ひさびさに何かが光臨(おり)て来ましたっv

カズヒサ達は一心不乱に虚空を睨み指で何かをなぞるようなせわしない動きをしつつ、
時折にへらとユル顔を見せたり、親の敵を見るような厳しい目つきをする謎エルフを
生暖かい目で見守りつつ、勇者そして皇女として課された使命を果たすべく武具の手入れ

をしたり、仲間内で様々議論したりで時間を過ごしていた。
彼らの会話の中には「魔族」だの「全面戦争」だの物騒な言葉が出てきていたが。。。
自分の世界に入っているトゲエルフには馬耳東風だった。

馬車の旅3日目は、まだグループ支援魔法を弄ってました。てへっ
魔術式ってのは一日で為らずなのよっ！

馬車の旅4日目は、まだまだグループ支援魔（ｒｙ

って言うと思ったでしょ？ふっふ～ん。
出来ましたーっｖ　少なくても人様に見せられる程度にはっｖ

「ねーねー、カズヒサ、支援魔法の試し撃ちさせて？」
「ようやく終ったのか？おつかれ。　だが、断るっ！」
「えーっ？なんでよー？支援魔法よー？すごいのよー」
「わざわざ俺を指名するところが。絶対ろくでもない魔法だ。」
「むかっ　あっそう？せっかくカズヒサの技が連発出来ない理由が判って、それを補ってあげられるように創ったのになぁー。カズヒサがそう言うなら仕方ないわよねっ？」

「・・・なんて親切な俺が言うと思ったか？」あ、誤魔化した。

「では行きますっ」
お披露目は、わざわざ馬車を止めて全員の前で行うことになりましたっv

『パーティーセット』
魔術式を起動すると、キュバババッ、と音を伴いながら全員の体が色とりどりの光で
次々と包み込まれる。この綺麗な光一つ一つがそれぞれ支援魔法なのだ。
その絶大な支援効果はまさにネ申。
こうして説明してる間にも、ババババッ、と支援魔法はまだまだ続くのよっv

プスンっ

ニア
「あら？ファリナ？なんか終わり方が変じゃなかったですか？
あれれ？ファリナどこ？」

そこには地面につっぷしたトゲエルフがピクピクしてましたとさ。

「ちょっと欲張り過ぎたわ。」わたしは魔力の使いすぎでズキズキする頭を振りながら、
「ある意味、お約束を外さないな、おまえは。」バカヒサが呆れたように言う。

「元々が魔力コスト半端無い魔術式の集合体なのよぉ、一つ一つを大きく改造してコストを低減してるけど、最後のヤツみたいに計算違いすると、もう大変。」

苦笑しながら言い訳する。
まともにパーティーセットを掛けようとしたら、わたしが１０人くらい必要となるので、
魔術式の無駄を如何に省いてコンパクト化出来るかが勝負なのだ。
なのだが。。。

「まったく、魔力使いすぎてダウンなんて、俺が変なヤツだったら危なかったぞ。」
「へ～？そういう事いうんだ？良かったわね、手を出さなくて。」
「カーズーヒーサー！」やっぱりというかニアが来ました。
「うわ！美人の般若顔って怖いぞニア。」
「カズヒサ、ウカツな事いうとニアが暴走しますよ。」オーリスはニヤニヤしながら言う。
「そういう意味じゃないんだけどな。ま、いっか。」
倒れて意識の無いわたしに手をだしたらどうなるかなんて知らない方が幸せよ。

「ところでカズヒサ、あなたの技の話だけど。」
「お？何か判ったのか？」
「うん、あんたがバカヒサだって事は判った。」
「・・・技の話なんだよな？」

「真面目な話よ。あんたねぇ、丸太を切るのと、小枝を切るのと同じ力で剣を振る？
そうじゃないでしょ？丸太には丸太を切るだけの力で、小枝ならそれなりでしょ？
まぁ魔力面での加減の話だから筋力の力加減とは違って、慣れが大事だけどね。」
「それって、あー？あれか？一回で全力出しすぎてたって事か？」

「そうなるわね、あんたのあの技は半端無い威力だし当たれば全部真っ二つだから必要な
魔力コストのチェックも出来てなかったんでしょ？」
「ああ、全部真っ二つってのも考えモンだな。切れてたり切れなかったりで力加減っての
は学習していくもんなんだけどな。そうか、そうだったのか。」

「それとあんたの技は一応魔法剣扱いみたいよ？　技の属性はこの世界のどの属性でも
ないみたいだけど、勇者属性とでも言うのかしら。
男達の体を真っ二つにしたけど、体を構成する地と闇属性部分がすごく綺麗な霊的切断面
だったわ。この世界の知られてるどの属性で切っても、あそこまで霊的歪が無い切断面は、
有り得ないわね。あれなら精霊相手でも、魔族の結界でも何でも切れるでしょうね。

もっとも、技を使った時に全力過ぎて魔力をほぼ使い切る形になってたから、
だから魔力が貯まるまでの時間は、次の技も出せなかったの。
「一応魔法剣。。。って言われ方するとなんかショボイな。
あれ?でもそれだとおかしくないか?
さっきファリナは魔力を使いすぎて倒れたろ?」

「良いつっこみね。
なんかね、あんたの場合魔力が空っぽになっても保護されてるみたい。
普通は魔力を使いすぎると倒れたり、下手すると死んじゃったりするんだけど、
あんたの場合そうならない。たぶん、だけど『勇者召還の儀』の恩恵だと思う。
よかったわね、『吸魔』系の攻撃を受けても技が出せなくなる程度で済むわよ。
魔族にはインプとかバンプとかそれ系も多いから勇者には必要な資質ではあるわね。
バンパイアの手下になっちゃったヘタレ勇者様とか、いい伝説に残りそうじゃない?」

「やめてくれ。」カズヒサは苦笑しつつ答える。
「さっき失敗した支援魔法はパーティー全員の魔力回復力を向上する予定だから、
いざ戦闘!ってなったら今よりはもっと技が連発出来るようになるわよ。」

さー、また魔術式のパラメータ最適化作業に戻りますかっ

「それじゃ、わたしは馬車に戻って魔力式の調整やってるね。うふふふふ、今回の子はなかなか難産だわ。へそ曲がりな子はおしおきよっ。」

そう！こんな時こそ『ズゴゴゴゴゴゴ』の擬音が必要なのよっ　き・あ・いよっっ！！

わたしは馬車へさっさと乗り込んで座り込むと、自分の世界に入り込む。

「ファリナってよっぽど魔法の改造が好きなのね。」シャイアが微笑んで言う。

「凄い情熱ですっわたくしも見習わなくてはっ。」

「好きなのは良いが、あそこまで行くとマッドなサイエンティストだな。」

「この旅が終わっても、一緒してくれると大いに助かるんだけどね。」

オーリスは誰にともなく呟く。

「ファリナの魔法支援はわたくし達の目的を達成するためには必要です。

ですが、無理強いは出来ません。相手は魔王なのですから。」

そこへ、ルーが傍らに馬を引いた騎士を連れて来る、

「ニア、魔王に関しての新情報が入った。

先ほどの話を、もう一度皇女殿下へ報告しろ。」

「はっ、魔王ですが、魔王城から出たとの話はまだ入ってません。
ですが、代わりに側近2名が・・・・・・・・・・・」

馬車の外で、勇者と皇女様がそんな真剣な話をしてるのはお構いなしに、わたしは魔術式
の調整に余念が無かった。
しばらくするとニア達は出発のため馬車に乗り込むが、その時もまだ夢中だった。

「近くにいる仲間までの距離演算が、このアルゴリズムを圧迫させてるのが癌ね。
音波による反射波の・・・・でもそれじゃ・・・・少し位減らしても他が・・・
んっそれだと全体のバランスが・・・・」

「おいファリナ、あまり根を詰めても良いアイディアは出ないぞ。」
カズヒサは馬車に乗り込んで来ると、わたしに何かを投げて来る。
わたしはとっさにそれを片手で受けとめると、

「ちょっとバカヒサ危ないでしょ。まったく一声掛けてくれれば。。。」
そこで閃くモノがありましたーーーっv

「こーれーだーっっつつ!!投げっぱよっ　フィードバックしながら状態監視するから
いけないのよっっ、最初から掛け捨てで・・・そうよ、ここを・・

・・これでっ・・・
いけるっ！　いけるわっっ！！
音速1秒の距離だけ届かせれば計算式が簡素化出来るわっ、ならば・・・」

「おーい？ファリナぁ～？やれやれ果物くらい食べてからやりゃ良いのに。」
カズヒサは肩をすくめながらニア達、女性陣と苦笑した。

馬車の旅5日目は、支援魔法が完成したので、かねてから気になっていた『飛翔』が物体と接触した時の安定性向上と、力場の斥力を利用して狭い場所でもオートパイロットよろしく壁や突起物を避けながら怪我無く飛べないかの理論構築を行ってた。
先日の巨大サメ事件で水に接触するのを怖がって『飛翔』を使えなかった反省を生かそうと考えた訳だ。
もっともこちらの魔術式は基礎もまだまだコレからだから、完成は遠いけどねっ。

馬車の旅6日目は、目的地ピネの村についてからの、わたしなりな課題整理したり、
カズヒサがそんなに帰りたいなら、帰るための魔術式を考えてやるか！とばかりに、
以前ちょっと構築を試みて挫折した『異界渡りの術』の欠けた部分に対する考証をする。

そして。。。。”『異界渡りの術』が行使できるのは神だけである。”
という結論にたどり着いた。いや～～すまんねカズヒサ。と心の中でちょっとだけ謝る。

「・・・・チャンスは一度こっきりか。」
もし、どうしてもカズヒサが帰還を望むなら、一回だけわたしでも何とかする方法がある。

カズヒサはこの世界にとって、一枚余分なパズルのピース。
そんなモノが何時までも弾かれないでこの世界に留まり続けているのはそもそも異常。
それを可能にする術が、行使する代償を必要としないなど有り得るのだろうか？
魔法は具現される力に等価する何かしらを代償としている。
こちらの世界でもエネルギー保存則は有効なのだ。

「わたしの推測通りならば、ニアは贄にして鍵。それなら『勇者送還の儀』は、」
カズヒサとニア、二人にとって最後の選択になるのでしょうね。とため息をついた。

馬車の旅7日目、今日はピネの村に到着する日だから、わたしは油断無く『風の護り』を
わたし達全員と馬車の車体および牽引馬全てを対象に掛けた。
馬車には『清浄』を掛けておく。
言うまでもなく伝染病対策だ。

そうしてお昼過ぎにはピネの村近くに駐留する騎士団の駐屯地へと到着した。

「変ですニア、事前の情報ではもっとピネの村に近い所を駐屯地としていたはず。
何か起きたのかも。」
とオーリスが気付いた事をニアに伝える。
「おおかた、騎士団にも発症者が出たんじゃない？」
と、わたしはありそうな事を適当に言った。

前方から幾人かの騎士がやって来てニアの前に膝を突く、

「サフィニア皇女殿下、このような遠く離れた場所までお越し頂き恐悦至極にございます。
されど、予想外のことが起きました。今すぐ国元へお帰りくださるようお願いします。」

「なっ　予想外のこととは何ですかっ？」驚くニア

「実は、ピネの村から十分な距離を取り、村の病人も隔離し決して接触しないよう厳命していたにも関わらず、騎士団の者から発症者が出ました。」

カズヒサ、ニア、ルー、シャイア、それにオーリスは揃ってわたしを見た。

１１ページ目　約束を守れる？

契約を、すれば命を救わん。トゲエルフは鬼か悪魔か？

駐屯する騎士団のおそらくお偉いさんが言う、
「実は、ピネの村から十分な距離を取り、村の病人も隔離し決して接触しないよう厳命していたにも関わらず、騎士団の者から発症者が出ました。」

「このような事態になりましては、皇女殿下の御安全を第一に考える必要があるかと。
旅の疲れも癒えぬ内の御帰郷の勧めに、不肖この辺境第４騎士団長アルゴス、まことに遺憾ではありますが、万が一、皇女殿下が病になど倒れましては一大事にございます。
一刻も早く、ここからお離れになられるよう、進言いたしますぞ。」

「わたくしの心配などは無用です。こうしている間にも民や騎士団員が苦しんでいるのであれば、わたくしが病などを恐れてどうしますか。」

「皇女殿下のお優しいお言葉、病に伏せし団員たちも喜びましょう。されど、殿下、お言葉ではありますが、・・・・・・・」

ニア「・・・・・・・」　団長「・・・・・・・・・」

ニアと団長さんのやり取りを横で聞き流し、団長と一緒に来た騎士にさっそく気になる所を話しかける、たぶんこの人も騎士団の偉い人なんだろうなと思いながら。

「ねぇ？病に倒れた団員さんが発症したのは何時のこと？その人は今どこに？」

話しかけられた騎士は、なんだこいつ？という顔をしたが、皇女殿下と一緒に来たことを思い出したのだろう、質問に答えてくれた、

「今朝のことだ、もっとも発症した者は元々ピネ村を含むこの辺りを巡回衛視だった者だ。もっと前から感染していたのかも知れぬがな。今は村人達の感染者と同じ施設に隔離している。」

「ふーん、ここからピネの村までの距離と、毒を撒いてるっていう怪物の居る沼までの距離を教えて？」

「村まではここから馬で半日は掛かる、元々駐屯していたのは村を出てすぐの所だったのだが、感染者が出てしまったからな。皇女殿下を危険な場所でお迎えする訳には行かない。急ぎもっと村より街道を南へ遠ざかり、安全と思われる場所で皇女殿下をお待ちしたのだ。怪物が居る沼は、ここからだと半日よりもう少し掛かる。」

「あら？わたしがニアから聞いた所では、ピネの村から怪物の沼まで半日って聞いたけど
それなら、元々の駐屯地と比べて、ここは怪物からさほど遠ざかってないわけ？」
「ああ、だがここまでは怪物も来ない。ここは安全だ。」

「そうなんだ。ねぇ？わたしお昼でお腹が空いたわ、騎士団の人達の食料を少し分けて
もらって良いかしら？」
「ああ、それは構わないが、皇女殿下にはすぐにでもここを離れて貰いたいんだよ。」
「ニアは離れる気が無いみたいよ？　まぁその件は任せるわ。
じゃぁ行って来るね、あ、案内は良いから皇女様に付いててあげて？
ニアー？ちょっとお腹空いたから食べ物取ってくるねー。」

わたしは団長とまだ口論しているニアにそう声を掛けた。

団長「なんと申されようと、なりません。」
ニア「わたくしは決定を変えるつもりはありません。・・・・あ、気をつけてファリナ。」

ニアから離れると、適当にぶらぶらしながら辺りを眺める。
チュンチュン、小鳥が地面をつつき歩いている。
ブルルン、騎馬が時折いななく。
慌てているのは人間たちだけで、自然はそんな事お構いなく平和なのかも知れない。

一通り駐屯地を見て周り、わたしは一つの結論に達した。

「ここに居る動物達は病のキャリアーではない。」

毒物なら小動物の方が人間より先に症状が出るだろうし、動物体内の精霊にも大きな乱れがない。村近くに行けば違うのかも知れないが、少なくてもここの動物達は病に侵されてはいない。

次にわたしは騎士団の賄い所へ行き、団長さんの許可は取ってあるからと食料を分けてもらった。ほんとは団長さんの隣にいた騎士の許可だけど細かいことよね？

食料を口に寄せると、

『ダメ』

わたしの顔の横に透き通った水玉というべきモノが浮かび、そこから声が聞こえてくる。

水霊だ。この水玉も声も精霊使いにしか見えないし聞こえない。

わたしは食料を食べずに手を下ろし、賄いをやっている騎士見習いに言う、

「この食料はちょっと悪くなっているみたいよ？材料を見せて貰える？」

「ええっ？そんな古い物じゃないんですよ。・・・・なんだ、どこも悪くなって無いじゃないですか。」

「あーまいっ、あなたには見えないでしょうけど、水霊がこの食べ物は体に悪いって教えてくれてるの。あなたの見立てがどうであれ、水霊はウソをつきま

せん。」
「水霊が？ホントですかぁ？はぁわかりましたよ。どうぞ、調べて下さい。」
どうせ反対しても無駄だと雰囲気で察したようだ。

「ありがとう。」
わたしはしぶしぶながら、わたしの言うとおりに材料を見せてくれる見習いさんに
エルフスマイルを送っておいた。
材料を一つ一つ調べていくが、材料に悪いところは見当たらなかった。
「うーん、調理場を見せてもらうわね。」
そういって返事が返って来る前にさっさと場所を移動する。

調理場にある鍋やカマド、まな板など一つずつ調べて良くと
『ダメ』
また水霊がダメ出しした。
料理に使う水を溜めた水がめだった。

「この水はどこから汲んで来たの？」
「近くの小川からです。」
「この騎士団の料理は全部その小川の水を使ってるの？」
「そうですよ。」
「その小川はどこから流れて来てるの？」
「え？山からだけど。」
「それって東の？」
「見ての通り、この辺の山はそこしか無いよ。」
「どうやら病の原因はこの水みたいよ。」
「ええっっ！！　この水が？」

わたしは水霊に、水がめを『浄水』してくれると同時に、不純物は捨てずに集めてくれるようにお願いした。
普通に『浄水』しちゃうと不純物は捨てられちゃうから。
今はその不純物にこそ用がある。
そうして不純物を拡散しないよう水玉（水霊）で包んでもらい、
「とりあえずこの水がめは『浄水』したけど、これからは別の水源から汲んでくるのね。」
そう騎士見習いに注意を言うと、賄い所を出て、水霊に案内されて小川に行く。
そこでも『浄水』しながら不純物を集める。
そうして十分目に見える量まで集めると、
「これは。。。。そう、そうだったの。」

不純物が何か判れば、集めた不純物の塊にもう用は無い。
かといって、わたしにはこの物質を安全に処理出来る知識は無かった。
小川から取れたのなら、水霊の『浄水』では除かれるだけで分解消去は出来ないだろう。
神官が使う『解毒』なら毒・不純物を分解するそうだが、精霊術は毒・不純物を取り除くだけで分解はしてくれない。
『闇、これ分解出来るかしら?』
闇は物質を素粒子レベルで分解する事が出来る一面を持つので、闇霊にお願いした。

病の原因が判ったので、馬車へ戻るとそこでは何やら騒ぎが起きていた。

「どうしたの？」わたしはオーリスに聞いて見る。
「ピネの村から赤ちゃんを抱いた女の人が来てね、どうやら皇女一行がここに来るという
話をどこかから聞きつけて来たみたい。それで赤ちゃんが例の奇病に侵されていて、
ニアに直訴しようとしたのよ、神官に治して欲しかったらしいの。
可哀相だけどニアに病を移させるわけには行かないわ騎士団が止めたんだけど。
でも、ニアはあの通りでしょ？結局シャイアが治癒を試みてるってわけ。」

なるほど、シャイアは地面に跪き何かを唱えている。神への祈りの言葉だろう。
シャイアの前には赤ちゃんを抱いた女性。子供は息絶え絶えの状態に見える。
女性もシャイアの祈りに合わせ一心に祈っている、
「お願いします、お願いしますっ神様、この子をお助け下さい。」

やがてシャイアの声が高らかに響くと、子供を光が優しく包む。
すると子供の顔色は少し良くなったように見えるが、息絶え絶えなのは変わらなかった。
シャイアは明らかに肩を落とすと、
「申し訳ありません。わたしにあと出来る事は、この子が安らかに神の御許に行けるよう
お祈りを捧げることだけです。」

それを聞いた女性は、

「そんな、そんなっ　お願いします、もう一度、もう一度この子に癒しをっ！
あたしにはこの子しか居ないんですっ。お願いします。お願いしますっっ。」
「神は人の寿命を延ばすことを為さりません。お気の毒ですが。」
シャイアはうなだれたまま女性に言う。

「いや。。いやっ、皇女様、お助け下さい。なんとか、なんとかっ。」
「・・・・・」ニアにも女性に掛ける言葉は無いのだろう。しばらくして、
「どうぞ、馬車にお乗り下さい、生まれ育った村でこの子が神の御許に旅立てるよう。」
ニアはそう女性に話しかける。

それを聞いた騎士団長さんは、
「いけませんっ皇女殿下、このような女を。。。。病の感染者を殿下と同じ馬車へ乗せるなど言語道断ですぞっ。」
「構いません。何度言えば判りますかっ。わたしくがそうしたいのです。」
そうしてニアはこちらを向いて、
「これはわたくしの我侭です。ファリナは病は嫌でしょう？　ですから明日まで別行動にしましょう。わたくし達は馬車でピネの村へと向かいます。
ファリナは明日の朝、村に来て下さい。」

わたしは、ウソを言うのは平気だが、間違った意見をそのままにしておくのは嫌いだ。
だからこう言った。
「別に構わないわよ、伝染病じゃないからうつらないし。」
「「「「　え？　」」」」

「それに、神が人の寿命を延ばさないんじゃない。神の力を引き出すのは人であり、神官が神の力に限界を作っているだけよ。　シャイア、もっと精進なさい。」
トゲを発揮してるなぁ。と自分でも自覚してるが、これがわたしなのだ。
神のせいにして自分が至らない事の言い訳にしてはならない。
だがそれはわたしだから言えるのかも知れない、事実過去に神官が人の寿命に関与出来たことは無かったのだろうからシャイアを責めるのは酷なのだろう。

「伝染病じゃないのなら安心だろ？さぁ、村に行こうぜ。
おっと、その前になぜ伝染病じゃないのか判ったなら教えてくれ、ファリナ。」
カズヒサが場の雰囲気を読んで変えるためそう言った。

「原因は、水銀よ。」
「「「「「　スイギン？　」」」」」カズヒサを除いて水銀が理解出来なかったらしい。
「水銀か！、手足のしびれ、視野狭窄だっけ？なるほど症状は合うな。」

「ええ、だから伝染病じゃないわ。小川の水に含まれている水銀が体に蓄積されると発症するのよ。これからは小川の水は使っちゃだめよ。川の上流、おそらく、その怪物がいる沼付近に水銀を大量に含んだ地盤があるのでしょう。」

「判りました、これからは団員にも水を汲む場所を別にするよう伝えましょう。」

団長がそう約束する。

「原因が判れば対応も出来るでしょう。さあ村へ行きましょう。馬車へ乗って下さい。」

ニアも理解できないまでも原因が判り少し明るくったようだ。

赤ちゃん連れの女性に馬車へ乗車を勧める。

「皇女殿下、我々も準備でき次第村へ向かいます。くれぐれも無茶はなさりませんよう。」

団長さんはそう声を掛けると団員をまとめるために向こうへ行った。

馬車へ乗り込むと、女性が口を開いた、

「そのスイギンとやらが原因と判れば、この子は治るのでしょうか？」

シャイアは無言でうつむき首を振る。

「原因となる物質が判れば、これ以上の悪化は食い止められるだろう。だけど。。。」

カズヒサも向こうの知識で、完治出来ないことを知っているのだろ

う。

「まだ死ぬと決まった訳じゃない。今は早く村で静養させることだ。」

ルーがこれ以上雰囲気が暗くならないよう女性を励ます。

それを聞いたわたしは、ほんとわたしって色々ダメだなぁ、と自覚しつつ、

「気休めは言うものじゃないわ、その子はこのままでは夕暮れまでもたないでしょう。」

と言った。わたしには赤ちゃんに宿る精霊力が見えるのだ。つまり残りの生命力も。

「そんなっ。」女性は絶句して、静かに涙を流す。

ニア、ルー、それにシャイアはどうして今言うんだという厳しい目でわたしを見る。

わたしはその目に、ため息で返すしかなかった。

女性は何かを決心したようだ。泣いたまま赤ちゃんに話しかけている、

「大丈夫、大丈夫よ、お母さんはどこまでも一緒だから。一人にしないから。」

それを見て、わたしはもう一度ため息をついてから、心を決めた。

「ファリナ、そこまで言ってフォロー無いんなら俺の我慢も限界なんだが？」

とカズヒサがわたしの背中を押そうとしてるのかそう言う。

「そうね。
ここからはナイショの話になるんだけど、あなた、秘密は守れるかしら?」
わたしは女性にそう聞いた。

「ここで起きることを生涯誰にも話さないと約束するなら、その子を助けてあげる。」
「守りますっ。」
間髪入れず、女性は約束の言葉を返してくる。

「他の皆は?」
「いいぞ、勇者として誰にも秘密を話さないと約束しよう。いいな?」
カズヒサは決定事項として皆に約束を守るように言う。
約束破ったら酷いからね!日記のサブタイにも入れて覚えとくんだからっっ。

わたし自身のコンセントレーションを高めるために皆に言う、
「さっき言ってたように、神の力がこれまで寿命に関与したことは無い。
本当は神官の限界ではあるんだけど、わたしが神の力を超えたかのように思われると
何かと問題になるわ。狂信者にも、これまで癒されなかった重症患者にも。

押し掛けられるのは迷惑なの。
だから誰にも話さないでね。」

そう言ってから女性の前に両膝を着くと、左手を胸鎧の中央にはまっている宝珠に置き、
『簡易儀式』
魔術式を起動する。
わたしの右肩から『風の宝玉』が、
わたしの左肩から『水の宝玉』が、
わたしの右腕から『闇の宝玉』が、
わたしの左腕から『光の宝玉』が、
わたしの右足から『火の宝玉』が、
わたしの左足から『土の宝玉』が、
最後に、胸から『創造の宝玉』が、飛び出し宙に浮かび、わたしを中心として馬車の中で
宙を飛び円となって回転する。

故郷のティルトの村に置いてきた本格的な儀式魔法用増幅装置には及ばないが、わたしの
魔力を増幅して効果を高めてくれる魔術式だ。
おそらく、これが無くても可能ではあるだろうけれど、肉体の損傷を『再生』させるのを
赤ちゃんに施すのは初めてだから安全マージンは広く取りたい。

赤ちゃんの額に右手を触れて、水と地と闇の精霊に呼びかける。
『再生』させるのは水銀でダメージを負った神経細胞、中枢神経、
脳細胞などの人の基幹
となる部分だ。死滅した脳細胞をそっくりそのまま『再生』させる
ことは向こうの世界で
はまだ夢の技術だったが、こちらの世界では肉体を構成する根源と

なる精霊の力を借りる
ことで可能とならしめている。

神の力でも同様なことが出来るはずだが、神官に人体に関する知識が無いので、癒せないのだろう。
わたしが思うに、神は人にだいぶ甘いと思う。必要があれば至れり尽くせりだ。
それなのに、中枢神経にダメージを負った人間を神官が癒せないのは、神が意図的にそうしているのだろう。神官の知識の足りない部分をあえて補わず、人間の成長を待っているんだと思う。

わたしの詠唱を7つの宝玉が増幅し共鳴する。
光が収まった時、赤ちゃんの指がわたしの親指を握っているのに気付いた。
わたしの親指第一間接の幅よりちょっとだけ大きい赤ちゃんの手のひら。

その感触が、思った以上に嬉しかったのを覚えている。

12ページ目

12ページ目

その夜のこと。
一行はピネの村に着き、トゲエルフは褒められたりお礼を言われるのはこちょばゆいので、
皆から少し離れ、ついでに早めの洗濯に勤しんでました。

石鹸を少し削って小さめの水球を作り、そこへ水霊操りでよ～く溶かし込み。
『全自動』に混ぜて全員の服をまとめて洗濯する。
ちなみに、わたしとカズヒサの服を一緒に洗っても込み上げて来る物は何も無いからね。

「むー、ニアとシャイアの『凄いです』攻撃と、赤ちゃんのお母さんからの『ありがとう』
攻撃には参ったわ。」

「バカヒサってば困ってるわたしをニヤニヤ見てたけど、判ってんのかしら？
原因となってる水銀が自然発生的な物なのか、どうして今になって事実にさー。
明日の怪物退治はなーんかイヤな予感が「くっくっく。」ふひゃいっ！？

なっなにっ？？」

突然聞こえて来た変な笑い声の主を探して周りを見渡せど誰も居ない。。。。。

遠くにようやく到着した騎士団の野営の明かりや人が見えるけれど、この近くに声を届けるようなナニかは見えない。

「なっなっなぁあ？　まっまさかっコレが幽霊？幽霊なのっ！？」

などボケをかましながらも、正体に思い当たるモノが。

わたしは冷や汗を流しながら、『プヨ探知』を起動する。

他でも無い、こいつを探知するためだけに作った、こいつ専用魔術式だ。

『プヨ探知』で周りをサーチすると、２０ｍほど離れた家の軒下から魔力が返って来ない場所がある。

プヨ探知は、魔力を放射して物体の反射を捉える一種のレーダー探知だが、こいつは魔力を体表面で無力化しているためこいつの居る場所だけ魔力反射が無い領域が”視える”。

「くっくっく。なに、通りすがりに知った顔がおったのでな。挨拶じゃよ。

先日ぶりじゃな。エルフ娘。」

何日か前、よろず紹介所おやじの試練４回目に、街の彫刻屋さんが恋人に結婚申し込みをしたいので氷から花束を切り出してそれをプレゼントしたいという

依頼があった。
魔法で創った氷は荒々しさに欠けイメージに合わない、と言われ、
わたしも技術屋ゆえに
物に対するこだわりには理解出来る。そのため北極圏へと自然の氷
を取りに行ったのだ、
そこにこいつと、こいつの主人とか言うヤツが居た。共にヘンタイ
だったが。
その時は、『くっくっく、その服を溶かしてやぐわぁぁあぁ』と油
断ぶっこき中のこいつ
の話途中に、ある物を投げつけ相手にせずさっさとトンズラこいた。

わたしはこいつの居る方向へ顔を向けないよう注意しながら、
「その声はこないだのスライムねっ、何の用なの？」
こっそりと、石鹸の泡を手に掬い取る。

「くっくっく。先日はお前に投げつけられた物でえらい難儀したわ。
礼を言いたくての。」
「そう？それで今頃というか、ここに来たのが運のつきって言うか、
態々洗濯してる時に
顔出すなんて意味不明ね。さすがスライム。脳みそプヨってるって
か？
くらえっシャボン・ラ〇チャー。」

とっさに昔読んだ漫画の技名を出すわたし。
まさかここでこいつとまた出くわすなんて思ってもみなかったし、
準備不足よっっ！！
何のことはない、風霊操りで風を起こし石鹸の泡を飛ばしまくるだ
けの技だ。

技の名前を言ったのはたぶんに景気付けよっっ

シャボン玉連続発生器よろしく、たちまち辺り一面シャボン玉が飛び交う。

「こいつはこないだのより強力よっ、触れればあんた一巻の終わりだからね。」

準備不足で当然ハッタリだけど強気でＧＯよっ。

界面活性剤に弱いスライム相手ならではの必殺技を飛ばしつつ、けれど、飛び交うシャボン玉に相手の注意を引きつつ、本命は別に用意する。

こいつが潜む軒下の屋根をはさんで反対側へ、風霊操りで石鹸の泡を大量に運ぶ。

「くわばらくわばら。くっくっく。ここには用事の途中で立ち寄ったまでのこと。

今度会った時にまた遊ぼうぞ。エルフ娘。」

そう言ってプヨ、改め、自称エイシェント・スライムはまさに風のように去った。

魔力無効化体質というトンデモ無いヤツで、動きも見ての通り素早く、

魔導師たるわたしとの相性は極めて悪い。

魔法を無効化されてしまうと決定打がほぼ無くなってしまうにも関わらず、相手は魔法を

使い放題で切っても叩いても平気。なおかつ、体を完全に透明化することで、光・闇をも

見通す精霊使いからも見えなくなり、体表で魔力を無効化した際の副作用だと思われるが

精霊力も体表で拡散されて、とにかく極めて見え辛いヤツなのだ。

ここからあっさり去ってくれて正直助かった。色々な意味で相手にしたくない。
逆に言うとヘンタイだが実力は超一流。ニアやシャイアでは言うに及ばず、カズヒサでも危ない。明日を前にしてそんな危険なヤツがここに居た事を皆に注意すべきか？

しばし考えて、皆には伝えない事にした。
そもそも今だってわたしを殺そうと思えばやれたハズなのだ。
わたしがタダじゃやられないのはこの際横に置くとして。
ハッキリ言ってあんな暗殺が天職みたいなヤツ相手に注意を払おうにも、魔力放射でしか探知出来ず常時放射していたらいくら魔力があっても足りないようでは、そもそも注意のしようが無い。
今日明日ではどう頑張っても対応が後手に廻るしかないのなら、集中を乱すだけ損だ。
皆には何が有っても対応できるよう十分注意するように、とだけ伝えよう。
あのプヨが水銀被害で苦しむ今この時に現れたのは、偶然なのか、それとも？

「・・・とりあえず、石鹸は切らさないよう予備も持ってよっと。」
あらためて決心したわたしだった。

「というわけで、水銀汚染の元凶となる沼に居る怪物とやらは注意しないとダメだけど、
どうして最近になって水銀汚染が顕著になったのか、自然発生にしては被害が急激すぎるのが不自然よ。『なぜ今なのか?』を考えれば、他にも何かがあるはずなの。
皆十分注意してね。」

あくる日、わたしは沼に向かう道中、皆に注意点を説明していく。

「水銀は気化して・・・・・・えーと、空気に混ざって地面の表面に溜まるから、顔を低くしてはダメよ、毒の空気を吸っちゃうからね。
それと、『風の護り』と『清浄』は掛けてあるけど、ちょっとでも気分が悪くなったら、シャイアかわたしに言うのよ?すぐに『解毒』するから。」

毒の沼地に近づくにつれ、水霊と地霊それに闇霊が徐々に騒がしくなって来てるのが判る。
毒の汚染が自然の浄化能力を上回っているため、精霊が悲鳴を上げているのだ。

そうして、毒の沼地までもうすぐって時に、前方に何かの陰がうごめいているのが見えた。
わたしはすかさず、支援魔法(バフ)を掛ける。
『パーティーセット』

キュバババババババッ
数日前に失敗したバフだが、今回はとおっぜん(ふふん)成功する。

生命力向上などの生死に関わる物は４８時間保持、わたしの近くに居ることで効果が継続
される物は3分という短い時間と引き換えに、より高い効果を得られるようになっている。

４８時間継続される物は、メンバーの方位検知、最大生命力上昇、
生命力回復速度上昇、
最大魔力量上昇、魔法抵抗力上昇で、
支援を受けるメンバーがわたしの近傍に居る事で得られる効果には、
魔力上昇、知力上昇、
集中力上昇、魔法詠唱速度上昇、魔力回復速度上昇などの魔法使い
支援バフと、筋力上昇、
器用度上昇、移動速度上昇、攻撃速度上昇、加速、風の護り、水の
護り、土の護り、炎の
護り、対毒および対酸という主に近接職支援効果だ。

一定時間毎に、「キン」という甲高い音がわたしから発せられているのは、効果を上書き
継続させるための音だ。この音に乗せた魔術式は1秒経つと急激に
拡散してしまうので、
音が1秒で伝わる距離すなわち３４０ｍが効果範囲という訳だ。そうすることで魔術式を
簡素化し、必要魔力コストを軽減したのだ。その距離以上に離れてしまうと3分で効果が
切れてしまうのでメンバーとの距離は注意が必要となる。
もっともそれ以上離れるというのは一緒に行動するパーティーではそう多くないと予想。
近い位置に居る限り、わたしから放射される音に乗せた継続効果魔術式のため、効果は常
に上書きされ続け、支援効果を発揮し続けることになる。

「みんな気をつけて。」ニアがそう言うが早いか、
カズヒサとルー、オーリスの3人が陰へと駆け寄る。
近づくと、陰は3匹いることが判った。

「はっ」カズヒサが技を飛ばす。。。のかと思ったら刃を光らせては居るが技を飛ばさずに、刃に魔力を載せたまま、3匹を次々と切り倒している。
カズヒサが頑張ってくれるなら、わたしが何かこれ以上やることは無いでしょうね。
事実、3匹との戦闘はあっという間に終ってしまった。

「こいつらはいったい何だ?正直原因は水銀だから、怪物の正体は水銀で神経が侵されて、
怪物に勘違いされただけのこの辺りの動物じゃないか?と予想してたんだが。
腕や足も多いのやら、目が昆虫のように多いヤツ、見た目はネズミだが熊よりデカイやつ
とかまさに怪物だぞ。」
とカズヒサは質問を投げてくる。

「水と地の精霊力が水銀で侵されて暴走している状態ね。闇の精霊もそれに引き摺られて
正常を保ててない。」

「それって結局どうなるんだ?マズそうなのは何となく判るが。」

わたしはしばし目を伏せて、辺りの精霊力を感じ、その影響がどのように出ているのかを調べてみる。

暴走した水を糧に生きるものは、徐々に濁り連綿と続く生命の進化の流れから外れて行く。
暴走した大地に育まれたものは、正しき生育を阻害されあるべき姿から変容して行く。
狂った闇に触れたものは、徐々に歪み全く異なった別の何かに再構成される。

「この辺り一帯が、もう生物がまともに生きられる環境では無くなってしまっている。
ここに立っているだけで生き物は濁り侵されやがては変容して別なモノに変わり果てる。」

目を開けて皆を見渡し、

「ここまで汚染されてしまえば、この生き物たちはもう元には戻せない。
それどころか、この地に長く留まればわたしたちも怪物化してしまうでしょうね。
怪物を先に倒して、その後で大地の浄化を行う予定だったけど、浄化を先にやらないと
精霊力の乱れが人体に及ぼす影響が無視出来ない程大きいわ。
浄化をしながら出会った怪物達をこの地から解放してあげましょう。」

わたしとシャイアは『解毒』と『浄水』を手分けしつつ大地と沼に

掛ける浄化担当となり、
カズヒサ、ニア、ルー、オーリスの４人が怪物担当として片端から倒していく。

そうして日暮れまでかけてなんとか沼地の7割ほどは浄化したかな？と言う頃。

「ふー」

飽きた！
やってる事は可哀相な動物達を解放し、精霊たちを救い、エルフとして森を守り、
周辺住人たちを脅かす毒を浄化し、しいてはこの国が抱える大きな問題をこの６人で
解決しているというある意味偉業を為している訳だが。。。。

「なんと言う作業。なんでー？勇者パーティーってもっと華麗でカッコ良く解決するもん
なんじゃないのー？　地味っ地味すぐる。『解毒』と『浄水』しかして無いよ！」

「頑張りましょう！ファリナ、あたし達の活躍で救われる人が大勢居るのですっ」
そうシャイアはわたしを励ます。

「こーんな地味な仕事だったら神官団に押し付けたかったな

ううんっこれはカズヒサの日頃の行いが悪いからよっ　そうに違いない。」

「それなら俺の行いが良かったって事か。」
カズヒサはわたしの愚痴を聞いたのか戻って来た。その後ろにニア達も居る。

「ヤバそうなヤツが居る。ファリナ的には楽しめるヤツかもな。」
そうカズヒサが言った。そのさらに向こう２００m程先には。。。
鋭角的なフォルムで身の丈３m、見た目は三角錐のロケットの様な形をした明らかに
人工物な銀色の”何か”が宙に浮かんで、夕焼け空の赤が映り込んで居るのが見えた。

「何あれ？『探知』に引っ掛からないわよ？」

「どうするよ？一度引いて相手を観察するか？　ここで一度戦って相手の手の内を探る、
そのまま倒すってのもアリだな。」

「わたくし達はまだまだ戦えます。というよりファリナの支援魔法のおかげで全く疲れて
いないのです。」

「見たところ、あれがこの辺りを汚染していた原因でしょうか？
それならばここで引くわけには行きませんっ　倒しましょう！」

「カズヒサの判断に任せる。全然疲れてないとだけ言っておこう。」

「もう日暮れだしここは一度引いて、明日にすることを薦めるな。
地の利は向こうにある上に、夜の闇も向こうに有利に思える。」

上からわたし、カズヒサ、ニア、シャイア、ルー、オーリスの順よ。

「闇を見通す事が出来る魔術式を掛けるわ。闇の優位性は無くなる。
あれはある種のゴーレムよ。魔法で動くカラクリ人形ね。
生き物じゃないから昼夜関係ないし、銀色ってのが水銀との関係を
連想させる。
人形ゆえにどんな攻撃をしてくるかは結局戦うまで見抜けないと思
うな。
ここで一晩ほっといても構わないかも知れないけど、せっかく浄化
した所が元の木阿弥に
されるのもイヤね。そういう訳で、戦いましょう。」

わたしはそう提案した。

「K。バフはまだ有効だな？」
カズヒサは、わたしがうなずくのを確認すると、

「よし、ファリナ、闇を見通す術を全員に掛けてくれ。」

『影視』を全員に掛ける。「ファリナこれはどのくらい保つんだ？」

「計った事は無いけど半日はもつわよ。明日の夜明けくらいまでは平気。
それと、敵が水銀の集合体なら炎で攻撃するのは得策じゃないわ。ニア。」

「判りましたわ。」

「これは良いわ、影という影が全てくっきり見える。普段の仕事の時にも欲しいものね。」
オーリスは気に入ってくれたようだ。反対意見を出してもいざ戦いとなれば切替は早い。

「ニアとファリナが遠距離から魔法をぶちかましてくれ、それを合図にオーリスは敵の
頭部を狙って弓を頼む。俺とルーは魔法と同時に突っ込むから、シャイアは補佐だ。
その後は各自の判断で狙ってくれ。
万一、撤退する場合には昼頃ファリナが全員へ支援魔法をした地点で再集合だ。
さらに敵に追いかけられ続けた場合、最悪いったんピネの村まで引くぞ。」

カズヒサが最低限の確認事項を述べると、全員頷いて所定の位置へと散らばる。

ニアが攻撃魔法を唱え始める

「ギネア・シュライス・ファン・エネー・ルーイン・ラムエラス
大気の刃よ魔力の満つる空を切り裂け！『エリア・スラッシュ』」

ニアが範囲系真空の刃で、銀色ゴーレムを中心としてそこのある物
を全て切り裂く。

それを見たわたしは、
ノンビリとニアの魔法を解析してたら怒られるかしら？　などと考
えていた。
なんて事はなく、ちゃーんと敵の事を考えてましたから。

ゴーレム。魔道エンジニアのロマンの集大成ここに在り！ですっ。

１３ページ目

１３ページ目

そんな訳で（どんなわけ？）、気分的には壊したくないなー、が１で、
ほら私勇者ＰＴの一員だし？曲がりなりにも森の守護者トゲエルフだしー、が９で。
でも時の流れは厳しいです。わたしの気持ちにお構いなく戦闘は始まってる。

『闇爪』
わたしの逡巡など露ほどにも影響されず、起動シーケンスは無常にもあっけなく。
視界内であれば任意な場所に発生させられる、原子すら切断する絶対の刃が生まれる。

それは真一文字に進み、銀色ゴーレムを上下に断ち切る。
「ずしゃーーーっ。」
宙に浮かんで居た銀色のゴーレムは、切断面から大量の銀の液体を飛び散らせ、と同時に
大地へと落下する。

「…………………………………………
……………

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・アレ？」

「おい？」
走り寄っていたカズヒサもビックリだ。そりゃそうだ、わたしもビックリだ。

「なんだ、見掛け倒しか。」
ルーは剣を鞘に収めると呆れ顔でこちらに引き返して来る。

「はーぁぁ、ま、楽が出来るに越したことは無いか。」
カズヒサは振り向いてわたしに話しかける。

「あれ全部水銀なのかなぁ？」
銀の液状となったゴーレムは沼地の水の底へ沈んでしまっている。
こりゃ分解と浄化が大変だなー。

「とりあえず、これが何なのか調べ「そう簡単に楽させてくれない見たいよ？」うえ？」
わたしは銀色ゴーレム（液体）を見つめたまま、カズヒサにそう言う。

「ずぎゅ～～～～～～。」
まさにそんな音を鳴らしつつ、液体が凄い勢いで一つにまとまり、あっという間に元の
銀色ゴーレムが復活した。

「だ～よね～？、液体金属と言えば、やっぱしコレだよねぇー？」

なんて軽口を叩いては居る間にも、状況は目まぐるしく変わる。
いや、目が廻る、もしくは、目が点、かな。だって銀色ゴーレムってば、

どこの子供用ブリキロボットですか？
と言わんばかりに頭部から赤い目がビカビカビカーと光まくり、三角錐だった形が、三角
を基本フォルムにした腰から上だけの人型のように変形し、その両肩からもクルクル廻る
回転灯やら、腕には回転ヨーヨーより派手な電飾がビューンと音を立てながら輝いている。

さらに、『バシュッ』とくぐもった音がどこかで鳴ったとたん、
ぐぉーーーーーーん、と銀色ゴーレムが膨らんだのだ。

皆あっけに取られている。そりゃそうだ、わたしもビックリだ。
そうして気がつけば身の丈１０ｍを越える銀色ゴーレム改め巨大ロボが目の前に居た。
それって熱膨張なの？

「・・・・・うっそ。」
カズヒサの言葉は皆の気持ちを代弁しているだろう。
日が暮れてだいぶ昏くなっては居たが、一気に辺りが暗くなったのは気のせい？

「一応確認するけど、シャイア。」
「・・・・え？わたしですか？」
いつまでもビックリしている時じゃないっ！
わたしはシャイアに話しかけるがシャイアはポケッと眺めてて、反応が鈍かった。

「カズヒサ、ぼけっとしてる暇ないわよっ！
ええ、アイツに『解毒』が効くか試してみてくれない？」
土中や水中の水銀は『解毒』で分解消去が出来たのだ。まー試してみる価値はある。
ハッパを掛けられたカズヒサは、巨大ロボに走り寄ると”光”をまとった剣で切り掛かる。

「あ、はい。
大いなる父なる神よ。救いを求める御子にお力をお貸し下さい。穢れた毒を消去し、
清浄と健やかさを取り戻させたまえ。『キュアー・ポイズン』」

しかし、
「ダメです、効きません。」
「やっぱりね。自然の状態じゃないと水銀の浄化は出来ないのね。」
ちぇーー、やっぱり神様って変なとこでケチだ。
水に溶け込んでようが巨大ロボだろうが水銀は水銀でしょうが。
なんで沼の水銀は浄化出来るのに、ロボだとしてくれないかなぁ？

カズヒサの”光”の剣は確実に巨大ロボを切り崩しているが、何せ巨大である。
切られれば『バシャッ』と液状に戻るが、その傍からロボは水銀を

吸い上げてたちまち
復元してしまっている。
ルーの普通の剣や、オーリスの弓矢ではロボにダメージすら与えられてないようだ。

「魔法じゃないと効果的な傷を与えられないようですね。」
ニアはそう言うと攻撃魔法を唱える、

「カズヒサ、いきますっ
バルデラ・ビューイ・キ・ローゼン・ライ・エナン
雷よ！魔力の道を通り抜け敵を貫け！『ライトニング・アロー』」

パァーーーッ
漫画と違って現実には至近距離を光速で宙を疾るイナズマは目に映らない。
巨大ロボの一部と辺りが輝いたかと思うと、次の瞬間まるで花火のように火花が飛び散る。

次の瞬間、それまで攻撃を受けるに任せていた巨大ロボはビカビカ光らせていた赤い目を
スポットライトのように強い光で照らし始める。照らされたのは、

わたしとニアだ。

巨大ロボが腕を振り上げると、また「バシュッ」というくぐもった音が、今度はロボの
肩辺りで鳴った。と同時に腕がぐぃ～～んと真上に伸びる。
あきらかに前衛のカズヒサ、ルー、オーリスを無視してこっちを攻撃してくる構えだ。

わたしはロボの攻撃準備動作が終る前に、盾を召還する。

『イージス』
やがては真の最強に、なれたら良いなと少しずつ改良している発展途上の、それでも
現時点で創れるわたしの最強の盾だ。
水銀の重い一撃でも難なく受け止めてくれるだろう。たぶん。
だが、問題はそこではない。

わたしの目に、ロボが巨大な腕を振り下ろして来るのが映った。

ずがーーーーーーん

「「「　ニア　」」」
カズヒサ、ルーとオーリスが叫ぶっ
と同時にカズヒサは見てしまった、

腕が不可視の盾に阻まれたと見るや、液状へと変化し、
ニアとシャイア、それにファリナを大量の液体が飲み込むのを。

うそだろっ!?水銀に飲み込まれたら・・・・・
カズヒサは焦るが、ニア達を飲み込んだ水銀に刃を振り下ろす訳にも行かない。
下手すりゃ自分の剣でニア達を切っちまう。。
どうやってこの窮地を切り抜ける?

『大地よ、わたしを中心に大きく、何物にも壊されない頑丈な玉を作って、
わたしと隣の女性二人をその玉に閉じ込めて護ってちょうだい。』

いつぞやのモグラ捕獲でも似たような檻を創ったが、こちらは完全に球状だ。
球を創るのは『水球』や『全自動』、それに『雷球』や『炎・風・水の嵐』なども球を
基本としているし、今までも様々な場面で精霊にお願いしてきた。
そのため、精霊達も球という形を創るのに慣れていたのだ。だから
間に合った。
巨大ロボが腕を振り下ろすよりも、地霊操りでわたし達を護る球状に密閉した大地の壁を
創る方が早かった。

「な・なに?何が起こったの?」

ニアとシャイアは突然真っ暗な場所に閉じ込められ（『影視』で見えはするけれど）、
驚いている。

わたしも今のは結構あせったかも。
昨日ヘンタイスライムに遭遇しなかったら、もしかしたら殴られるまで気付けなかったかも知れない。そうしたらわたしはともかく、ニアとシャイアは危なかったろう。

見た目は人型とは言え液体、殴るだけじゃ終らないよね？と。

「どうやら、液状に変化した体の中に閉じ込められたみたい。
地霊操りで壁を作って防いじゃいるけどね。」

わたしが簡単に状況をニアとシャイアに説明する。
さて、どうしよう？
地霊を操って地中から脱出する、でも良いけど。
美女が地中を逃げる？そんなの絵的に却下ですっ！
でもハデに行くとなると、外のカズヒサ達まで吹っ飛んじゃいますねぇ。

あれ？微妙に手詰まり？
正確に言うと手はあるけど選択出来ないというジレンマ？
むむ、女として、魔導師としてプライドが掛かってるゾ！考えるのだ、わたし！

「ただの水銀が意思あるように動くわけがない。
つまりニア達を包み込んでいるのは、なんらかの制御下にあるからだ。
とすると。。。さっき肩の辺りで変な音が鳴ったよな?」

カズヒサはロボの肩の付け根で音が鳴った辺りに目星をつけた、肩の回転灯のちょい下だ!
「せやっ」
と魔力剣で光刃を飛ばし切断する。
切られた部分は一瞬分かたれるが、すぐに切断面が液状となってくっつこうとする。
その瞬間、カズヒサは見逃さなかった。
分かたれた2つの切断面がそれぞれ繋がるために相手側へと細長く伸びた時、腕側の縁に
何か光る玉がチラリと見えたのを。
「あれだっ!」
カズヒサは次の技で狙い外さず斬る!と心に決め、集中と準備に入った。

「つまりー、斬られると液体に戻るという事は、固体状態を保持するためにエネルギーを

使っているわけだ。ならば、魔力の供給源を破壊すれば固体状態を保てないっと。」

わたしは魔術式を一つ選んでこの場で構造をいじる。ベースは『プヨ探知』だ。

魔力のレーダー探知だが、必要なのは魔力を受けて相手の位置を特定する部分だ。

こちらから魔力を放射する必要は無いので、その部分をバッサリ削除する。

『プヨ探知改』の魔術式を早口で詠唱起動すると、

魔力の持ち主であるニア、シャイア、わたしの魔力を受けて活動する精霊達が視えてくる。

と、精霊の壁のすぐ向こう側、

明らかな魔力の供給源がハッキリと視えた。それは二の腕辺り、ちょうど回転ヨーヨーの

電飾があった辺りに”在る”。

それさえ判ればこっちのもの。

『闇爪』魔力供給源を断ち割るべく魔術式が。

「ハッ」全てを斬る光の刃が制御球を。

パシャッ

精霊の壁の向こうで包み込んでいた半固体が、液状となって地面に流れ落ちたのを地霊が教えてくれた。
わたしは地霊操りで地面に溜まった推定水銀を大地の壁で向こうに押しやりつつ、風霊が清浄な空気でわたし達を取り囲んでくれるのを感じながら、球状の壁を解除する。

「ニア、シャイア、ファリナ。大丈夫だったか？」
カズヒサ、ルー、オーリスが駆け寄って来る。
ルーはなんだか涙目ですっ

わたしはそれを見て、とりあえずカズヒサには「役立たずっ」と心の中で言っといた。
たくもー、自分の女のピンチくらいちゃんと助けなさいな、男の子。
オーリスが「ワタナベがやってくれたよ。」とニアへ言っているのが聞こえた。

まったくだ、やってくれたよー。
こういうときは前衛の男の子がしっかりしないとダメダメだよ。そう思うよね？
地霊が護る壁の中に居たわたしには当然カズヒサの活躍など知りようも無かった。

目の前には片腕をもがれた巨大ロボがまだ立ってるが、攻略法も判ったし、

そうなると、壊すのはいつでも出来る。気持ち的にはだいぶ余裕が生まれて来る。

この巨大ロボはいったい何なのか？わたしの思考は謎解きへと移っていた。

１４ページ目

１４ページ目

トゲエルフは目の前の巨大ロボを見上げて、思う。
どうして派手な攻撃魔法を撃ってこないんだろう？これがわたしの子供達（ゴーレム）なら、
そこまで考えてちょっと自己嫌悪。まるでわたしが破壊魔みたいではないか！

巨大ロボは先ほどわたしが魔力供給源を破壊した事で液体に戻した腕の部分を吸い上げる。
が、腕部分のエネルギーを支えていた源を喪った状態では、腕を復元することが出来ないようだ。さて、どうするのだろうと見ていると、

足が生えて来た。

宙に浮いてる体から足がニョッキリと生えてくる、
ちょっと可愛い。
しかし、

ある程度形になったと思ったとたん、足の部分は液体に戻り地面に流れ落ちてしまった。
なぜ??

よ～～く見てみると、足の付け根に何か銀色とは異なる物体が見えた。
「あれは?玉?」
「どうやらアレが水銀を操ってる制御部らしい。さっき肩に似たような光る玉があった。」
カズヒサも気付いたらしい、そう補足してくれる。

なるほど、肩にも制御部が、ね。
推測すると、体を操る各部位に制御球と魔力を供給するエンジンとが存在してて、それで
水銀を自在に動かすような魔術式を操っているわけね。
でも、足の付け根にある玉は光って無い。
だから足が無いのだろうか?あそこだけ壊れている?

『キュアー・ポイズン』
シャイアが流れ落ちた水銀を浄化している。分解され消えて行く。
やはり、魔力で制御されてない状態では浄化出来るようだ。

「ハッ」
カズヒサが一声で振り下ろした刃をさらに跳ね上げて一度に2回、技を繰り出している。
光刃は宙を飛び、巨大ロボのもう片方の肩付近2箇所を切り裂く。
すると、無事だった腕が肩の根元から液体となり落ちた。
すかさずシャイアが『解毒』で浄化してしまう。

なるほどなるほど。制御球を壊されるとやはり制御を失ってしまうわけね。
なんでもっと早く、閉じ込められた時にやってくれないかなー？
（注：気づいて無い）

「へー？カズヒサってば何時の間に連続技出せるようになったの？」
しかし、カズヒサは返事をすることなくロボを切り崩すのに一生懸命だ。
シャイアと連携してロボを少しずつ、文字通り消して行く。
こうなるとわたしも、ロボが何者なのか調べるなら急がなければならない。
カズヒサとシャイアの働き者ペアがロボを退治し終えるまで、もうあまり時間が無い。

そう考えていた時、、巨大ロボは再びスポットライトのように強い光で照らし始めた。
照らされたのは、

カズヒサとシャイアだ。

「カズヒサ、へその部分狙って！」
今は自分の趣味よりシャイアを助けることに集中するべきと思考を切り替える。
わたしは巨大ロボの中心部、『プヨ探知改』で割り出していたもっとも巨大な魔力供給源
をカズヒサに教える。

「させるかっ」
カズヒサは大きく叫ぶと、剣の光がひときわ眩く輝き、
真一文字に切り裂く、が！なんと、どうやら空間ごと斬ったようだ。
剣の厚みの何倍もの、たぶん１ｍ以上の幅でロボのへその部分を切り払った。
斬られた周辺は空間ごと斬られた余波なのか、縁の部分の景色が歪んでいる。

『バッキーン』
音が辺りに鳴り響き、カズヒサの剣が砕け散る。
と同時にロボから「バシュッ」と音が響き、両足のあった辺りからカズヒサとシャイアを
目掛けて水銀が伸びて来る！
ロボのすぐ近くで、剣を喪ったカズヒサには避けられない距離だ。
腕をクロスさせてガードするが、重い水銀の一撃を受けて吹っ飛ばされる。

「ベキベキッ」と言うイヤな音が響き渡る。骨が折れた？

「「「「　ワタナベ！！　」」」」ニア達の声が重なる。

シャイアだけは「神よっ！」と叫んでいた。

だが、ロボの反撃もそこまでだった。

シャイアへ攻撃が届く前にロボは切り口から液体に変じ全てが地面に流れ落ちてしまった。

どうやら胴体を切られると一番大きな魔力供給源がそこにあるだけにセーフティーが働き

いったん固定化を解除して自己診断機能後に魔力炉を再起動し体を再構成するようだ。

それでこの戦いは終わりだった。

シャイアがすかさず『解毒』したからだ。

もう巨大ロボの体を構成していた水銀はどこにも存在しない。

ロボの制御球が、体を再構成することはもう二度と出来ない。

「「「「「　ワタナベ！！　」」」」」

わたしを除く女性陣がカズヒサに駆け寄る。

わたしはと言うと、カズヒサの確かに折れたハズの腕がまっすぐになり、癒されるのを

見て、そちらに一瞬気を取られ、駆け寄るタイミングを逸しました。
だって囲まれてるし。

この時、わたしは「神様ってあんな一言でも願いを聞き届けてくれるんだ～。」と思っていたが、つっこむ場所は他にあった！と気付いたのはしばらく後になってからだった。
さすがのわたしもカズヒサが心配でそれどころじゃ無かったのよー。

カズヒサは、
「いっててて。」
と右腕を左腕でさすったり、左腕を右腕でさすったりしている。
あー、両腕やったんだ。そりゃ痛いわー

「ふー、助かったよ、シャイア癒してくれてありがとう。」
なんてニッコリ笑いかけたりして、シャイアが真っ赤になってますよ。

「やりましたわ！ワタナベ！」
ニアがカズヒサに抱きつく。
ちょっ　きゃ～～～っ　そ、それって嫁入り前の娘としてどうなの！？

「おめでとう、最後凄かったな。」
ルーが褒めてる。ん？なんでおめでとう？
あ、そうか。これってカズヒサの戦功を立てるのが目的だっけ？ア

ハハ忘れてた（汗

「シャイアもおつかれー。」
オーリスはシャイアを労わる。

「わたしは平気です、でもワタナベが無事で良かった。神よ感謝致します。」
今日一番の立役者のシャイアはどこまでも神官らしい。

カズヒサ「・・・」ニア「・・・」
そしてわたしは、カズヒサやニア達が興奮冷めやらぬ様子で健闘を称え合ったり、お互いに感謝の言葉を交わしたりする傍らから、そっと離れ、ロボの残骸へと近寄る、

『術式解析』
残っている無事だったロボの部品は、頭部の制御球、壊れている付け根の制御球、そして首に在った最後の魔力炉の3つだった。それらを一つ一つ丁寧に診ていった。
それらの魔術式は特に難解な物では無いが、基本のフレームがしっかりしていて、それを補佐するサブフレームの構成、タスク管理部とリアルタイム処理部、感覚系入力部や手足

を動かす制御部など細分化されたモジュール構造を持っている。
この術式を組んだ人間は知識が系統立てられていないこの世界において、異質と言える程
の体系立った構造式を独自に編み出していたようだ。
はっきり言ってスゴイです。
わたしはさらに目を皿のようにして魔術式を診ていく。
どこかに魔力付与者の銘が入ってないかしら？

あった！
『ネヴィアシータ』
それが魔力付与者の銘なのだろう。わたしはその名前を心に深く刻んだ。
もちろん、これから先、この魔力付与者に関係する文献や所縁の地を探すためだ。
それくらいこのロボの魔術式は完成された芸術品に思えた。

行動パターンアルゴリズムを読み解いていくと、水銀を利用した経緯もだいぶ理解できた。
これを作り出したネヴィアシータは、水銀が人体に悪い影響を与える事には気付いていた
ようなのだ。
なぜなら、制御球にはロボからの水銀が気化するのを防止する魔術式が組み込まれており、
無差別に水銀被害を起こさせるつもりはなかったようなのである。。
水銀のデメリットを魔術式で押さえれば、熱で伸縮する性質や、液状とも固体とも言えぬ

形状で任意の形へ変化させることが可能、不定形と定型の２モードを持てば不整地走破性は飛躍的に高まる。２足歩行するより不定形の方が優れた場面はいくらでもある。

何より自然界に微量に含まれている水銀を、ロボが故障時の修復材料として利用するような魔術式まで組み込まれてあった。

ここまで本格的な自動人形を生み出した人物には、同じ道を志す者として興味は尽きない。

感心するべきは魔術式そのものではなく、素材の応用範囲を見定め有効活用しようとするその発想力だ。

唯一、残念だったのは水銀が環境に悪かったことだろう。

そしてこのロボには攻撃のための魔術式は組み込まれて無かった。

自衛手段として、警戒色ならぬ警戒電飾で脅かす機能や、熱膨張を利用した巨大化機能と殴る蹴る程度の防衛行動がプログラムされていただけだった。

たしかに、身の丈１０ｍの巨大ロボと戦おうとする酔狂なドンキホーテなどが居ない限り、それで十分なのだろう。

ただし、反撃アルゴリズムにはロボへの攻撃力が大きい順番で反撃するよう攻撃パターンが定められていた。

ニアやカズヒサ、そしてわたしと体を消去するシャイアを狙った理由はこれだったのだ。

ある程度、ロボの制御球を調べることで構造や行動パターンは判明出来た物の、製作意図
に関してはそれを推測出来るような記述は見つからなかった。
このロボはもっと西から来たようだ。何をしにこの土地に来たのかは判らない。
ネヴィアシータの住まう地が西にあったのだろうか？
しかしここより西というとすぐに海に到達してしまう。

どこへ行こうとしていたのかも判らない。
だが、ロボはここまで来て、足の制御球が何らかの理由で故障したようだ。
そうしてこの地から動けなくなった。おそらく数年前だろう。

制御球は、修復プログラムによりこの周りの土中から水銀を集めようとして、しかし、
足の制御球が故障していた事で集めた水銀を利用することが出来ず、
集められた水銀は、
やがて沼を汚染する原因となって行ったようだ。

わたしは頭部の制御球と、壊れた足の制御球、そして魔力炉の３つを両手に持ち、
「カズヒサはもうちょっと休んでて、わたしはその間にちゃちゃっとこの辺りを浄化してくるよー、シャイアもカズヒサに付いててあげてね。」
と声を掛けて、まだ水銀を浄化してない地点へと歩いていく。

カズヒサとシャイアが二人あそこに居れば、ニアもあそこから動くまい。
ニアが動かない限り、ルーとオーリスは役目上ニアから離れないだろう。
つまり全員あそこに足留め出来る。

わたしは皆から十分離れると、一度周りの安全を確認し、それから、左肩の『水の宝玉』から水霊を、左足の『土の宝玉』から地霊を呼び出した。
宝玉に棲む精霊達は宝玉内の魔力供給を常に受けられるので、普通の精霊より力が強いのである。その分気位が高く扱いづらい面はあるけれど。
わたしは宝玉に棲む精霊達を使役してはいないので『強制』は出来ない。
彼らはわたしの友達なのである。（こら！そこ！お前友達居ないのか！とか禁句だー）
友達ゆえ、また、大家でもあるので、お願いすれば大抵の事はやってくれるのだ。
その強大な力で。
わたしの精霊操りを行う際の言霊が命令形ではないのはそのためだ。
わたしは精霊＝自然を強制する関係より、友人付合いの関係の方が好きだ。
だからこれで良いのだ。

『地霊、それと、水霊。わたしの視界内の地面と水を浄化してくれると嬉しいわ。
それと、不純物は捨てないでわたしの所へ集めてね。』

宝玉の精霊達はわたしの願い通り、広範囲に渡って水銀を集め、この辺り一帯を浄化してくれた。水銀に汚染された場所が無くなるまで数回繰り返し、浄化を完了させる。
次に『火の宝珠』から火霊を呼び出し、まだ残っているかも知れない怪物化した動物達を見つけて天に還してくれるよう頼んだ。
火霊は性質上この手の対処は速やかだ。
水霊には燃え残っている火の消化をしてもらう。
最後に目を閉じ哀れな動物達への葬送の詩を詠う。

これでニアから受けたロイヤルなお仕事は完遂ですっ

そうしてから、
わたしは頭部と壊れた制御球、魔力炉の3つを地面に置き、
左手を胸鎧の中央にはまっている宝珠に置き、
『簡易儀式』魔術式を起動する。
効果を永続する魔術式を掛けるには、儀式魔法で魔力を高めて行使する必要がある。

『風の宝玉』『水の宝玉』『闇の宝玉』『光の宝玉』『火の宝玉』

『土の宝玉』そして、
胸から『創造の宝玉』が飛び出し、わたしを中心として空中で輪となって回転する。

まず壊れた制御球を地と闇で修復する。
次に制御球２つの魔術式の構造体に手を加え、水銀で体を構成する際の倍率を１／５倍に
設定した。さらに、自然界から水銀を使って修復する機能を削除する。
それと、メモリー領域から先ほどの戦闘記録を抹消した。
全ての作業を終え、制御球２つと魔力炉を集めた水銀の上に置く。
「ぎゅ～～ん」
可愛い音を鳴らしてロボが復活する。両手は無いが今度は両足がある。
身の丈は１／５制限を掛けたので、６０ｃｍ程度だ。

このロボはもう大質量の水銀を持たないので、たとえどこかで壊れても、大きな汚染には
二度とならないだろう。
そして、直せない欠損を埋めるために自然界の水銀を無理に集めることも無い。
両足があるから、元々の目的地へも行ける、かも知れない。

「もうオイタしちゃダメよ。」

ちょっと小さくなったブリキロボットに言葉が通じたのかは判らないが、目玉をビカビカ
光らせてから歩き出し、すっかり暗くなった森の奥へと消えて行った。
彼が行きたかったどこかに向かったのだろう。

それを見届けてから皆の場所へと戻った。
「さぁ任務完了よ！」

１５ページ目

１５ページ目

今回は、トゲエルフがのの字を書いてるシーンから始まります。
その理由はというと、

話は少しだけ過去に遡ります。

「ふふふ、出来たわ！これはスゴイわよ、
わたし歴史に名前残っちゃう！アッハッハッハッハッハ。」

徹夜で魔術式を創った後遺症で、ハイテンションなわたし。
勢いって怖いわね。
カズヒサと出会って、『勇者召還の儀』の自動翻訳効果を確かめた時から、構想を練っては居たのだ。夕べ閃くものがあって思わず徹夜してしまったわ。

カズヒサの自動翻訳効果は、カズヒサの意思に沿った形で、カズヒサの口から出た音声を
音として伝える前に翻訳を行い、必要があれば口語は音として伝えずにカットし、訳語を
音として伝えるようになっている。
それによって聞き手は、カズヒサの口語と訳語の、２つの声を同時

に聞いてしまうという
マヌケな事態にならずに済んでいるわけ。

凄い所は他にもあって、本来カズヒサが口に出してない訳語すらもカズヒサの肉声として
聞こえてくる点だ。訳語だけ聞いても「あ、カズヒサの声だ」と判る。
まぁ、こっちの効果は今回は関係ないから横に置いとく。

わたしが着目したのは『話し手の意思に沿って自動で音が発声されている点』だ。

魔術式が詠唱を必要とするのは以前話した通り。
わたしは”そのホンの一部を”伊達メガネの仮想キーボードにショートカット登録すること
で無詠唱を実現しているが、逆を言えば大多数の魔術式は詠唱を必要とするのだ。

わたしはこれまでも詠唱の短縮化を色々と図って来た。
地味な所では早口。そして得意の魔術式で実現し黒歴史となった『高速言語』まで。

高速言語は知っているだろうか？
一音に複雑な情報を乗せて発声される言語で、高速言語の一音をスペクトラム解析すれば、
周波数成分の各配列ごとに意味がある情報が見て取れるだろう。
わたしはかつて故郷の村に居た頃、今よりもっとずっと若かった頃に（今でも若いわよっ）

この高速言語発声魔術式を開発したことがある。

あの時も得意絶頂で高速言語を使って、それまで創った魔術式を次々と試し撃ちしたっけ。

調子に乗って次々と炸裂する魔術式に、ビックリした村人達は総出でその発生源へ（わたしだ）に来て、「何をやっているんだ？リアファリナ？」と声を掛けた。

わたしは満面の笑みを浮かべて振り返り、みなに自慢したっけ。

「ピーガラガラピーヒィー。」（注：高速言語『みんな聞いてよー、それがねー、云々』）

わたしは村人全員の、点となったあの時の目が、今でも忘れられない。

高速言語の「コ」すら知らない田舎の村人達、彼らから『頭の残念な可哀相な子』という
目で見られ続けた遠い日々。。。。あーーーーっ！もう！

「今はその話じゃなくてっ！」

ドコまで話したっけ？
えと、高速言語はオン・オフ魔術式を一々起動しなきゃならないので、タイムリソースの無駄と、対人コミュニケーションに難有りという理由でお蔵入りしたのよ。

この場合のお蔵入りとは「別な発想もしくは何らかのデメリット解消法が見つかるまで。」というもので、この度、めでたく『話し手の意思に沿って自動で音が発声される』魔術式を追加し、改良を行ったことでようやく陽の目を見たわけなのさー。

これでわたしの任意のタイミングで高速言語と、通常使ってるアイゼンワード帝国標準語である”マロイ語”、ちなみにこの大陸全土でもマロイ語がほぼ標準語だが、を自分の意思で切り替えて発声出来る術を得たわけなのよっv

え？それだけか？って

もちろん、それだけじゃないわよっ
高速言語は一音に複数情報を乗せて発声する言語なわけで、単に魔術式のダダ長い詠唱を

各節毎にまとめて一音化すりゃ良いという物ではない。

起動シーケンス毎に各魔術の発現段階に沿って、魔術式の構造を分解する。

つまりＷＢＳ（Ｗｏｒｋ　Ｂｒｅａｋｄｏｗｎ　Ｓｔｒｕｃｔｕｒｅ：作業分割構成）し、魔術式のスコープ全体を俯瞰出来る才能と、アクティビティ化して細分化された意志力を、クリティカルパスを守りつつ再構成した発声音への変換されても、自身の魔力コスト管理を正確にマネージメント出来る才能とが必要とされる。

これは逆を言えば、何でもかんでも高速言語化したとして、全て効率化するか？というと必ずしもそうでは無い事実へと繋がる。

そこへ満を持して登場したのが、今回の『話し手の意思に沿って自動で音が発声される』魔術式なわけですよ。この技術の影響範囲は高速言語だけに留まらないのだ。

この魔術式の素晴らしい点はね、

？自分は一つの魔術式を発声しただけで、自分の意思で複数の魔術式を同時発声出来る点。

？自分で発声してない魔術式でも、正しく魔力コストを消費し魔術として発現出来る点。

レコーダーで詠唱を録音して再生しても、レコーダーは魔力を操っ

てくれないから魔術と
して発現しないでしょ？詠唱の音をただ単に鳴らしているに過ぎない。
自分が発声してない音で、魔術を発現出来るというのは素晴らしい発明なのよっv
『自分の意思が正しく働く複数の音を操る』魔術式と言えば良いのかしら。

高速言語化しないままの通常の詠唱法で複数詠唱可能とせしめているから、その辺の三流
魔術師でも『ファイアーボール』と『アイシクルランス』と『ライトニングアロー』同時
に操る一流魔術師となれるのだ。
風と炎を同時に操れたら、一つどころか、二つ上の威力の魔法となるだろうことは容易に
想像出来るわよね。

三流が一流と肩を並べられる。そして応用範囲が無限の可能性。
こうして、単なる詠唱の短縮化から、夢の技術へと一気に飛躍してしまったというわけ。
わたしの今回創った魔術式の凄さが少しは判ってもらえたかしらっ！？

さぁっ！こうしちゃ居られないっ　この素晴らしい発明を一刻も早く皆に自慢せねばっv
わたしはまだ日の出を迎えてもいない早朝にも関わらず、徹夜で躁状態となったまま自分
の部屋を飛び出した。　とりあえず、バカヒサを叩き起こして自慢しようっと。

カズヒサの部屋はどこかと、いまだ効果の残っている昨夜の『パーティーセット』効果の
一つ、メンバーの方位検知で居場所を探る。
わたしが泊まっている家は、村長さんの家だとかで結構部屋が多いお家なのだ。
方位検知によって、カズヒサが何処に居るのか調べてみると、
「何よ、この家の外じゃないの。」
そして、玄関へと歩いている短い間に、わたしが皆の策略に嵌められた事を知った。

とりあえず、出来立てホヤホヤの魔術式『腹話術』、何度も言うが銘々は気分よっ
の効果確認も兼ねて、策略に乗ってあげたけどねっっ
まさに朝飯前の一仕事。その割にはちっとも楽じゃなかったなー。

「あの、ファリナ？怒ってる？」
と朝食時に切り出したのはニアだ。

「べぇっつにー？夜明け前だったしねー、こっそりやっといたけど、

後始末は判ってるん
でしょうねぇ？ちゃんとやっといてよっ。」

「ああ任せろ。勇者がまた一つ奇跡を為した。で押し通すさ。コレっきりだけどな。」

カズヒサ達は、わたしが魔術式の創作に没頭している間に、村長の家に村の重症患者達を
運び込んで居たのだ。
それもわたしが直ぐに気付く位置から若い順で並べて置くと言う念のいりようで。

わたしの、誰にも話すなという念押し具合から、普通に頼んでは癒してくれないだろうと
予想したのだろう。それでも苦しんでいる子供を見ればあるいは？
と思ったらしい。

いくらわたしでも目の前で苦しんでる子供を見捨てるわけないでしょ。全くもー。
わたしはジト目でカズヒサ、ニア、シャイア、ルー、オーリスを見回す。
ルーは肩を竦め、オーリスは歯を出してニッと笑っている。

「ファリナに癒して頂いた方は生涯感謝をするでしょう。皆に本当の事を言わずに黙って
て良いのですか？」
シャイアの問いには、朝食を口に入れて咀嚼しながら口を閉じたまま返答しましたよ。

『その事は別にいいわよ。前に言った通り押し掛けられる羽目になりたくないしね。』

ニアはえっ？という顔をした。
でもシャイアは気付かなかったようだ、
「でもファリナは凄いですわ、夜明け頃から治癒を始めたのに、この時間までであの人数
を癒してしまうなんて。」

それよっ、それを聞いて欲しかったのよーーーっっv
わたしはまた口を閉じたまま返答する。

『ま～ね。今回創った魔術式の効果のおかげよ。』
ふっふ～ん、自慢よー、さー気付いてー！という顔をする。

するとシャイアもようやく気付いたのか、
「あれ？ファリナ、口閉じたまま話してる？」
「腹話術かよっ。」
カズヒサが突っ込む。その通りだー

『フフフフフ、この魔術式で高速詠唱したり、複数の詠唱を同時に行ったりできるのよ。』
「それって、もしかして凄い事じゃないのかしら？」
ニアは気付いてくれたようだ。顔に賛辞が浮かんでいる。

「俺には、食べ物を口の中で噛んでるくせに、食べかすを飛ばしもしないで普通に話せて
いる、そのビックリ人間真っ青の奇人変人っぷりの器用さが気になるけどなっ。」

うるさい、バカヒサ。
この程度の『同時に複数の事をこなす』才能は魔導師の必須スキルなのよっ。
今のわたしは調子コキーノにしてムテキング状態。バカヒサのつっこみなど届かぬわっ
そう、シャイアが次のセリフを言うまでは。

「本当にファリナって色々考えてて凄いですよね、わたしなんて神に祈るだけでしたから
詠唱がどうとか考えた事無かったです。」

そう言えばシャイアってば、「神よっ！」の一言だけでカズヒサを癒してたわね。。。。
あれ？。。。。。え？。。。。。。。あっ！！

「ね、ねぇ？シャイア？」
わたしはシャイアに恐る恐る聞いてみる。

「はい？なんでしょうか？ファリナ。」
「神官は神様に祈って癒しの術を行使するわけでしょ？実際の所、どこまで祈りの言葉を
短く出来るの？昨日、神よ、の一言でカズヒサを癒してたわよね？」

「あ、あれはとっさだったから。祈りの言葉を短く言うなんて神官にあるまじき行為です。

でも、そうですね、神様は天からわたし達を見守って下さっているので、どのような祈りであってもお聞き届けして下さるでしょう。それが御心に沿っているならば。」

「って事はもしかして、神様の、”か”、だけでも癒してくれるとか？」

「はい。試したことはありませんが、今後も無いでしょうけど、大丈夫だと思います。」

「恐るべし神様。至れり尽くせり、まさにオートマチック。」

もはや朝食を食べる気力を失ったわたしはご飯を押しのけて食卓へつっぷした。

「ど、どうしたのファリナ？」

ニアが心配してくれた。けれど既に話す気力も無くしたわたしは、腹話術で返答する。

『人が一生懸命努力してマニュアルミッションのギア操作を極めたと思ったら、世の中の主流は既にオートマチック車でした、というオチに気付いたのよ。』

『腹話術』も『高速詠唱』も『無詠唱』も決して魔術式のシーケンスを省いている訳ではないのだ。短くなった分、わたしの頭の中ではそりゃー凄い演算を繰り返している訳で。

詠唱者の意思を感じ取り何がしたいかを先読みし、手順をすっ飛ばしても実現してくれる
なんて神様ってズルくない？

「まにゅ？え？おーとまちっく？なんですの？それは。」
「ぶふっ。」
笑うなっバカヒサめっっ

「まぁマジレスするとだな、マニュアルの方がより早いレスポンスを期待できるわけで、
術を使いこなすという意味でファリナのアプローチの方が正しいんじゃないかと思うぞ。」

わたしは顔を起こすと、
「まー良いわ。そのうち神様もビックリの魔術式を創ってみせるから。」
今日から神様はライヴァル、ううん、倒さなければならない敵よっ！

「それにしても、カズヒサから慰められるとはね。
ドスケベの朴念仁かと思ってたわ。」

さてと、丁度良いからカズヒサにアレを渡しておこうか。

「あんた、これから先も旅して廻るんでしょ？
『勇者召還の儀』って魔王でも倒すためにあんたが呼ばれたってわけ？」

「そうなのです、魔王がわたくしの姉である、アイゼンワード帝国の第一皇女、
ルーレフィシア・ティア・ランナ・ナーシアス・エル・アイゼンに突然結婚するようにと、
帝国へ脅しを掛けて来たのです。
当然我が帝国は魔王の脅しなどに屈しませんでした。魔王討つべしと勇者カズヒサを召還
したのです。」
ニアは得意げに説明してくれる、

あー、あんたってば、あんなヘンタイ野郎を倒すために呼ばれちゃったんだぁ。
わたしの脳裏にプヨと一緒にいた魔王の言動を思い出す。
『オレのヘソまで反り返ったピ～～(自主規制)でオマエのピ～～～(自主規制)をピ～～(自主規制)してやんぜー！』とか言っていたっけ。相手にしなかったが。

それにしても、たしか帝国の第一皇女って御歳２４歳の行き遅れだったわよね？
美女過ぎる娘の婿条件を絞りすぎたんだか、嫁に出すのを惜しんだとかで。
ヘンタイでも腐っても魔王。貰ってくれるって言うなら喜んで嫁にだしゃ良いのに。。。
そんな事のために見ず知らずの土地に無理やり召還されて帰れないなんて。

わたしは思いっきり「カワイソー」って顔してカズヒサを見てあげた。

ま、それはともかく。

「これは慰めてくれたお礼よ。あんた昨日剣を壊しちゃったでしょ。」

そう言ってわたしはポシェットから一振りの長剣をヨイショっと取り出す。

以前勢いに任せて創っては見たものの、非力なトゲエルフには振り回せなかった一振りだ。

魔術式で筋力を底上げしても自分の体重が増える訳じゃないのでバランスが取れないのだ。

「大した慰めしてないけどな。良いのか？」

「ええ、一応説明すると、その剣には防御不能、回避不能で必ず会心の一撃が出る魔法が込められているの。

あんたの何でもぶった切る魔法剣と組み合わせれば文字通り最強剣よ。」

「なんだそのチート性能は？」

「”混沌と螺旋の精霊”って言う精霊がその剣には憑いてるわ。

剣を振る際に、一種のタイムパラドックスを引き起こして無限の可能性の中から唯一つの

もっとも優れた成功例を、最初の一回目で引き当てる事が出来るのよ。

局地的なタイムマシンね。無限のフィードバックから希望する未来を収束させる。
だから誰にもその剣の一撃は防げない回避も出来ない。
どんな達人でも無限に受ければ素人の一撃でも『当たっちゃった』って事はあるでしょ？
それを最初の一回目で引き起こすわけ。」

「聞けば聞くほど凄そうなんだが、ホントに貰って良いのか？」
「構わないわ。」

「これで、ニア、貴方からの依頼は全て達成したから、わたしとしては街に、アイゼリアへと帰るつもりなんだけど。最初にやらない約束だった村人達の治療代がわりに、お願いがあるんだけど良いかしら？」

「あ、ファリナ、あの、このままわたくし達と一緒に旅をして頂けませんか？」
「ごめん、それは無理。」

「「「「「　え　」」」」」
カズヒサ達はあっさり断られるとは思わなかったのだろう。

「ファリナ、俺としてはお前と一緒で楽しかったし、向こうの事も良く知ってそうなお前

が居てくれて気持ち的に色々助かったよ。これからも俺を助けてくれないか？」

「あのっ、その気の無いファリナに無理やり治療させるような事をさせてしまって大変申し訳ありませんでした。お気を悪くしたのならいくらでも謝罪いたします。どうかワタナベの願い通り今後もわたくし達と御一緒に。」

「あのね、村人を助けたのは最終的には自分の意思よ。それとこれとは話が別なの。」

「ファリナ、俺は、もう帰れないかも知れないと思ったとき、酷い絶望に襲われたよ、そしてお前に逢って救われたんだ。どうしてもダメか？」

「無理なものは無理。それでニアどうなの？お願いを言っても良い？」

ニアは頑固なわたしにこれ以上繰り返しても逆効果と感じたのか、「判りました、今回は引き下がりますわ。それでお願いとは何ですの？」

「やった！魔術書を調べたいのよ。図書館への出入り許可証をちょうだい！」

「図書館？もちろん構いませんわ。でも魔術書なら魔法研究室の方が揃ってますから、
そちらへも紹介状を書きましょう。それと今回の報酬ですが、オーリスお願い。」

「ええ。気を使ってくれてありがとう。」
そして、オーリスから金貨2枚を。ニアから紹介状を書いて貰った。
これでミッションコンプリートね。

「それと、カズヒサ。」
「・・・・ああ。」
拗ねてるし。暗いっ暗いです。カズヒサ。
しかたないなぁもうっ。

「カズヒサが帰る方法は、とりあえず4つあるわ。」
カズヒサがこっちを見る。そうそう、良〜〜く聞きなさいよね。

「一つ目は、カズヒサが死ぬこと。
でも、これはお勧めしないわね。わたし達は神の作りし箱庭を循環する存在だから、この
世界で死ねばカズヒサの世界に転生出来る可能性が少しはあるわ。
でも、もしかしたら魔界転生かもよ？　アハハ、魔王ってあんがいカズヒサかも。」

「その方法は前に聞いたな。他のは？」
「異界渡りを可能にするには神属性が必要よ。つまり神様じゃなけ

れば無理って事ね。」
「それでは不可能なのですか？」ニアにとっては切実な問題だ。
「もったいぶるのは探偵の犯人推理だけで十分だ、つまりは？」

「二つ目は、カズヒサが自分で魔法を使えるようになること。
以前言ったでしょ？カズヒサの属性はこの世界のどの属性とも違う勇者属性だって。
カズヒサが魔法を行使出来れば、異界渡りが出来る。。。。かも？」

「なるほど。。。でも、自分で言うのもなんだが、ずいぶん遠そうだ。」

「三つ目は、カズヒサの魔法剣ね。これも言ったでしょ？何でも切れるって。
この世界とカズヒサの世界の境界線ダケを狙って、世界に穴を開ければ帰れるわよ。
まぁ、カズヒサの精神修行が必要なのは2つ目の魔法と一緒かな。」

「むう、いけそうだっ！って感じが少しはする案だな、それ。」

「四つ目は、わたしの魔術式『勇者送還の儀』を使って帰る方法ね。」
「なんだそりゃ？神様しか出来ないんじゃなかったのか？
はっもしや、おまえか～～？お・ま・え・が、ネ申なのか～～？」
「はいはい。当たらずとも遠からずだけど、わたしは神じゃないわよ。
異界渡りは神にしか出来ない。でも一度だけなら使える神属性があるのよ？
ここにね。」

カズヒサの胸に人差し指をあてながら言う、

「そう『勇者召還の儀』よ。その効果は神属性、それを利用すれば一度こっきり可能。
でも一度しか使えないから向こうへ帰ったらもうこっちへは戻って来れない。
使うか使わないかはよく考えてね。」

「それじゃ、カズヒサ、ニア、ルー、シャイア、オーリス、また縁が有ったら逢おうね。」
「え？もう行くのか！？もう少しゆっくりして行けば。」

「早く帰って、その魔法研究室とか言うところへ入り浸らなきゃ！打倒オートマチックよっ！」

そう言って、わたしは村長の家を出て行く。

「ファリナ、村人達を助けてくれてありがとう。あなたの行く先々でミラー神の御加護がありますように。」

「名残惜しいがまたどこかで会えるだろう。その時はまた宜しくな。ファリナ。」

「楽しかったわ、元気でねファリナ。今度あの暗闇でも見える魔法教えてね。」

「ファリナ、貴方の御力でこの村そして国を救って下さって、そし

て何よりもわたくしと
カズヒサを助けて下さってありがとうございました。これから先、
何か困った事があれば
わたくしを頼って来て下さい。ううん、また逢いたいだけなの。わ
たくしが。」

「元気でな、ファリナ。帰る方法考えてくれてさんじゅうきゅ。」

がくっ
最後にそれか！まったくバカヒサなんだから。
「じゃーね。バイバーイ。（必殺エルフスマイルよっ）」

『飛翔』
こうしてわたしはピネの村を後にしたのでした。

「行っちゃったわね。」とニアが呟く。
「寂しくなっちゃいますね。」シャイアが同意する。
「最後にほっそい足を見せ付けて、飛んでってくれたけどな。」とル
ー。
「すっごい美人さんだったものね。残念ねー？ワタナベ。」と気持
ちを切替えたオーリス。
「ああ、なんかずっと一緒だと思い込んでたからな。へこむぜ。」

（謎の人物）「まぁある意味、まだ一緒に居るわけだが。」

「「「「「え？」」」」」

エルファリナの挿入ページその１

エルファリナの挿入ページその１

わたしは”混沌と螺旋の全能神”ユミーティア様の４人の眷属の一人に生み出された。
その方は、再生と死を司る全能神にして名を唱えること能わず、便宜上”深紅の君”と呼ばれている。
この世界を含む三千世界を御創りになられた”混沌と螺旋の全能神”ユミーティア様。
実際には１０００の３乗個、１０億程度では済まない。
人の数の概念のはるか外。無限と呼べる世界が存在するのではあるが。

その全ての世界に住む生物全てに与えられた共通する理が、
”弱肉強食”、そして、”もっと先へ”だ。

わたしが逢った事があるのは、”深紅の君”と、”竜王の君”のお二方だけであり、
”混沌と螺旋の全能神”ユミーティア様には逢った事もないが、ずいぶん意地悪な方なのであろう。
停滞を許さず、昨日と違う今日・今日と違う明日を強制され、形ある物はいつか滅びるし、
生きるものは必ず死ぬ。
同じようで、でも違う。ループではない螺旋を描くこの世界の絶対

の理。
何をお考えになられてその様に創ったのかは、わたしをもってしても杳として知れない。

”混沌と螺旋の全能神”ユミーティア様
創造を司る全能神”金の君”
破壊を司る神殺しの”神龍の君”
再生と死を司る全能神”深紅の君”
混沌の次元監察官”竜王の君”

上のお三方は世界を創造しても、為すべきことは全て御創りになった時点で全て為されてしまっているために、世界に干渉せずを貫いている。
誕生して欲しい者が居れば、世界を創った時にその時その場に誕生するよう因子を置かれ、
死んで欲しい者が居れば、世界を創った時にその時その場で死ぬよう因子が置かれている。

下のお二方は、世界に干渉することで救える存在がある、とお考えで比較的積極的に関与
為されているようだ。

一見、意見が分かれている様に見えるが、全能神の視点で見ればそれはどちらも同じことなのであろう。
わたしは”出現したその時に”必要な知識は全て与えられているが、その知識が言うのだ、
混沌の名を持つ全能神の視点では『この世界の全ては区別することに意味が無い』のだと。

「おーい、『　　』よ。誕生したばかりで、早くも過去を振り返ってるとこ悪いがよ、
何時までもそのままだと話が進まねーんだわ。戻ってこいやー。」

「あ！失礼しました。”竜王の君”。」

「おー、ま、知っての通り、お前に誕生してもらったのは、俺様が楽するためにあるわけ
だからよ。ちょっくら世界を2～3千廻って修行して来い。今のままだと知識は在っても
経験不足だしな。」

「はぁ。さすがにそれほどの数だと廻るだけでも那由他な年月が掛かりそうですが？」
「おー思ったより短いな。もう2～3千廻っとくか？」
「いえ、結構です。」
「おいおい、大した手間隙じゃねーだろ？遠慮すんな。」

億の億倍、さらにその億倍、そしてさらにその……やめよう、年数を考えると負けだ！
そんな途方も無い年月を短いとは、そりゃ貴方だからですよ。
そんな考えただけでクラッとする年月を2回もやらされてたまるか！
そうは思ったが、ここはこちらが大人になって、グッと堪えましょう。

「お前、何気に失礼なヤツだな。まぁ良い。５０００人ものヒトの

目もあるしな。
おい、ここ見てるヤツら、知っとけ。ドラゴンロードの懐の広さってヤツをよ。」

「５０００人？」わたしは思わずキョロキョロと周りを見回す。

「アフォかお前。やがては次元監察官になろうってモンが、それじゃダメダメだろが。
ここは次元を隔てる所から、これ見てるヤツらが居るんだよ。
具体的には５０００アクセスって単位でよ。」

は？アクセス？

「かーーーーーっ！。」そう言って”竜王の君”はコイツだめだ。とばかりに首を振る。

「とりあえず思考を読むのはお止めください。マナー違反です。」

「バカめ。お前は俺であり、俺はお前なんだ。マナーなんぞ知るか。ったく、もう5分も無駄にしちまったじゃねーか。お前の那由他の那由他倍貴重な俺様の時間をよ。」

「たった5分じゃないですかーーー！　そもそも修行して戻って来るのが那由他な年月後ですよ。その間待つことになるわけですから、5分くらいでケチケチ言わないで下さい。」

「1秒後も那由他後も同じことだな。そんでな、『　　』よ。
親切な俺様はカウント3してやるからその間に旅立て。

3、2、い「ひーーーーぇーーーーー、行って来ますっ。」
おー、それと、お前の姿は最初の転生主の姿で固定すっからよ。ま、楽しみにしてな。」
ううう、変な容姿にしたら怨んでやるーーーーっ

こうして、わたしは世界名『ネイワース』の『ブリューグフト大陸』、その『ラクト山脈』
の東側に在る『ティルトの村』という所で、エルフを両親として、人としての生を受けた。
名を『リアファリナ・レディケイオス・ノヴァリース』という。
名・守護となる精霊名・姓の順である。それにしても『レディ・混沌』とはね。

『って、なんかダメじゃないですかーーっ　転生失敗デスヨっ”竜王の君”！』

「わたしの中にいるわたし、貴方の事、嫌いじゃないよ。好きだよ。
でも努力もしないで何でも出来る力なんて要らない。
いつか、わたしが貴方より強くなったら。その時また一つになろ？
それまで、しばしのお別れだよ。」

『ヤラレマシタ。絶対このこと知ってたよ、あの意地悪キングめ。』

そうして”わたし”は、”わたし”ことリアファリナから切り離されてしまいました。

いや、切り離されたという表現は厳密に言えば正しくない。

次元監察官見習い（とほほ）の視点では、現に今も繋がっているのだから。

『なんだかなー、一番最初の修行だっていうから張り切っていたら、”待つ”事が修行だ、

なんてなー、どうなのよ?そうなの?これも修行なの?

はぁ～～～、まぁ１００の力を半分にして５０になったとしても、

元々無限を目指す身

だしね。５０歩１００歩ではあるかぁ。　うん、それじゃ頑張ってよね”わたし”。』

序列で言えば神より上である”わたし”なのだ。

その”わたし”が、人の身である”わたし”の意志を無視して押し通す?バカ言いなさんな。

”わたし”のカンが言っている。これは同じことなのだ、と。

ならば”待つ”ことにしようではないか。

そうして、”わたし”は『時を得る』までしばし意識をたゆたらせた。

微睡みからの目覚めは唐突だった。『時が来た』のだ。

「行っちゃったわね。」とニアが呟く。
「寂しくなっちゃいますね。」シャイアが同意する。
「最後にほっそい足を見せ付けて、飛んでってくれたけどな。」とルー。
「すっごい美人さんだったものね。残念ねー？ワタナベ。」と気持ちを切替えたオーリス。
「ああ、なんかずっと一緒だと思い込んでたからな。へこむぜ。」

「まぁある意味、まだ一緒に居るわけだが。」

「「「「「　え？　」」」」」

む？次元監察官見習いのカンでは、続くらしいぞ。

エルファリナの挿入ページその2

エルファリナの挿入ページその2

「まぁある意味、まだ一緒に居るわけだが。」

「「「「「え？」」」」」

全員が綺麗に振り返る。
そして一瞬の間

「「「「「ファリナ？」」」」」

ハモってるし。

「「「「「の妹さん？」」」」」

まだハモるか。

「わたしはある意味では、お前達が知るあの娘そのものであり、視点を変えれば違うともいえる。存在力の大小で問うならば、わたしが本体だと言えるし、この世界における人で

問うならば、あの娘が本体だと言えるだろう。」

とりあえず、わたしが何なのかは言っておかねばならないだろう。

「貴方、ファリナにそっくり。でもちょっと若くした感じね。。。」

「その問いの答えは、あの娘は２１歳だからな。エルフの２１歳といえばお前達が知っているあの娘の外観に相当する見かけとなる。人間で言えば１７歳に相当するか。

だが、あの娘は3年前に『変身』の魔術式を使って自身の見かけを変えている。

外見は成長して今のあの娘となったが、『変身』はその魔術式を行使した際、元へ戻る為に身体の情報をそっくりそのまま保持する魔術式だ。

だから、解除したならば3年前のこの姿へと戻るだろう。

つまり、この人間の１５歳相当の姿こそが、あの娘の本当の姿という事になる。」

「ファリナの本当の姿・・??」

「「「「「　胸無いな（わね）　」」」」」

「つっこむ所はそこか。」苦笑するしかない。

「まて、お前もファリナだと?　だが俺達が知るファリナは金髪で

翠の瞳だぞ。
お前は髪も瞳も黒に近い赤。。に見える。」

「なに?。。。。ほぉ、わたしの外観はこうなったのか。なかなか
わたし好みだな。
いやすまん。わたしも生まれて初めてなのだ。この”わたし”の姿
を見たのは。
あの娘と一つだったのは7歳までだったし、その頃はあの娘の姿で
しか見て居ない。
この深紅の髪と瞳は、わたしの師匠であり概念上の母親といえるお
方の色彩だ。」

「一つだった?ファリナと?」

「そうだ。7歳だったあの娘は、努力無しで無限の力を扱える事を
嫌ってな。
『そんな力、要らない』って捨ててしまったのさ。」

「何それ、何の話なのかよく判らない。」

「そうだな、最初から話そうか。」

わたしは生き物とか魂といった”モノ”では無く、”概念”と言っ

た存在に近い。
ヒトの魂と同化しなければ、この世界に生まれて来る事も出来ない。

わたしは修行のため、この世界に生まれる必要があった。
そのために”根源”からこの世界に生まれようとしていた一つの魂と同化したのだ。
その魂は無作為に選んだモノだったが、どうやら、わたしの師匠の干渉があったようだ。
なぜなら、生まれ変わる魂は本来無垢となっており、前世の記憶など持たないはずだから。
だが、わたしが選んだその魂は前世の記憶を持っていた。有り得ない事が起きたのだ。

とにかく、わたしが宿ったその魂は生まれ、前世の記憶、そして、わたしの加護もあって
長じるにしたがい、エルフという種族から大きく飛び越えた存在となって行ったのだ。
そして、7歳となった時に、自分の中にいる、わたしという”概念”に気付いた。

あの娘はああ見えて自分に厳しい。
力に見合う努力も無しで、何でも出来てしまうのは我慢出来なかったようだな。
いや、努力する過程に楽しみを見出すタイプと言うべきか。

何でも知っていて、何でも出来る。
そんな人生はあの娘に取っては何の楽しみも無い地獄と等しかったようだ。

『わたしの中にいるわたし、貴方の事、嫌いじゃないよ。好きだよ。
でも努力もしないで何でも出来る力なんて要らない。
いつか、わたしが貴方より強くなったら。その時また一つになろ？
それまで、しばしのお別れだよ。』

「あの娘が、わたしへ掛けた別れの言葉だ。
そうして、わたしはあの娘から別たれ、今のわたしとなった訳だ。
どうやら依り代として、カズヒサ、お前が持っている剣にわたしを
結びつけたのだな。
そういう訳だから、しばらくは、お前と共に旅をすることになった。
ヨロシクな。」

「なるほどな。お前がどんな存在で、ファリナとどういう関係なの
かは判った。
まさかこの剣がお前だったとはな。
それで、俺達はお前の事をなんて呼べば良い？」

「ふむ。わたしは本質的にあの娘であり、それは今でも変わらない。
別れた様に見えても、根っこでは繋がっている。
では。。。。エルファリナとしよう。そして、今まで通りファリナ
と呼ぶが良い。」

「えっと、よく判ってないけど、貴方はファリナなのね？そしてわ

たくし達と一緒に旅を
続けてくれると言うのね？。。。。。どうかこれからも宜しく！ファリナ！」

「ああ、わたしもこれまで通りニアと呼ぼう。」

「わたしも今の話は判らない事ばかりでした。でもあなたがファリナと同じ存在だと言う
ならば、わたしは大歓迎です。これからも一緒に旅が出来て嬉しいです。ファリナ。」

「宜しく、シャイア。」

「正直言ってわたしはお前を信じている訳じゃない。だがファリナがワタナベに進呈した
剣がお前だと言うならば、ファリナが信じたお前を、わたしも信じよう。
心強い仲間がこれからも一緒だと嬉しいよ。ファリナ。」

「宜しく、ルー。」

「あっちのファリナは青チュニと白いミニスカだったのに、あなたは身体のライン
ぴったりの深紅でロングなワンピース、そして凄いスリットなのね。
どっちもエロエロなのはどっちのアダッ「何言ってるんですか！貴方は。」
うわ、叩かなくてもいいじゃんニアってば。ま、とにかく宜しくね。
」

「ああ、宜しくな、オーリス。」

「確かに一緒なんだろうがな、俺が好きだったファリナはお前じゃないな。
魔術が好きで、暇さえあれば魔術式を弄ってて、どこか傍若無人で、でも情が深くて、
変なところがヌケてて、俺をカズヒサと呼んだファリナは、あのファリナだけだ。
お前がカズヒサと呼んだとき、やっぱり違うんだと判ったよ。」

「ふっ、あの娘の胸にママーって抱きついておけば良かったと後悔してるのか？
残念だったな、胸無くて。
まぁ『お願いしまちゅママー』と頼むなら胸を大きくしてやっても良いぞ。」

「う。。。。まーそのうちな。」

「「「「結局胸ですかっ！」」」」

「はは、胸は冗談だが、これからも一緒だと心強い。歓迎するよフアリナ。」

「ああ、これから宜しく、カズヒサ。
ところで、あの娘、妙なところで抜けてたな。お前は今すぐ帰ろうと思えば帰れるぞ。」

「「「「「えっ！！」」」」」

「その剣さ。狙ったものに必ず当たると言ってたろ？そしてお前の魔法剣は何でも切ると。

つまり、今すぐにでも、お前の世界との境界線を叩っ斬って空間に穴を開ける事が出来る。どうする？帰るか？帰りたかったのだろう？」

「マジかよ。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。

いや、今すぐ帰れるなら、何も今じゃなくて良い。帰れると判っているだけで良いさ。」

「ワタナベ。」

「安心しろ、ニア。ちゃんと魔王を倒してやるさ。帰るのはその後で考えりゃ良い。」

「ワタナベ。。。。。。あ、あの、わたくしもカズヒサって呼んで良いですか？」

「「「あ！ずるい、わたし（あたし）も！」」」

「はは、気にしてたのか。良いぞ名前で呼んでくれて。」

「「「やったー！」」」

「ふむ。まとまったところでひゃぃ「その鼻をくったような話し方は地なのか？」

こらー、鼻を抓むなーっ「なんだ、普通に話せるんじゃないか。」

ったくー、わたしを何だと思ってるのよ。ホントはとっても偉いんだからねっ。」

「ああ、偉い偉い。お前はほんとに偉いよ。」

「その態度、全く信じてないなー。さては。」

時間軸にだって干渉出来るこの次元監察官カッコ見習いカッコ閉じるのわたしを捕まえて
事もあろうに鼻を抓むとは罰当たりめっ

とりあえず、見てもらおうじゃないの。わたしの凄さってヤツを。
・・・という訳で今回と前回のサブタイに、今さっき決まったばかりの「エルファリナ」
を入れといたわよ。題して『エルファリナの挿入ページ』よ。

ふっふ～ん。ここを見てる貴方の言いたい事は判るわよ。
『今回も前回も、サブタイには最初からエルファリナって書いてあったろ！』でしょ？

ち～がうんだなーこれが。
さっきまではサブタイには名前が入ってなかったのよ。
わたしが過去に遡って名前を適用したことで、貴方の記憶を含む全世界全次元全時間軸に
「エルファリナ」が刻まれたの。干渉済だから、もう貴方の記憶も弄くられてあるのよ。
ほらね？いくら記憶を掘り返しても『最初からエルファリナの挿入ページだった』としか
記憶にないでしょ？？

次元監察官（見習い）ナメンナッ
次元を隔てたそっちの世界のＷＥＢ履歴や、貴方の記憶弄るくらい

簡単に出来るのよっv

さてと、自己紹介も一通り済んだ所で、

「まぁ良いわ。。。。。。ところでお客さんよ。カズヒサとニアにね。」

わたし達は村長の家の前、村中央の広場でしゃべって居たのだが、広場中央へ目を向けてそう言った。

「俺達に客?どこに?」カズヒサ始め、皆には見えてないようだ。

「出てきなさいな。わたしの目は誤魔化せないわよ。」

「ケっ、自慢げにするなよ。お前らの話が一服するまで待っててやったんだからよ。」

くぱっ　と音がすると、スライムが覆いを解いて、その中に隠していた者の姿を見せた。

さっきまで何も無かった広場の真ん中に、狼男とスライムが急に現れる。

狼男は場違いにも偉そうです。

「ニア、こいつら魔将軍ですっ　気を付けてっ。」
オーリスから注意が飛ぶ。

「魔王配下の魔将軍二人組みで、ビーストキングとエイシェント・スライムだ。」
補足を加えたのはルーよ。

そしてスライムは静かに移動し、狼男とは距離を取り、どちらかというと、わたしの前へ
と来ました。

「くっくっく。また逢ったなエルフ娘。ちと姿が変わったようじゃが、ワシの目は誤魔化
せんぞ?今日はまた溶かし甲斐のあるオベベを着てるのぉ。くっくっく。」

「別に誤魔化してないし。それよりも避けた方が良いわよ?　5、4、3・・・」

「オレ様は魔将軍にして、ビーストキングの『オリジン』様だ。小僧をブッコロしに来たってわけさ。覚悟は良いか?　んじゃ、死ねや。」

狼男はそう言うと右手を掲げ、すると、右こぶしが黒く染まって行きます。
こほん、次元監察官（見習い）のわたしが解説すると、あれは『無葬拳』と言って、
こぶしを当てた瞬間に闇属性の発勁を放ち、素粒子レベルで無に還

す技ですね。
防ぐ方法は無く、避けるしか手がない技です。当たれば終わりですからね。

「せぃ」カズヒサは抜刀と同時に左下から右上に切り上げました。
ホントは目にも留まらない早業だったんだけど、わたしの目にはバッチリ見えますから。

「ぎゃわっ」

「2、1、ゼ「くっ」　ね？わたしの言うとおり避けて良かったでしょ？
お仲間の技で死んじゃう所だったわよ。あっぶないわよねぇ。」

「なんじゃと？　くっ無事か!?　ビーストの。」

「そっそんなハズはねぇ。オレ様の幻影陣が、こ・こんな餓鬼に見破られるわけが。」

そこには右腕を斬り飛ばされたカメレオンが居ました。
種明かしするとね、ビーストキングはおよそ動物なら何にでも変化出来るのね。
そんで変化した動物それぞれに固有の特殊能力が在って、カメレオンには『幻影陣』って
言う、隠蔽した本体とは別に実体を伴った幻の”影体”で攻撃を行うことが出来るの。
”影体”の攻撃はこちらに当たるけど、”影体”に攻撃してもダメージを与えられないの。

ダメージを与えるには隠れている本体に攻撃を当てないとダメって、卑怯技なの。

このビースト君は、カメレオンに変身して固有技『幻影陣』を使い、”影体”狼男の固有技
『無葬拳』を操ってカズヒサを殺そうとしたのよ。
だけど、本体のカメレオンが右手を斬られたから”影体”狼男の右手が斬り飛ばされたのね。
斬られたのは本体でも、飛ぶのは”影体”狼男の右手ってのは面白い仕組みよねぇ。

でもね、カズヒサの手に持ってる剣は、必ず相手に当たる特性を秘めた魔法剣。
『幻影陣』の天敵ですね。相手が悪かったとしか言えないわ。

そして、斬り飛ばされた『無葬拳』が発動したままの右手は、スライムへの直撃コース
だったと言う訳です。

「あー？　今までの剣と長さが違うから抜くとき鞘に引っかかったって言うか、
重さも違うから振る剣筋が狂って、全然違う所切ったというか、
もしかしてこれが、必ず当たる魔剣の効果なのか？」

その通り！

「ディー・フロー・エルアライン・リー・アローテ、
猛き炎よ魔力を糧に敵を撃て！『ファイアーボール』」

ニアの魔法がスライムに直撃しましたが、魔法がかき消されました。
あの娘が説明してた様に、スライムの魔力無効化体質のせいですね。

わたしはまだ『無葬拳』が発動したままの狼男の右手へ無造作に近づき、
ヒョイッ　と掴みあげると、ボヒュッ　と音を立てて消し飛ばしました。

「「　なっ　」」

「なんだと！『無葬拳』に触れてなんとも無ぇとは、てめーナニモンだ！？」

「おぬし、先日逢ったエルフ娘とは別人じゃな？　あの娘もトンデモ無い娘じゃったが、
おぬしからは感じる気配の質が違う。あの娘はどうした？」

「あら？気になるの？」

「くっくっく。何、ワシ好みの娘なのでな。」

「あら、何ならわたしがひんやりジェルのウォーターベットならぬスライムベットとして
使ってあげるわよ？　これからの季節には涼しくて快適そうじゃない？」

「くっくっく。抜かしよるわ。その程度で魔将軍たる我等に勝ったつもりか？」

「ふんっ。」『ズボッ』
ビースト君はトカゲ男に変化して固有技『再生』で右手を復活させ、

「ヘッ、面白くなってキタじゃねーか。久々にオレ様も本気を出すぜー。」
そう言って、今度は白い狼男に変化しました。雪狼男ですね。

「くっくっく。ではここからは魔将軍の本領発揮で行くぞぃ。」

『ぎゃいいいいいいいいいぃ』
スライムが魔法無効化空間を辺りいっぱいまで広げましたね。

「くっくっく。これでこの広場では魔法は役立たずになったぞぃ。
『魔法無効化』じゃ。」

「「「　なんだと（ですって！）　」」」

「ワタナベっ、魔力が集まりません。これでは魔法が発動出来ませんっ！！」
ニアが魔法を試そうとしたようだけど、無効化されているので魔力が拡散しちゃうのよね。
そして、周りの温度が急激に下がって来ました。
雪狼男が固有技『極寒地帯』を発動させているからです。

「くははは、オレ様の技は魔法じゃねーからよ。おめーらがどんな特殊な技を持ってた

としても凍らせちまえば何も出来ねーべ？」

なるほどねぇ。どうりであの娘が去ってからこいつらが出て来た訳だ。

どう考えてもわたし向けの敵よね。まったくこの配置を組んだのは”深紅の君”かしら？

”竜王の君”だったらこんな親切設計のわけないものね。

「ねぇ？芸はそれで終りなの？　貴重な時間を費やしてまで見るほどの価値があったとは思えないんだけど。」

そう言って『極寒地帯』の中を平気で横切りトコトコとスライムへ近寄る。さらに、

スライムが反応するより早く、瞬間的に飛び込むと手のひらでスライムへ浸透勁を放つ。

「ぐぁぁわわわわわー。ぐぅ、おぬし何を、やった。バカな、斬ろうが叩かれようが平気なワシに殴りでこれほどの痛みを与えるとは。」

「貴方の体は液体であることを利用して叩かれても衝撃を瞬間的に分散させてダメージを逃がしてますが、液体の反応速度を越えた周波数で振動を与えれば、逆に液体が災いして、

ダメージを逃がすことが出来ない重要器官に振動ダメージが集中し

てしまうことになるの。」

「なんなんだ、おめーは！。」
雪狼男が殴りかかって来ますが、色々と遅いです。
わたしこれでも本気で動けば光より早いんですよ？
そんなこぶし一生懸命振り回そうとも、そもそも無視してたって当たりようがありません。

さー、お待たせしましたっv　ここからはわたしのターンですよっv
次元監察官（見習い）の戦闘力をバッチリ見せ付けちゃいますよー
って、

「あ！うそっ！ちょ、ちょっと待っ、え？コレで終りなのっ！？
なんでよーっ　わたしの華麗な活躍がーーーーー
あーーっもう！意地悪キングのバカーーーーーーーーーーーッ！」

エルファリナの挿入ページその２（後書き）

おう、ドラゴンロードだ。

なんだかな。俺様としては、こう『いきなり最終決戦！』って感じで、
魔王始め８人の魔将軍相手に立ち向かうエルファリナ達ってシーンを考えてエルファリナの敵を配置といたんだわ。
天地創造かこの世の終わりか！って戦いを期待してたんだけどな。
”深紅”のヤツに修正くらったみたいだな。

それにしてもよ、よりによって狼男にスライムはねーだろ？
そう思わねぇ？どう見たってやられキャラじゃん。
先の見えた戦闘シーン見るほどつまんねーモンはねーぜ。
そんな訳でよ。エルファリナの戦闘シーンはカットだカット。

ま、そのお詫びっちゃなんだが、リアファリナの方にはいぶし銀な敵を
配置しといたからよ。そっちで楽しんでくれ。
しばらく先だけどなっ。

はっはっは。しばらく先も１秒先も俺様には同じ事なのだ。
んじゃなー。

18ページ目？

18ページ目？

「うう、頭痛い。」二日酔いのトゲエルフの醜態は、百年の恋も冷めそうな有様でした。

昨日カズヒサと別れたわたしは『飛翔』でお昼前に港町アイゼリアへ戻って来たのでした。
その足で”よろず紹介所”へ出向くと、お店に居た冒険者達の半数は、わたしが無事仕事を達成して戻って来たのを喜んでくれました。

ぬくもりに飢えてるつもりはないけれど、帰った時に温かく迎えてもらえるって嬉しいな。

祝杯コールが飛び出し、ホントは魔法研究室へ行きたかったのだけれど、帰ったら祝杯を上げようねーって約束しちゃったのは自分の身から出た錆び。
1～2杯付き合ってから、飲酒飛行は危険だからとか言い訳して逃げよう。

そう思って、飲み始めたのがちょうどお昼の鐘が鳴る頃でした。

でも、祝杯してくれた皆が、わたしがお酒を一口飲むだけでとっても嬉しそうに騒ぐので、
わたしとしてもとっても気分が良くなってしまい、気がつけば”よろず紹介所”の酒場部分で大勢に囲まれて、わたしが一口、あなたが一口、みんなで一口、エンドレス～♪の様なノリと勢いで次々と飲んでしまっていました。

最初は小さなコップで飲んでたのが、やがてジョッキになり、そのうち、ドンブリになり、
どこかの冒険者が「コレは冒険で得た不老長寿の杯だ！」とかやりだしたからさー大変。
その場に居た冒険者達は皆何かしら過去の冒険で怪しげな杯を得た事があるとかで、皆の怪しげ杯自慢話が始まるわ、じゃーオレの持ってるそれらの杯も使って飲み比べて効果を確認しようぜーっ！！とか始めるし、やれ筋力増強するはずだとか、美容に良いはずだ、とかお肌つるつるになるんだとか、今思えばそれホントに杯の効能なの？と疑いたくなるような物ばかりだったが、ナゼか皆はわたしで効能を試したがり、美人をもっと美人に！とか言われたら無下に断る理由も無く。

言わないでっ！そんな怪しげな物飲むか！？とか。
わたしも反省しきりデス。

そして、今わたしは”よろず紹介所”の2階にある簡易休憩所、つ

まり雑魚寝スペースで、
二日酔いの頭痛に耐えながら、昨日の恥ずかしい記憶を消したい気持ちでいっぱいで。
ついでに、水霊から思いっきりお叱りを受けている所です。
周りにはいっぱいの男達がうめき声を上げ、さながらゾンビのよう。

『水の宝玉』に棲んでいる水霊は、わたしの体調その他を好意で常に見てくれているので、
酔いが進むと『解毒』でアルコールを対外へ排出してくれてました。
わたしは酔うと覚め、
覚めてはまた大量飲酒で酔っ払いを繰り返していたそうだ。
ラリって怖いわね～。。。

さすがに何度もその状態を繰り返せば、だんだん面倒になった水霊も、わたしが死なない
程度にアルコール分解に手を抜き始め、ちょっとくらい酷い目に合わせて、反省を促そう
と考えたらしい。
特にニヤケ顔の男達とラリったわたしの泥酔姿は潔癖な水霊のお怒りに触れたようで、朝
目が覚めてからずっとこの調子で延々と説教され続けているのだ。
終わりそうになると、話が元に戻りまた怒られ。
はぁ。もうため息しか出ません。頭痛いのに。。。。

この状態の水霊には、頼んでも『解毒』してくれそうにありません。
なお、水霊のお怒りモードはそういう雰囲気を察してわたしが勝手に訳してるだけだけど、
きっと誤訳はしてないだろう。

水霊はその性ゆえカラっと許してはくれない。

せめて水に流して欲しいと思うのはわたしだけだろうか。

ようやく水霊をなだめ、死屍累々の雑魚寝スペースから一階に降りて行くと、

「起きたかリア。足元大丈夫か？いやいや、昨日はお前さんのおかげでこの店の売り上げが普段の5倍だったぞ。ちょくちょく酒盛りやってくれると助かる。」

「何それイヤミですか。」

一階まで歩って降りるだけで一日分の仕事を終えたようなわたしは、元気無く短い返事を返した。

「はは、誉めてるのさ。ところで新しい呼び名は『酒豪エルフ』が良いか？

それとも『不沈小悪魔』が良いか？凄かったぜ。男に勧められるままガンガン飲んでて、

落ちそう！でも落ちないってのが微妙に男心を刺激してよ、下心丸出しの男共が次々先に

沈んで行くってのは。商売女でもあそこまで上手くねーぜ？」

「どっちもイヤぁぁぁーー」

夕べは黒歴史決定です。

「ところで、お前さんはここには戻って来ないと思ってたよ。皇女様のパーティーは肌に合わなかったのかね？」

「そんな事無いわよ。やっぱり女性が多かったから気兼ねなく過ごせたしね。」

「それじゃまたなんで？おっと、オレに惚れたらダメだぜ？はっはっは。」

わたしはジト目で禿頭のおやじさんを睨み付けると、

「歳の差考えなさいよね。まったく、あと２０若くなってから来てちょうだい。
理由は、言っても理解してもらえないと思うけど。」

「はっはっは。この店が流行ってるのはお客のケアに気を使っているからさ。
人生相談でもなんでも来いだ。」

「どっちかって言うと、情報屋としての顔が受けてるように見えるけど～？」

「それも正解だ。よろず紹介所としちゃよ、ここに来てくれるヤツ等がなるべく怪我せず
仕事出来るように気を付けてるって事だぜ。他人と合う合わない含

めて総合的に判断して
仲間になるヤツを紹介する。そして独りで仕事するより格段に成功し易くなるわけさ。
それで結果的にこの店が儲かるって寸法よ。
オレとしちゃ、お前さんが前の仲間の何が合わなかったのか知ってれば、次はもっと良い
仲間選びの助言が出来るってもんさ。」

「それよりもお腹が空いたわ。何かスープをお願い。」

そらまめを漉したスープを飲みながら、「どうしてそんなに暇なの？おやじさん。」

「そりゃ決まってる。お前さんがオレの仕事を奪っちまったからさ。いつものヤツ等はまだ2階から降りて来やしねぇ。こりゃ今日はずっと暇だな。」

「皇女様のパーティーはね、なんて言うか、『神に愛された』パーティーだったの。」

「なんじゃそりゃ？神様に愛されたら結構な事なんじゃないのか？」

「普通はそうね。でもね、神様に愛されてるとね、物事が上手く行きすぎるのよ。
今回の件で言うと、『どうしてわたしだったのか？』から始まるの。
夕ご飯が食べ終わるまで盗賊達に襲われなかったり、その他にも色

々あるわ。
どこがどう神に愛されてるって証明するのは難しいんだけどね。」

「上手く行き過ぎた、って拙いことじゃないだろう?」

「そうね、上手く行かないより、上手く行ってくれる方がもちろん良いんだけど、
わたし自身、昔そういう『上手く行き過ぎる』って事が在って毎日が凄く詰まらなかった。
それ以来かな、そういう事に必要以上に敏感になっちゃって。
どうせおやじさんも知ってるんでしょ?皇女様のお仲間に一人、神様の加護を持ってる人
が居る事くらいは。
きっとこれからも上手く行っちゃうのよ。きっとそうなるようになってる。
だからよ、わたしそういうのダメなの。
失敗するから努力するんだし、努力したから上手く行った時に嬉しさ倍増なのよ。」

「はぁん、そりゃ贅沢な悩みだな。
とりあえずお前さんに次紹介する時にゃ、ほどほどダメなヤツを選べば良いって事か。
お?そりゃこの店のヤツ等は全員当てはまるな!わっはっは。」

「スケベはお断りよ。」

「良い女を見ると、男は皆スケベになっちまうのさ。
ところで、今日はこの後どうするんだ?
オレとしちゃ、2階で全滅してるヤツ等の代わりに仕事受けてくれると助かるがな。」

「そうしてあげたいけど、今日は止めとくわ。
水霊の機嫌損ねちゃって今日はまだお風呂に入れてないのよ。
汗臭いまま、見ず知らずの他人と会うなんてゾッとするし。
まずは以前泊まってた宿に行ってお風呂と洗濯ね。」

「おやおや、お前さんの魔法なら何でも出来るんだと思ってたよ。
意外と不便な所もあるんだな。」

「だからこそ面白いのよ。それじゃおやじさん、ご馳走様、またね。」

「ああ、また宜しくな。んじゃ2階のヤツ等を叩き起こして仕事させるとするか。」

以前の宿屋で、また長期宿泊の手続きをして、お風呂と洗濯を済ませ、
まだ夕方まで時間があるものの、夕べのお酒が残ってるせいか、今ひとつ頭がハッキリとしない。今日の日記って18ページ目だっけ？2枚ほど余計な物が混ざってるような？
まぁ良いか。記憶が無い部分は黒歴史よ。このままフタをした方が良さそうだ。

ん～、この時間からだと図書館も魔法研究室へ行くにも中途半端に

なってしまう。
今日のところは水霊のご機嫌取りのために、健康的に過ごすとしますかね。

いつもは青いチュニックと白いミニスカートだけど、今日は以前水の精霊界を尋ねた際に
水の女王にして月の雫と呼ばれてる、シルヴァンティア様から下賜された月輝祝布（ライトルーア）で
織った薄青のミニドレスを着て、その上から防具と双剣を吊った。
水のドレスを着たことで、かなり水霊のご機嫌も直ったようだった。

夕ご飯にはまだ早いけど、のんびり散策しながら以前仕事で知り合った料理屋に顔出そう。
そう考え、街を歩きながら、いつものように魔術式のアレコレに思いを馳せる。

水の精霊界で思い出したが、まだ炎の精霊界と、光の精霊界には赴いて無かったなぁ。
地⇒水⇒風⇒闇の順で精霊界を巡ったのだけど、闇でかなりヤバい目に遇いまして、
闇でこれなら、炎と光は逝っちゃうかも!?と思いとどまったっけ。
一応命の危険が少なさそうな順を選んだつもり。闇は怖いけど、基本優しい精霊なのだ。

そこまで考え、ハタと気付いた。
そういや逝ってない精霊界がもう一つあったな、と。

精神の精霊が住まう精霊界がどこかにあると言い伝えでは聞いてい

る。
しかし、そもそも精神の精霊は過去に接触出来た例も少なくて、精霊界の存在が確認されたとの話も聞かない。

「精神の精霊かぁ。」

むかーし、まだわたしが若かった頃に、（何度も言うけど、まだまだ若いわよっ）
怒りの精霊の力を応用して、火事場の馬鹿力を意識的に使うことが出来ないか？とか、
対精神系魔法の防御に役立てられないか？とか考えたことがあったっけ。

怒りの精霊へ理性的に話掛け、会話を行うことのあまりの困難さに根を上げて仲良くなる目的は未だに達成出来ず、そのままになってたりする。
あれって、空き地の隣に立ってるお家に野球ボールを打ち込んじゃって、「こら～～！」
と怒鳴り出てきた親父さんに怖がらずに話しかける困難さと同程度。
と言えば理解してもらえるかしら？　さらに言えば、そこで会話が成り立たなかったなら、イコール自分の命が無くなるかも？、とまで言えば、とりあえずやって見ようという気も起きないよね。
わたしも試しに一回やって懲りました。
恐怖をも司る闇の精霊が間に入ってくれたので、協力はしてくれるけど、話しかけるな！の様に（そういう雰囲気だった）なりまして、とりあえずの目的は達成出来たけどねっ。

炎も光も怒りの精霊も、どーーーーーしても、やらなきゃならない必然性が生じるまでは現状維持で、深入りしない事にしたのでした。

そうして、つらつらと考えていると、ここ最近のわたしは目的を持って無いなぁ。と思う。
カズヒサは向こうに戻るため、ニア達の願いを叶えるため、って明快な目的を持ってた。
故郷の村でひたすら魔術式やら魔道具を創っていた頃は、毎日それだけで充実してたけど、
こうして冒険者になって、その日暮らし、せいぜい数日後までを考えて生きる生活をしていると、自分自身の目的をしっかりと思い描かないと毎日に流されてしまいそう。

とりあえず図書館めぐりしたり、魔法研究室の魔術書を隈なく読む。
なんてのは目的じゃないわよねぇ。

「ん〜目的かぁ。」

強くなる、って子供の頃は思っていたけど、もう既にわたしって十分強いしねぇ。
プヨの魔法無効化に対抗する術を開発するってのも目標が低いような気がするなぁ。

いつの間にか、料理屋が目の前だった事に気付き、

「よ〜〜っし、今日は美味しいもの食べて、やりたい事でも整理しよっと！」

「「　いらっしゃーい！　」」

「あ、リアさん、また来てくれたんですねっ。こっちに座って下さい！」

そう声を掛けて来たのは、先日銀しぶ鯛釣に一緒した若い料理人さん。名前はアーロン。

カウンター席の良い所に案内してくれました。

「お嬢さん、今日はブラドー酒の良いヤツが入ったんですよ。一杯どうぞ。」

ブラドー酒ってのは、見た目も味も日本酒に近いお酒で、前回サメ退治した後にここ来て飲ませてもらった時に大好きになったお酒なのです。

一瞬、ヒヤリとして左肩の水の宝玉を見ましたが、わたしが羽目を外さない限りは少々のお酒で文句も言われまいと思い直し、しかし、ここはチビリチビリと舐める様に味わって、

「美味しいっ。ご主人、美味しいです。」

お店の雰囲気も良く、美味しいお酒を頂いて自然と笑みが浮かんで来ますっ

「お嬢さんは、ほんとに美味しそうに食べて、飲んでくれるから、こっちも嬉しくなっちまう。料理はどうしやすかい？今日はコハチ、アダコ、オキグリがお勧めだよ。」

「うん、まずはつまみで。ネタはお任せするわ。」　「あいよっ。」

そうして美味しい魚料理を食べながらアーロンとお話していると、横手から、

「お嬢さんが先日銀しぶ鯛を取って来てくれたのかね？」

と話しかけてくる人が居ました。

「はい、そうですよー。して、どちら様ですか？」

「オホン、ワシはディラン・セリオン・ハーマンと申す。貿易を営んでおる。」

あら？聞き覚えありますよ？

「はは、お嬢さんが銀しぶ鯛を取ってくる羽目になったのはコイツのせいでさ。」

と、ご主人が教えてくれる。あぁ、成金のハーマン氏ね。

「う、うむ。ま、その節は迷惑を掛けたね。お詫びと言っちゃなん

だが、おいザック、
あれ出してくれ。ワシのおごりだ。」

「あいよっ。アーロン、今日入ったアレだしてくれ。」
「はい、親方。」

そうして目の前に置かれた物は、『魔術師殺し』と書かれたブラドー酒。
わたしは思わず目が点になりました。なんて物出すんですかーっ

「はっはっは、酒落が効いてるでしょう？ワシからの意趣返しと言うかね。
まぁ、飲んで見てや。」

「これはね、蔵元から極僅かしか出荷されてない酒でして、材料に拘るあまり、少ししか
仕込めないんですわ。このディランのヤツがお得意様になってる酒屋から、懇意で譲って
貰ったんです。」

「あら、ご主人とハーマン氏はもしかしてお友達？」
「腐れ縁ってヤツだな。」とハーマン氏。

「これも美味しいっ。甘いのに味がとっても澄んでますっ。わたし甘口のブラドー酒って
どっちかと言うと苦手なのに、このお酒なら平気です。とっても美味しいっ。」

「だろ～？いやいやお嬢さんはお酒の飲み方が上手だね～。」
「ちょっと、ディランさん、手が早い。その娘に手を出さないで下さいよね。」

「お？小僧がいっちょ前に色気づいたかー？かっはっは。」
「おいおいアーロン、こんなのでもお客さんだぞ。」

ご主人は注意しつつも笑ってます。とても仲が良さそうですね。
そうして、わたしがちゃっかり2杯目も頂いていると、ハーマン氏は、

「お嬢さん、その酒の名前の由来を御存知かな？」
「由来？いえー、知らないですよ。」

「この街の図書館には、この国の者なら誰でも知ってる古い本があるんだよ。その本は、
『ラージャと魔法の宝玉』と呼ばれておる。一度本を開いて見る事を勧めるね。」

「開く？読むじゃなくて？」

「ああ、その本は魔法の本で、開くと自分がまるで本の主人公となって、本の世界を実際
に体験できるっていう魔法が掛かっている素晴らしい本なのさ。」

へぇ、幻覚系の魔術かしら？

「その本の物語には悪い魔法使いが出てくるんだが、お酒で眠らされて退治されちまう。
ってお話なのさ。その酒ってーのが、これって話さね。」

と『魔術師殺し』を指差すハーマン氏。

そこからは、お酒や魚にちなんだ物語で夜更けまで盛り上がって深酒してしまい、次の日
またもや水霊に説教されてしまいましたとさ。とほほ。
しばらく禁酒デス。

わたしが『夢幻の精霊』『本の魔神』と呼ばれる存在に出会うのはもう少し先の話。

１９ページ目

１９ページ目

ここは首都『グレート・アイゼン』です。
厨っぽい名前だな、とか思ってないデスヨ。

結局、魔法研究室を訪ねたのは、あれから三日後でした。
二日続けて水霊に説教受けてる時、こうピカーーーッとプヨのアンチ魔法無効化の方法を
思いついてしまったのです。
つくづくわたしって暗黒面の使い手だなー、って思う。
例えば悔しい時、例えば説教受けてる時、そんな時ほど名案が浮かぶのよっ
鬱屈した思いをバネにしてるのよねっ
そうなるともう居ても立っても居られません！

思いついてから出来上がるまでたったの一日。ゼロから構築してのこれは新記録ですっ
おかげで昨日は、プヨ来ないかなぁ？と無意味に屋根の上とか、その辺をグルグル飛んで
みたりとか。待ってる時って来ないものよねっ　どうでも良い時は来るくせに。
自分でもバカだと思うけど、誰かに自慢したいって込み上げて来て他が手につかない。

この気持ち解ってもらえるかしら!?

プヨが来るまで待ち切れないから、ちょっとだけネタバレよ、ナイショだからねっ。
魔力もある種のエネルギーだから、波で出来ているの。
声紋や脳波と同じく十人十色なその波形。
プヨは魔力波の波長を、瞬時におそらくは体表の触覚的に感知して、位相を１８０度逆転
させた波を作り、それをぶつけ魔力の波を相殺しているのだ。だから魔力を無効化できる。
理屈としてはわたしの『簡易儀式』の魔力増幅の正反対だ。
魔力増幅は魔力波の振幅を増幅しエネルギーを高めてる。
魔力無効化は魔力波の振幅を減衰しエネルギーを抑えているのだ。

特定の相手の魔力波だけ無効化すればすなわち特定の相手のみ魔力無効化し、自分は魔法
を使い放題となるし、
自分の回りの魔力波を無差別に無効化すれば、全方位で有効な一定範囲内の魔力無効化も
出来るのだろう。
実際には波の振幅を完全にゼロに押さえ込む必要は無く、魔術を発動出来うるエネルギー
レベルより一瞬でも下まで振幅を乱してしまえば、魔術は魔術として成り立たなくなる。

そうなると、『魔力無効化』を無効にするのを、魔術式でもって為すのは非常に困難。
プヨの無効体質を無力化するための、肝心の魔術式の魔力すら無効

にされてしまうからだ。

魔力無効化を外部から強制キャンセルするには、プヨの魔力波を感知する体のメカニズムをダマしてしまえば良い。それだけでプヨは位相逆転を出来なくなる。

問題はどうやって無効にされない魔術式を創り、プヨの体表感覚に影響を与えるか、だが。

そこは魔導師にして精霊使いたるこのトゲエルフ。

魔術式に頼らなくても、わたしには心強い精霊が居るのだー。

後は、実際に使う場面までのお楽しみよ。

さて、話は戻り、ここは首都『グレート・アイゼン』

厨っぽいな、あ、それはもう言ったっけ。

港町アイゼリアから真東に歩いて2時間ほど、約１０Ｋｍほど内陸部に入った場所に在る

都市がこのアイゼンワード帝国の首都である。

どうしてそんな所に居るかというと、魔法研究室とは通称で、その正式名は、

『帝国立真魔法追求ならびに保存と継承を目的とした深遠を探求する者達の研究室』

なんでも、３人の大魔導師達をして命名する際に意見をまとめ切れ

ず、全員の主張をその
まま繋げたのだそうだ。バッカじゃないの。
この辺の事情を教えてくれたのはハーマン氏だ。

本なら何でもジャンルを問わずに置いてる図書館と、魔法専用の研
究室なら、先にどちら
へ行こうかと考えれば、おのずと研究室が先と考えるのが普通よね？

研究室がアイゼリアの何処にあるのかと尋ねたら、返って来た答え
は「首都に行かないと
無いぞ」だった。
そんなわけでっ　やって来ました首都『グレート・アイゼン』
厨っぽいのは、以下略。

「本当ならお前の様な外部のものは、この偉大なる魔術の殿堂には
立ち入ることも出来ぬ
のだぞ、姫様の特別なお計らいがあったればこそじゃ、それをしっ
かり理解した上で行動
するのじゃぞ。」

「はいはい、わかりましたぁー。」

「ったくこれだから偉大なる魔法の真理を知らぬものは。ぶつぶつ。
」

「はいはい、ねー、どうせならお勧めの魔道書のある棚って何処ら

辺なの？教えて？」
とりあえずエルフ・スマイルをサービスよっｖ

「む／／／／／　向かって右側の棚が、われら偉大なる魔法の真理を知る者達が結集した、『ジェノサイダー』先達の英知が込められた魔道書の数々が納められておる。」

その名前って真理関係ないじゃん。きっと魔術師に非ずば人に非ず、とか、破壊こそ魔法の真理、とか言い出した人達の集まりなんでしょ？

「魔術とは力そのものじゃ。畏れられてこそ魔術師。解ってないヤツらが多すぎるのじゃ。」

手っ取り早く言えば、俺ＴＵＥＥＥＥＥＥ！したい人の集まりってことよね。

「良いか、くれぐれも『シーカーズ』の馬鹿共には近づくでないぞ。」

「はいはい。じゃ真ん中の棚から読むとしますか。」　「あっ！これっ。」

きっとその『シーカーズ』って人達の棚は左端ってオチでしょ？

先に結論を言うと、初日の成果はあまり芳しくありませんでした。
とりあえず、わたしの感想として言えば、
魔術の評価方法を主観に頼っちゃダメよ～、かな。

第三者的に評価し、効果の指標は信頼性が揺らがないよう明確に定めなければ意味が無い。
今日、わたしが読んだ魔道書はその辺りが全くダメダメで、著者の都合が良い様に結果の解釈が為されてしまっていた。

まずは真ん中の棚。研究室の正式名称の『保存と継承を目的とした』とかいうグループの棚なのでしょう。

『魔物使いライラ・サラヴィンの、あの魔物に勝つ属性はコレだ！』
『異界研究家ロイ・ラーウィンの夢幻界の生物１００選』
『正統派魔術師フェイ・フォンの炎の魔法を１０倍強くする方法』
『魔術師イザーク・ラッセの、勇者でも駆け足で亀に勝てなくなるラッセの空間魔術式』
『宮廷魔術師ロアン・ファイリールの成功する、子供を魔導師として育てる方法』

えーっと、どう突っ込めば良いのでしょうか。魔法との関係は微妙？
順番に簡単に説明すると、

草タイプには炎だー。とか？

攻略物好きなわたしの知識欲に訴えるものはあったけどねっ

自分が遭ったことも無い生物なのに情報元が不明では、ただの空想なのでは？
でも面白そうだから覚えてしまったわたしが居ます。

乾季で風が強い日なら、そりゃ当然、絶好の火炎魔法日和よね。炎が強くなる条件を高める知識は知ってて損は無いけど。でもこの自然環境に配慮した考えは風水師に近いかな？

勇者が亀に追いつく頃には亀はさらに先に進んでいるから永遠に追いつけない。
そんな屁理屈から始まり、本格的な空間を利用した無限回廊の生成法まで、かなり真面目に空間に関する術をまとめていました。

子供の頃から魔道書に親しみを持たせ、いわば、先んずれば人を制す理論。
地味でどっかで聞いた事が書いてあるけれど、それなりに本質を突いている点が良い。
感覚系や空間系などは、自分の感覚や空間把握力が狂わないよう、慣れ、センスが必要となるのだが物心付く頃から親しんでいれば有利となるだろう。

えーっと、うん、こういう基本的な知識を継承するって大事だよね。
次行こう。

『深遠を探求する者達』すなわち『シーカーズ』、と思われる左端の棚を眺めてみると、
そこには、

『死者との交信法、御先祖様や古代の英雄から英知を授かろう！』
フロイ・カー
『女の子の精神へダイレクトアクセス、気になるあの娘の心を鷲掴み』リーゼン・マロー
『異性にモテル１００の方法、に勝つ、たった一つの冴えた魔法』
アントニオ・ラーゼン
『物質転送理論、コレを読まずして究極の魔法を語る無かれ』ライアン・オークル
『迷路抜けゴーレム競争で勝つフラクタルアルゴリズム』フランソワーズ・チイ
『魔法の深遠、深遠の魔法』ブルー・アンソワーゼ

えーっと、どう突っ込めば、以下同文。

死者との交信って向こうの世界でも見ましたよ。どこにでもあるんですねこういう詐欺。
と思って読み進めてみたら、もしかしたら、自分にしか見えない『何か』を構築し、そこから知識を得ている可能性がある、かも。そうだったら凄い。けどそれはほぼ無いな。

ダイレクトアクセスを行うための理論が今ひとつ謎で、理屈は解明出来てないけど利用は

出来ている典型でしょうか。目的がヨコシマなだけに惜しむらくはタダのヘンタイさんにしか使われないと言う。

あれこれ細かい事を気にするより、たった一つの魔法の言葉を唱えた方が良い結果に結びつくよって本ですね。美人相手に尻込みしちゃう？振られちゃった？仕事で失敗した？

そんな時には魔法の言葉を唱えるのよ！『ジャ～マ～イ～カ～。』

良い事言ってるんだけど、これ魔法じゃないよね！？　目指せジャマイカ野郎！オー！

物体をふっ飛ばすまでは良いのですが、肝心の目的地で元に戻る再構築部分の理論が全くこれっぽっちもカラッキシなのは、しょせんタイトルが”理論”止まりだから？

あまりのトンデモ理論振りが、わたしの魔導師としての琴線にインスパイアしましたよ！

むむむむ、キタキタキタ！空間転移の魔術式がっっ

※その話は、また別の話となる。。。。ということで次です。

（リアファリナ注：この場ではまとめ切れなかったからこの案はいつか再利用。の意味）

カッコイイ事言ってますが、総当りで迷路探索を行うのは時間の無駄だと思いますが、

どこの世界でも迷路脱出物は人気があるんですねー。

ゴーレムいーよねー。この人とは気が合いそうです。

魔法というより心理学っぽいですね。心の奥底にある混沌とした所、そこへ足を踏み込む

か否かで術者の心の在り様に変化が生じ、結果も変わっていく。
理性を持って混沌を制するか、心が混沌とした状態のまま魔法を唱えるか。
その差を検分し、自身の心を理性により制御し、術の効果を高める方法が書かれています。

ん～魔術師として大成するためには必要なのでしょうが。。。次よっ次っ。

『真なる魔法の追求』こと魔術至上主義者の集まり『ジェノサイダー』。
さすがこの一角は目を見張る物がありますっ　誰がこの恥ずい二つ名付けたんでしょうか？

『最強魔法による究極の攻撃魔法』”最強魔導師”ギャロップ
『狂気を糧に如何なる攻撃でも死なない軍団の構築法』”不死の付与者”ライハーラ
『血塗られた実験と凶戦士の誕生秘話』”魔法王”ライトワン
『炎地獄と黙示録の獣』”偉大なる召還士”カーディナル
『これで貴方も永久の貴族か不死の王か』”永遠の美”カミーユ・ライヴァッハ
『死を撒き散らす殺戮と倒国の書』”呪われし者”ザカース

地殻を破壊し都市を再生不能な荒野に返る魔法では、魔術実験時から１０日後に小規模な

地震が発生したそうです。著者は自画自賛していますね。
誰もその地震は魔術と関係ない自然発生ですよー、って教えてあげなかったのかしら？

自分の奴隷をなます切りにして数日放置しても死ななかったり、雷荒れ狂う地に放置しても雷に当たらなかったのは魔法の効果なのだそうです。実験する側の狂気って怖いですね。

バーサーカーを作ろうとして、奴隷の精神に干渉し心を壊したら、傷付けても反応しなくなり魔術は大成功だそうで。能動的に動かなくなったのは些細な服作用だとか。
バーサーカーなら狂戦士だけど、タイトルは凶戦士だからこれでもいーのか、そうですか。

油と炎で動物を生贄に伝説の魔獣を召還するハズでしたが、召還は叶わなかったけど多数の人間が炎の照り返しの中に蠢く『何か』を目撃した。それが黙示録の獣なのだそうです。
ツッコミ担当が居ないって不幸よね。

過去そういう不死身に転生出来た偉人の伝説をドキュメンタリー風にまとめてあり、君も修行すれば不死身になれるかも。と疑問形で結んでるけど、妙に描写が細かいのは不思議。
その辺りが屑本扱いにならず、本棚の目立つ場所に置かれている理由かも。

この本を読んで7日以内に5人の友人にこの本を読ませないと読ん

だ人は死ぬ、この本は、
たったの１００日で国を滅ぼせる強力な呪いの本なのだそうです。
それって誰も友人に勧めないのを前提で計算してるような？

えーっと、わたしがたまたま読んだ本が偏ってたんだよね？
今日はなんか厄日っぽいからまた出直そう。それがいいわ、うん。

まだまだ棚の入り口側を少し読んだだけだから、本命はこれから見つかるのでしょう。
そうよね、真打ちって後から出てくるもんなんだよねっ　ねっ？
明日からに期待ですっ！

そうして港町アイゼリアへの帰路。
ふと下を見てみれば図書館が。
その時、わたしの頭の中に一句浮かんだ。

『もう帰る、そういう時に、大当たり。』

閉館までもうちょっとだけ時間があるから、様子見してみましょっと。

図書館に入ると、本棚の手前に数人の列と、列を見守る衛兵が居るのが見えた。
なんだろうと良く見ると、一つの本が置かれてあり、列はその本を見るために並んでいる
ようです。本のタイトルは『ラージャと魔法の宝玉』だった。

本は開くだけで一瞬で読み終わるようです。列はあっという間に捌けて行き、わたしの番
は直ぐでした。
わたしは本を手に取ると、本を開く前に出来るだけ本の情報を読み取ろうとしましたが、
どう見ても普通の児童書に見えます。
著者は『リーゼン・マロー』・・・・・あれ?この人、児童書も書いてるの?

とりあえず、これ以上は何も解らないようです。開いて見ますか。

『そこでは』、わたしは主人公『ラージャ』と呼ばれる若者だった。
首都の片隅で貧しくても慎ましく母親と二人暮らしで、夢見がちであったが正直者だった。
ある日、自分の父親の兄と名乗る男が母親と主人公を訪ねてくる。
伯父は貿易商を営んでおり、主人公の父親である弟が死んだことを

つい最近風のうわさで
知り、妻子を守るためこの街まで訪ねて来たのだと言う。
伯父は二人に殊更親切で、足りない物が在れば何でも買い与えた。
そしてある日、伯父はラージャにこう言った、

「この街の近くには秘宝が眠っており、それを取ってくれば母親をもっと幸せに出来る。」
ラージャは伯父に案内されて、秘宝が眠る場所へと一緒に向かいました。

伯父に連れられて砂漠へ行くと、目の前に洞窟が現れ、伯父はそこへ入るようにラージャに言います。その際、ラージャに腕輪を寄越し、何か困った事が有れば腕輪に祈りなさい。
と言付けた。

洞窟の中は真っ暗な場所だ。
わたし（ラージャ）は魔法が使えるのかも確認の意味で『影視』を唱えて見たけど、発動しませんでした。うーん、この世界が本の中にせよ、魔法が使えない、もしくは、制限が在るようですね。
魔術式がダメなら精霊は？
あ、闇霊は傍に居るのを感じます。
それ以外の精霊はダメですね。この世界では精霊使いとしても精神系列しか使えないのでしょうか。

今は感じないけど怒りの精霊他の精神の精霊ならここでも呼び出せるようです。

真っ暗な階段を下りて良くと、そこには金貨が山積みとなっていました。
わたしはチラリと視線をやるものの、次の間へと歩みを止めない。
幻影による物体は、CGを知っている者ならたやすくその不自然さが理解出来るだろう。
光源処理だけでも、シェーディング、距離減衰、レイトレーシング、ラジオシティなどがしっかり処理されてなければ物体の不自然さが直ぐに際立ってしまうものだ。
ここの金貨はとても”金”には見えない。ただの黄色の〇にしか見えなかった。

どれだけ精密な世界が構築出来るかは魔術式次第だが、魔法の良し悪しを決めるのは発想に掛かっている。何の捻りも無い在り来たりなこの世界の心理描写。
金貨の間、宝石の間、知識の間、色欲の間、そして恐怖の間。
金貨はのっぺりした黄色、宝石は輝きもないタダのガラスに見える。
幻影を作り出す魔術式がどれだけ適当なのか。これは子供の落書きレベルに等しい。

溶岩の間を通り抜け、階段を抜けるとそこには、いかにもと言った感じで光る宝玉がある。
それを手に取ると洞窟は崩れ始めた、命からがら洞窟の外に向かう

と、入り口には伯父が
待ち構えており、持ってきた光の宝玉を渡せと言う。
渡しても良いけど、それじゃ話が続くまいと思い、ここは渡さないでおこう。

すると怒った伯父は正体を現し魔法使いの姿になるとわたしを洞窟に閉じ込めてしまった。
洞窟の入り口は完全に崩れてしまって、外に出られそうにもない。
ここは慌てず、腕輪をこすりながら、魔神さ～ん出て来て～♪、と言うとテンプレの魔神
が出てくるハズ。
あれ？出てくるハズ？
あれれ？
あ、出てきた。
ちょ、ちょっとお兄さん！イケメンですよっ！お姉さんビックリだよ。
イケメン魔神は少し口角を上げてニヤリとした顔で、何でも御用をお言い付け下さい、と
テンプレを語った。
わたしはイケメン魔神の力で洞窟を脱出し、無事に家へ帰った。

それからは偶然訪れた街で王女様と出会い求愛され、王様を影で操る悪い魔法使いの宰相
と戦い、宝玉の力でいったんは退けるものの、宝玉の意味を全く知らない王女が変装した
魔法使いに『大切なものは箱に入れてしまうべきだ』と騙され、宝玉を魔法使いから渡さ
れた箱にしまってしまう。

実はこの箱は魔法使いの使い魔が化けた物で、使い魔に宝玉が奪わ

れてしまった。
魔法使いは宝玉を手に入れると、その力で王女と城を力ずくで奪い去ってしまう。
国を追い出されてしまったわたしは、長く苦しい旅を腕輪のイケメン魔神の力を借りつつ
どうにか連れ去られた王女の居る城へとたどり着く。
王女の愛と機転で魔法使いを『魔術師殺し』で酔いつぶして、宝玉をもう少しで取り戻せ
そうになるが、直前で魔法使いが気付かれてしまう、わたしは魔法使いと一騎打ちになり、
辛うじて斬り倒す事が出来た。

しかし魔法使いは最後に呪いの言葉を王女に掛けようとするが、一瞬先にわたしが宝玉を
剣で打ち壊して事なきを得る。宝玉の力は剣に移り宝剣となった。
そして、魔法の宝剣を携えたわたしと王女様は末永く幸せに暮らしましたとさ。

本は閉じ、わたしはハッと気付く。
ここは図書館で『ラージャと魔法の宝玉』の本を閉じた所です。
時間はホントに一瞬で終ったらしい。体感では数ヶ月分の経験をした感じなのです。
幻覚としては子供だましですが、アレだけの情報量を一瞬でダウンロード出来て、体験を
行えるのは素晴らしい魔術です。ヘンタイさんだなんて言ってゴメンよー。

多少違和感があったのでもう一度本を開こうかと思った時に、いつの間にかわたしの後ろにはこの本を読む人が数人並んでいたので、もう一度並ぶのも面倒だし、今日はモヤっと漠然でまとまってない状態を感じてただけだったので、この本をもう一度開いてその辺りを確かめるのは次回でも良いかと思い直す。

この日は、図書館で『リーゼン・マロー』が書いた物をざっと調べて終わりました。

わたしが微妙だー、と思ってた本の数々が実は当たりだったと解ったのは、それらの知識が実際に役立つずっと先の事だ。

先人の知恵を馬鹿にした感想は、後から日記帳を読み返し自分自身のあまりの恥ずかしさに身悶えしつつ、黒歴史にしようかと本気で悩む日々。はぅ／／／／

２０ページ目

２０ページ目

「はぁ、知識欲の命じるままにアレコレ調べものが出来る毎日。しあわせ～。」
読書中のトゲエルフのゆる顔は、研究室と図書館の来客数を増やすのに役立ったとか。

あれから魔法研究室と図書館を行き来する毎日です。
魔法研究室は魔術に関する本は豊富なんだけど、著者についてはよほど有名じゃなければ
書かれた本は置かれてないので、これは！と思った著者については
図書館で著者関連書籍
を探して読んでいる。

それから、図書館では『ラージャと魔法の宝玉』をほぼ毎日読んで居ます。
本に書かれているストーリーは、違う行動を取ると内容が変わるマルチエンディング形式
になっていることも解りました。
大抵はラージャがストーリーに関係ない所でそれなりに過ごしました。となるのだけど、

時々は凄い展開になる場合があります。
どういう時にあらかじめ用意されたエンディングへ繋がる分岐なのかの規則性についても、
著者のリーゼン・マローについて調べた結果、ある程度見えて来ましたし。

まだ少ないですが、わたしが見つけたエンディングにどんなのがあるかと言うと、

本を開いて中に入りほぼ同じ道筋を通りますが、腕輪の魔神に、魔法使いの城へ辿り着く
長い道は可能な限り直線で、避けられるトラブルを全て避け最短で辿り着くようにと告げると、元々のストーリーよりも短時間で魔法使いの城まで辿り着けます。
ラージャ（わたし）がこんなに早く城に辿り着くとは思って無かったのでしょう。
そこでは驚くべきことに、王女は魔法使いと良い仲になっており、いえむしろ王女の方が
積極的に魔法使いへ迫っており、さらには魔法使いの子供まで懐妊してました。
わたしが城に辿り着いたと見るやしおらしく助けに来たのを嬉しがり、邪魔になった魔法
使いをわたしに殺させ、その後は魔法使いの子供をそ知らぬ顔して生み、結婚生活を満喫
しつつ悠々自適の生涯を送るという悪女エンド。

また別な時に本を開き、今度は魔法使いの城で王女の不実な行為を突きつけ、意味不明な言い訳をした挙句、逆切れした王女を先に殺してから魔法使いと対峙すると、魔法使いは自分こそが被害者で、王女は実は古の魔女だったと語る。その時、殺したはずの王女は息を吹き返し宝玉を奪って自分の国へと逃げ帰る。

さらに、わたしこそ事件の真犯人であり、魔法使いと結託して王女を殺そうとした凶悪犯であると国中にお触れを出した。

賞金首となったわたしは、やがてレジスタンスのリーダーとなり最後は強力な悪魔の力を使って残酷で非道な女王となった元王女を城の最上階で討ち取って物語が終る魔女エンド。

別な日にまた本を開いて中に入り、王女と最初に会った時に斬り殺そうとすると、王女は悪魔の姿を現し、呪詛と呪いの言葉でこの国を汚染する。悪魔の言霊で汚染されたこの国は既に存在そのものが悪魔の国と化し、また同時に死者の国でもあった。城は悪魔とゾンビで溢れ、わたしは数人の仲間を探し出し、城の地下深く、冥界の近くへと探求し、魔王と化した元王女を倒したが、直後、仲間の一人が悲鳴を上げて倒れ、だが、直ぐに起き上がったと思うと、たった今倒したばかりの魔王に変化した。

魔王はわたしに何度倒しても生き返るぞと言うが、その姿の向こう

に魔王の玉座が見える。
玉座の後ろに”あの宝玉”があるのを見てとったわたしは力を振り絞って宝玉を打ち壊した。
力の源泉を失った魔王は最後の醜いあがきをするも最後はわたしに討ち取られ物語は終る
という魔王エンドもあった。

そんな風に研究室と図書館と宿を往復しながら数日が過ぎ、たまには気分転換も兼ねて、
よろず紹介所へも顔を出して簡単なお仕事でも請けようかな、と行ってみたら、さっそく
おやじさんから仕事を依頼されました。

「リア、おまえさんにどうしても引き受けて欲しい仕事があってな。」

「お仕事の内容にも寄るわよ？あまり長期間拘束される仕事は今は受けたくないわ。」

「それならある意味ちょうど良いかもな。期限が切られている訳じゃないんだが、ちっと
面倒事になりそうな仕事なんだわ。いわゆる恋話ってヤツでよ。
依頼人は女の相談者を求めているんだが、その依頼人ってのが魔術師で、若いんだが割と
偏屈で通ってるヤツなんだよ。
そうなると、ウチの店に来てる女達の中じゃ、魔術師の理屈っぽい話をキレ無いで聞ける
ような、あー頭脳派は、おまえさんしか居なくてな。」

「わたしに恋話を持ち込んでいる時点で人選ミスの気がするけどなぁ。
相談に乗れば良いの？解決できる自信は全然無いけど、それでも良いなら引き受けるわよ。」

「ああ、それで良い。元々おまえさんに無理なら他のヤツにも任せられないからな。
じゃ、頼むぜ、依頼人の家で詳しい話を聞いてくれ。場所は・・・・・」

そしてここは依頼人ことゲイリー・フォン・メイローが住まう、メイロー子爵家。
ゲイリーはここのドラ息子なんだそうな。御歳２６才。御家は結構裕福。
顔は普通、まー悪くは無い。割と身長も高い方ね。

「なるほど。話をまとめると、貴方に好意を持ってたお嬢さん、キャリー・レーンさんを騙している悪い男が居るので、その男の悪行を調べる。　そしてキャリーさんに目を覚まして欲しい、ということで依頼内容は良いかしら？」

「持っていた、じゃないよ！今でも持ってるんだから。キャリーは今ちょっとだけ変な夢を見てるだけなんだよ。」

「あら、それはゴメンなさいね。貴方に好意を持っているキャリーさんの目を覚まさせる。
これで良いかしら？」

「ああ、それで良い、２－３日で出来るか？」

「その前に確認なんだけど？もしキャリーさんが目を覚ます必要など無いとおっしゃった
場合なんだけど。その場合はどうして欲しい？
知っての通り、一人の個人の意思を捻じ曲げる訳には行かないからね。」

「そんな訳ないじゃないか！キャリーが好きなのは僕なんだから！」

「そうなの？でもね、世の中好きだって気持ちだけではどうにもならない法律と言うもの
があるのよね。キャリーさんの意思を無視してわたしがどうこう出来ないわよ？
う～ん、それじゃこうしない？
これからそのキャリーさんの所へわたしと一緒に行って、その場で説得するというのは？
もちろん直ぐにキャリーさんの悪夢が覚めるとは思えないけれど、何事も手順を踏む、
というのが女の子には必要よね。それに好きな人からの心配されて嬉しくない女は居ない
わよ。ああ、わたしこんなに愛されてるんだぁ～ってね。」

「そっかー、そう思うかい？よしっ一緒にキャリーを説得しに行こう！」

ふー、良かったー、うまく焚き付けられましたっ。
もう少し話の解りそうな人だったら、こっちも骨を折っても良いと思うけどさー？
話し始まって1分でどうでも良くなりましたよ。というかさっさと徹底的に振られるなりさせて、仕事を終らせてしまえ！と思ってます。前金は貰ってるしね。

キャリーの家に行くまでも、延々、いかにキャリーが清楚で可憐で優しくて素晴らしいかを話し聞かされてもうケッコウ！デスって思えた所で、キャリーの家へ付きました。

あんぐり。
「あの、あなたがキャリーさんですか？」

「はい、そうです、あなたは？」
な・なんだってーっ！犯罪デスヨ！この娘、どうみても１８歳未満。１５－６歳？

「わたしはリアファリナと申します。こちらに居るゲイリーさ「キャリー、あの屑と別れてくれたかい？」　わたしは無視ですか、そうですか。」

おぼっちま君がそう言うと、キャリーは急に顔を険しくし、
「一体なんなんですか！？あなたは。最初に遭った時から変な事ばかり言って。

もう付き纏わないで下さいって何度もお願いしたじゃないですかっ。」

なるほどっ、もう見切ったよ。全てはこのおぼっちま君が悪いんだってね！
でもわたしもお仕事で来てる、前金分は働くわよっ

「待って下さい。感情的に話すのは良くない事ですよ。まずはお話させて下さい。」
わたしはキャリーが返事を返す前に、さらに言う、

「キャリーさん、こちらはメイロー子爵家のゲイリーさんです。
ゲイリーさんは、キャリーさん貴方が現在お付き合いしている男性が、
貴方に悪い影響を与えていると心配されているのです。」

「なっ／／／／／　なんでイーディスの事を知っているのっ。
それにあたし達、付き合ってなんか居ませんっ。
その・・・あたしが誰と付き合おうがこの人は何の関わりもないでしょ！」

「キャリー、キャリー、あの屑はダメだよ。君を幸せに出来るのは僕だけなんだから。」

「な・・な・なっ。」

あーあ、キャリーさんの顔が真っ赤で爆発寸前ですよー。

「キャリー？どうしたんだい？おや？お客様かい？」

おっと優しそうなイケメン登場！察するに屑呼ばわりされてるイーディス君かな？

「イーディス、この人があたしに付き纏ってる例の男よ。」

「なんだって？」そう言うとイーディス君はキャリーを引き寄せて、
「失礼ですが、貴方は誰ですか？」と尋ねる。いや、口調は穏やかだが、キャリーを引き寄せて見えない位置からニヤニヤとゲイリーを見下した嘲笑をしている。
ゲイリーじゃないけど、わたしもこの男を嫌いになったね。

その後しばらく、ゲイリーとイーディスは口論していたが、キャリーが味方をしているイーディスにはそもそも勝てるはずもない。

メイロー家への帰路でわたしはゲイリー君に尋ねる。
「キャリーさんが考えを曲げない間は、何度説得しても無駄ね。どうする？イーディスの悪行を調査して、その結果を持ってキャリーさんを再度説得に行くのが良いとは思うけどね。」

「くそ、くそ、ふざけるな屑め。　あ？あぁ、いや良い。僕に考えがあるんだ。
君の仕事はここまでで良い。ご苦労だったね。」

そう言ってゲイリー君は足早に家へと帰って行く。
「くそがっ覚えてろ、キャリーが誰の物なのか解らせてやる。ぶつぶつ・・・・」
耳が良いわたしにはそんなゲイリーの呟きが聞こえて来る・・・・
わたしは仕事が完了となったので、ここからよろず紹介所のおやじさんに仕事の顛末を
報告しに戻る事にした。

「そんな訳でね、おやじさん、あのゲイリー君は何かをしでかす可能性が高い気がするの、
もし何かあったら声を掛けてね。乗りかかった船だから。」
「ふーむ。ああ、解った。頭の隅に置いておこう。」
それから数日経ってからのこと、おやじさんに緊急で呼び出しを受けた。

「ゲイリー君が意識不明？どう言う事？」
「はい、ゲイリー様が二日前、突然部屋の中でお倒れになったまま
発見され、未だに意識
がお戻りになりません。部屋の中には魔方陣が描かれ、お傍にはこれが落ちていました。」
メイロー家の執事がそう言って取り出したのは、

リーゼン・マロー著『女の子の精神へダイレクトアクセス、気になるあの娘の心を鷲掴み』

魔法研究室で見た、あの魔法書だった。

21ページ目

21ページ目

わたしは執事から問題の魔法書を受け取り、改めて事態の解決に向けた仕事を受託した。
その足で、まずはキャリーの所へ翔ぶ。
やはりというか、キャリーも二日前から原因不明で意識が無い状態だった。

さて、どうする？
ゲイリーとキャリーが時を同じくして意識不明になったのは偶然ではあるまい。
出来れば二人一緒に診れる場所へ移動してもらうのが一番ではあるが。
キャリーはゲイリーを嫌っている、そして、たぶんゲイリーのせいでこうなってしまった
その上で、メイロー子爵家へキャリーを運んで行くのは非常識だろう。

そして、キャリーをこの家から運び出すにはそれなりの理由が必要となる。
意識が無い娘を、どこの誰だか知らない人間がどこそこに運んで、と言われて運ぶ馬鹿は居ない。

わたしはキャリーの今の状態を出来るだけ診てから、キャリーの母親らしき人へ告げる。

「キャリーは精神の精霊の動きが止まっているわ。だから心が目覚めない。
このままでは、おそらくキャリーは遠からず衰弱して死んでしまうわね。
精神の精霊を正常に戻してあげないと治らないわ。」

「精神の精霊？いったいどういう事ですか？キャリーは助かるのでしょうか？」

「わたしは見ての通りのトゲエルフで精霊使いよ。おそらくこの国では一番のね。
だからわたしにキャリーを任せて欲しいの。
精神の精霊と話が出来るのはこの国ではわたし一人しか居ないと思うわ。
なんとか精神の精霊を説得してみるから。」

「あなたが精霊使い？キャリーを助けてくださるの？お願いします。キャリーを助けて！」

「ええ、出来る限りのことをします。
だからね、それをする為にもキャリーをよろず紹介所の2階へ運んで行って欲しいの。」

「なぜそこへ行かなければならないの？ここではダメなの？」

「精神の精霊と接触するのは非常に危険なのよ、わたしが安心して

精霊術を行える場所
はよろず紹介所なの。それでもここでやれと言うなら、キャリーを
見捨てる方を選ぶわ。
自分の命を掛けてまで赤の他人を助ける義理はわたしには無いから。
」

「・・・解りました。いえほんとは解ってないけど、貴方がキャ
リーの為に危険なこと
をして下さるのは解りました。それによろず紹介所なら以前利用し
たことがありますし、
あそこなら安心ですものね。」

「それじゃ、キャリーを運ぶのはお任せするわ。
わたしは別な場所で同じように意識不明の人が居るそうだから、そ
っちも診てから
よろず紹介所へ向かうわね。」

そう言い置いてからメイロー子爵家へ向かう。

「いったいどうなっているんだ！なぜ息子は目を覚まさん！？」

「息子さんはこれを使ったのよ。」
子爵家に着いたとたん、わたしに食って掛って来たメイロー子爵に
わたしは問題となった
リーゼン・マロー著『女の子の精神へダイレクトアクセス、気にな
るあの娘の心を鷲掴み』

を見せた。

「それは『シーカーズ』の、有名な冗談本ではないか。」

「冗談？」

「馬鹿共が有難がってるだけで、何の役にも立たない魔道書で有名なのだ。」

「ああ、なるほど、精霊使いの素質が無いと、これに書かれた魔術を発動出来ないのね。」

「何！？ぬぬぬ、そっそんなことより、息子を早く治せ。治せるのだろうな！？」

「良いけど、ゲイリーをよろず紹介所へ運んで頂戴。そこでやるわ。」

「ふざけるなっ、ここでやれ。」

「それなら話はこれで終りね。わたしは帰るわ。貴方達はこれから魔術師にして精霊使いを当ても無く探し廻ることね。もっとも相手は精神の精霊、それもかなり力が強い精霊よ。この魔道書を理解出来るほどの術の持ち主がそんな精霊を相手に戦うとは思えないけど。ゲイリーが衰弱死する前にそんな都合が良い術者を見つけられれば良いわね？」

「ちょっ、　っと待て。ぬぬぬ、判った。ゲイリーをよろず紹介所

に運べば良いのだな？」

「そ。じゃよろず紹介所で待ってるわね。わたしも準備があるのよ。」

わたしはよろず紹介所に戻ると、おやじさんに二人が運ばれてくることを説明し、さらに、
2階を貸切にしてもらう事にした。
おやじさんはニヤッと笑うと、「賃貸料はメイロー子爵家へつけとくさ。」と、了解してくれました。

わたしは2階の広々とした雑魚寝スペースで、必要な準備を始めた。

まず、わたしがゲイリーとキャリーの心に干渉している精神の精霊が居る場所、おそらくはその精神の精霊が住まう精霊界へと入るための魔術式『ゲート』の準備をする。

この魔術式は、以前、水や闇の精霊界へ尋ねた際の魔術式とほぼ同じなんだけど、水や闇の精霊界は、実は物質界に出入り口が存在しているので、生身のままそこへ訪れるための魔術式は割りと簡素な物でも良かったのだ。

そこへ先日、ライアン・オークルの魔道書『物質転送理論』のトン

デモ理論に刺激されて
『ならば物理法則に縛られない精霊界を通って目的の場所まで移動してしまえ！』
と考えた際に、目の前に精霊界への入り口を開くための魔術式『ゲート』を創ったのだ。
もっともその企ては、精霊界から脱出口を目的地に開くための術が思いつかずに頓挫したのであるが。

とにかく、精霊界に入り込むための入り口はここに開くことが出来る。
後は二人の体の中にいる目的の精霊を探し当て、その精霊が所属する精霊界への入り口を開ければ良い。わたしの目の前にいる精霊が対象なのだから難しくは無い。

『ゲート』の魔術式の微調整を終えてから、わたしは着ている防具一式を脱いで、
「見張り宜しくねっｖ」
と声を掛け、”生きた鎧”を起動する。
今回はわたし自身が精神の精霊界に入り込むため、”生きた鎧”の自己判断機能は使えない。
ずっと前に説明したように、”生きた鎧”の自己判断力はわたしの二重人格部分を利用して行っているのだが、その二重人格部分を作るために精神の精霊へ働きかけているのだ。
精神の精霊界に入り込む際に、精神の精霊の力を使っているとどの

ような悪影響が出るか
判ってないので、影響を排除するために自己判断機能を使わず、今回の”生きた鎧”は完全
にゴーレムとしての決められたアルゴリズムに従って動く人形となる。

え？生身のまま精霊界へ行くのだから、見張りは要らないだろうって？
うん、精神の精霊界に行ったことが在ればその辺りの予想も立つのだけどね。
わたしが知る限り、精神の精霊界へ入った人は居ないのよね。もしかしたら出てきた人が
居ないだけかも知れないけど。だからその質問の答えは解らない。
となるわね。
生身のまま行けるのかも知れない。体を置いて精神だけが行くのかも知れない。
誰にも解らない。

さらに、普段自分へ掛けている補助魔法で、精霊を使っている物をまずは全て解除する。
伊達メガネ、識別妨害、体力セット、魔力セット・・・

それが済むと、右腕の『闇の宝玉』から闇霊を呼び出し、
わたしのサポートをしてくれるように頼んだ。
闇霊は精神へも干渉出来る精霊なのだ。相手の土俵である精神の精霊界で戦いとなること
は極力避けたいが、万が一戦いとなった場合や、そうでなく、ただの交渉となった場合に

おいても精神の精霊と相対する精霊を伴って居れば、侮れない相手だと認識させることが出来るだろう。

そうこうしてるうちに、ゲイリーとキャリーの二人も運び込まれて来たようだった。

わたしは1階へ行き、二人を2階の雑魚寝スペースへ運ぶよう指示する。
皆はわたしの”生きた鎧”が音も無く動き、わたしを守っている姿に驚いたようだった。
そう言えば、見せたことないもんね。

雑魚寝スペースに寝かされた二人と、キャリーの母親、メイロー子爵と執事、それと、
よろず紹介所のおやじさんと野次馬の冒険者多数を前に、注意点を告げる。

「これからこの二人の精神の中へ入り込み、二人を捕らえている精神の精霊と話し合って
来ます。その間、もしかしたらわたしのこの身体は意識が無い状態になっているかも知れ
ないけど、手を触れてはダメよ。近寄ってもダメ。この”生きた鎧”が守っているからね。
意識の無いわたしに近づくと問答無用で殺されるわよ。もう一度。殺されるからね。

その辺のドラゴン種よりも強いから。じゃ、ちゃんと注意したからね？
おやじさんも気をつけててね。誰もこの雑魚寝スペースに入らないようにって。」

「ああ、任せとけ、入り口に看板も立てておくぜ。
夜這いに命掛けるやつぁこの店には居ないぜ。」

「ここに居るぜー！って言ってみるかな。一応。」

そんな冗談を飛ばす男に鋭く一瞥を投げると、

「くはっ、その瞳、クセになるぜ／／／／／」

逆効果でした。

気を取り直して、全員をこの部屋から出て行かせる。
メイロー子爵は部屋を出る際に、
「リーゼン・マローの魔道書の数々には『魔神』と呼ばれる魔物が頻繁に登場しておる。
どうやらそれは同じ存在を指しているので『本の魔神』と呼ばれているのは有名だ。
今回その魔神が関わっているのかね？」

「おそらくは。」

わたしも推測でしか今は物が言えないが、おそらくそれに間違い無い。

ゲイリーとキャリーの身体を診ると、異常を引き起こしてる精神の精霊は直ぐ判明した。
もしかしたら隠れるつもりも無いのかもしれない。

『ゲート』精神の精霊を特定しさえすれば、相手は目の前にいる。
その精霊と交信するために魔術式を起動する。

かるい眩暈の後、

真っ青の空、見上げても空、見下ろしても空。
空中に浮かんだ白亜の城、
それぱかりか、空中に浮かぶ大小の島々。
島々には緑豊かで湖まである。湖面は涼やかな風で軽く波立っている。
湖の色は5色に見える。水に含まれる微量元素や植物・藻の影響で光の反射率が変化しているせいだろう
滝があり、虹が出来ており、空に浮かぶ大きな丸い天体は月？月が3つも在る！？
色とりどりの魚が空中を泳ぎ、魚と一緒に真っ白い鳥が群れを成して飛んでいる。

まるで夢のような世界。そう、ここは実際に夢の世界なのだろう。

何て素晴らしい！
ただし、

「キャリー、どうだい、僕と一緒だとこんな綺麗な世界に住めるんだよ。」
「見てごらんよキャリー、僕たち二人きりの世界で、永遠に過ごせるんだ。」
「君と二人っきりで凄く嬉しいよ！ああキャリー、僕の愛を受け入れてくれたんだね。」
「もう誰にも邪魔されないよ、僕が居て、君が居て、世界が僕達を祝福してるんだ！」
「誰も君を傷つけるものは居ないよ。僕がずっと守ってあげるからね。キャリー」
「キャリー、キャリー、キャリー・・・・・」

目の前の一人でブツブツ煩いゲイリーが居なけりゃね。

キャリーは俯いたまま目は焦点を結んでおらず、一言もしゃべらない。
自分の意思で話さないのか、おそらくは、ゲイリーが使った魔法の影響だろう。
無理やり精神を身体から引き離されて、精神の精霊界に連れてこられたのだから。

「困るな。こんな所まで押し掛けてくるなんて。」

突然、わたしの後ろからそう声が掛けられた。

「そう思うなら連れてこないでよね。ねぇ？・・・」

そう言いながらゆっくり振り返る。そこに居るのが誰なのか予想済みだったから。

「・・・腕輪の魔神さん。」

そう。そこには『ラージャと魔法の宝玉』に出てくる腕輪のイケメン魔神が居ました。

22ページ目

22ページ目

トゲエルフの怒りを思い知れっ！

「こんな所になんの用なのかな？」

「判りきったこと聞かないで、二人を帰してもらいに来たのよ。
それに何よ、その話し方。ゲイリーが二人居るみたいよ。」

「ハハハハハ。面白いこと言うね。そもそもゲイリーは望んでここに来たんだよ。
そして、代償を払ってそこの女を呼び寄せた。どこに帰さなきゃならない道理がある？
それにこの話口調は勘弁して欲しいね。僕は精神の精霊だし、今は契約者のゲイリーと
繋がっている状態だからね。」

そう言うと、イケメン魔神はゲイリーの傍にすうっと移動した。

「アンタの道理なんて知らないわよ。
無理やり連れてこられたキャリーは取り返す。馬鹿やったゲイリーは帰っておしおきよ。」

「威勢が良いのは何よりだけど、この夢幻界では君は何も出来ないよ。
この世界はとてつもなく広いけれど、それは総体としての人々の意思集合体として広大に
見えてるだけで、君自身が動ける範囲は君の意識野の狭い範囲でしか無いんだよ。
この世界を自由に動き回れる僕と、動けない君とじゃ勝負にすらならないね。」

「動けないからって馬鹿にしてると足元すくわれるわよ。」

「ハハハハハ。すくわれようが無いよ。
この世界で移動するのは他人の精神の中、意識野を自由に移動できる能力が必要なのさ。
そして君が如何に優れた精霊使いでも、精神世界での攻撃手段なんてたかが知れてる。
言っとくけど、僕には闇霊なんて下位の精霊の攻撃は通じないからね。
こう見えても、精神世界では僕がほぼ一番高位なんだよ。」

「ほぼって事は一番じゃないじゃない。
それに精霊の攻撃力は、精霊使いとの総合力で決まるのよ。
わたしの闇霊を、そこらの野良精霊と一緒にしてると後で泣きを見るからね。」

思ったよりやっかいな状況だわ。コイツの言うとおりだとしたら脅しは無意味ね。
ならば、方針転換よっ

「ゲイリー聞こえる？」

「ハハハハハ、そうだろうとも。君に出来ることはそれくらいさ。
でもね、説得も無駄だよ。僕の言うとおりにして念願の女を手に入
れたんだから。
彼が僕と君のどっちを信じるかなんて自明の理でしょ。」

とりあえず言うだけは言うし、基本説得なんて目指してないもの。

「ゲイリー？聞こえてるわよね。
聞きなさい。アンタこの性悪精霊に騙されてるのよ。
アンタは、リーゼン・マロー著の『気になるあの娘の心を鷲掴み』
を盲信してるみたい
だけど、その本はアンタみたいな人間を騙してこの世界に引き摺り
込むためのトラップ
なのよ。この性悪精霊の言うことは、一から百まで嘘っぱちよ。
アンタの腕の中のキャリーが、一度でもアンタに微笑み掛けた？
一度でもに愛をささやいた？　無いでしょ？だって嘘っぱちなんだ
もの。」

「う、うるさい！なんだよ！僕とキャリーの邪魔をするなっ
あの本は素晴らしい本じゃないか！　誰でも本の通りにすればどん
な女の子だって思いの
ままに出来るんだから。」

「ゲイリー、その女の戯言にいちいち耳を貸したらダメだよ。」

わたしはここぞと思いっきりオーバーアクションで言う、

「思いのまま!?　どこが!?
キャリーを見なさいよ、うつむいて何の反応も返さないでしょ？
あの本を信じているようだけど、それがそもそも間違いだって気付きなさいよ。」

「ハハハハハ、あの本に書かれていることは真実さ。信じるなよゲイリー。」

「ああ、判ってるとも!
おい、知らないようだから教えてやる。リーゼン・マローは幾多の本を書いたけど、
信じていた女に裏切られてから、女を人間ではなく物扱いする様になったんだ。
そしてあの本を書いた。女を信じて無いから無理やり自分の物にする魔術を書いた本さ。
僕はリーゼン・マローの気持ちが良く判るよ。
本当に愛した女に裏切られたんだからね。お前に判るかい？その気持ちが。」

「知らないわよそんなの。それにアンタ、思い違いしてるわ。
著者のリーゼン・マロー、いいえ、本名リーザ・マローは女性魔術師よ。」

ゲイリーは一瞬何を言われたか理解出来なかったようだ。ポカンと

してから、

「う、嘘を言うな！リーゼン・マローが女だって言うなら、女の心を自由に操れる魔術を書くはずないだろっ！」

「ホントのことよ。リーザ・マローはアンタが言うとおり、ある日を境に男を信じなくなった。そればかりか、自分を含む女性という性すら憎む対象になったみたいね。

何があったのかは想像出来るけど、今ここでそれは問題じゃないわ。魔法書『気になるあの娘の心を鷲掴み』は、男を憎むあまり、男を破滅させる為に書かれた本だって事が問題なの。そしてアンタはその本に誘い込まれこの世界に閉じ込められた。

このままだとアンタは数日で衰弱死よ。

嘘だと言うなら、そこの性悪精霊に聞いてみなさいな。」

「お、おいっ、この女の言うことは嘘っぱちなんだよな！？」

ゲイリーの意識が性悪精霊に向く。

今だわっ！！　わたしは精神の精霊のうち、悪戯の精霊に呼びかける。

悪戯の精霊が司っている物にも色々あるけれど、この精霊にはわたしが使う幻覚系魔術式に協力してもらっている。『幻影』『隠密』『識別妨害』『仮想キーボード』とかだ。

悪戯の精霊の力でゲイリーに幻覚を見せ、ゲイリーの性悪精霊に対する不信の種をさらに育てようという策だ。

性悪精霊の力は強い・・・・相手の力が強ければ計略を持って滅じるべし。

「・・・・ハハハハハ、そういう手で来たか。
まぁ良いさ。リーザとの契約は『男の破滅』。今更何をしようが結果は変わらないよ。」

「お、おいっ、何とか言えよっ」

「ゲイリー、諦めなさいな。アンタは騙されていたのよ。そして見放されたようね。
ほら、その証拠にキャリーを見なさい。」

「え!?　う・・うわーーーーっ　何だよ!?これ何なんだよっ」

悪戯の精霊による幻覚で、ゲイリーにはキャリーが老婆に見えているハズだ。
そして、ゲイリーのキャリーへの執着心に一瞬の空白が出来る。

ライラ・サラヴィンによれば、精神の精霊はその精霊に力を与えている人物が持っている
『執着心を無くす』ことで力が削がれる、と結論付けている。
喜びも、怒りも、哀しみも、楽しみも、全ては執着する人・物があってこそ。
何の執着心も無い所では心を波立たせることも無い。そこでは精神の精霊が力を振るう

ためのエネルギーの元、心の動きが無くなり、力を発揮出来なくなる。

「ハハハハハ、ここは夢幻界だということを忘れているよ。人の心の一番奥底、一番深い所には混沌界があり、夢幻界はその混沌界の縁に存在している。そして君達が混沌界に落ちないよう支えているのは誰あろうこの僕さ！！支えるのを止めるということは、すなわち混沌界に落ちると言うことだよ。」

そのとたん、夢のような青い空を背景とした美しいこの世界は、まさにガラスを割るように崩壊した。次々と崩れ落ちていく世界の向こうには真っ黒な世界が広がっていた。

「ハハハハハ、あの真っ黒な世界は混沌界さ。何でも存在するけどそこに何の秩序も無い。全てが在るのと、全てが無いのは人間から見れば同じことさ。あそこに落ちればこの僕だって無に還元される。だからここでバイバイだね。しょせんこの世界を移動出来ない君達には逃げ切れないよ。」

『闇牙』

物質界では黒い一条のレーザービームだが、精神世界では闇霊そのものが飛ぶ。

ゲイリーの執着心に間隙が出来たことで性悪精霊の力は弱まってるハズ。いまならっ。

「ちっ、無駄な足掻きを。」

ゲイリーの傍から、一瞬で、まるで瞬間移動の様に移動し、攻撃をかわす性悪精霊。

闇霊の攻撃速度は光に準じる。見てからかわしても絶対にかわせないハズ。

つまり、同じ精神の精霊である闇霊を感じた瞬間に予測してかわしたのだ。

でも、無駄じゃない。

だって、そうして欲しかったから。

この世界は精神の世界、ゲイリーの傍を離れるということは、精神の繋がりがその分弱くなることを意味する。

「なんだとっ!?」

驚く性悪精霊。

なぜなら、

ゲイリーの傍を離れた性悪精霊とのその隙間に、わたしが強引に割り込んだからだ。

「馬鹿な、この夢幻界で自由に移動できるなんて、人にそんなことが出来るハズが無い。」

そして、性悪精霊よりゲイリーに近いわたしは、よりゲイリーに対し強い影響力を持ったことを意味する。
この精霊界に存在する人の精神は、その性質上、精霊と大差が無い。
わたしはゲイリーとキャリーを『ゲート』から強制的に物質界へと送還した。
ゲイリーとキャリーは物質界でそれぞれ自分の身体へと返るだろう。

「人に出来ない事をする。すなわち人に在らざる者。つまり同類って事かよ。」

ゲイリーとの繋がりが強制的に絶たれたせいか、それとも元々こっちが素だったのか、
話口調が乱暴に変わりましたね。

「どうりでおかしな予感がしたわけだ。人じゃないなら思い当たる節があるぞ。
お前、混沌界から来ただろう?」

そこに気付くとはさすが精神の精霊。
だけどそれはわたしの逆鱗だって知ってた?

「知らないようだから教えてあげるけど、人はみんな混沌界を通って生まれて来るのよ。」

怒るほどに冷静になって行く自分を感じながら。

「しらばっくれる気か。まぁ良い。お前が混沌界の生き物ならあそこに落ちても平気だろ。
おい！今日の所はこれで勘弁してやるから、もうオレの前に姿見せるなよな。
それとも戦うか？お前が仮初の姿を捨て、混沌の生物として正体を晒せば、ここでオレと
戦うことだって出来るだろうよ。」

「わたしは人よ。アンタが知る普通の人と何も変わらない。」

「ハハハハハ、この夢幻界で動き回れるお前のどこが人だよ。
スカしやがって、ホラ、攻撃してみろよ。お前の真の姿を晒して攻撃して来いよ。」

ここは精神の世界、たとえ口喧嘩でもこのままやられっ放しで引き下がるのは負けと同じ。
ここでは。。。。。。売られた喧嘩は買うだけよっ！！

『ヴぉぉおおン』

そんな音を立ててわたしは、わたしを中心に精神世界に心の波紋を広げた。

「むっ？。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。
。。。。。。。。。
。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。
。。。。ハハハハハ、
今のは何の真似だ？』

「わたしはこの世界でアンタに有効な攻撃手段を持ってないからね。
そう、わたしはね。」
おおっ来た来た。

「＃ゾ％！”ヴィ＄～％￥＆ガ＃＆￥リ」
「ちっ。これを狙ったのか。」

わたしが無作為に撒き散らした『感情の波』は夢幻界にいる怪物達を誘き寄せる格好の餌
となった。今性悪精霊に襲い掛かったのは『ヌギガヌフ』という名の怪物で、何処までも
獲物を追いかける雑食性の意地汚い性を持っている。
もっとも、高位の精霊を自称する性悪精霊には怪物の一匹や二匹ではどうにもならない。

しかし、先ほどの撒き餌に誘き出されたのは一匹では無い。
うわ、次々来た！その数、とてもたくさんっ！！
これ以上、この場に留まるとわたしもヤバイっ

「はっ。わたしがコケにされたまま引き下がる女に見えたか！？
バーカバーカ。
くらえっＭＰＫっ！！」

最後に見たのは大量の夢幻界の怪物に囲まれた性悪精霊だった。
もちろんわたしも囲まれてるのだろう。そう言い捨て、わたしは後ろを確かめずに一目散に『ゲート』から逃げ帰る。
捨て台詞は様式美よっ。これって大事だよねっ。

一瞬の眩暈。
直後、わたしは横に転がる！
何かがわたしが今居た所を通り過ぎた。

「ガキンッ」

わたしは転がってすぐ体勢を立て直し、すかさず『ゲート』を閉じる魔術式を詠唱する。
わたしの目の前では”生きた鎧”に剣を突きたてられた怪物が居た。
これは『マリガンヌヴプ』見た目はサンショウウオに似てるが目と歯が鮫のようだった。

「リアっ！なんだそいつは！？」

おそらく部屋の外から誰かが声を掛けて来るが、わたしには返答する余裕が無い。
『ゲート』を閉じ終えるまでにさらに2体の怪物が飛び出して来る。
怪物達の足元には、横になって意識が無いままのゲイリーとキャリーが居る。

そして、今のわたしは『無詠唱』が使えない。精神の精霊界に入る際に解除していたから。

2体のうち、一体は部屋の隅に移動した。
そのうち一体はわたしに襲い掛かろうとしていた。

「つっ　精霊よ護って！」

直後、わたしの身体が光に包まれた。
ふふふふっ、これぞ本邦初公開！『精霊武装』よっ。

わたしはその状態のまま、『単把』を怪物に叩き込む。
精霊の加護もあり予想以上の威力が出たようだった。
怪物がわたしの拳打に押されて、わたしとの距離が広がるとすかさず回し蹴りを放った。
蹴りの方向には”生きた鎧”。
蹴りの威力に負け、そちらへ押し込まれた怪物は次の瞬間、双剣で４つに別たれた。
最初の怪物はもう居なかった。”生きた鎧”に切り裂かれ夢幻界に強制送還されたのだ。

最後の一体は、見た目はまんま死神だった。名は不明。ロイ・ラーウィンの１００選には
載ってなかったヤツだ。
骸骨の顔が嘲笑った気がした。
死神の前にゲイリーとキャリー、その後ろにわたし、さらに後ろの部屋の外に複数。
この配置は！？　やばっ、範囲攻撃が来るっ！？

魔術式の詠唱を開始したのは、わたしと死神が同時だった。

死神が魔術を詠唱している。声は聞こえない。そう、感じるだけ。
おそらくは範囲攻撃。
わたしの魔術式で、一撃で問答無用に倒せなくば死人が出るだろう。

単体攻撃魔法を唱えたわたしと、範囲魔法を唱えた死神。
勝負を分けたのは詠唱時間の差だった。

『奪命』
光の精霊により、相手の命と存在力の全てを奪い取る術だ。
そして、

最後まで声も無く、その場から死神は消え失せた。

「ふ～～。」

今のはかな～～りヤバかった。
ＭＰＫ（自分で手を下さずモンスターを大量に呼び寄せて相手を倒す卑怯技）恐るべし。

ふと我に返って見ると、わたしを護ってくれて居たのは怒りの精霊だった。
そう気付いてお礼を言う。（これ大事。）

「ありがとう！怒りの精霊。助かったわ。」もちろんエルフ・スマイルも送ったわよ。

怒りの精霊は『　　』無言だったけれど、なんとなく「手を煩わせるな。」と言っているような気がした。もしかしてツンデレですか？

「お、おい、リア、なんだよ、今のは？」

部屋の外にいる人達から声が掛かる。

「精神の精霊界から追いかけて来た怪物達よ。無事倒せたし、もう良いでしょ。
それより、ゲイリーとキャリーをベットに寝かせてあげて。
しばらくすれば目覚めるだろうから。」

「何？息子は大丈夫なのか？」「ええ、目覚めたら教えて？お仕置きするから。」

「何を言って「迷惑掛ければお仕置きする。これ当然。」わわ、わかった。」

ツンデレ怒りの精霊の迫力がプラスされたわたしの言い切りに、頷くメイロー子爵。

「あの、キャリーを助けて下さったのね。ありがとう、ありがとう。」

わたしはキャリーママに微笑み掛け、後の事は子爵とキャリーママに託して、”生きた鎧”のガーディアンモードを解除、フォローモードにする。

さらに、もう一度怒りの精霊にお礼を言うと、『　　』やはり無言だったけれど、どうやらわたしはニマニマしていたらしい。

『%#”$!&=#$』「別に心配で助けたんじゃないからねっ」そう雰囲気で語り、精霊界に戻ったのだろう。消えてしまった。

ニヒヒ。なんか怒りの精霊もこうなると一気に可愛くなっちゃったわね。

そして、怒りの精霊の加護が切れた。

ぷしゅ〜〜〜

まさにそんな感じだった。怒りの精霊の加護で昂揚してた気持ちが急激に治まった。

わたしは今更ながら真っ青になる。さっきはかな〜〜りヤバいなんてレベルじゃなかった。

よく誰も死ななかったわ、冷や汗ダラダラ。

そして、痛っ　いたたた、何よその『精霊武装』って？本邦初公開って？

その場の思いつきを自慢しちゃうなんて、ノリというかラリというか怖いというか痛い。

ちょっと自己嫌悪が入りつつ、わたしは雑魚寝部屋を出る。
とたん、わたしは複数の冒険者にもみくちゃにされた。

「よー、やったなリア、俺たちゃ、お前なら期待に反しないって思ってたぜ！」
「リア、俺達、熱いまなざしでお前さんを見守ってたんだぜ！」
「完璧だ。リア、何もかもが。」
「リア、愛してるゼー！！」

？？なんか変なノリですけど、どうやらわたしの成功を喜んでくれているみたいだよね？

「え？えぇ、ありがと？」

「おい、リアよ。」「ん？何？おやじさん。」

「顔に床板の継ぎ目模様が付いてるぞ。なんせ、

二人　ＯΛ（リア）―　入口　皆皆皆皆

こんな風におまえさん顔を床に付けて気を失ってたんだぜ？」

言われて顔に手を当てて見ると。。。。。。

「きゃーーーーーーっ」　顔！顔に変な跡ががががっ

わたしはお手洗い場に飛んで行きましたっ

「「「「「　やっぱりエロフ最高！　」」」」」

そんな掛け声が上がる横で、よろず紹介所のおやじは

「パンツ丸見えだった、って、言わねーほうが平和だよな。うん。」

23ページ目

23ページ目

それにしても腑に落ちない。
精神の高位精霊というのなら、なぜゲイリーやキャリーが生きて戻れたのか？
破滅が目的ならさっさと殺してしまえば良い。衰弱死を待つのは悠長に過ぎる。

イケメン魔神が精神の精霊だと言うなら、契約者、この場合はリーザが望む通りの行動を取ったに過ぎないのだろう。
それなら、男の破滅は望んでも、殺すのは望んで無かった？
捕らえて衰弱死させようとはしても、助け出されるのを本気で妨害した様に思えなかった。
これらの矛盾こそがリーザの心の在り様だったのかも知れない。

本人が亡くなってしまった今、彼女の考えを正しく紐解ける方法はもう残されて居ない。
彼女が、書いた本へ散らばめたキーワードを拾い集めるくらいしかないだろう。

とにかく、事件は一応の解決を見た。。
わたしはメイロー子爵からいくばくかの謝礼を貰い、キャリーへも

見舞金という名目で
慰謝料を出させた。
ゲイリーがキャリーに振られて落ち込んでいたので、ジャマイカ野郎の教えを説いた所、
方向性はアレだが前向きに考え出し、改めて自分の”売り”は金の力であると再認識すると
同時に、金力を背景にした積極的な性格へと変わり、お蔭で、ストーカー行為も収まった。
後はなるようになるだろう。

わたしはもう一つだけ、試したいことが有ったので、準備万端で図書館を訪れた。
長閑な午後の図書館で、これだけの緊張感をはらんで本を開くのはわたし位だろう。
『ラージャと魔法の宝玉』の本を手に取り、深呼吸一つ。
そして、わたしは本を開いた。

物語の中に入り話を進める。
主人公ラージャとなり、貧しくとも正直に精一杯その日を暮らし、
やがて伯父に連れられて真っ暗な洞窟を冒険、伯父の裏切りで洞窟に閉じ込められる。
腕輪の魔神を呼び出すと、はたしてそこには。。。。。

禿頭で髭オヤジが現われた。「何でも御用をお言い付け下さい」と。

イケメン魔神は現われなかったが、わたしは彼がどこかで見ている事を確信していた。

「なによ、精神の高位精霊とか言ってた割に、心がちっちゃいヤツね。」

そう聞こえよがしに呟くと、髭オヤジに魔法使いの城へと一直線で辿り着くよう命じた。

女性魔術師リーザ・マローは魔術師であると同時に童話・児童書の作家であった。

幻影魔術にも長けたリーザは自身の書いた書物で、特定のページで飛び出す絵本よろしくそのページの情景が思い浮かぶ魔術を組み込んだことで有名になった。

しかし、初期の作品には『ラージャと魔法の宝玉』ほど全編にわたった書物はなかった。

そして在る時から名前をリーゼン・マローと称し、一切の童話・児童書を書かなくなった。

その後だった。彼女の書いた書物に『魔神』と呼ばれる人物が描写される様になったのは。

そして『魔神』の書物では常に不思議と不吉が付いて廻った。

どのような不思議が在り、どのように不吉なのか、その内容は記録に残っては居ない。

名を変えてから4年後、彼女は自殺している。

直前に書き上げたのが児童書『ラージャと魔法の宝玉』だった。
どうして書くのを止めた児童書を、人生最後に書いたのかは判っていない。

本の用意されたストーリー通りに進めば、エンディングはハッピーエンドである。
けれど、王女と魔法使いに疑いを持ち出すとシナリオは分岐し出す。
リーザが男も女も嫌いになったとしたら、やはりここがポイントなのだろう。
他のエンディングでの王女は下手な言い訳はしない、が、このシーンだけは王女は言い訳
を言うのだ。自身を弁護したのはこのシーンだけだ。

城へ辿り着き、王女が魔法使いと男女の仲になっているのを確認した後で、王女が独りに
なった所を見計らい、王女へと話しかける。

「王女よ、わたしを裏切ったのですか？」
そう尋ねると王女は涙を流しながら首を振り、

「いいえ、違います。
たとえ浅ましくても貴方とどうしてももう一度お逢いしたかったから、
だから魔法使いの言いなりとなって汚れてしまっても我慢して生き延びたのです。
わたくしは今でも貴方だけを愛しています。それだけは信じて下さ

い。」

そうわたしに告白する王女。
要約すれば『間男が悪い、断るに断れなかった、私は悪くない』。
浮気女の典型的言い訳である。
積極的に男に迫っていたあの姿を見た後では、わたしもそう感じたのは事実だ。
だが、これは現実のしがらみに関係無いただの物語のワンシーンだ。

わたしは王女に告げる、

「浅ましいなどと思いません。王女よ、貴方が生き続けてくれて嬉しい。
貴方は今でもとても綺麗で、少しも汚れてなど居ません。
これからもわたしと共に生きて下さい。」

すると世界は輝きに包まれ、王女様も輝きに包まれて消えて行く。
王女様は、消える直前まで幸せそうに、本当に幸せそうに満面の笑みを浮かべて居た。

「リーザも本当は誰かに許されたかったのかしら?」
わたしがそう呟くと、

「人じゃないものが、人の精神(心の中)を語るなよ。」

輝きに包まれた世界の中で、仏頂面をした性悪精霊ことイケメン魔神が答える。
夢幻界で大量の怪物に囲まれて大丈夫だった?とか無駄なことは聞かない。

「何が?この輝きがリーザの語りたかった結末でしょうに。」

「この結末をリーザは求めて居たけれど、同時に決してそんな結末は訪れないだろうと
絶望もしていたのさ。望むけど決して来ない未来。そうして彼女は少しずつ壊れて行った。
希望と絶望と悲しみと、そして夢の中でだけ得られた幸せと喜び。
あの時の目まぐるしく
日毎夜毎に大きく変化し、震える彼女の精神はたまらなく魅力的だったよ。
このオレが強烈に惹き付けられて、そして彼女が喪われた今も忘れられないで居る。
彼女を襲った不幸は悲しい事だったが、オレが彼女に惹かれたのはそれがキッカケだったのも事実さ。

そして、そんな彼女が望んだ結末を、オレ自身いつしか待ちわびるようになったのさ。
誰かが彼女が欲しかった結末に辿り着けたなら。。。。。

だが、それは相手が人だったらの話だ。お前のような人外じゃない。
お前は彼女の唯一の希望(思い)を土足で踏みにじったも同然。決して許さない!!」

「リーザが定めた条件を満足してわたしはここに居る。アンタの筋違いな逆恨みなんて、
知ったことか。」

「詭弁だな。リーザが本を読む相手を一から百まで想定できるはずもない。
人外がこの結末に辿り着けるのを想定出来なかった事を、だから許されているとは暴論も
甚だしい。」

「どうかな？　わたしはそれよりアンタの怠慢を責めたいわ。
リーザが許されたがって居たのなら、アンタこそが率先してそうなるよう人を誘導すべき
だったんじゃないの？アンタしか知らない事実なんだから。」

「ハハハハハ、どこまでも図々しい理屈を並べやがって。
リーザは自分が救われたくて、心を開放して欲しくて、心を繋ぐ魔術を編み出したけど、
その一方で心を覗こうとする他人を嫌悪していた。
救われたい、けれど、自分の捻じ曲がって醜くなった心の中は知られたく無い。
そういう矛盾こそ人であることの証拠さ。
人の心を永く見守ってきたオレだからこそ言えるのさ。
そういう奥底の思いこそ大事にすべきだってね。

なのに！お前はその力で！ここまで干渉してのけた。
世界の異分子であるお前は第三者で居るべきだったんだ。
リーザの開放はいつか、どこかで、ただの人間に任せるべきだった。
これで少しは反省しやがれっ」

わたしの周りを、もの凄い勢いで壁が構築されていく。上下前後左右全てに。

「これは。。。。。ラビリンス？」

『古から伝わる『心の迷宮』だよ。ハハハハハ、そこを突破する頃にはお前でもちっとは心が成長しているだろうよ！！そこではお前の心の中の恐れ、過去に埋めた忘れたい事柄の数々が迷宮の所々で赤裸々に暴かれるのさ。ハハハハハ。これはお前の黒歴史か。お前が忘れたがった過去が見えるゾ。」

イケメン魔神は見えなくなっているが、そんな声が届いて来る。

「アンタの酔狂に付き合うほど暇じゃないのよ。」

本の世界では魔術式は発動しなかった。けれど、もうここは本の世界じゃない。

リーザの構築した世界はさっきの輝く世界まで。

とは居え、ここはある種の精神の精霊界なのだろう。

ならば、魔術式は発動出来ても精神の精霊に関係した物しか使えない制限はある。

でも、闇霊だけでも十分よっ
わたしはイケメン魔神への怒りを鎮め、一泡吹かせるために魔術式を創り出す。

ベースとなる魔術式の構造は『プヨ探知』
これを闇霊による探査の網に置き換える。
『パーティーセット』の、音に魔術式を乗せる式を利用し３６０度全方位に探査網を育て、
さらに魔術式『腹話術』が、発生させた音の伝わる先で次の魔術式を構築し、発動させる。
エンドレスで繰り返すことで探査網が空間内に次々と生成されていくのだ。
そして、フランソワーズ・チイのフラクタル魔術式を併せることで、
魔力コストを激減し、
課題だったフラクタル探査網の生成時間を劇的に改善させて、迷宮探査可能とする。

既存の魔術式を寄せ集めてアレンジした『プヨ探知？』を詠唱起動する。
『キン』わたしを中心に探査音が鳴る。直後あちらこちらで『キン』『キン』『キン』と
鳴り響きさらにその先でもＮ倍した探査音が鳴り拡がって行く。
魔力コストを激減したとは言え、時間と共に消費される魔力は尻上りで膨大となり。。。
わたしの魔力が尽きる前になんとか迷宮の全てに魔力探査網が行き

渡った。
「ふ～」一仕事終えたわたしは、探査音は『キン』じゃなくて『ピコ～ン』にしようなどと考えてから心を切り替えた。

わたしの頭の中には魔力探査網により迷宮の形状のほか、ラスボス、イケメン魔神の魔力をも捉えヤツの居場所も判っている。
なるほど、自慢するだけあって大した魔力だ。

『ゲート』
精神の精霊界に存在し、場所まで判っているなら辿り着くのは一瞬。

「それだけの力を持ちながら、人のフリをするか。混沌の化け物め。」

イケメン魔神はあまり驚いていないようだった。少なくても表面では。

「失礼ね、知恵と努力の成果よ。そんなことすら解らないのか。アンタがどんなにリーザを愛しても、人の努力を推し量ろうとしないヤツが、心の機微にまで気配りが足りるハズが無い。アンタの無責任なリーザ論こそがリーザを冒涜していると知りなさいっ！！」

「お前が言ってる事は、力ある者が好き勝手やったうえでの思い上がりに過ぎない！
オレにとっては絶対に許せる事じゃないな。
本当ならここでぶち殺してやりたい所だが、今はこのオレでも力の限界がある。
次に遭った時こそ、この決着を付けてやろう。」

そう告げてイケメン魔神は消え、わたし独りが残された。

「それがあなたに取っての真実でも、この世界はリーザの望むままに構築されている。
魔術は嘘を付かない。わたしにはあの王女様はリーザの分身に思えたわ。」

わたしの脳裏に、綺麗で透明な笑みを浮かべたまま消えて行った王女様が思い出される。

「だからわたしは、わたしがどんな存在であろうとリーザが欲しかったエンディングへと
辿り着けて、あのラストを確認できたことは、リーザにとっての本意だと思うわ。」

返事はどこからも無かった。

「まぁ、これでイケメン魔神とは敵対かぁ。とは言え、これで一区切りよね。」

まったく！　精神の精霊とのやり取りは心に重く圧し掛かってくるわよね。

明日の日記は、サブタイも付けて気分転換してやろっと。

※追記。

何年か経って、その後のゲイリーとキャリーのことを知ったので記載する。

ゲイリーは親の金力ではあるが、街の若手実力者として知られる様になった。

元々魔術師出身であり理系で数字に強かったが、成功したのはその後の彼の努力だろう。

キャリーはあの後、イーディスに騙され多額の借金を抱えて夜の女になったそうだ。

だが、そこで成功したゲイリーと再会し、経緯は不明だがゲイリーの愛人へと収まり、

それなりに幸せに暮らしているそうだ。

『あのゲイリー』の成長ぶりに驚いたのは秘密。

２４ページ目　エルフ揃い踏み

２４ページ目　エルフ揃い踏み。

草木も眠る丑三つ時。

「まてぃ今はまだ零時を少し廻った所よ。雰囲気出したい気持ちは判るけど間違ってるわ。」

失礼。

真夜中のトゲエルフは真っ暗な宿のベッドに腰掛けて薄ぼんやりしたサッカーボール大の宝珠を手に持ち、顔の下から宝珠に照らされニタ～リと不気味に声も無く笑って居た。

「ウフフフフ。出来たわ、出来てしまったわ。」

何が？どうでも良いけど声も無く笑ってたんじゃなかった？ナレーション間違ってるよ。

「うっさいわね。おほん。
これで世界の平和はわたしの手の平の上に在るも同然。
どうしようとわたしの、自由！！　アハハハハハハ。」

ナンカ知りませんがアネゴ、そんなスゴイ物を創ってどうしようと言うんでゲスか？

「ずいぶん卑屈になったわね。それが正解よ。
そうね、創ったら使う、当たり前じゃない。そう言う訳で行くわよっ
今夜を境に、安眠出来る夜はもう二度と来ないと知れっ！！」

パタン。

アネゴ、アネゴ、何そんなに静かにドアを開け閉めしてるんでゲスか？小心者デスね。

「うるさいだまれっ（小声）、独り言いってるの見られたら恥ずかしいでしょ。」

躁状態での、脳内ナレーションはこれにて終了ーーーー

ここはこの街に最初に来た時に野宿？した、『周りから誰にも見られない屋根の上』。
この時の為に用意した小さい樽を目の前にどっこらしょと置く。
この樽の中には『赤ネアンの実』と『タラチの種』を粉末状にした物をそれぞれ袋に入れ、
樽いっぱいに詰め込んでいるのよ。

『赤ネアンの実』も『タラチの種』もここ港街アイゼリアの特産品とも言える物なの。
どちらもこの地で取れた物ではないけど、海路でこの街に運び込まれここを経由して各地
に広まって売買される品物で、手っ取り早く言えば『赤唐辛子』と

『黒胡椒』よ。

おっと、樽の底板を最終チェックよ。外れやすくしとかないとね。
そして、運悪く、底板がなぜか外れた際に、あら不思議、袋にしまわれているはずの、
『赤ネアンの粉』と『タラチの粉』がちょっといえ多少いえ結構ブチまけられちゃったり
しても、それは事故よね。

わたしは四次元ポシェットから先ほどのサッカーボール大の宝珠を取り出して準備する。
この大宝珠には、わたしがこれまでに危険物認定した魔術式が数多く詰まっているのだ。
そんな危険な物、形にしておくなって？
ごもっとも。でも苦情は受け付けない。だって、

「趣味なんだも～～～ん。『ボイスコマンド、ＣＩＣ起動』。」

『声紋認証ＯＫ、オーラ認証ＯＫ、魔力波認証ＯＫ、リアファリナ確認しました。
パスワードを入力して下さい。』

わたしだって趣味とは言え、別に世界を滅ぼしたいわけじゃない。
危ない魔術式はそう易々とは起動できないよう、厳重にセキュリティーを掛けている。

パスワードは、わたしが好きな言葉を”日本語”で音声入力しなければならない。

ハイテクとローテクの組み合わせなだけにこの世界でこのセキュリティーを破れる者はまず居ないだろう。

『故に善く兵を用うる者は、人の兵を屈するも、戦うにあらざるなり。
人の城を抜くも、攻むるにあらざるなり。人の国を毀るも、久しきにあらざるなり。
必ず全きを以って天下に争う。故に兵頓れずして、利全かるべし。
これ謀攻の法なり。』

『パスワード確認。Ｃｏｍｂａｔ　Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　Ｃｅｎｔｅｒ起動します。』

正直、わたしはこれまで世界征服が出来る魔術式はそれなりの数と質を創っていたのだ。
だが、現実それらの危険な魔術式を使えるか？というと実は最後の決め手が足りなかったのである。その決め手となる魔術式が今夜完成したのだ。
それは何かというと、

今、わたしの周りに広がっているコレだっ！！

半ドーム状の全天スクリーン。本来足元を含めた球状スクリーンが展開されているが、
ここは屋根の上なので足元は見えない。

わたしを中心とした３６０度に港町アイゼリアの風景がスクリーンに映っている。

わたしは東を向いておもむろに両手を前方へ突き出す。
すると全天スクリーンはそのカメラ位置を東へ移動させる。
もちろん全天スクリーンそのものはわたしを中心としたままだ。
カメラ位置だけが移動しているのだ。

この全天スクリーンは、わたし以外にもこの場に人が居れば見せることが可能だ。
ただし、わたしが許可した人間にのみ。わたしの傍に居れば無条件に見れるという物ではない。なぜならこのスクリーンは、物理的に存在するスクリーンでは無いからだ。

光の精霊がカメラ位置で捉えた光学情報をわたしの視覚に映し出し、わたしが見た映像をわざわざ精神の精霊でわたしの傍に居る人間にも同じ映像（幻）を見せるようにしている。

この仕組みはこの映像をわたし一人で楽しむなら無用の物だ。
だけど、わたしはこの魔術式を戦略的位置付けとして創っている。
大人数で見れない戦略級魔術式に何の意味があるものか！？

この魔術式は他人に見せるつもりは無い。おそらく一生そんな機会は無いだろう。
意味の無いこだわりではあるけれど、こだわりってそういう物でしょ？

さて、カメラ位置はもの凄い速度でここから東へ遠ざかっている。
スクリーンに映る景色は、慣れない人間が見たらそのあまりの対地速度で気絶するくらいのスピードで移動中だ。光の精霊だけに物理的に飛んでいく速度とは桁が違う。

東のラクト山脈を越え、さらに東へ。
前方に突き出した腕を納め、わたしはスクリーンに映っているものを見て笑った。

「こんな夜中に空から眺めて地形が判るかーーーっ。」

しばしカメラが迷子になったのは、ひ・み・つ☆

「ふぅ。やっと辿り着いた。」

今、スクリーンには闇の中にほのかに白く浮き上がる不思議な色彩をしたエルフが映っている。顔は女性に見えても男には見えない。歳は２０台半ばに見える。
この美貌の主はティルト村の長老で、村で唯一人の廃エルフ、もとい、ハイエルフである。
名をアサーシオン・ルシル・ネイヴァン。
『始めの光』という精霊名を持っている１万歳とも言われる年齢不詳のクソジジィである。

ここまで来ればこの全天スクリーンがどんな役目を果たすか判ってもらえただろう。
遠く離れた、具体的にティルト村まで約２０００ｋｍの距離でも、光の精霊経由で鮮明に
映し出す事が出来るのだ。
そして魔術式は目に映って居る物であれば、それを目標として攻撃する事が可能。
そう、この魔術式『ＣＩＣ』は超長距離攻撃の文字通り”目”なのだ。
これが無いと、どんな強力な魔術式でも大した距離を狙えないので自爆術になってしまう。

「ターゲット、ロックオン。目標クソジジィの枕元の柱。」

特にそんな事を口に出す必要は無いけれど、わざわざ口に出して言うのが楽しいのよっ
い～や！気合を入れないとこのクソジジィの魔法障壁は破れないっ。
魔法障壁が防ぐのは魔力と魔術式なので、宙を飛んでいく樽のような質量を伴った物体は
素通しとは行くまいが、質量による慣性で魔法障壁に遮られず越えていく。
そしてトドメは『赤ネアンの粉』と『タラチの粉』だ。

「死ねっ（ほど苦しめっ）、クソジジィ！！　大陸間弾道弾『エアミサイル』。」

樽がバビュ～～ンと音を立てて飛んで行きました。あっという間に

見えなくなる。
『エアミサイル』は風霊の力を借りて目標に必ず命中する魔法の矢を飛ばす魔術式だけど
今は矢の代わりに樽を飛ばしたのよ。
ミサイル系統魔術は多い、『フレイムアロー』『アイシクルランス』『アースジャベリン』
魔力の塊を飛ばす『マジックミサイル』、広い意味では『ファイアーボール』も含まれる。
その中でも、物を飛ばすのに秀でているのが『エアミサイル』というわけ。

樽には姿勢安定板を兼ねた羽が当然航空力学を考えた形状で取り付けられている。
風霊は樽の姿勢と速度さえ維持してくれれば、樽は空力で飛ぶため
重量を支える魔力消費
を最小限に押さえられる、のでおおよそ２０００ｋｍ先までも飛ばせるのだ。
さすがに羽が無いと樽を超長距離飛ばすのは無理だ。

そして『エアミサイル』魔術式の構造的特徴は、魔力を”ツケ”に出来ることだ。
だいたいこんなモンという大雑把な量の魔力を最初に風霊に与え、
後は仕事が終ったらね、
という出来高払い式なのだ。
もちろん普通はこんな事は出来ない。
わたしの『風の宝珠』に棲んでいる風霊だからこそ許された芸当だ。
出来高払いじゃないと正確な距離を掴んでいる訳でもない超長距離攻撃の魔力はドンブリ
勘定になってしまうので、必要量以上を消費してしまう。

そして。。。。。ＣＩＣには相変わらずグースカピーと寝ているクソジジィが映っていた。

「え～～っと。時速５００ｋｍとして・・・・到達は４時間後くらい？明け方か。」

とりあえず寝よっと。こんな時に睡眠を取らなきゃならないのって残念だわ～～。
クソジジィの苦しむ顔が見れないなんて。ニヒヒ。

そしてわたしは明日の朝が楽しみだ、と思いつつ宿に戻り眠りに付いた。
さすがに超長距離の『エアミサイル』は一発で相当な魔力を使ったようです。

ばしゃっ

「はぶわっ、ぶへっ、ゲほっ、ぶわっげほげほっ　ぺっぺっゲホゲホッ
な・何？何なの！？　あぐっやだっペッペッペッ。くち、口に入った。ペッペ」

寝ている所に何か液体がぶっ掛けられたようです。
一体何があったの？？？

「もう、何なの!?　ってか、何これっ!?」

ベッドは辺り中、真っ黒です。
シーツも真っ黒、やだっパジャマも真っ黒。

あ、顔っ!?

「やだー、何よ、これ、顔も真っ黒じゃないっ!?」

というか、もう全身真っ黒け。顔を拭いた手も最初から黒いのか顔が黒かったのか区別が付きませんっ

と、そこへ天井からひらひらと白いものが降って来ました。
紙?とっさにそれを指で挟んで取る。そこにはなにやら文字が書かれていました。

『残念賞』

「クッ、クソジジィいいいいいいいい。」

というか、わたしの”生きた鎧”にも反応させず、精霊達の護りの中どうやってこの黒いのをわたしにぶっ掛けたの!?
精霊達はこぞって「わかんない。」って言ってるし。。。

というか、どうやってわたしが居るこの場所突き止めたの!?
というか、まだ太陽が昇って間がないじゃない。
わたしの樽攻撃が届いて直ぐにこれなの?反撃してくるにしても超速過ぎっ。。。。。

バシャバシャバシャ、グルングルン。
朝焼けの光の中を『全自動』でパジャマとシーツその他を洗っているわたしって(涙
あの黒いのは墨汁でした。わたしの部屋の隅に置いてある机の上に在ったヤツだ。
墨汁を水球に混ぜて増量し、寝てるわたしにぶっ掛けたのだ。

そこまで判明すればクソジジィの共犯者も判りました。
水霊です。
わたしに害は無いからとクソジジィに説得され、ここしばらくお酒のせいで鬱憤を溜めていた水霊はクソジジィの悪戯に加担し。。。。
未だに、どうやってここを突き止めて、さらに不審者に即座に反応する”生きた鎧”を反応させなかったのかまでは判明してませんが、やはりクソジジィは侮れない。

そんな事を考えていたときに、

「あら?リア早起きね、何してるの?」

そう声を掛けて来たのは宿屋の看板娘、エレノアでした。

「え?シーツ洗ってんの?やだ言ってくれればあたしが洗った。。の。。。に。。。」

どうしたの?

「・・・・・ねぇ?リア、もしかして・・・世界地図?」

なっ、ばっ

「ち、ちがっ／／／／／」

「やだぁ、あははは、リアったら。可愛い!!誰かに見つかる前にお洗濯してるのね。」

「ち、ちがっ／／／／／」

「うんうん、だ～いじょ～ぶ、誰にも言わないから。あははは。」

「ちょ、まっ・・・・て。。」

あぁ行っちゃった。。。。くぅ、クソジジィめーーーーーっ／／／／／

ところ変わってここはティルト村。

「おはようございます長老。リアファリナから便りが届いたとか聞きましたが？」

「ああ、みなさん来ましたね。ええ、リアファリナが香辛料を送って寄越したので、
みなさんに配ろうかと思ってお呼びしたのですよー。」

「あの娘の事だからまた何か悪戯しませんでしたか？」

「あははは、ええ、ちょっと危なかったですねー。
でも、ここまで荷物運びに酷使されたあの娘の風霊さんにいつもの様に協力してもらって
居場所を突き止めましたー。あの娘は今、大陸の西側にある街に住んでいるようですよー」

「大陸の西。。。そりゃずいぶん遠くに。」

「そうですねー、風の精霊界を通ってあの娘の傍へ行きましたけど、
いつもの様に守護者
があの娘を護って居たので、風の精霊界から水の精霊界へ渡って、
あの娘の水霊に協力を
お願いして悪戯やり返しときましたー、あの娘の守護者は良く出来てるけど、精霊界まで
は目が行き届かないみたいですねー。あの娘の枕元に立っても界を隔てていれば反応しない
のは学習済みですー。それにあの娘の結界内に元々あった物で致命傷にならない物ならば

悪戯し返しても平気なのですよー。あはははは。」

「はぁ、でもそんな事が出来るのは長老くらいですよ。」

「うーん、そろそろ私も本気で危ない気がするので、もし私が不審な死に方していたら、
犯人は間違いなくあの娘ですからー、その時はあの娘に責任取って貰って、長老役を押し
付けちゃって下さいねー。あははは、これ遺言ですよー。あの娘にも伝えて下さいねー。」

笑い話じゃないでしょうに。
ここに集まった村人はみんなそう思った。
と、そこで一番歳が若そうな若者が発言した。

「長老、リアファリナの居場所が判ったのなら、ここへ帰るよう説得して頂けませんか？」

「おやおや？あの娘がここを出て行ったのは、あなた方が弄り過ぎたからでしょう？」

別な、見るからに年配のエルフが口を挟んだ。

「長老、冗談ごとではありませんぞ。リアファリナはここ２０年で唯一人生まれた娘だし、
あの娘以外はみな男子。今はまだ目立ってませんが、１００年後には嫁不足は深刻になり
ますぞ。というか、リアファリナを弄り回してた筆頭は長老じゃないですかっ！！」

さらに別な者も口を出す。

「そうです、それで無くとも、リアファリナはこの村一の器量良しオルフィーナの娘で、息子の嫁にと狙って居た者も多く居るでしょう。一刻も早く呼び戻すべきです。」

先の若者が後を引き継いで発言する。

「若いヤツ等はみんな呆然としてましたよ、リアファリナが出て行ったときは。長老が出来ないなら、俺が行って連れ戻して来ますよ。詳しい居場所を教えて下さい。」

「そもそも、ランドールんとこの小倅だろ?『対精霊空間』と言ったか?あの程度の結界でワタフタしよって情けない。自分の修行不足を棚にあげてリアファリナを責めるとは。」

「そうとも、精霊祭ん時の炎の精霊ダンスや、雪祭りでの除雪魔術式とか、しょせんは、子供の可愛いイタズラじゃないか!!あれごときで若いヤツは愚痴言い過ぎだっての。ほれ、洪水の時に水龍を呼び出して川の流れを変えた時なんざ、ラフィーザのとこの息子が化け物呼ばわりしただろ。村を救ってくれたのにあれじゃ、リアファリナじゃなくても嫌気がさすわな。」

「まーまー、みなさん、雪祭りでは雪が無くなっちゃって皆困った

じゃないですかー、
炎の精霊を呼び出して花火で楽しんでた所までは可愛いかったけれど、挙句暴走させて、
村人総出で一晩中炎の精霊を宥めて廻ったりもそう。
あの娘の悪戯には実際困ったものでしたよねー。あははは。」

「皆リアファリナに精霊術で負けたから悔しかったんですよ。狙ってたヤツ等は特に。
セフィーもあれからゴーレム相手に修行を続けて『対精霊空間』の中でもなんとか精霊を
呼べるようになりましたしね。ラスターも水龍とまでは行きませんが水の高位精霊を呼び
だせるまでもう一息ですよ。皆帰って来て欲しいんです。」

「まー、その件は、折りを見てリアファリナに話しかけてみますねー。
それはそれとして、もうすぐ生まれるネリッサの子ですが、女の子ですよー。」

「「「「　なんですって!!　」」」」

「どうやらリアファリナが、ネリッサに男女の産み分け法と言うのを教えてあげたみたい
ですねー。なんでも女の子や、男の子が生まれる確立を高める方法があるのだとかー。
ネリッサは恥ずかしがって教えてくれませんでしたけどねー。
その方法が広まれば、やがては村の娘も数が増えて行きますよー。」

「そいつはメデタイ。おっとメデタイと言えば・・・・」

村人の話がリアファリナから外れて世間話に移っていく、
それを横で聞き流しながら長老は、

「この村ではあの娘は大事にされ過ぎて腫れ物扱いですからねー、
それをやっかむ者も
居るし。先日の夢の中では、あの娘が『眠れぬ大樹の王』に喧嘩売
ってた姿が見えた件も
気になりますしねー。夢幻界で何やってたのやら。大事にならなけ
れば良いですが。
やはり、もうしばらくは様子見しましょうかねー。」

何より、あの娘は頑固だし。と、先ほど見たまだあどけない寝顔を
思い浮かべた。
あの娘の精霊には、あの娘の次くらいには好かれている自信が有る
ので、もうしばらくは
悪戯合戦でも優位を保てるかしらー?、などと考えながら。

そして我等がトゲエルフは今日もよろず紹介所へと顔を出したとこ
ろです。

「おはよー、おやじさん。。。おっと、お客様なのね。」

「おっ、良い所に来たなリア、ちょっと待っててくれ。」

「はいなー。」

おやじさんと話をしているのは女の子二人組みだ。
片方は。。。エルフ？いえハーフエルフね。
もう一人も若い。１６－７歳かしら？？
わたしは、なんか良い物件は無いかと壁に貼られた依頼書を見て時間をつぶすことにした。

「待たせたな、リアちょっとこっち来てくれ。」
そして、おやじさんは女の子二人組みに向かって話し出す。

「今来てもらった女性は、うちのピカイチの精霊術士でリアファリナ。
リアファリナ、実はお前さんにこの二人と組んで欲しいんだよ。どうだい頼めないか？」

あら？この物言いは。。。訳有りみたいね。

「そうね、まずは一度組んで仕事を一緒にしてみてから決めましょうよ。
相性とか色々あるでしょ？その辺を多少感じてから決めた方がお互い良い結果になるわ。」

「こんにちは、ウェンリアラと申します。見ての通りハーフエルフの神官ですわ。」

「初めまして、リアファリナよ。」

「初めまして、ジェラルディ・イライザ・・・です。よろしく。」

イライザが家名の訳ないし、あからさまに家名を隠したわねぇ。
エルフ・スマイルを送ってから、

「よろしくね。」

と言っておいた。

明日の日の出とともに、ここから南へ3日の距離に出現しているというゴブリンを退治に出かける仕事を請け負った。ジェラルディが剣士で、まずは修行をさせたいのだそうだ。
わたしとウェンリアラ、そして、ジェラルディは幾つか約束し、今日はそれで別れた。
明日の日の出前に南門集合だ。

二人が店から出て行ったのを確認し、おやじさんに話しかける。

「で、今度はどんな厄介事なの？」

「それについては、私から説明させてもらうよ。」

おやじさん達、お店関係者以外立ち入り禁止の店の奥の方から渋い声が掛かった。
出てきた男性は。。。。ナイスミドルｖ

「また貴族絡みなんだ。」

「わはは、まぁそう言うな。お前さんじゃなければならない理由もあってな。」

「それぱっかりね。とりあえず話を聞こうかしら。」

内緒話なのだろう、店の奥にある小部屋に移動する。

「座ってくれ。」

おやじさんが声を掛けて、みんなが着座する。

「つまり、娘の護衛をして欲しい。ということね。」

目の前のナイスミドルは、ローランド・フォン・リーベフェルマ伯爵と名乗り、家出娘のジェラルディの父だそうだ。娘が冒険者に成りたくて家出して、困った伯爵は昔一緒に旅をした仲間のおやじさんを頼ってこのよろず紹介所に来た。そこへひょっこり娘さんまでやって来た訳ですね。うんうんテンプレ通り。

そんな訳あるか！と怒鳴ったら、ウェンリアラというハーフエルフが父娘の橋渡しをしているそうで、この店に寄ったのも伯爵とこの店の関係を知って居たからであり、伯爵側も冒険者で生活するならよろず紹介所、という訳でこの店に事前に連絡を入れていたそうだ。

二人の特徴を伝え、店を訪れたなら連絡して欲しい。と。

また、娘の冒険者家業を頭ごなしに反対するわけでもなく、優れた護衛を雇って、二人と一緒に行動してもらえるよう頼んでいたそうだ。

「でも、ずいぶん大げさね。娘さんの護衛だけにしては用意周到さを感じるけど？」

「理由は幾つかあるんだよ。我がリーベフェルマ家は、この帝国でも大きな権勢を誇っている。表向きには家督を継ぐのはジェラルディ唯一人なのでね。」

「表向きには？」

「ああ、ハーフエルフのウェンリアラも私の娘だ。詳しい話は聞かんでくれたまえ。」

庶子では家督は継げないしね。
ハーフエルフは２０歳くらいに見えましたと言うことは実年齢は２５歳くらい？
エルフもハーフエルフも２０台半ばくらいまで育つと、外見は死ぬまで老いなくなる。

「娘には好きな事をして欲しい気持ちがあるが。。そうも言ってられない事情もあってね。
せめて私が元気な間くらいは黙認してあげたいのさ。
そして二人とも私の可愛い娘だ。なるべく怪我なんてして欲しくないと考えるのは親馬鹿だろうかね？」

「はいはい、それで貴方のお家が権力持ってて、ジェラルディがあ

ととり娘だと何が都合
悪いわけ?親族がジェラルディを亡き者にしようとしてるの?」

「そういう可能性があるというだけだよ。今のところはそんな動きは無い。
それに、君が娘の護衛に付いてくれれば、それだけで抑止力になる。
君の事は、サフィニア姫様との武勇伝を通して私も聞いているよ。
姫様の通行証で魔法研究室に出入りしているそうじゃないか。
幸か不幸か君に手を出す事はサフィニア姫様、ひいては皇家に弓引くことと一緒なのだよ。
それに先だってはメイロー子爵家の嫡男を助けたそうじゃないか。
子爵家もこの帝国内で相当な権勢を持っている。
その子爵家と懇意にしている者に敢えて手を出そうなどと考える者は限られてくる。
どうだろう?我が二人の娘の事もぜひ頼みたい。」

「返事は既にあの二人にしてるしね。ま、やってみましょうか。」

話はまとまり、わたしも明日からの遠出の準備をしますかね。
そうして、よろず紹介所を出て宿に帰ろうとした時に、

「またなリア、今夜は寝ショベンするなよ（笑」

「なななっ／／／／／／　どこでその話をっ??」

「どこって、どこでもさ。かなり話し広まってたぜ?ランサーが市場でエレノアに聞いたとかであちこちで吹聴していたなー。」

「違うー、違うのよーーー。」

そんなことを言ってた時でした、

『ふぃぃぃぃぃぃぃぃ』

！！！ジャミング！！！

『フレイムアロー』などのミサイル系統は目標位置に対し、誘導するための式を貼り付け、
攻撃魔術がその式を目標に飛んでいくわけです。
わたしの”生きた鎧”はこの目標誘導式が、わたしを含む周囲１０ｍ以内に発生すると、
誘導式を妨害する対抗魔術式を自動生成します。それがこのジャミング機能。

『ズガーーーーン』

向かって左手、２０ｍほどの通りを挟んだ建物の屋根の上で誤爆してますっ！！
目標の誘導式が不自然に消えた事でミサイル系統魔術式が誤作動したようですねっ
どうやら『ファイアーボール』のようです。

『飛翔』

わたしが急ぎ屋根の上に上ると、そこで見えたのは、
焼け焦げて倒れている男と、

一瞬だけ姿を捉えることが出来た、屋根の上から飛び降りようとしている小柄で肌が黒い、

「ダークエルフ？？」

でした。

25ページ目

25ページ目

焼け焦げた男はまだ息が有ったので、多少乱暴によろず紹介所まで運び込んで、拘束技に長けてる冒険者さんに縛り上げてもらった上で、傷を癒し、そのまま官憲に引き渡した。

おやじさんと、まだ紹介所に居たリーベフェルマ伯爵にも伝える。

時期が時期なので無関係とは思えない。陰謀が在るなら有力な手がかりとなるだろう。

『ファイアーボール』が使える程の魔術師ならば、素性を明らかにするのも容易いだろう

と伯爵は意気込んでいた。

わたしはくれぐれも実行犯が、黒幕から殺されて闇に葬られる事が無いよう、十分注意を払うように伯爵に念押ししておいた。

官憲にはリーベフェルマ伯爵を狙ったテロである可能性が高いと仄めかしておいたので、伯爵からの横槍もやり易いだろうし、管轄が違うからといって無視も出来ないだろう。

逃げたダークエルフについても、おやじさんに話しておいた。

「ダークエルフ？見間違いじゃないのか？この辺りで見かけたって

報は無いぜ。
あいつ等はもっと南東の方、聞くところによるとラクト山脈の南端辺りに集落が在ると聞いたが。。。」

「見間違いじゃないわよ。エルフは耳を視認してエルフ種族だと区別してる訳じゃないの。
身体に対する体重比が人間とエルフは大きく違うのよ。エルフは身長に対して体重が軽いから体が動いた際の空気の動きや地を蹴る音とか、風や地から伝わる情報で区別してると言って良いわ。なので見間違うことはないの。」

エルフは身長に占める足の長さが、人のそれとはかけ離れている。胴が短いゆえに身長の割りに体重が極端に軽いのだ。
スタイルは良いけど、心肺機能が小さくスタミナ不足なのはエルフの宿命なのよね。

何か判ったり、新しい情報を得る度に情報交換する約束をして、わたしはよろず紹介所をあとにした。

「えーれーのーあー?」

「あら、リア、お帰りなさい。どうしたの?怖い顔して。可愛い顔が台無しよ?」

笑顔でわたしと受け答えしているけれど、唇の端が引き攣っているのが見て取れる。

「そう、まぁそれはもう良いわ。この街を出ることになったから。今夜は泊まって、明日の朝、日の出前に宿を引き払うわね。」

「え～～？でも戻ってくるんでしょ？」

「戻って来てもここには泊まらないわ。お客の事をそう軽々しく口にする従業員が居る所じゃ、おちおち安眠出来ないもの。」

実際、笑い話では無いのだ。非力な女エルフ独り、ライフサイクルを掴まれたりすれば、取り押えるのも難しい話では無い。従業員が軽い気持ちで口にした事を悪意を持つ人間に知られれば、冗談では済まなくなる。

「え？」

エレノアの顔が暗くなる。わたしの言いたい事が少しは伝われば良いけど。

いい歳した大人なんだから、自分がした事でお客を失うことをちょっとは反省しなさい。

「あ、その、ごめんなさい。リア、あ、あの、あたし冗談のつもりで。」

「うん、それはもう良いわ、過ぎた話だしね。オネショなんかじゃなかったけどさ。

墨汁をさ、引っくり返した汚れを落として居たんだけど。今となっ

てはそれはそれよ。
明日出て行くのは決定事項。短い間だったけど楽しかったわ。」

エレノアの口の軽さはいつかどこかでトラブルになったハズ。
これを機に改めなさい。言わなくて良いことを言ったのはわたしの
最後の親切よ。

元々、必要なものは常にポシェットに入れてあるとは言え、住まい
続けた宿だ。
それなりに部屋の中には、私物を幾つか広げて在る。
明日の朝使うもの以外はポシェットにしまい込み、宿を出て行ける
準備を完了する。
そうしてから、しばらくこの街に戻れない可能性もあるので（もし
かしたら直ぐに戻って
来るかもだけど）、すっかりなじみとなった料理屋へ向かう。

「という訳で、しばらくはこの街を離れることになりそうなの。」

「あー、そうなんですか。。。」
アーロンはしばらく雰囲気が暗くなりました、けれど、

「リアさん、この街にはまだまだ美味い物がありますから、戻って
来た時には、また顔を
出してくださいよ。これは俺からのおごりです。最高に脂の乗った
クローマの腰の部分を
握りました。ぜひ覚えてって下さい。」

「うわー、ありがとう！赤身の魚なのね。。。。。。んぐっ。」

もぐもぐもぐ・・・・

「美味しい！！アーロン良い仕事してるじゃない。」
アーロンは嬉しそうだ。
うん、湿っぽくされるより、こういう発展的に明るく見送られた方が良い。

「お嬢さん、今日の料理はこっちにお任せで良いかい？」

「ええ、もちろんよ。あまり食べられないけど美味しい所を少しずつ宜しくねっ！」

「おい、アーロン、今日はお前にお嬢さんの料理任せる。しっかりな。」

「は、はいっ　親方。ありがとうございますっ。」

「あらー、アーロン、どんな物を食べさせてくれるのかしら？」

「がっかりさせませんよ、リアさん。楽しみにしてて下さい。親方ー？ブラドー酒の冷をって、準備ばっちりですね。親方。」

「あたりめーよ。お嬢さんが来たらコレに決まってらー。
そのためにお前に任せたんだからよ。」

「ちゃっかりしてるなー、親方ってば。」

「そう言えばアーロンって、のれん分けしてもらうとか言って無かった？」

「ああ、その件はですね。もう数年、親方の下で修行しようかと思いまして・・・・」

そうして、楽しいお話と美味しい料理とお酒を満喫してその夜は更けていきました。

あくる朝早く。南門でウェンリアラとジェラルディに合流する。
昨日の軽装と異なり、今日のジェラルディは立派に剣士と言える出で立ちだった。
まだ地表までは陽の光が届いてない夜明けの暗さでも、彼女の全身鎧は一際輝いていた。

ほのかに緑とも青とも言えない七色の光を放ち、けれど、その輝きは煩すぎず適度な落ち着きがある。どの距離感でも目の焦点が合いそうで合わない。
一目で距離感を狂わせる魔法が付与されている事が判る鎧だった。

わたしは魔術式を読み取ろうとしたが、隠されていて読めなかった。
そりゃそうだ。武具の魔術式が外見で簡単に読めたら手の内晒すようで意味が無い。
わたしがこれまでに見てきた魔術付与されたアイテムの数々は、そんな当たり前な気配りすらされずに自在に魔術式を読み取れていたから、そんな風に簡単に読めると見損なっていたらしい。ジェラルディの全身鎧に魔術付与した人物はその辺り

きちんとしていた様だ。

全身鎧なのだが、ジェラルディの動きに不自然な点は感じられなかった。

重量軽減や、動きを補佐する術式も組み込まれているに違いない。

このわたしの”生きた鎧”がそうであるように。

というか、ジェラルディの鎧のビックリする点は他にも在った。

一目で判った。向こうもさぞビックリしただろう。

ジェラルディは背中にこれ見よがしな大剣を背負っていた。

見た目は、あー、そういうのマンガとかコンピュータＲＰＧで見た事あるーっ

って感じの、どう見ても人が振り回せるような大きさの剣では無かった。

ジェラルディはわたしより若干背が高く、１７５ｃｍほど。

とは言え、この世界の１ｍが向こうの世界の１ｍとは限らないのだけど。

なにせ物差しも無く、比較対照となる物も無い。

わたしの主観で計った１秒間で音が届く距離を仮に３４０ｍとして

１ｍを割り出している。

悪かったわね。何も無い所から正確に１ｍを割り出す方法は知らないのよ。

この世界での単位はメートルではない。ヤンテと呼ばれている。

１ヤンテはおおよそ１ヤード相当だと思ってもらえれば良い。

わたしはずっと自分の脳内でメートル換算して暮らして来たので、

この日記の中では今後

もメートルで言わせてもらうわね。
ちなみに重さはマラムという単位で、１マラムが０．５グラム相当。
たぶん。
こちらも今後とも、わたしが慣れてるグラム表記をさせてもらうつもりだ。

話を戻して、ジェラルディの剣は、柄の部分まで含めればそのジェラルディと同じくらいの長さだ。刃の幅はさほどでは無いがそれでも３０ｃｍはあるだろう。
刃は鞘に収められておらず、持ち運び出来るよう、刃を簡単に覆う形の止め具を丈夫な帯を用いて背中に背負う形になっている。
見た感じ、帯も留め具も魔法付与されているようだ。

刃も緑とも青とも付かない、防具と同じ材質で出来ている様だ。
こちらも当然魔法付与されている。

「ねぇ？ジェラルディ。失礼を承知で聞くけど、その剣扱えるの？重くない？」

「この剣は、見た目は重く見えるけど、凄く軽いんです。
軽くても打撃力は魔力で補われて、斬った瞬間に魔力による衝撃が相手に伝わるから、
そういう意味では見た目通りの威力が発揮されると思ってもらって良い。
私が着ている鎧も同様で、見た目よりずっと軽い。重さはほとんど感じないし。

でも防御力はこれでもかなり高い。先祖代々我が家に伝わっている武具なんです。」

「なるほどー、ってずいぶん緊張してない？大丈夫？声が固いわよ。」

「すまない。私は元々こういう口調なんです。」

「ジルはそういう教育方針の下で育って来たからね。しばらくすれば慣れて砕けた口調になると思いますわ。」

ウェンリアラがそうフォローする。

「判ったわ。これからしばらく御一緒するわけだから、改めて宜しくね。」

「「　よろしく（お願いします）。」」

南門を出て、ゴブリンが出没する地点に向けて歩きながら色々話をする。

そう、今回は歩きの旅なのだ。

わたしは”生きた鎧”の自動補助機能があるから、歩く分には疲れ知らずで済む。

ジェラルディはさすがに人間で剣士なだけあって足取りはしっかりしている。

自然、ハーフエルフであるウェンリアラのペースで旅をすることになる。

道中すっかり打ち解け、リアラ、ジル、ファリナと呼び合う仲になりましたv
もう少し仲良くなったらジルの武具の魔術式を解析させてもらおうっと。ふふふ。

リアラはなんと司祭だという。
「親の七光りなんですけどね。」

「そんなことない。リアラは凄く頑張ってるもの。
ホントは私の我侭でこんな風に連れ出すつもりなんて無かったのに。。。」

「まだ言ってる。私はねディアーヌ様からジルの事を頼まれて居るんですからねっ」

「ディアーヌ様って?」知らない名前が出てきたので聞いてみた。

「私の亡くなった母上です。」とジル。

「あ、ごめん。」「いえ、お気遣い無く。」

ちょっと場が暗くなってしまったので、話題転換。

「それで、ジルはどれくらい剣を使えるの?」

今度はジルが暗くなりました。
「ごめんなさいっ。ほんとはこれが初めての実戦なんです。」

「で、でもっ、ジルは神官戦士として訓練を受けてる私と同じくら

い剣が使えるのです。
経験が無いだけで、弱くはありませんっ。」
リアラがすかさずフォローする。

ふむふむ。これは別に驚くことじゃなかった。
貴族の姫様がそうそう実戦なんて経験している物じゃないのは判りきっている。

「なるる。でもね、ジルの背後から魔法で援護するにも、どれくらい強いか知らないと
実際の場面で困ったことになっちゃうわ。
だから、試させて？」

ジルは歩みを止め、こちらを見る。
「それは、この場で力試しをするということですか？」

「そうなるわね。」
わたしは腰に吊るした二刀を引き抜いた。

「ちょ、いきなり過ぎます。ファリナ、ジル貴方まで。」
リアラは少し慌てて居ます。

「大丈夫、もし怪我してもリアラが治してくれるしね。」
そう言ってジルも背中の大剣を取り、構える。
わたしは数歩下がって、お互いの間合いを外す距離に立った。

「ほい、では始めっ」わたしはさっさと開始の掛け声を掛ける。

摺り足で距離を詰め、大剣の間合いに入ったとたん、

「やっ」ジルは大剣を上段に振り上げると、一気に飛び込んで来た。
左足が前。
わたしは右の剣を持ち上げ大剣を受けると同時に右剣で右回りの螺旋を描く。
大剣を右へ受け流しつつ大地に払い落とし、わたしは左、ジルの右側へと回り込む。
ジルの大剣は当たった際に衝撃波を発するが、わたしの防御姿勢は”生きた鎧”により強化されているので、というよりわたしの筋力など無に等しく、防御時のパワーは”生きた鎧”にお任せだ、そのため片手で両手大剣を受け流すなどという芸当が可能。

大剣は勢いのまま払い落とされ、左足を前にしていたジルは体の右側に回りこまれると、
そのままでは右に大剣を振る事が出来ない。腰が廻せないためだ。
右足が前だったなら、右手で強引に払い切りが出来たかも知れない。
それは後の祭りだ。
ジルが体勢を立て直す前に、わたしは左の剣をジルの首にそえた。
「はい、一本。」

そして、再度数歩下がり、はじめの距離を取り、「二本目行くわよ。」
ジルが再び構えるのを待って、今度はこちらからダッシュして右剣で突きを入れる。

もちろんダッシュ力も”生きた鎧”のパワーに頼っている。
そこっ、卑怯とか言うな。これがわたしの戦闘スタイルなのよっ。
『加速』や攻撃速度を数倍に引き上げる『ヘイスト』は使ってないのだから試合とは言え
卑怯とまで言われる筋合いは無い。自分でも大して変わらない気がしてるけど。
決して卑怯では無い。。。ハズ。

ジルは右剣を辛うじて右から大剣で受け止めたが、両手持ちの悲しい所で、わたしからは
ジルの右手が大剣の影から外れ隙となっているのが見て取れた。
わたしは左剣をジルの右手に切り下し、当たる直前で止めた。
「これで、二本よね。」

二刀を腰に吊り、「こんな所かしらね。」試合の終了を告げる。

「ジルの実力は大体判ったわ。攻撃面では確かに素人とは言えない動きだったわ。
でも防御面がダメね。ジルは盾持ちの相手ばっかりしてたでしょ？
同じ両手剣使いとか、わたしの様な二刀流の相手は初めて？」

「「　判るの？　」」
あ、ジルとリアラがハモった。

「そりゃね、受け払いしてくる相手に慣れて無い様だったし、体の右側への攻撃に対して
反応が遅かった。右手片手武器持ちの相手ばかりしてたんだろうなーって。

もしかして、相手はリアラ？」

「ええ、そうなんです。ずっと私がジルの相手をしていました。やはり私としか戦ってないから、変なクセが付いてしまったようですね。」

「リアラのせいじゃないし、むしろリアラが相手してくれたからここまで来れたんだし。」

「うん、まー、経験を積めば大丈夫よ。たぶん。」
と微妙な励ましをしておいた。だって言い切れる程の付き合いはまだ無いし。
「リアラも右手で攻撃しやすい相手の左側ばかり狙ってたらダメよ。読まれるから。」
判ったことは注意はしておく。

そうして、ジルとリアラ相手にお互いの得意技などもちょっと話し合い、
旅の初日としてはなかなか話が途切れず、楽しい道中であり、道連れだった。

南の街道で隣の宿場町まではジェラルディーとわたしの二人であれば半日で着いただろう。
ウェンリアラのペースでは夜明け前に出発して、到着が夕方の少し前だった。
女性3人組だし、初日でもあるし、急ぐわけでもないからこれで問題無いとわたしは思う。

真夜中。
リアラとジルが寝静まった頃、わたしは寝台から寝言とも言えない小声で精霊語を使って話しかけた。

『ずいぶん早い再会ね？たしか次遭った時はどうとか言ってなかった？』
しばし間があったが、

『ふん。予想外だったな。それともコレはお前が仕組んだ事か？混沌の化け物。』
返事を返したのはイケメン魔神だ。
そう、ジルの魔法鎧には精神系魔術が付与されており、付与魔法からイケメン魔神の気配が感じられたのだ。鎧を見て直ぐに判った。

『とにかく、俺にはお前と話すことなど無い。契約に従ってこの鎧に力を与えているだけに過ぎない。不愉快だ、もう声を掛けるなよ。』
そう言ってイケメン魔神の気配は消えていった。
とは言っても、感じられないだけで居なくなったわけではない。

「ファリナ？」

「うぁっ、なな何？リアラ。起きてたの？」

「貴方、鎧の魔神と知り合いだったの？それにしては穏やかじゃなかった見たいだけど。」

「うん。どっちかと言うと敵対してる。見解の相違ってやつね。でも大丈夫よ。あの魔神は鎧に掛けられている魔法の契約に縛られているから。
わたしも積極的に敵に回したいわけじゃないし。
リアラとジルと一緒に居る間は喧嘩せずに上手くやって行くわよ。」

「そう。。。」

リアラは少しの間俯いて居たけれど、急に顔を上げ、わたしと目を合わせると、

「ファリナにお願いがあるのだけど。」

と切り出した。

26ページ目

26ページ目

『呪われし勝利の魔剣』

ジェラルディが持つ魔剣はそんな風に呼ばれてリーベフェルマ家に伝わって来たという。

「私は怖いのです、あの魔剣は人の魂を喰らって力を発揮すると言われています。
私も一度だけ見たことがあります。ジルがまだ赤ん坊だった頃です、ジルを亡き者にしようとする賊が、リーベフェルマ家へ押し入った事がありました。
あの時は、ディアーヌ様があの魔剣の力を使って私達を助けてくれたのですが、
あの時の恐ろしさは今でも忘れられません。魔剣から何か触手の様な物が飛び出して、
ディアーヌ様の腕に絡み付き、ドクンドクンって何かを吸い出すのを確かに見たのです。
ディアーヌ様は賊を追い払いましたが、直後に体調不良を訴えられ、翌朝お亡くなりに
なられました。
その時、リーベフェルマ家に代々伝わるこの武具の継承者は皆短命だったと聞きました。」

「そのこと、ジルは知ってるの？」

「はい、ジルもこの事は承知の上で、でも、魔剣の力を解放しなければ大丈夫だと言って
聞かないのです。ファリナは鎧の魔神と話が出来るのでしょう？
魔剣と対となって伝わって来たあの鎧、取り憑いている魔神もまた有名なのです。
これまで誰もあの魔神と会話が出来た者はおりませんでした。
名だたる精霊使いをわざわざ呼び寄せて試したりもしたそうですが、反応無かったと聞いています。でも、ファリナが会話出来るなら、魔剣の呪いに掛からないようにする方法を聞きだす事が出来るのではありませんか？」

「あー、言いたい事は判ったけど、アイツとの交渉にわたしが間に入ったら、まとまる話もこじれそうな気がするなぁ。。。。さっきも言ったけど敵対関係なのよー。
でも、それなら、鎧と魔剣を検分すれば何か判る気もするかなぁ。」

「なるほど、そういう事であれば遠慮無く見て欲しい。」

「「　えっ？　」」
いつの間にか、ジルは寝台から少し身を起こしていました。
途中から目を覚ましてわたしとリアラの話を聞いていたようです。

「ジル、起きてたの？」

「いまさっきね。私も魔剣に取り殺されたい訳じゃない。呪いを受けないで済むならそれに越した事はないしね。」

リアラとジルの話を横に、わたしはと言うと、
「それじゃ、呪いの識別させてもらうわね。」
魔剣と鎧の傍に立ち、そう宣言した。

「はや。。。」ジルの言葉を聞き流し。。。。

本命（美味しい所）を後に残して、先に鎧を手に取り、検分を始める。

触れただけでイケメン魔神が何か言ってくるかと思ったけれど、特に横槍もなく。。。
重いだろうと予想して力を入れて持ち上げて見ると、
「なにこれ、軽っ！！」　まるで発泡スチロールを持ち上げた感じのように軽かった。

「元々、その鎧を贈られた人物は女性だったんです。その女性がアイゼンワード帝国の
外征で功績を立て、我がリーベフェルマ家を興したと聞いてます。
贈り主はその女性の母上で、魔術師だったと聞いてます。
だからなんです、呪われた武具だって言われてますけどそんな危険な物を娘に贈るハズ
が無い。それにこれはその鎧を着用した者しか解らないと思いますが、その鎧を包まれ
ているととても安心出来るんです。戦いの場で自分が傷つくことなどないって。
贈り主がどんなに娘を愛していたか、私は疑っていません。」

魔力反発を考慮して、まずは『術式解析』無しで鑑定眼による検分

をしながらジルの話を
聞くわたし。

「ただ、その武具に何かあるのも間違いはありません。というのも、
最初の持ち主だった
リーベフェルマの初代当主だったその女性の、肖像画が我が家に飾
ってありますが、
その武具も一緒に描かれています。そこに描かれている鎧はブレス
トアーマーでした。
今の様に完全に肌を露出しないスーツアーマーではなかったのです。
剣も腰に吊られた形でもっと小さく、ブロードソードとして描かれ
ています。」

「つまり、昔に比べて鎧も剣も増殖しているわけね。
素敵ねぇ、成長する魔法武具なんて。」
わたしは鎧をコブシで殴りながらそう言った。
『ぽこっぽこっ』と鎧の反響音が聞こえて来る。

「どうやらこの鎧は、おそらくそっちの剣も、元は生物のようね。
いえ、今も生物なのかも。魔法生物ってヤツね。外骨格を持つカー
ナをイメージして貰う
と判りやすいかな。」

カーナとはこっちの世界で言うところの蟹です。身が美味しいのは
一緒。
精霊使いの目で見ても、鎧と剣から精霊力は感じません。
なので、普通に生物とは言えないでしょうけれど。

「どうやらこの鎧と剣はカーナの外骨格の様に、魔術で極限まで固
く強化された生物が元

になっているようね。緑や青に近い七色は昆虫なんかのキチン質を彷彿させるわね。
トンボの羽って言うの？　あ、トンボって言っても知らないか。」

「トンボ・・・というか、ファリナが言ってる事が半分も理解出来ないけど、
すると、私はカーナの殻をかぶっているわけなのですか。」

思わず蟹の着ぐるみを着たジルを思い浮かべた。
身長１７５ｃｍの美少女、顔の周りには蟹の足が小さく髪の毛の様に出て、
手は大きなハサミで、『ふぉっふぉっふぉっふぉっ』と笑い。。。
「やだーーーっ（笑」

ツボ、ツボに入った。
「あはははははは。」く、くるしい。。。。。

「この鎧や大剣が元は生物だったなんて、魔術ってこんな事まで出来るんですね。
でも、いまのファリナの話で私は確信しましたよ。
この武具を創ったネヴィアシータ様は、そこまでの手間隙を掛けてまで愛娘を助けようとしたのだってね。だってここまでの物を創り出せる魔術師ならば、単に呪い殺すだけならもっと簡単な魔法が在ったハズだもの。」

「そうね、呪い殺すなんて簡単だし、ここまでの武具を創るの、は大変。。。って、え？

いま何て言った？」

「？？・・・単に呪い殺すだけならもっと簡単な魔法が在っただろうって？」

「いえ、その前。誰が創ったって？」

「この武具を創ったのはネヴィアシータ様と言う女性魔術師で、我が家の御先祖様です。」

「ネヴィアシータ！！　マジで？」

うわー、うわー、ここに来てネヴィアシータ関係者と魔道具に逢えるとは。

抱いてる七色の鎧を見ながら、しばし感動。

「むむむむ、キタキタキタ、気合入ってキターーーー。

ごめんっ、ちょっとマジで解析するから、会話途切れるよ。」

『デバックモード、術式解析』。

わたしは『術式解析』を一気に全部を起動するのではなく、起動シーケンスをバラバラで

一つずつ確認しながら起動するようなモードで詠唱し発動させた。

解析されるくらいならトラップを発動させて、もろともに。。。。

なんて可能性もある。

一つ一つ順を追って確認しながら、怪しい点を見つけて必要があれば『術式解析』を起動

途中でキャンセル出来るようにするためだ。

『魔術解析を阻害するトラップが存在した際のセーフティーとして術者保護膜の生成。』
ＯＫ。

『対象となる物を確認・術式の対象物として目標を固定する。』
ＯＫ。

『対象物へ魔術式を掛け反発力が発生しない様、目標物の対反応速度を極限まで低下。』
ＯＫ。

『対象物へ解析魔術式を展開する。』
ＯＫ。

普段は目にすることの無い輝く魔法陣が鎧の周りに突然発生し、驚くジルとリアラ。
デバックモードでは、可能な限り可視状態にするので、普段は不可視とする魔法陣も目にする事が出来るのだ。

『解析魔術式と目標物の魔術式の融和性検証開始。』
ＯＫ。

『融和性検証終了。目標物に解析トラップおよび検証阻害ウィルスは存在せず。』
ＯＫ。

『目標物の魔術式を可視化。可視化術式の起動。可視化出来ず。』

『エラー処理起動。目標の魔術式の可視化を再実行。可視化術式を

吸収する魔術式を検知。』

『術式解析エラー終了。戻り値『可視化術式を吸収する魔術式を検知』。』

さすがにそう簡単に解析させてはくれないようです。それならそれでっ、

わたしはポシェットから予備の宝珠を取り出して右手に握りながら、左手を胸鎧の中央にはまっている宝珠に置き、

『簡易儀式』魔術式を起動する。

『風の宝玉』『水の宝玉』『闇の宝玉』『光の宝玉』『火の宝玉』『土の宝玉』そして、

胸から『創造の宝玉』が飛び出し、わたしを中心として空中で輪となって回転する。

鎧と剣の七色とも異なる輝きが部屋を照らす幻想的な光景にジルとリアラがさらに驚く。

目標物の魔術式を含めたこの空間に存在する全魔術式を丸ごと予備宝珠へとコピーする。

鎧の妨害術式を含めた全魔術式は見えないだけでここに存在しているのだ。

空間ごと転写してしまえば、例え隠蔽されてようと関係無い。

後はコピーした宝珠の中にある『ネヴィアシータの魔術式だけ』を解析すれば良い。

そして宝珠の中はわたしの創造空間である。

例えて言うなら、白背景で白文字なら見えなくとも、背景を黒くしてしまえば見えるような物だ。わたしの支配空間の中では隠蔽魔術式は意味が無い。見えない魔術式が”色抜き文字”の様に浮き上がって来るのが見て取れた。

同じようにコピーされた大剣の魔術式も見える形にする。
そうして、鎧と大剣の魔術式を診ながら、わたしはリアラとジルに声を掛ける。

「主となる魔術式部分まではまだ解析終らないけど、というより、数日掛かりそうだから先に、最初のリアラから言われた呪いの部分から言うね。」

リアラとジルは姿勢を正して耳を傾けて来る。

「この鎧と大剣はやはり予想通り魔法生物だったわ。そして今も立派に”生きて居る”。力を解き放つには装着者の血肉が必要なのね。」

そう言うと、リアラは「ひっ」と言って顔が引き攣った。
ジルも少しビビッタようだ。

「鎧と剣は一組で、吸い上げた血肉を元に攻撃用”魔法陣”として鎧と剣に蓄えられるの。
元がブレストプレートとブロードソードだった物が、いつ頃からかは解らないけど、
攻撃用”魔法陣”が使われずに蓄える一方になったみたいね。

そのため、鎧と剣はオデブちゃんになっちゃった。と。」

「「　ええっ！？　」」

「って事は何？、攻撃魔法だかを使えば元の小さめの鎧と剣に戻るわけ？？」

「そうなるわね。そして問題は、オデブちゃんとなった鎧と剣は、体を維持するために
必要以上の血肉を得る必要があったみたいよ。そのために最近の継承者は力を解放すると
鎧と剣に生命維持不可能なほど吸われてしまったようね。
力を解放しない限り、魔法生物は寝てるようなものだから血肉を吸われる事もなく、唯の
武具として使えるわ。
ねぇ？ジルはこの武具を継承するにあたって、魔法陣を行使するためのキーワードを教えてもらった？」

「いえ、そんな話は聞いたことも無いです。」

「変ねぇ。そんな重要なことが伝わらないなんて。というか鎧と剣にもそんな重要な事は
注意事項として書いてあっても良い様な物なのに。。。あっっ！！」

「「　なっなに！？　」」

わたしは精霊語に切り替えて鎧に話し掛けた。

『こら！アンタ。アンタなんじゃないの！？鎧の継承者へ注意を与える役目は。』

反応は無かった。なのでさらに言う、

『精神の精霊も堕ちた物よね、契約も守れないなんてさー？精神論とか無縁なのね？』

わたしが見たところ、ヤツは精神の精霊のくせに、精神面が打たれ弱い。

顔マッカにして反論してくるタイプだ。

『ふんっ俺がネヴィアシータと契約した内容は、ネヴィアシータの子孫に使い方を教えてやる事。鎧に加護を与える事の二つだけだ。それ以外は知らないな。』

一瞬だけイケメン魔神の気配が現われて、そう返事が来るとまた気配が消えました。

待ってもそれ以上何も返答は無かった。今の返事が全ての回答なのだろう。

あー、って事はもしかして。。。。

リアラの顔を見ると、さすがにハーフエルフだけあって今のイケメン魔神の精霊語による返事の内容が判ったようです。一方、ジルはなんだか解らない様子。

『ねー？リアラ？リーベフェルマ家の血脈って途絶えたとかで、今の家系は養子の家系が継いでいるとか、そういう話は聞いた事ある？』

わたしは何も知らないジルに伝えるべきかは先送りするために精霊語でリアラに話掛ける。
リアラも魔神の返事からリーベフェルマ家の過去のスキャンダルが理解出来たのだろう、
精霊語で合わせてくれた、

『いえ、少なくとも私は聞いた事が在りません。』

『と言うことは、リーベフェルマ家の歴代奥方の誰かが浮気して、血脈がそこで途絶えたってことかな?そしてそうと知らずに継承され続けていると。』

『血脈が途絶えたという事は無いかと思います、リーベフェルマ家を興した初代当主は子沢山だったとかで分家が多いですから。でも、そうなると、』

『お家騒動の元だわね。』

先日のダークエルフがお家騒動に絡むとなったら、この件が公になると、相手の決定的打となるに違いない。キーワードが在る事を証明すれば良いのだから分家の娘に着せるだけで済む、立派な検察側の証拠物件足り得る。

『ま、わたしには関係無い話だし忘れる事にするわね。この武具に良い印象を持ってるジルがこの事実を知る必要も無いでしょう。
お家騒動の元になるならば、知る人間は少ない方が良いし。
ただ、この武具が奪われたりしない様には注意しないとね。』

『ありがとうございます。ファリナ。私も黙っている事にします。』

そうして、わたしとリアラが対応を簡単に協議している間、ジルはじっとわたし達の話に割り込みもせず、じっと待ってたようだ。

「それで？何か判ったんですか？」とジルが切り出す。

「武具の継承者が精霊使いの素質を持っている事が重要だったみたいね。
リーベフェルマ家の人間は長い歴史のどこかで精霊使いの資質を喪ったようね。
そのため、武具の使い方を教えてくれる精霊の声が届かなくなっちゃったみたい。」

事実をボカしつつ、織り交ぜながら伝える。

「それなら、この武具の継承者は本当ならリアラが相応しかったの？」

「一概にそうとは言えないわね。あくまで使い方が伝わらなかっただけで、今後はジルがしっかり伝えて行けば済むことだし。
ただし、魔法陣として蓄えた力はキーワードで発動するみたいだけど、血肉を吸って魔剣の力を行使するだけなら心の中で願うだけみたい。鎧には精神の精霊が棲んでで、それが心の願いを聞いて、魔剣と鎧に込められた魔力を発動させる仕組

みとなってるわ。
対応策は考えて見るけど、さすがに今日の今日では無理よ。
だから対応策が見つかるまで、魔剣の魔力に頼らず戦ってね。それなら安全だから。
極力実戦は避けるのが正解かな。こっちでも気をつけるわね。」

「なるほど、判った。使い方を調べてくれてありがとう、ファリナ。」

「私からもお礼を言わせて下さい。ありがとうファリナ。そして重ねてお願いになってしまうけど、出来るだけ早く対応策を見つけて下さい。」

「はいはーい。あ、それで話の流れで判ってもらえただろうけど、何も知らない人間がこの武具を使うと危険だから、紛失したり盗まれたりしないように注意が必要よ。」

「判ったよ。」

「それじゃ今日はここまでね、最後にバタバタしたけど、おやすみなさい。良い夢を。」
そう言って鎧と剣を元の場所に戻してから、自分の寝台の上に横たわった。

ふーーっ。

リアラやジルにショックを与えないために、蟹に例えたが、わたしの予想ではこの武具の
元になった生物はもっと凶悪だ。
夢幻界に棲むサソリの形をした魔獣。メアログラプトゥスというヤツだと思う。
イケメン魔神とは夢幻界繋がりだったのかと腑に落ちた。

ディアーヌ様とやらに突き刺した触手の様な物がサソリの尻尾というわけだ。
そして、ネヴィアシータの血脈から外れて居た場合には、尻尾から血肉を吸われると同時
に神経毒を流し込まれる仕掛けが在る事も判った。
この神経毒が短命の原因なのだ。これもジルとリアラには言えなかった。
わざわざ不安がらせることを言っても、それで誰かが幸せになるわけじゃない。
それに今の魔剣では、神経毒よりも直接吸われる血肉量の方が致命的になるだろう。

ネヴィアシータが自分の血脈にだけ使用法を伝えるようにしたのは、おそらくは意図的に
そうしたのだと思う。解析して判ったが、この武具は例を見ないほど強力だ。
やはりネヴィアシータの発想力には驚かされる。
極限まで軽くした剣により剣速を高め、高い運動エネルギーによる斬撃パワーと、魔力で
発生する衝撃波による物理衝撃ダメージ効果。
この剣は、物理的に重い剣を魔法で軽く感じさせる発想とは、真逆の発想で創られている。

さらに斬られた際に魔獣が持つ強化毒による追加ダメージ効果も在る。

オデブちゃんなどと可愛らしい表現と裏腹に、物質となるほど凝縮され増殖された魔法陣
がひとたび発動すれば、剣の保有者を中心に広範囲に夢幻界を召還、物質界に重ねるのだ。
物理法則がまるで異なる夢幻界では人間は何も出来ない、剣を振ることも、攻撃魔法を
発動することも。そうして夢幻界の魔獣達に一方的に虐殺される事になる。

その効果範囲は、魔法陣が大きく育てば育つほど、比例して広がる様になっているが、
術者が意図的に範囲を狭めることも可能なのだろう。魔剣が育ちすぎるのを防止するため
にはどこかで適度に発散させてやらなければならないからだ。

仕様から見て、これは攻撃魔術の類では無いだろう。
おそらく、だが、愛娘が戦場で敵に囲まれた際に、そこから愛娘が死地を切り抜けられる
よう、緊急脱出法として使われる事を考慮した作りではないか。
夢幻界の魔獣は見境が無い。発動させる際に周りに味方が居てもらっては困る。
攻撃魔術なら、敵のど真ん中まで愛娘独りで辿り着いて発動しなければ使い様が無い魔術
など、娘ラブの母親からすれば論外ではないか。

また、使用者を限定し、万が一、誰かに奪われる事があったならその誰かを破滅に導く。

強力な魔法を付与した武具のセキュリティーとしては当然と言える措置だろう。と思う。
とはいえ、ジルも言って居たが、もしかしたらネヴィアシータは神経毒すらただの警告として用意したに過ぎないのかも知れない。殺すつもりなら即死する毒を選ぶだろう。
殺すつもりなどなく、じわじわと弱るうちに魔剣に恐怖感を覚えて手放す事を期待したのかも知れない。

魔剣が血肉を吸う事への対応策は一応幾つか思う物は在る。明日が待ち遠しい。
明日も移動日だ。移動しながらの対応策の立案となるだろう。
そして英気を養うためにも今日はさっさと寝るに限る。

ゴブリン退治は三日後、あと二日の移動を終えて次の日に予定していたけど、対応策を考えた後じゃないと危険だわね。最悪伸ばすしかないか。

つらつらと考えつつ、やがて意識はブラックアウト・・・・・

27ページ目

27ページ目

トゲエルフの朝はときどき早い。

リアラが目を覚ました時には、既にファリナが起きていたので朝の挨拶をしてから尋ねた。

「おはようございます。どうしたの？ファリナ。朝からぐったりして。」

「ん～、今朝早くね、知人が尋ねて来て、叩き起こされたのよ～。」

「お知り合いの方ですか？」

リアラは思わず周りを見渡すが、該当する人物はここには居なかった。

こんな早朝から人を訪ねて来て直ぐに帰ったとすれば、ずいぶん忙しい客人だ。

「ふぁ～～～、まだ寝たりないぃ～。」

「知人って風竜ですか！？」

宿の朝御飯を食べながら、リアラとジルに今朝の顛末を語る。

「ん。以前、風の精霊界に行った時に契約した風の上位存在ね。」

「それって、もしかして、ファリナはドラゴンライダーってことですか！？」

話題に喰い付いて来たのはジルでした。瞳が輝いてます。

「ドラゴンライダー？」

わたしは風竜の『イチゴショート』を思い出す。

本竜（ほんにん）が好きな名前で呼べと言うので、乳白色の身体、お腹はカスタードクリーム色で、

首から頭部にかけて赤い鬣を生やしていたから思い付きでそう付けた。

本竜は割りと気に入ってたみたいだった。

契約したとたん、寿命で死んでしまったので、今の姿は生前とは似ても似つかない。

竜の魂は不滅。死んでしまった今でも立派（？）に存在している。

今の姿からはイチゴショートの名前こそ笑い話だろう。

「あ～？そう言われれば、あんなのでもドラゴンライダーなのかしら、ね？」

竜を駆る人、竜に乗る人、一応間違っては居ないのかな？

どっちかと言うと、ドラゴンドライバーって感じだけど。

「すごい、すごい、まさかドラゴンライダーがこんな身近に存在していたなんて！！」

なんだろう？ジルの異様なこのノリは。

わたしはリアラに目を向けると、彼女は苦笑いを浮かべつつも説明してくれた。

「ジルが冒険者を目指すきっかけとなったのが、子供の頃に読んだ童話なんです。
その本は『竜に乗った魔法剣士』という題名で、内容は、まぁ題名通りなんですけどね。
で、その主人公に憧れて、今ここに至る。という訳なのです。」

「ははぁ。」
ジルに目を向けると、真っ赤に染まった顔でプイと横を向き。

「いいじゃないか。きっかけなんて何でも。」

「ええ、素敵なきっかけじゃない。」
わたしはジルへそう感想を述べる。
とたん、ジルはこっちを向き、

「ホントに？ホントにそう思う？馬鹿にしない？」

「ええ、馬鹿になんてしないわよ。わらっちゃうけど。」
そう言ってエルフ・スマイルをジルに贈るわたし。
そうして、ひとしきりジルを弄ってから宿屋を後にした。

ちなみに『イチゴショート』の真実はジルの夢を壊さない様、沈黙を守ることにしました。
そもそも自前で羽を持ってたヤツが、ピッチ角、ヨー、ロールと言った航空機の専門用語を覚え、回避機動やら要撃角やらを学習しテールスライドが得意だとか、最近は高ＡＯＡの動的減速機動法に凝ってるとかでプガチョフコブラを早朝から披露するようなヤツに夢を持ったらイカンと思うのはわたしだけだろうか？

なんで死んで頭蓋骨だけになったヤツがあんなに元気なんだ。。。。
精霊使いとして上に行くほど、奇妙な上級精霊達との付き合いが広まり、時々今朝の様に
こっちの都合お構いなしに押し掛けられ迷惑極まりないのが、精霊術の欠点かも知れない。
朝っぱらから浅角スピンと急角スピンの違いなんてどうでもイイではないか！！

移動日二日目、今日もひたすらテクテク歩きます。
今日の話題はジルが持つ剣が主役だ。

「剣に秘められた魔力の効果については？」
ジルが当然のことながら、自分の魔剣に籠められた力を聞くので、判った所を伝える。

「一つには、極限まで軽く作られた素材から繰り出される神速の斬戟ね。
二つには、素材の軽さを補うための衝撃力による直接ダメージの追加効果。
三つ目に、魔剣の素材となった生物が固有で持つ、強化毒による継続ダメージの追加効果。
四つ目に、魔剣の素材となった生物の種族が持つ、特殊な補助魔法効果。
五つ目に、魔法陣として蓄えられた戦略級魔術による、夢幻界を召還しての敵殲滅ね。」

「ずいぶん多いんだね、特殊な補助魔法効果って？」

「攻撃速度上昇効果よ。わたしが使っている同じ効果の魔術式と同時に２つの効果を発揮することが可能ね。あくまで理論上は、だけど。」

わたしが使っている攻撃速度上昇効果は、精神の精霊である、悪戯精霊の力を借りて極度の緊張状態を作り出し、その結果、いわゆる『走馬灯効果』によって脳神経の反応速度を上昇させて作り出している。身体も無理やりその反応速度で動ける様にしてるのがミソ。

最大限の『ヘイスト効果』で掛ければ反射速度は１８倍と言ったところだ。

実時間にして１０秒間程度。体感時間にして３分間のウルトラマンとなれる。

もっとも、翌日死ぬほど筋肉痛になるのは請け合いなので、ヘイストを最大効果で自分に掛けたいとは露ほども思わない。

ましてやヘイスト状態での駆け足なんて論外だ。

『体力セット』や『パーティーセット』の攻撃速度上昇効果は、魔力コストの都合も在るけれど、１．５倍程度である。経験上これくらいなら身体に無理が来ない。

ついでに何度か話に出てきている『加速』との違いであるが、こちらは怒りの精霊の力を

借りて発揮する『火事場の馬鹿力効果』で脚力を上げている物なので、速度上昇と言葉の
上では一見同じ様でも効果は全く異なっている。

そしてジルの魔剣のヘイスト効果だが、こちらは夢幻界の生物を素材として使っており、
サソリの尻尾を経由して使い手と一心同体となることで、使い手も夢幻界の生物であると
この人間界の物理法則を騙し、物理を越えた力を発揮させる事で効果を得ている。
一体化を深化させればさせるほど物理法則を無視出来る様になるみたいだが、一定レベル
を越えて深化させようとするとセーフティが働く様になってるので、ヘイスト効果以外の
補助効果については全くの未知数だ。
ネヴィアシータとしても、夢幻界の生物に深入りするのは精神的に宜しく無い、と考えて
いたのだろう。わたしもそう思う。いくら”逆流”を防止しているとは言え、魔獣と一体化
したいと考える人間がどれだけ居るのだろうか？

「夢幻界の召還、って具体的には何がどうなるの？」

「おそらくは物理法則が異なる世界を、この世界に重ね合わせることで魔剣の使い手だけ
が得をする何かがあるんだろう。くらいにしか判ってないの。
魔剣の素材となった生物の特性を利用しているから、魔術式として解読出来る様な物でも

無かったし。使ってみるまで正確な所は解らないわね。
判っているのは、夢幻界が召還されると、夢幻界の魔獣達まで一緒に召還される事になる
から、同じ夢幻界の魔獣である魔剣とその使い手以外はそれらの魔獣達によって皆殺しに
されるだろう、ってことね。」

「それって味方も殺しちゃうってこと？」

「うん。使い所を選ぶ魔術よね。」

「それじゃぁ、使い様が無いな。」

「ファリナ、魔剣を使いこなすための鍵が何なのかは判りましたか？」

魔剣の使い方、効果に興味があるジルとは対照的に、リアラは魔剣の使い手が受ける脅威
を減らす方が切実らしい。

「うん、それは最初から判ってるよ。魔剣の柄に嵌め込まれている宝玉が持ち手を選んで
居るのね。対応策として考えているのは、宝玉を丸ごと取り替えてしまおうかと。」

宝玉が何を持って持ち手を選んで居るのか詳しい説明は避けた。
ジルにチューニングを合わせてしまえばお家騒動の証拠の一つを隠滅出来るし、一石二鳥
よね。

そうして、わたしとリアラとジルの3人は魔剣のあれこれや、わたしの補助魔法効果やらお互いの得意とする所、希望する戦い方や連携についてを確認取りながら、次の宿場町へ向かって歩いた。
言うまでも無いけど、女性3人旅だから『風の護り』と『探知』は常時展開している。
街道には時折商人のキャラバンも通るけれど、油断は禁物よね。

次の宿場町は海沿いの小さな港町。
町に入ってすぐの広場で騒ぎが起きていた。大勢で囲んで独りを甚振っているようである。
わたしは関わり合いたく無いので、気付かないフリして通り抜けようとしたのだが、
しかし、夢を追い駆けて冒険者にまでなったお方は別だったようだ。

「待ちなさい。たった独りを大勢で殴る蹴るの乱暴。恥ずかしいと思わないのですか！？」

そんな恥ずかしいセリフを堂々と述べたのは他でもないジルだった。

「よそもんは口を出さねーでくれ。これはこの町の問題だ。」

片目が大きな傷で潰れている中年の親父が、強面の顔でそう睨み付けて来る。
あらら、これはちょっと困った事になったかな？わたしはそう思った。
”町の掟”なる物をジルに説いて納得するくらいなら最初から口を出さないだろう。
かと言って、掟に従って行動しているなら理は町人にある。事の経緯も知らないよそ者の
言う事など、彼等が聞き入れてくれるとは思えない。

だがしかし、それはただの杞憂で終った。
ジルの一言で注意がこちらに向いた時、囲まれてた人の合間から倒れている人物が見えた
からだ。少年だった。

最初その少年を見た時、あれ？どこかで見たな、と感じた。
大勢の荒くれ者に囲まれた少年。。。。あ、思い出した。

『雷球』
わたしが起動した魔術式によって生み出された雷の球体が、わたしの手の平の上、２ｍ程
の上空に留まる。
周りでは突然の物騒な魔術に驚いたようだ。少年を囲む荒くれ者、野次馬の商人や町人達
が一斉に息を呑んだ。

「あっ、お、おまえはっ。」
片目親父がわたしを見て気付いたようだ。

「思い出してくれて嬉しいわ。出来れば平和的に行きたいし。

じゃないと、この町に取って良くない話をぶっちゃけちゃおうかな～？」

「うぐぐっ。」

片目親父こと、海賊親父が大手を振って自分は町の者だと言うなら、この港町こそが海賊の拠点ということなのだろう。地元では善人で通し、一歩町の外に出れば海賊となる。

商人が大勢集まる中で暴露されたくは無いだろう。

「く、くそがっ、おいっ、行くぞ！」

そう言って去ろうとする海賊親父とその仲間達。異論が出なかった所を見ると他にも何人かはあの時にわたしの攻撃魔法で脅しを受けた海賊メンバーが居たらしい。

去ろうとする海賊親父達へ手を伸ばし、何かを言おうとする少年。だが痛めつけられたせいで声が満足に出ないらしい。

あら～？これはもしかして。。。

「待て。男の子の物は返してから行きなさい。」

おっとぉ、わたしが言う前にジルから切り出しました。

やば！ヒロインの座が奪われるっ！！わたしもナンカ言わなくちゃっ。

「へっ、そいつの物なんざ持ってねーや。元々この村のモンを取り返したまでよ。」

「あっそう。海の男の屁理屈なんて聞きたくないわ。出るトコ出ても良いのよ？」

あれ？わたしのセリフはなんでだか悪人っぽい？ヒロインっぽくない？

「海の男？漁師なのか？」周りの野次馬からひそひそと聞こえて来ます。

海賊親父の顔は真っ赤になったと思ったら青くなったり忙しい。
結局背に腹は代えられないと気付いたようだ。「ちっ。放してやんな。」

「ルーちゃん。」
そう言って男達の影から飛び出して来たのは女の子でした。少年と同じくらいの歳だ。
海賊親父達は面白くなさそうに唾を吐き捨て、この場を去っていきました。

ジルは親父達には構わずリアラに声を掛ける「癒してあげて。」

「ミラー神よ、あなたの従僕の願いをお聞き届けください。
傷付き弱った者を癒してくださいますよう。『ヒール』」

さすがにその若さで司祭となったリアラの治癒力は目を見張る物がありました。
あっという間に男の子の傷は塞がったようです。
精霊力を見ても、鼻血が出るくらい元気を取り戻したのが判りました。

男の子の名前はルクレシオ、１３歳。

女の子の名前はアーマリア、同じく１３歳。
共にこの町の出だそうだが、ルクレシオがこの町を出て行くにあたって二人で駆け落ちを
する所を捕まってしまったらしい。
この世界では、町はひとつのコミュニティを形作っており、自由気まま勝手に出て行って
良い物では無い。駆け落ちで女性を連れ出そうとすれば私刑を喰らっても文句は言えない。
１３歳での駆け落ちは別に不思議では無い。女の子で初潮を迎えれば次は結婚を考えるの
がこの世界での慣わしだ。

そういう意味では、１６歳のジル。２１歳のわたし。２４歳のリアラ。
行き遅れに片足突っ込んでいるのは間違いない。
もっともエルフは、ヒトとして精神も成熟した２００歳前後が適齢期なんだけどねっ。

とはいえ、これだけの騒ぎを起こしたのだ、もはやこの町には留まれないだろう。
それで無くとも、町の秘密を知るわたしが悠々と町中に留まれば必ず邪な企みを起こす者
が必ず現われるに違いない。
わたし達５人は早々と町を出て野宿する事にした。

なんでも良いけど少年！、さっきから礼にしろ何にしろジルにばっかり言うけどさ、
アンタに陶冶を与えたこのわたしは無視かいっ！！

野宿となって気付いたこと。
女の子3人のパーティーなのに、料理出来るのがわたしだけ。
いや、ジルには最初から期待してなかったさ～。
でもまさかリアラは出来るモンだとばかり思ってたヨ！！
神官って庶民への施しで料理の修業をするモンなんじゃないの！？
そう言うと、「不器用でごめんなさい。」と返って来た。
くっ可愛いじゃないですか。その顔で周り中の皆が甘やかしたに違いないっ。

当然ながら洗濯当番もこのわたし。しくしく。。。。
そうして働くわたしの隣で、男の子の事情を聞き取るジルはどんどん好感度を上げている。
なんだろう？この差は。これが世の中の厳しさなのだろうか。

真夜中。

「ヒュン」

そんな音が鳴り、離れた所に「カチン」と数回音がする。
弓矢で攻撃された際に、わたしの『風の護り』で矢がはじかれ、離れた場所へ落ちた音だ。
少年と少女は寝ているが、わたしの地霊操りでその上に球状の壁を創って保護している。
町の人間との戦いになるので、音も届かないようにしてある。

ジルとリアラには『探知』に引っかかったおそらく海賊達、１１名を知らせてあったので、
寝ずに向こうの出方を待っていたのだ。
予想通り真夜中に襲ってきた。
わたしとしてはこの戦いは願ったりだった。なぜならジルの覚悟が知りたかったからだ。

ジルの戦闘力は一対一ならそこらの海賊など相手にならない。
わたしの補助魔法があれば数人同時に相手取っても平気に違いない。
だが、『人を斬る』『殺し合い』の覚悟を、若干１６歳の女の子が持ち得ているだろうか。
この戦いでジルの覚悟が見れるに違いない。

わたしは普段ならこういう場面で使う『闇牙』をあえて使わず、手持ちでもっとも残酷な
殺傷力を持つ水系魔術式『破裂』を準備した。
人体の６５％は水で出来ている。この『破裂』を受ければ水で膨らんだ風船が破裂するか
のごとく、とっても悲惨な光景が見られるだろう。
その光景でジルが戦意を失うならそれで結構。人殺しになる前にお嬢様は家にお帰り願う
のが良いに決まってる。

風霊が離れた場所に居る敵の言葉を伝えて来る。
「ちくしょう、矢が通じねー。あのエルフ女の仕業だ。オメーら、相手は女ばっか3人だ。
ルクレシオの小僧は昼間あれだけ痛めつけたし、マリアは戦力外だ。こっちは１０人以上居るんだ。舐められんじゃねーぞ。」

どうやら片目親父では無いようだ。知らない声だった。
どうせ弓矢は通じないし、焦れて姿を見せた時がアイツらの最後よ。
わたしがそう思って悠然と構えてた時だった。視界の端を何かが突っ込んでくのが見えた。

「え？」

「ジル！？ちょっ」

ジルはリアラの制止を無視して突っ込んで行く。
えええええ～～～！？　多勢を相手にする場合は接近する前に魔法を撃ち込むのがセオリー
だし、そう打ち合わせして念押ししておいたハズ。

「もう、どうしてそうなるかなー？」
わたしとリアラもそれぞれ武器を構えてジルの後を追い駆ける。

支援魔法を全て掛けてあるジルの足は速く、敵の中にあっという間に突っ込み、片端から
次々と切り伏せて行く。
夜の暗闇の中、魔法と魔法具の加護があるジルの動きは海賊達には追い切れなかったよう
で、何が起きているのか知る前にさらに数人が切り倒された。

「ちくしょうー、何なんだ？クソっ　ぐがっ。」
最後尾で指示を出していた男は最後まで言うことが出来なかった。
ジルが右手で投げナイフを男の喉に投げつけ倒してしまったからだ。
思わず目を見張る。
明らかに男が指揮を取っていることを知り、ナイフを投げたのだ。
以外と冷静じゃん。

『闇牙』
魔法の影響範囲まで近づき、残りの全員を倒した。
戦いが終り、リアラは生き残りが居ないかを探したようだが直ぐに終えた。
ハーフエルフのリアラにも精霊力が見えるのだろう。死者を弔う神への祈りが響いた。
そして、野宿の場所を移動するため、ジルとリアラはキャンプ場所へ戻っていく。

わたしは１１人の遺体を見渡し、全員見覚えが全く無い事に気付く。
だからだろうか。魔導師への攻撃にしてはお粗末過ぎた。以前わたしの攻撃魔術を受けた
人間ならもう少し慎重であってしかるべきだ。
単なるよそ者の口出しに腹を立て、その勢いでここまで来たのならコイツらに取って軽率
な判断こそ命取りになったのだ。
わたしは、このまま遺体を放置して町の遺族へと引き渡すべきかと少し悩んだが、やはり
大地へ還す事にした。
遺体が在れば遺族は満足するだろうが、復讐心も燃やすに違いない。
遺体が無ければもしかしたら生きているかも?と、在りもしない幻想の為に復讐心も半減
するだろう。保身もあるが遺族の為でもある。襲われれば返り討ちにするしかないから。
死者を弔う歌を詠い、１１人の遺体を大地の奥深くへ還した。

先ほどまで野宿していた場所へ戻ると、リアラがジルに説教していた。
わたしはジルの連携違反を咎めるのは明日にすることにして、気付かず寝ている少年少女
を地霊に頼んで次の野宿場所まで運んで貰った。
ジルの覚悟は見れたし、そもそも遠距離魔法を手控えて味方をあえて危険に晒したのは、
わたしも同罪だしね。てへ。

28ページ目

28ページ目

薄暗い部屋の中で、7色の光を浴びながらトゲエルフは宣言する。
「では、いきますっ。」
周りではジルとリアラがこれから起こるだろう事を想像し、思わず息を呑む。

トゲエルフは、おもむろに魔剣から赤い宝玉を左手で外し、右手の緑の宝玉をはめ込む。
そうして左腕を持ち上げ鎧にはめ込まれた自分自身の宝玉を一瞥すると、
「しめて3秒ね。」
と言った。

「「　え？　」」

「えっ、って何？」

「え？いや、あれ？え？　今ので宝玉の交換終り？」

「うん、そうだよ？」

「もっと大変で時間が掛かる物だと思ってましたわ。」

とリアラ。

「え？でも、だって、魔剣の宝玉は魔術式の心臓にあたるからそんじょそこらのまがい物
なんかじゃダメで、本格的に儀式魔法で魔力を集めて結晶を創るには時間が掛かるし。
それに魔剣から取り外そうとすると剣の反発もあるからとても危険で、宝玉の交換は細心
の注意をはらっても難易度が高い、って言ってなかった？」
とジル。

「うん、言ってたね。
だから新しく創らずに手持ちの宝玉で間に合わせたし、細心の注意をはらって素早く取り
替えたでしょ？？」
何言ってんの？と言わんばかりのトゲエルフ。

『納得行かない。』
ジルは心の中でそう思ったが口には出さなかった。
どうもファリナは、時々こんな風に人を騙すというか真実を隠して態とおちょくるような、
こちらの反応を見て楽しむクセがあるように思える。
それを指摘すると、あからさまに、ふ～っとため息を吐き、
『判ったわかった、うっかり冗談も言えないのね。』
と、まるで冗談を軽く受け流せない自分が悪いかの様に言うに決まってるのだ。

わたし達3人組みは、今朝早く元海賊の少年と少女に別れを告げ、昼前にはゴブリン被害に怯えるこの宿場町へとやって来た。
あの少年にはアイゼリアのよろず紹介所のおやじさんを教えて、旅費として銀貨3枚ほど渡しておいたので、本人にやる気があるなら食いつないで行くことくらいは出来るだろう。
ここまでは唆した感もあり責任を感じたので、わたしとしても便宜は図ったつもり。
後は本人達のやる気と運次第だろう。そこまではわたしの関知するところではない。

少年はジルにお礼を言い去って行った。
だからなぜそこでジルなの?と思いきや、すれ違いざま、わたしに、
「アンタにも礼は言っとく。」とボソリと言った。頬は赤かった。

ちょっと嬉しかったわたしは、
「男のツンデレって気持ち悪いからハッキリ言葉にしなさいよねっ。」
と言っておいた、意味は通じなかったようだが、おちょくられた事は通じたようだった。

あとでリアラがツンデレの意味を聞いて来たので教えてあげたら、
「それなら、さっきのファリナの受け答えも十分ツンデレでしたね。」
とニコヤカに言われてしまった。

ツンデレとは心外な。そんな訳で自分では普段よりトゲ3割増しの応答を心がけつつ。
ジルの呆れ返った顔を見て思う。結果だけを見て「なんだ実は簡単だったんだ。」
などと思われるのもシャクだなぁ、と。
思うが、人の意表を突く事が三度の飯より好きなのでそこはトレードオフなのよね。

段取りをしっかり行った上での3秒なんだけどな。
そのためにえらい労力とリソースの無駄遣いをしてしまったが、物に拘るより二人の驚きの反応を返され、自分の心の満足を得られたから良しとするか、と思い直した。

例えばたった今、魔剣に填めた緑の宝玉。
わたしの生きた鎧に装着している風の宝玉よりも強い力を秘めている。
あれ一つ得るためなら命のやり取りをも辞さない人間がどれだけ居ることだろう？

風の精霊界で上位に位置する風竜『イチゴショート』から、契約の印として授かった宝玉。
あれほどの風の力を秘めた宝玉は、この世で二つと、いやもう一つくらいはあの廃エルフのクソジジィが持ってる気がするが。。。。それでも三つは無いだろう。
仮に存在していたとしてもバリバリの非売品。
入手出来ないという意味では存在しないのと変わりは無い。

いくらわたしが貰った宝玉とは居え勝手に他人へ、それも魔剣に組み込むとなれば、本竜の了承を貰っておくに越した事は無い。
今朝イチゴショートにその旨伝え、許可を得る代わりに言い渡された条件だって、普通に考えれば、条件を達成するためのミッション難易度はかなり高い。
ん～でも、いつまでも待つって言われたし、気長に探すとしますか。
イチゴショートとの約束は今の所は関係無いし、頭の隅にでも置いておこうっと。

「この赤い宝玉は不要だから緑の宝玉の対価として貰うわね。」
ポシェットに仕舞い込む。リアファリナと書いて「物を捨てられない人」と読むのだ。

「あの、ファリナを信じないわけでは無いのですが、これで本当に大丈夫なのですか？」
リアラは過去に魔剣に命を吸われた人を実際に見ているのだから心配するのは当然だろう。

「だーいじょーぶ。吸われたってわたしが鼻血出るくらい治してあげるからさっ。
それよりも、ゴブリンは数体じゃなくって、１００匹くらい数が居るってさ。
明日は激戦だよー？　支援魔法は全開で行くからねっ。」

「わかった。魔剣の危険を取り払ってくれてありがとう。ファリナ。それじゃ外でいつもの鍛錬してくる。リアラ手伝って。」

「はい。でも明日のためにも今日は軽くですからねっ。」

そう言ってジルとリアラは鍛錬のために部屋を出て行く。

わたし？わたしは鍛錬してもこれ以上筋力付かないしねぇ、どうしよっかな。

剣の型は生きた鎧に覚えこませてあるし、わたしの意志に沿い決まった型を行ってくれる。

とは言え、ほっとくとわたし自身の身体が動きを忘れてしまうので、鎧と微妙な動きの差

となって現われ、極端な話、鎧が右に腕を振ろうとした時に、わたしが左に振ろうとする

と関節を痛めてしまう原因となる。

まぁ、鎧の動きはわたしの精神と完全にリンクしているので、意思に反した動きはしない

けれど、怠けた身体は頭で考えた通り動くとは限らないものだし、わたしも型のおさらい

を軽くしておくに越した事は無いわね。

わたしが宿の裏に行くと、二人は既に武器の柄に練習用の錘を付けて、素振りを規定回数

こなして居た。

「ファリナも鍛錬ですか？」

普段は練習しないわたしが来た事でリアラはそう聞いて来る。

「そうなの。たまには練習しないとさー。」

「ファリナは魔法使いなのに剣もかなり使えるよね。剣だけでも苦労しているわたしとは違って。どんな練習法をしているのか興味ある。」

「えへへ。期待してるとこガッカリさせちゃうけど、わたしの剣の腕前はこの鎧のおかげなのよー。」

わたしはその場で鎧を外し、生きた鎧を自立モードで起動する。自分の身体を動かすのが目的なので、鎧のサポートがあると訓練にならないのである。

ジルとリアラは、鎧が自動的に動くのを見てやっぱりビックリしたようだった。

でも、なぜ非力なエルフがジルの両手剣を片手で受け流せたのか、これで解っただろう。

そうして双剣を型通りに振り、自分の動きを一つずつ確認する。一振り一振りに集中し魂を込めて振る。師匠は居ない。完全に自己流である。

剣道の段は持って居たが、二刀流を習ったことはない。

記憶させた動きをそっくりなぞってくれる鎧が在ってこそ成り立つ二刀流なのだ。

満足行くまで身体を動かし、双剣を鎧に吊ってる鞘に戻した。

ジルとリアラを見ると、いつの間にかお互いの打ち込み稽古に移っていた。
リアラは基本的にジルの連続技を盾で受け止め、ジルの姿勢が崩れた時に打ち込んでいる。
なるほど、この練習法が在ってあの戦い方なんだと納得。
明日の本番前に余計な雑音を言っても仕方ない。けれどリアラ相手ばかりではジルは早晩
伸び悩むことになる。
これぱっかりは経験なので、直ぐに練習相手が見つかる訳でもなし、おいおい考えて行くしか無いだろう。
生きた鎧?? アレには手加減モードは無いし、組み込むつもりも無い。
自分の命綱に変な機能を入れてバグったらイヤでしょ??

稽古を終えてから部屋に戻り、大好評の『お風呂セット』で汗を流してから就寝。
水霊操りのお湯は部屋の中でも周りを濡らす事も無く、湯上りで熱が篭ったりもしない。
精霊ってホントに助かるわよね、それじゃおやすみなさい。

最近、寝てる間に『全自動』で洗濯する術を編み出したので楽チンだ。
水球の外側に『静寂』をかぶせているのがポイント。

そして次の日、早朝の人気が少ない時間に『ＣＩＣ』でゴブリンの集団と地形を確認して
戦いに適した場所を探し、あらかじめ頭に入れておいた。
自分独りで行動していた時とは違って、段取りという物に時間と労力を掛ける様になった。
たかがゴブリン１００匹程度、わたしの広範囲殺傷魔術式一発で終るわけだけど、ずっと
そのスタイルでは前衛が育たない。やがては後衛の自分の不利益になってしまう。
このパーティーが何時まで続くのかは判らない。でもだからと言って、どうせ直ぐに解散
するさ。という考え方は美しくないと思う。
縁を大事に、このパーティーを組んでいる間はパーティー利益を考えて行動したいと思う。

さて、肝心のゴブリン達はというと、集団で町の自衛団と小競り合いをしながら、町周囲
の畑を荒らしたり好き放題しているという。
帝国騎士団を始め戦力のほとんどが魔王軍と戦うために国の北側に配置され、南部が手薄
となっている弊害がこんな所で噴出していたのだ。
国境警備隊はもっと南に駐屯し、中途半端に帝都に近いこの辺りが現在はもっとも治安が
悪い危険地帯となっている。

確認しておいた地点から程遠くない場所で、斥候と思わしきゴブリン少数を見つけた。
『探知』を展開しているので、先制権はこちらにある。
『加速』を伴ったジルがゴブリンの群れを、わたし達に有利な地形に誘い込み、戦闘開始。
遠距離魔法を使わず剣で倒しているのは、ゴブリンは今ここに見える以上に数が多いので、
魔法を使うことで警戒心を煽りたく無いし、下手をすると逃げられてしまう。
ある程度の数を削るまでは地道に倒して行くのが殲滅への近道だろう。
殲滅出来る魔法を持ちながらも使わないというのは、結構なストレスになる。

今日はジルの経験値上げ、今日はジルのケイケンチアゲ、キョウハはジルの・・・・

ジルはゴブリン一体なら難なく倒せる技量を持って居るが、ただ、
持久力に乏しいようで、
時々スタミナ回復する必要があるようだった。
『パーティーセット』の生命力回復速度上昇で、傷回復は早まっているが、スタミナ回復
は含まれて居ないので、早々に効果面の見直しを行う必要があるだろう。
それについては今晩にでも行おうと心の中で決めた。

傷回復とスタミナ回復を掛けられ半強制的に、それでも黙々とゴブリンを倒しているジル。
後方で周りの警戒をしつつ全体を眺めながら、時折回復系魔法を唱えるわたしとリアラ。

「そろそろ慣れて来たかしら？うふふふふ、鬼釣り行くわよーーっ！！

ジル、次は魔剣の力も使ってねー。」

ジルとリアラは揃って反応する。「鬼釣り？」

『ヘイスト？』『ルーンシールド？』

手持ちの単体支援魔法の中で最上位の魔法を、ジルに対しさらに上乗せで掛ける。
攻撃速度上昇を劇的に上昇する魔術式と、敵の攻撃を魔力で相殺する盾だ。
『ヘイスト？』は体感で3分間、普段の１８倍程度に早く動けるようになる魔術式だ。
自分に掛けるのはイヤだが、他人に掛ける分には筋肉痛を回復魔法で癒せば後は他人事だ。

そうして、
『幻影』
わたしそっくりの影をいくつか創り、ゴブリンの群れをこの場所へ誘導する。

そして集められこちらへ雪崩の様に走り寄って来る、見渡す限りのゴブリンｘたくさん。
それを見たジルは、魔剣を正眼に構えると目を閉じて何か呟く。
祈りの言葉のようだったが、聞き取れなかった。精神統一の類だろう。
とたんに、剣の柄が生き物の様に変形し触手がジルの腕に絡まる。
新しく組み込んだ緑の宝玉は、ジルから吸われる血肉を一定値以下に抑える役目を持つ。
元は生物の魔剣である。供給される栄養が少ない状態で魔力を発揮し続ければ、やがては
蓄えられた魔力を徐々に吐き出し、そうして危険度は下がって行くだろう。
いわゆる魔剣のダイエットである。

ジルの動きはもはや視認出来ないくらいの早さで、寄ると触ると次々と切り捨てている。
まさに竜巻のようだ。
今のジルは『ヘイスト?』の他に魔剣のヘイスト効果も合わさって、尋常では無い速度で
剣を振るい続ける。
そして、

『バンッ』
と突き抜ける音がして、ジルの前方方向に居たゴブリン１０体ほどが扇状に消し飛んだ。

緑の宝玉には、赤い宝玉に籠められた魔術式の上位互換性にプラスして風系魔術式による
『ソニックウェーブ』、それをわたしが新しく追加で付与してある

のだ。
剣を振るうことで周囲の空気を高速で振動させ、追加ダメージ効果を発揮する魔術式だ。
そこへ元々魔剣が持っている敵に当たった際の衝撃波効果が発揮されると、低い確率だが
衝撃波が高速振動する空気を伴って発生し、ソニックブレード効果となる場合がある。
剣を振るった方向が扇状で消し飛ばされたのはそのためだ。

でも、最初の一発でその欠点に気付いた。
「な、なんですの？あれは。こっちに飛んで来ないですよね？」

うん。来るよー。方向選ばずだしね。
リアラのジト目にわたしは視線を流した。今夜！！、コンヤチョウセイシマス。
今は運を天に祈ろうねー、ほらーリアラはそういうの得意でしょ？？

ま、それは冗談だけどね。『風の護り』もあるからこっちに直撃はしない。

わたしはスタミナ回復の他に、徐々に削られて効果が消えそうになる『ルーンシールド？』
や『ヘイスト？』を、完全に効果が消える前に次々と上書きする。
リアラはジルが傷を負えば、それが浅くても直ぐに回復を飛ばし続ける。
あれほどたくさん居たゴブリンも、みるみるうちに数が減って行く。

そして、それが来ました。

『＃３$@＃＆%$』

聞きなれない叫び声にふと気付けば、わたしの目の前に風霊が浮かび上がって居た。
どうやらこちらを魔法使いと見て『静寂』に類する風系魔法をゴブリンが唱えたようだ。
もっとも、風系魔法はわたしの風霊が押さえ込むので、わたしには効かない。

風の上位精霊を連れてくれば別だけど、クソジジィ並みの精霊術の使い手で無い限りは、
わたしの風霊の妨害を破れはしないだろう。
音は鎮めるよりも掻き乱す方がずっと楽で簡単なのはどこの世界でも同じだ。敵の風霊が
こちらを圧倒的に上回る実力が無い限り風系魔法がわたしに効果を発揮することは無い。
まぁ、『静寂』が効いても、わたしの場合は無詠唱があるので困りませんけどね。

魔法を唱えたゴブリンと、その隣にいる一際大きなゴブリンは明らかに周囲のゴブリンと
格好が異なっている。おそらくアレが群れのボスなのでしょう。
ボス達は魔法が通じなかったと見るや、くるりと方向を変え逃走に移った。

わたし達からボスまでの間には、少なくなったとはいえ、まだかなりのゴブリンが居る。

やれやれ、逃がすくらいなら魔法で倒そうかと考えた時に、逃げるボス達の向こう側から、
ゴブリンとは異なる3つの反応を『探知』に捉えた。

新たに増えた3つの反応の内、2つは解らないが、一つは軽やかな動きと風と大地からの
情報で、エルフ種族であることは直視しないでも感覚で直ぐに判った。
ボスと遠からず進路が交差するだろう事も判明しているので様子見を決め込む。
ゴブリンのボスごときで、星を取ったの取られたので騒ぐつもりも無いし。

「ゴブリンとは言え、多勢に無勢の様子。助太刀する!!」
3人のうち、先行して来た二人は、冒険者の約束事に従って助太刀の意を宣言する。
そうしないと横取りと区別が付かないからだ。それでも時にはトラブルの元なんだけどね。
まー、普通は女の子3人組で多勢のゴブリンを殲滅出来るとは考えないから正しい行為で
はあるのだけど。

『ダ・ゲライン・ゾル・リベルファイ・イングランス
凍てつく槍よ!我が敵を滅ぼせ!『アイシクルランス』」

二人のうち、叫ばなかった方は魔術師のようだった。氷槍を2本同時に2匹のゴブリンへ
それぞれ飛ばした。
2匹はその攻撃を受け、それなりの傷を負ったようだが倒すまでには至らなかったようだ。
魔法を使うゴブリンは傷を負うとすかさず癒しを使って来た。

『&#3$@#』
2匹の傷が塞がっていく。

「スニージー、集中だ！」
そう言ってもう一人の剣士が魔法ゴブリンへ襲い掛かる。大きなゴブリンを牽制しつつ、
的確に魔法ゴブリンに斬りつけていく。

「エンゲ・ナジエバン！『エナジーボルト』」
スニージーと呼ばれた魔術師は、詠唱の短縮形らしき魔術式を使って魔法ゴブリンへ攻撃
を加える。短縮形は基本形より詠唱時間が短くなる分、威力が弱まる場合が多い。
集中攻撃なので一発の威力より手数を選んだらしい。手馴れた感じだ。

魔法ゴブリンがおそらくは癒しを使おうとしたのだろう、その瞬間を狙って、
剣士が盾をアッパーカットの様に低い体勢から伸び上がるような全身の力を使いゴブリン
に叩きつけて弾き飛ばす。
『シールドバッシュ』だ。詠唱を妨害し、すかさず突きを放ち魔法ゴブリンを倒した。

その後も一方的に剣士と魔術師は大ゴブリンを倒してしまった。
その頃にはジルも残された全てのゴブリンを倒していた。

「大丈夫だったかい？　って聞かなくても良いか、どうやらお邪魔してしまったようだ。」
向こうの剣士が剣を収めて、そう穏やかに話しかけて来る。
わたし達の周りにはゴブリンの死体の山。所々『ソニックブレード』で大地は抉られ、
木は不自然に切り倒されている。
この状況を見れば助太刀は無用だったと解るだろう。

「たった3人でこれだけのゴブリンを倒したのかい？凄いね、君達。」
魔術師も人懐こい笑顔でこちらを称える。

さて、いちおう形的にはわたし達は要らぬおせっかいで肝心のボスを最後に横取りされてしまった事になる。リアラとジルはどう出るだろうか？
こう言っては何だが、冒険者を長く続けて居れば横取りなんて普通にあるだろう。
そして助太刀と横取りの境界線が曖昧な状況などこれから幾度も巡り合うに違いない。
今回の対応でジルの人としての器が見えてくるのかも知れないな、

と思う。

「逃げられる所でしたので、御助力感謝致します。」
そう、ジルはあっさりと告げた。
リアラも心配していたのだろう、ほっとした顔だった。もしかしたらわたしもか？？

さて、そうなると気になるのは、そこに居るハズの見えないエルフだ。
『探知』ではわたし達の正面、約２０ｍ先に居ることになっている。
しかし、肉眼ではそういった人物は見えない。精霊を感知する精霊使いでも見えてない。
つまり透明化の魔術を使っているのだ。

こちらは女の子３人組、そのうち二人はエルフとハーフエルフだ。
まっとうなエルフであれば、姿を隠す理由などないだろう。

『Ｓｅｅ　Ｉｎｖｉｓｉｂｌｅ』
わたしは透明化を見透かす魔術式を無詠唱で起動する。
透明化は、光霊（光学迷彩）／闇霊（同じく光学迷彩）／風霊（光の屈折、気配隠蔽）
地霊（体色変化・保護色）／火霊（体温隠蔽）／精神霊（意識外とする事での隠蔽）
大まかに言えばこう言った原理だ。
逆を言えば、透明化を見破るために同系統の精霊を動かすと、相手にもこちらが見破ろう
としているのが解ってしまう可能性がある。

そこで！わたしの『Ｓｅｅ　Ｉｎｖｉｓｉｂｌｅ』は、透明化でほぼ使われないだろう
水霊を用いて相手の居場所を割り出す魔術式だ。
もちろん、今現在、この辺りは『風の護り』やら様々な支援魔法によって精霊力が入り
乱れている状態である。相手の透明化と同系統の精霊をさらに動かしても気付かれない
可能性もあるけどね。

水霊の力でわたしの周りの空気中の水分子をリファレンス（基準値）として、水分子の
分布状況を目に見える形とする魔術式だ。
リファレンスとした空気中よりも水分子が多い・少ないが見えるのだ。
つまり人体は水が６５％占めている。空気中より明らかに人体の位置だけ水分子が多い
のが見えるわけだ。
相手がゴーレムのような無機物だったとしても逆に空気中より水分子が少ないと解る。

そうして透明化を見透かして見る。
なるほど、確かにエルフ種族、それに女の子だ。身長はわたしと同じくらいだろう。
子供であれば隠れる理由になる。だが同年代となるとなおさら隠れる理由が無い。

だが、わたしには意図的に隠れようとするエルフには心当たりが在る。

思い出して欲しい、港町アイゼリアでリーベフェルマ伯爵との会見後に襲ってきた相手を。

『雷球』

わたしは攻撃魔術式を起動し、隠れている女エルフの頭上に浮かばせる。

突然のわたしの行動に驚く皆。

「そこの女エルフ。隠れて居ないで出てきなさい。」

素早く反応したのは剣士だった。

「待ってくれ!!、怪しい者じゃないんだ。ただ、事情が有って初めて遭う人達からは、誤解を受け易いんだ。それで隠れていただけなんだよ。君達を騙そうとか、そんな事は考えてないから、危ない魔法は止めてくれっ。」

「ホントなんですよ、そうは言っても信じられないと思うけど、僕達はここから去ろうと思う。それが無用な争いを避けられてお互いのためでしょう?」

「隠れて居るのは正直気持ちは悪いけど、事情が有ると言うのなら仕方ないだろう。ここから去ってくれるなら争う理由は無い。」

そうジルは言うが、わたしは、

「ダメよ。わたし達は4日前、アイゼリアのよろず紹介所の前でダークエルフから襲撃を

受けているの。隠れているのがダークエルフならここで倒す。
黙っていてゴメン、ジルとリアラを護衛するようにリーベフェルマ伯爵から依頼を受けて
居たんだけど、その時にダークエルフに襲われたのよ。
だからダークエルフなら見逃す訳には行かない。」

「それは違うっ。我々じゃない。」
あせって反論する剣士と魔術師。

「待って!!姿を見せるから。でも誓ってあたしは貴方達を襲ったダークエルフじゃない。」
そう告げて透明状態から現われた人物は、

予想通り、女ダークエルフだった。

29ページ目　なりゆきでダンジョンパーティー

29ページ目　なりゆきでダンジョンパーティー

なぜだろう？　ただいま四面楚歌なトゲエルフです。

「そうやってアンタ達エルフは、何時だってあたしを悪者にするけどさっ、ダークエルフに生まれちまったのはあたしが悪いのかい！？　親がどうとか、邪神信仰がどうとかっていっつもだよ！！　親の顔なんか見たことないしっ！！　邪神なんて祈ったことないしっ」

「レティは見た目はこんなだし、君が疑う気持ちは十分判るっ、だけど彼女はずっと神殿で僕達と一緒に育って来た幼馴染で、君が疑うようなダークエルフの悪いヤツラとの付き合いはこれまで一切無いと我が神プニに誓うよ。ダークエルフってだけで先入観を持たず生身の彼女を見てやって欲しいんだ。そうすれば彼女が悪人じゃないって直ぐに判る事さ」

「ファリナっ、生まれで人を差別するのは良くありませんっ。この方は確かにダークエルフに生まれてしまったかも知れませんが、人間に育てられたと

言うことではありませんかっ、ならば育った境遇はこの私と同じで何も変わらないですっ。
何も悪いことを行ってないのに決め付けで命を奪おうなどと許される事ではありませんっ」

「物語のダークエルフは悪役だけれど、この方もそうだと言い切れる証拠は何も無い。
むしろ、ゴブリンとの戦いでこちらを助けようとしてくれた人だし。
助っ人二人を仮に善人とするならば、その仲間のこの人だけ悪人とする根拠は薄いと思う。
全員が悪人なら助けずほっとけば良かっただけだし」

おかしい。ダークエルフだよ？　黒いんだよ？
そこっ　リアラだってハーフエルフでしょ！！　なんでダークエルフの味方なのよっ？？

「神殿で育ったとは言え親が居ない事で背負った、あの一口で言い表せない悔しい気持ちは私もよ～く知っています。私の場合はエルフのくせに神への祈りは冒涜だとか、ハーフエルフはエルフの高貴な精霊使いの血を穢す者だ、とかずっと言われ続けて来ました。
だからです。親の事で子供を蔑み、差別するなどもっての他なのですっ、ファリナ」

むーーー。

そこでニコニコ笑ってる魔術師。アンタは何か言うことないの！？

「エルフで魔術師って珍しいですね。これまでエルフって言うと、
みな精霊使いで直情的
というか、レティが視界に入ったとたんイキナリ襲ってくるような
人達ばかりでした。
いきなりの破壊の呪文には焦りましたが、レティやウインと話して
る間も撃つ様子が見ら
れないので、貴方が理性的な方で良かったなーと思います。
それで、問答無用で撃たなかった理由を聞いても良いですか？
ホントにレティを危ないと思って居たなら、ためらわずに撃ったで
しょ？」

そう、スニージーと呼ばれた魔術師は周りの死体の山を見回しなが
ら問いかけて来る。

「わたしは自分で魔法を創りそれを操る者だから魔導師よ。
そこのダークエルフは姿を隠して居た割りに背中に背負った弓を構
えてなかったし、矢に
も毒が塗られて無いのは水霊からの報告で解ってる。
ダークエルフと言えば毒と短剣。そのどちらも持って無いならダー
クエルフを囮にして、
暗殺者の本命はそっちの剣士かアンタかも、と思ってた訳よ」

そう言って、魔術師の脇から大地の槍を飛び出させて見せる。
ま、３人共、着てる物が南方風のデザインだし、この辺りの人間じ
ゃないのは解ったけど
暗殺者ってのは流れ者だから土地の者じゃないってのは警戒を解く

理由にならない。

「『アースジャベリン』、複数の魔術を同時に操り、しかも、詠唱破棄だなんて。
なるほど。僕かウインが変な動きをしてたらサックリ往ってた訳だったんですね。
でも、こうして手の内を見せてくれたという事は、僕達は敵じゃないと理解して貰えたと思っても良いですか??」

「今いま襲うつもりじゃない、という意味では理解したわ。
だからと言って、アンタ達が敵じゃないとは思って無い。第三者を装って待ち受ける仲間の只中へと誘い込んでから悪党の顔を出す、なんてのは常套手段だしね。
って、そこの二人!!　何ダークエルフと仲良くしゃべってんのよっ!?」

「「　え??　」」

え?じゃないわよ。何時の間にやらジルとリアラは和気あいあいとダークエルフを相手に、楽しく話をしているではないですか!?
空気ぶち壊しおってからに!!

「なんかリアラと同じく物心付いた頃から神殿で人間の下で育った、って聞くと他人とは思えないって言うか」

「私はこう言っては下世話ですが、エルフにはこれまで相手にされず育ちましたから。
ダークエルフと言われても出逢った事も無いし、嫌悪の感情は特にありません。」

「うんうん。あたしも生まれて初めてだよ。初めて逢った人に嫌われないでこうして話を
出来たのってさ」

「そうなんだ。レティアラはもっと大陸南方の国からこっちへ来たんだね。
それじゃ冒険者となって長いの??」

「やだなぁ。レティアラだなんて堅苦しく呼ばなくて良いってば。
レティでいいよん。
１９の時に飛び出したからもう６年経つのかー。ずっとウインとスニージーと３人で大陸
を旅して来たんだよ。冒険者と言うより傭兵の方が長いかな」

いつの間にか６人で依頼元の宿場町へと歩いている最中です。
前をダークエルフのレティアラとジルとリアラの３人が歩いて、その後ろに剣士と魔術師。
最後尾をわたしが歩いている。
一見、二人の護衛たるわたしの方が遠いようだけど、基本的に魔導師として戦うわたしは、

この布陣の方が全員が視界に収まるので調度良いのだ。
いつでも『闇牙』をぶっ放せる準備は出来てる。
それにしても。

おかしいでしょ！　わたし独りトンガッテルなんて！！　そうですかわたしがトゲエルフだからですか！？

ゴブリン全部の証明部位を持ち帰るなんてそもそも無理だし、宿場町からの依頼は、個別の数単位では無く、ゴブリン軍団の集団単位での殲滅として受けている。
魔法ゴブリンとボスゴブリンの頭か、偉そうな装いを引っぺがすかして、特徴有る部分を町に持って帰り、殲滅の確認そのものは町の者に別途行ってもらう手はずになっている。
魔法ゴブとボスゴブは、これまで町に迷惑掛けてそれなりに姿を覚えられてるのでそれがわたし達依頼を受けた者と、依頼元の町双方で後々問題が出ないと思われる契約だった。

ボス達は倒されてしまったが、彼等が報酬権については実にあっさりとこちら側に有ると認めてくれたのでそこで揉めはしなかった。
ジルは彼等が助太刀してくれた労力への対価として、今夜の宿と飲み食い代をわたし達が

持つ事を約束したのも、尾を引かなかった理由だろう。
歳は若いがこういった細かい心遣いを忘れないのは立派だ。

余談ではあるが、わたしがゴブリンの死体を大地へ還してるのを見て皆から不思議そうな
瞳で見られて居たが、別に感傷でも無ければ潔癖だからでも無い。
死体は速やかに大地に還った方が、精霊の安定にも、死と転生の輪的にも良いと考えてる
からやってるだけだ。
説明が面倒なので「こうすると化けて出ないのよ」と言っといた。
死体を大地に還せば天が定めた約束事『沈黙の掟』が働くのでアンデットにならずに済む。
なので、あながち間違いではないだろう。

歩きながらお互いの自己紹介をすませる。
後で酒場で知ることになった情報も分けて書くとメンドクサイからまとめてここに書くね。

神官戦士のウインゾフィー・ホークリング。人間２５歳
『ブリューグフト大陸』の東南にある『スイッザー連邦共和国』という所からはるばる旅
してここまで来たらしい。距離にしてアイゼンワード帝国を西欧と見立てた場合、インド
あたりに相当するようだ。信仰する神はプニ。
実家が神殿だったので神官戦士としての訓練を受けてたと言う。片手直剣と大型盾使い。

全身鎧ではあるけど、ジルの様な完全に覆われるタイプじゃない普通のプレートアーマー。

魔術師のスニージー・アーシェフェル。人間２５歳
ウインの幼馴染。商家の次男坊でウインに付いて旅をすることにしたらしい。
彼等の国では魔術師ギルドなる物が存在し、実家がある程度裕福であるならという制限があるものの、誰でも魔術師を目指す事が出来るらしい。魔術書を渡され必要な魔術はそれに最初から全部記述されているとのことだ。便利だねー。

偵察のレティアラ。ダークエルフ２５歳、歳はホントのところ不明らしい。
孤児なのでエルフだったら誰でも持ってる守護精霊名と姓は無いと言うことだった。
というか守護精霊名なんて物があるとは知らなかったらしい。余談だがリアラもだって。
アンタ達。。。思わずホロリとしちゃったよ、わたしゃ。
本人隠してるつもりらしいけど、ウインがジルやリアラに話しかけるとピクリとする所を見てるとバレバレだって。ニヒヒ。ダークエルフいぢくりネタはけーん。
弓と体術と精霊術で戦うそうだ。少しでも周りの誤解を防ぐために、その辺の悪いダークエルフと間違われないよう、短剣は持たない主義とのこと。

魔法剣士のジェラルディ・イライザ・リム・リーベフェルマ。人間

１６歳
わたしがさっきリーベフェルマ伯爵の依頼でうんぬんしゃべっちゃったからね。てへ。
もう隠す必要も無いと思ったのだろう。ジルはフルネームで紹介した。
彼女は驚くべきことに魔法少女だったのです。焚き火くらいは出来るらしい。。。
武器は御存知、魔法付与されたスーツ型全身鎧と両手大剣だ。

司祭のウェンリアラ・カースティン。ハーフエルフ２４歳
あの３人は知らない事だけど、父親がリーベフェルマ伯爵。ジルとは母違いの姉にあたる。
母親とは生まれた時に死別。人間の神官夫婦の元で育った。
精霊は見えるけど習ったことがないから精霊術は使えないとのこと。
ミラー神の神官戦士で、片手フレイルと小型のラウンドシールドで戦う。
鎧は胸当てだけプレートで、他の部位はチェインアーマー。

そしてわたし、リアファリナ。トゲエルフ２１歳。
そしてやっぱり聞かれる「「「　トゲ？？　」」」　いつもの様に説明しといた、マル

無事報告を終え明日には報奨金が貰える約束を交わして、宿屋で酒盛りをする５人。
わたしはジルとリアラの護衛だから、推定容疑者を前にお酒なんて飲む訳に行かない。

ほんっと、本人達に自覚が無いと護衛は大変です。
まぁわたしが暗殺者だったらいくら護衛がすぐ傍に居ようとも、これだけ時間を掛ければ
どこかで目的を達せられたと思う。だからこの3人だって大丈夫。。と言えなくも無いと
は思うけどね。アイゼリアで襲って来たのはダークエルフ。いま目の前に居るのもダーク
エルフ。これで油断しようものならただの馬鹿でしょ??
周りでお酒を次々とクイクイやってる姿を横目に、果実生絞りジュースをちょびちょびと
一人寂しく舐めてました。

「プニ神が御光臨なされて、それで貴方達の遊び相手になられたのですか!?」
リアラは他宗教の慣習の違いを熱心に聴いていた。中でも神様自ら現世の信者の前に姿を
見せて活動を共にした事が有るという事実に驚いていた。

「ああ、小さかった俺達は相手が神だなんて知らなくて、気の良いオジサンだと思ってた
んだ。大きくなって遊ばなくなりしばらく経ってからかな？　相手が神だって知ったのは。
毎日一緒になって泥んこ遊びをした人が神様だなんて普通は思わないだろう?」

「おいおい、ウイン。オジサンは無いだろう？　神様怒るよ？　綺麗な女の人だったろ?」

「でもさ、あたしもプニ神を思い出すとさ、なぜかお父さんって感じなんだよね。
女の子だったらミニスカートで廻し蹴り出来ないとダメだー言われてさぁ。
あたしの体術はプニ神に鍛えられた様な物だよね。ミニスカは結局穿かなかったけど」

そう言ってレティアラは膝下までのレギンスを見せる。
なによそれ？　綺麗なお姉さんでも中身はオヤジってことなのかね？？

「最後に遊んだ時のこと、今でもハッキリ思い出せるんだ。プニ神が言った言葉を」
3人のリーダーは神官戦士のウイン。彼が二人を大陸中引き廻しているようだ。

プニ神の御言葉。それは←←←こんな感じらしい。

一緒に遊んでいる間は、纏わり付いて、手を引っ張ったり、腕にも足にも好きな様に抱きついて何でも我侭を言った、あの人は嫌な顔一つせず、さりとて我侭をそのまま聞くのでは無く、自分と一緒に行わせて苦労を分かち合う形にしていた。子供だからと言って甘やかしたりはしなかったが厳しいと感じたことも無かった。

思い出すのは、真っ青な空に浮かぶ複雑な形をした細い雲の下で遊んだ楽しかった思い出。

そして、そろそろ遊びの時間も終りに近づいた夕暮れ。
赤く染まった夕焼け雲を、目を細めて見ていた綺麗な女性。
細かい容姿を思い出そうとすればするほど靄が掛かったみたいに思い出せない。
綺麗だと一目で判るはずのその顔は、アゴのラインも髪型も瞳の色も眉毛さえ、何一つ
として思い出せない。

『宝探しをしようか。ウイウイ、スニッジ、レティ。
この世界のどこかに、死霊都市ニブルヘルという場所が在る。とても危険な場所だけどね。
そこを通り抜けた所にオレの神殿が在る。そこにお前達への贈り物を隠しておくよ。
いつか、それを見つけられたらお前達の勝ちだ。そしたら……』

「最後は何て言ったか思い出せない。不思議なことに3人共同じなんだ」

「ウイウイ……？？」

「プニ神ってさ、男の子の事をなんかよく解らない名前で呼んだりするんだよね。」

「それホントに神様なの？」
そもそも神様が子供と遊んだり、変な名前で呼んだりするものなの

！？

「間違い無い。俺が１９になったその日に、忘れていたこの記憶を３人共思い出したんだ。
俺の親父からも、これはプニ神の啓示で間違いないって言われてる。
それで旅に出たってわけさ、啓示に従ってね」

「死霊都市ニブルヘルか、聞いた事は無いな。
この世界のどこか、ってずいぶん広いけどアテはあるのか？」
さすが物語り大好きのジルとしては興味津々だね。
神様からの啓示で危険な場所へ宝物を探して旅をするってシチュ、好きそうだもんね。

「有るといえばある。無いといえばない」
ジルとリアラはもう、先を聞きたくて仕方ないらしい。早く早くと瞳が言っている。

「実は初代の巫女姫様、ああ、俺達プニ神を崇める者の最高司祭は巫女姫と呼ばれる方で、
代々女性が務めているんだが、その初代巫女姫様の日記というか、手記が在ってな。
その手記には、なんとプニ神と一緒に暮らした日々、その時の事柄が書かれて居てな。
その場所は地下神殿として描かれているんだ。そして、やがて巫女姫は大陸を横断して
今のプニ神総本山の場所へと旅をなされたんだが、その記録を遡ってくと、どうやら大陸
の北西部にその地下神殿があったようなんだ。だから俺達はここに

来たのさ。
地下神殿というからには地下に在るんだろうし、なら死霊都市には雰囲気合いそうだしな。
まぁね。最初からここまで解ってた訳じゃないし、途中途中で情報を集めながら旅してたからさ、ここに辿り着くまで6年も掛かってしまったよ」

「は～、なるほどだからこのアイゼンワードにその地下神殿があり、そこに神様が隠したアンタ達への贈り物があるかも、と？」

「ああ、俺達はそう思ってる」

「僕はなんと言っても神様からの贈り物が気になるしね、今からワクワクするよ」

「ウインは啓示で、スニージーは贈り物目当て。あたしはただもう一度逢いたいだけかな、お父さんに。女性だし神様だけどね。へへ。」

「素敵ですね。けれど御期待に添えず申し訳有りませんが、私は聞いたことが有りません。
地下神殿なる物についても、死霊都市についても。ジルとファリナはどうですか？」

「私も無いな。もう少し手がかりは無いのか？」

「わたしはもっと東からこの国へとやって来て、まだ2ヶ月経って

ないからねー」
わたしは肩をすくめて見せた。

「そうか。手がかりって言えるかどうかは解らんが、その場所に関係する話が手記の中に
出てくるんだが、地下神殿に関係しそうなのは、それだけなんだ」
そう言ってウインゾフィーは古い日記帳みたいな物を懐から取り出して皆に見せる。
あれが初代巫女姫とか言う人の手記なのだろう。

「ナイアガラってのが何なのか知らないが、この辺「ブフォッ、ゲホッゲホッ」どうした？
リアファリナ？」

ううっ、ビックリして果実ジュースが変なとこに入っちゃった。むー涙が滲むよー。
ウインゾフィーの傍に歩いて行き、手元の手記を覗き込む、
紙は比較的新しい物に書かれている。おそらく写本なのだろう。

『今日はプニが変な出入り口を創ってた。そもそも自前で飛べるし、瞬間移動すら自在に
こなせる神のくせに何であんな物を使うのはさっぱり理解出来ない。
ナイアガラを割って
飛び出すのがロマンなんだ、とか言っていたが私には神力の無駄遣いにしか思えない。
そんな物を創ってる暇があったら……』

「……この辺りに大きな滝なんてあったっけ？」
わたしはジルとリアラにそう問い掛けた。

「大きな滝……有りますよ、ちょっと遠いですが、この国の観光名所ですね。
帝都の北を流れるゼシャール河を半日ほど遡ると2つの川に分かれます。
北側の本流をさらに遡って、8日ほど馬車で行くとザワール湖に着きます。
ザワール湖の出口は西と南に2つあって、南は今言ったゼシャール河へ繋がる河です。
いま一つ、西の出口は直接海に流れ込む河なのですが、海に流れ込む所がグランザールと呼ばれている巨大な滝なのです。幅が約２００ヤンテ、高さが１００ヤンテほどですね」

「そりゃ大きい。リアファリナ？　貴方はナイアガラって物が何なのか知ってるようですが、その滝がそうだと思われるのですか？」
魔術師のスニージーが聞いてくる。
ん～。他人様の宝の場所見て、かすめとる趣味も無いし、素直に教えるとするかな。

「わたしが知ってるナイアガラって言うのは、ここことは違う遠い場所にあるやっぱり巨大な滝の名前よ。だから、そのグランザールって滝が目的地の可能性はあるかな。

本物のナイアガラは人間には絶対辿り着けない場所にあるから、そっちじゃないのは確か。」
異世界の滝だなんて説明出来ないし。

見るとウインゾフィーが両手でガッツポーズをしている。
「よぉっし。6年目で初めてだ!!　これほどハッきりと目的地の情報を得られたのは!!」

「乾杯だよっ　ウイン!!」
「そうだそうだ!!　プニ神に!!」
「やったね」
「貴方がたの幸運に」
えらい盛り上がってるなぁ。ジルとリアラも場の雰囲気で一緒になって盛り上がってる。

いーなぁ。いや違う!　いじけてやる。これも違うか。
むー。トゲエルフを置いてけ堀にするとヒドイよ?

「……それじゃ、神様に危険と言わしめた死霊都市を抜ける算段はついてるんでしょ??」
とたんに盛り下がる3人組。ふっふっふ、ザマをみ。

ウインが頭の後ろをかきながら、
「そっちは全然まだだ。さすがに俺達も3人じゃ無理だろうとは話しているんだけどね。
プニ神が危険だって言うからにはかなりヤバイ事はもう間違い無い。
俺としては、腕の立つ前衛がもう一人、死霊相手だから『鎮魂』が

使える神官が一人、
さらに俺達3人組みに足りない支援魔法を使える魔法使いを一人、
探したいんだけどね。
なかなか腕も立って、信義も置ける人物となると出逢えない……もん……だ……な？」

ん？　んん？？　すごく嫌な予感がする。

「なんだろう？　あたしそんな3人に心当たりありそうな気がする」
アンタは黙ってな！！　ダークエルフ。

「やっぱり気が合うね、レティ。私もそんな気がしてるんだ。」
気のせいだよジル。

「凄い偶然ですね。『退魔』も『解呪』も『聖光』も『霊斬付与』も使えたりしますよ。」
悪霊払いも、呪い返しも、神の御威光も、対死霊追加ダメージも今は忘れてちょうだい！！

「これが縁という物なんですねー」
そんな縁は要らないヨ！！　スニージー。だから神様関係はイヤなんだぁぁぁぁぁぁああ

「コホン。どうだろう？　我々「冗談じゃないね。ダメダメダメ、
ダークエルフとなんざ
一緒に行けるわけなんでしょうが！！」　レティを悪く言わないで

くれ。そして、そこを
なんとかならない物だろうか？」

「ぜったい、ダ「ねぇ、ジル。これでお別れなんて寂しいよ。折角出逢えたのにさ。
あたしも、なんて言うかジルのこと妹みたいに思えて来ちゃってさ。
リアラのことも、
同年代の女の子とこんなに長く話せたこと、これまでに無かったんだ。
だからさ、一緒に行こうよ、ぐすっ　え～～ん」　おいコラ、嘘泣きすんなっ！！」

この腐れダークエルフめ、ミエミエの大根芝居しおってからに！！
　って、

「「そうだよね（ですよね）、これっきりなんて寂しいよ（ですわ）」」

ジルもリアラも騙されてるヨ！！　しまったぁぁぁぁあああああああ
貴族のお姫様と司祭様は詐欺に耐性が無かったのかぁぁぁぁあああああ

「それじゃ、これで決まりだねっ　リアファリナはジルとリアラを護衛してるんだろ？
一緒に行くよねっっ！？」
ダークエルフの銀の瞳が光った気がした。

わたしは頭を抱える。どうしてトゲエルフたるこのわたしが、肌も

腹も黒いエルフと一緒
せにゃならないのよーーーーっ

29ページ目　なりゆきでダンジョンパーティー（後書き）

ジルとリアラの一人称が間違ってた事に気付いた。
〇：私
X：わたし
でも、小説って投稿した、その時その時のナマモノだから良いのであって、
これくらいで直しちゃうのは、ナンカ違うなあと思うため、あえてそのまま
にシトキマス。気付いた方は脳内変換よろしゅー

３０ページ目

３０ページ目

結局、あの３人組とパーティーを組んだ。
ダークエルフと一緒に行動なんて出来るものか！！　と悩んで居たものの。
ここは大人になってポジティブ・シンキングで行こうじゃないか。
そう、アレだ！！　アレですよっ

同郷のエルフ達に見られたら『ダークエルフの仲間になるなんて！』とさぞかし煩いことを言われるだろうけれど、正直そんなことはどうでも良いのだ。
いや、そんな些細な事など、もはや気にしている場合じゃ無いのだ。

初代巫女姫の手記にはこう記されている。

『今日はプニが変な出入り口を創ってた。そもそも自前で飛べるし、瞬間移動すら自在にこなせる神のくせに何であんな物を使うのかさっぱり理解出来ない。
ナイアガラを割って飛び出すのがロマンなんだ、とか言っていたが私には神力の無駄遣いにしか思えない。
そんな物を創ってる暇があったら……』

ナイアガラが、あのナイアガラならば、プニ神は向こうの世界を知っていることになる。
いやさっ　神ならば知ってて不思議は無い、むしろ当然??
ならば、プニ神の意図は明らかだ。これはわたしに対する餌なのだ。

『ナイアガラを割って飛び出すのがロマンなんだ』

プニ神が、わたしに餌を撒いてまで今回の死霊都市クエストをウインと共に参加させたいのであれば、よ〜〜しっ、行ったろうじゃないか!!

神の思惑に乗ってしまうと判っていても!!　無視出来ない。い〜〜や、これを無視したなら自分のこれまでの人生を否定するのに等しい!!
アレが報酬ならば、風竜『イチゴショート』からのミッションも同時に達成出来るカモ?
そんな思惑もある。なぜならばアレだからだ。
むしろ、ここまで言って報酬がアレじゃ無かったら暴れても良い所よねっ!?
うふふふふふ。

アレでさえあれば、どんなにショボくてもわたしの魔術式で何とかなる!!
自分でゼロから創るのは知識不足で無理だけど、既に在るなら話が早い。
みてろ〜　イチゴショートめ。ギャフンと言わせてやる。

そこっ　どこがポジティブシンキングだ?　唯の物欲じゃね〜か!

！　とか言うなっ

風竜『イチゴショート』
世界が今の形となるより遥か昔から存在し、神が世の理を創るよりも早くから世界の大空
を我がもの顔が飛び回り、時には嵐を呼ぶ暴君となり、時には雲を呼び恵みの雨を降らす。
背中の竜の翼を広げれば太陽を隠し、姿を見た者には恐怖を、声を聞きし者には魂の死を、
ありとあらゆる獣の頂点に立ち、その力は神にも匹敵する。
存在そのものがエネルギーの塊であり、それゆえ、圧倒的な存在力で真名を唱えることも
叶わない。

ってむか～し聞いた気もする偉大な存在でさえも、死して今や唯の頭蓋骨である。
ただし、このガイコツ。死んでるくせにやたら元気だし態度も大きい。
先だっても緑の宝玉を自由に使って良い代わりに条件を言い渡されている。

そもそもこの風竜とわたしが契約出来たのはひとえに運が良かったためだ。
死んでも滅びない竜とは言え、死ねば自慢の翼で自由に空を飛ぶことは出来なくなる。
それが悔しくて死ぬのを先延ばしにしていた時に、わたしと出会い、

死んでからも自身が
満足出来る方法で大空を翔けることを、わたしから得られた情報で
可能ならしめたからだ。

自前の翼と竜の魔力で飛ぶ事を極めた風竜であるがゆえに、最小限
の力場を創り、風の力
で揚力を得、風圧を感じながら飛ぶなどそれまでに無かった飛び方
であり、新しい飛び方
を得て、退屈な死後の永い時間の暇つぶしが出来る知恵を与えたが
故に、一種の気まぐれ
で契約を結んだに過ぎないのだろう。

そうして、航空機の飛び方と理屈を知ってる範囲で教えたのだが、
熱く語り過ぎたからで
あろうか？　死んで他に何もやる事が無いイチゴショートは、わた
しが教えた一つ一つを
ご丁寧にも完璧と言って良いほど繰り返して覚え込んだ。
各種機動法についてのウンチクは感心を通り越して呆れるくらいだ。

そのイチゴショートから出された条件、それは、

『新しい飛び方、もしくは、空を飛んで楽しいと思える何かを見つ
け出して来ること』

であった。
どうやら、わたしが隠している秘密の機動法がまだ在ると思ってい
るらしい。
そんな物は、ない。

考えて見て欲しい。イチゴショートの推進力は魔力による力場なのである。
わたしが知ってる航空機の機動法は推力を偏向させるスラストベクターと呼ばれる機構とカナード翼により高度な機動を行うものだが、力場で飛ぶのであれば、飛行方向に対して一瞬とはいえ完全に後ろを向いて飛ぶクルビット機動法ですら、イチゴショートが求める新しい飛び方とは認められないに違いない。
ＶＴＯＬのように飛行方向と全く異なる方向へエンジン推進力を引き込み、飛行ベクトルを強引に変更するベクタリング・イン・フォワード・フライト機動法を教えたとしても、今更それが何なの？　というものだろう。

そもそもフライト・エンベロープの限界が無いヤツに、どんなオモシロイ飛行法が在ると言うのだろうか！？　いや無い。

そんな訳で、イチゴショートから出された問題の達成難易度はかなり高く、思いつく物が皆無で、どうしようか悩む日々が続いて居たのであった。
過去形である。

さて話は変わって、レティアラがわたしを襲った一味では無いと確

信出来ることがあった。

宿場町で次の日、報奨金を受け取るまで暇だからと、余った時間で皆で鍛錬を行ったのだ。
わたしはまだ疑っていたので鍛錬に参加せず、見守っていたのだが、そこでレティアラはリアラ相手に体術で挑み、関節技でリアラを押さえ込んだのだ。
その時の技が、腕がらみとか、チキンウィングアームロックと呼ばれる技だったのだが、
ジルに技の名前を聞かれたレティアラは、技の名前を『キムラロック』と答えたのである。

木村という人がグレイシー柔術の使い手をこの技で破った事から、この技をキムラロック
と呼ぶようになったと聞いている。

プニ神がわたしをこの3人組と一緒に行動させたいのは巫女姫の手記で判っていた事だが、
だからと言って、ダークエルフがウインの幼馴染にして、暗殺者一味では無いという証明
にはならないとも思っていたのだ。
極端な事を言うと、ウインとスニージーを洗脳もしくは催眠術や魅了と言った精神系魔術
を駆使すれば、仲間と誤認識させて誤魔化す方法などいくらでもある。

だが、レティアラは体術をプニ神に習ったと言っていた。それが証明されたのだ。
ちぇっ。

何年も前に技の名前を教わっていたのであれば、レティアラがプニ神から技を習った話は
本当なのだろうし、この辺りのダークエルフ一族と関わりを持たないなら暗殺者一味では
無いと信じても良いのだろう。
まぁ神様関係の3人だと知った時点で、心のどこかではこうなる事は判ってたけどねっ。

そして、ここはアイゼリアのよろず紹介所です。
一仕事を終えたので、おやじさんへ報告と頼んでた調査結果と、伯爵への報告と死霊都市
の情報収集を兼ねて戻って来ました。
ダークエルフのレティアラは宿に置いて、5人で店に来ています。

「よぉ、リア。ゴブリン退治は無事済んだようだな。ご苦労さん。
そっちの二人は新顔だな？　この国のよろず屋に登録するかい？」

「ただいま。おやじさん。そうよ、この人達の登録をお願いね。今は居ないけどもう一人
居て、わたし達と合流して6人組みパーティーを組んでるからそっちの手続きも宜しく」

「そういう訳で宜しく頼む。これが以前の紹介所で書いてもらった紹介状だ」

交渉や事務仕事はウインの役だ。
彼は3人組だった時からリーダーという役割を任されていた。
確かに剣の腕は立つし思い切りも良いし、性格も良いのだが、交渉役をこれまで任されて来たのは、それが雑用だからだ。

人間の男で、真面目で人が良い神官で、腕っ節もある。
見た目は爽やかイケメン系だがガタイも大きいし侮られる事も無い。
プレートアーマーを着込み、剣と大盾を持つ剣士にワザワザ喧嘩を売る馬鹿も居ない。
ほらね？　面倒そうな対人の雑用を押し付けられる条件揃ってるでしょ？？

「素人じゃなさそうだな。リアと組んでるとなると即戦力と思って良いな？
助かるぜ。なにせ魔王軍との戦いで腕の良いヤツラはあっちに取られちまってるしな」

「期待してるとこ悪いけど、準備出来次第また旅立つから依頼は受けられないわよ」
そう言うと、おやじさんは一瞬だけ残念そうな顔をしたが、直ぐに立ち直り、

「ま、それはしゃーないな。何か珍しい物を旅先で入手出来たら高く買い取るぜ」
ニヤリと笑って、あまつさえウィンクまでしてくる。先ほどの残念そうな顔を取り繕っているつもりらしい。

「それと、おやじさん。ここから北のグランザールって滝の周辺でおかしな事が起きてるって話を聞いたこと無い？探し人が居るんだけど、その人が居る所では色々な騒ぎが起きてるって言うのね。グランザール周辺の騒ぎとか情報が在れば売ってちょうだい。」

ウインもスニージーも耳ダンボだ。

「グランザールねぇ？　特に聞かねーなぁ。」

ガッカリするウインとスニージー。なんか面白い。

「あそこは自殺者が多い所だからなぁ。時々幽霊騒ぎが起きるくらいか。
あ、そう言や、河が滝になって落ち込むちょいと手前に中州があるんだが、その中州にはプニ神の祠が在って、祠の先は洞窟になってるらしい。「この先危険」ってプニ神直筆の立て札が立ってるって事で有名で、知る人ぞ知る観光名所にもなってるらしいぞ。
時々冒険者が入るんだが戻って来ねーとこ見ると、触らぬ神に祟り無しってヤツだわなぁ」

「ふ～ん。札立てとくなんて変な神様ね」

「そんなトコかな。売るほど情報は無いな。お、そうだ勇者様の話だけどよ」

「ん？」

「リア、勇者様のパーティーは大活躍らしいぞ。勝利につぐ勝利で、先だっても魔王軍の将軍とか言うのを倒して、ヤツラの企てを阻止したって聞いたな。おかげさんで帝国の日和見連中も危機感が沸いて来たんだろうよ、このままじゃ勇者様に手柄を独り占めにされるってな。そいつらが近日中に大規模な軍団を編成して、魔王軍の要塞を攻めるって聞いたぜ」

「へー？？　でも、そう言う嫉妬心から派遣される軍団ってゼ……ううん、何でも無い」

「お、おい！！　やめてくれ、お前さんが言うと不思議と当たるんだ、洒落にならん」

わたしとおやじさんは他愛のない世間話を交わし、皆の関心が逸れたのを見て、店の奥へと二人で移動した。ここから先は聞かせる相手を選ぶ話となる。

「こないだお前さんを襲ったヤツラの面は割れたぞ。そっちは伯爵が手を打ったから気にしなくて良い」

「……ダークエルフが居たハズだけど、そいつはどうなったの？」

「そいつはまだ捕まっちゃいねぇ。だが黒幕はもう捕まっている。

分家の男爵家のヤツだ。
依頼主が捕まった以上、暗殺者は仕事を放棄して里へ帰った可能性もあるな」

「どうかしらね？」

「そっちは何か判ったら知らせる」

「頼むわね」

「それとこれは伯爵から、娘さんのこれまでの護衛代だ。それと伝言も預かってる。
娘達とは仕事抜きでこれからも仲良くしてもらえると嬉しい。だとよ」

「まだしばらくは一緒することになってるわ。そこから先は判らないけどね。
それと伯爵には、ジェラルディが将来的にも家に戻らない可能性も考えて、跡継ぎ問題は
考えておいた方が良いわよ、って伝えておいて？」

「ああ、養子でも取るかな、とか黄昏てたけどな。伯爵には伝えておくよ」

よろず紹介所を出たわたし達は、旅の準備を行いながら街でしか出来ない用事を片付ける

ため昼間は各々の都合で行動し、夜は宿に集まり準備状況を確認しあった。

ウインが、『命が掛かっているのに、実戦に出てから呼吸を合わせようと考えるのは準備不足も良いとこだ。街に居る間に連携方法を模索しよう』と言い、皆も賛成したので鍛錬しながらお互いの技や術を把握し、連携方法を決めて行った。

ボスゴブリンとの戦いで手際良く、そして熟練者の顔を覗かせたウインとスニージーだが、毎日の鍛錬の場でお互いに技を掛け合い、稽古を通して力量については大まかにだが把握出来ている。

ジルもウインという格好の練習相手が見つかって嬉しそうだった。

レティアラも、弓と体術の腕前はかなりの物だった。体術では、わたしが殴りと蹴り主体の格闘技なのに対し、殴り蹴り投げ絞め関節と総合格闘技を使って来る。

ありていに言って、わたしが鎧を脱いだ状態では相手にならず、あっさりと負けている。

いくら普段は鎧で誤魔化していて筋力を鍛えて居ないとは言え、これは悔しい！！

ここは黒歴史に半分突っ込んでいる『精霊武装』をベースに、こっそりチート化するしか手は無いようね。普通に起動したんじゃ相手も精霊使い、怒りの精霊を動かしたのは直ぐにバレてしまう。

気付かれないようにコッソリ呼び出して・・・・

運の良いヤツめ。次は覚えてろっ（注：コッソリ呼び出す方法が思いつかなかったらしい）

３０ページ目（後書き）

語句修正の理由について、一定期間を過ぎたので削除しました。

31ページ目

31ページ目

今日はグランザールへ旅立とうという日。空は快晴!!
でも、その前に片付けなければならない事が出来ました。

よろず紹介所に全員が集まって、さぁ行くぞ!!　と思った矢先のことです。
おやじさんから声が掛かった。
「ジル、お前さん宛に手紙が来てるぞ」

「手紙？」
ジルは受け取ると丁寧な手つきで手紙を開ける。
内容を一読すると、

「見てみて」
と手紙をリアラに差し出して来た。
他人のプライベートな手紙を皆で注目するのも変だし、わたしとしても「チチキトク…」
だったらイヤだなぁ、程度に考えて居たのだ。だが、この時は予想の斜め上を行った。

「なっ!?」
リアラが叫び絶句している。

なんだ、なんだ、と全員が手紙を覗き込むと、そこにはこのように書かれていた。

『リーベフェルマ家の秘密を暴露されたく無ければ、本日正午にｘｘｘへ来い。』

ヲイヲイ、イマドキこのような脅し文句で素直に従う人間が居ると思ってるのだろうか？

「何のことだか判らないけれど、我がリーベフェルマ家に敵対する意思を持つのは明らか。
出来れば片付けておきたい。」

はい。ここに居ましたよ～。
ジルは思い切りが良すぎます。

そして、パーティーリーダーのウインもその意見を採用したのでした。

「これが過去も襲撃して来た奴等だと言うのなら、後顧の憂いを残すのは気がかりだ。
ただし、この手紙を見る限り相手は準備万端整えて待ち構えているだろう。
叶わないと見たら一目散に逃げるのダケは忘れないでくれ」

だそうだ。
い～けどさ～？　もう少し悩もうよ。

そしてやって来ました指定場所。
心配性なわたしは一足先に『飛翔』で偵察に来ましたよっと。
自分の目で直接現場を確かめるのが一番だという事もあるが、相手がダークエルフなら、
光の精霊を使った『ＣＩＣ』が近寄りすぎると気付かれてしまうと言うのが一番の理由。
わたしなら気付くし、廃エルフのクソジジィは無論、里の者でも精霊術に長けた数人は
気付くだろう。ならばダークエルフも気付いて当然だと考えた。
……今度『ＣＩＣ』のカメラをステルス化しよっと。

港町アイゼリアの北北東へ１０ｋｍほど行った場所に、廃墟と化した小さな村があります。
ずいぶん昔にうち捨てられた様で、石造りの家は崩れ、かろうじて家々の壁が残っている
だけとなっている所でした。

『飛翔』と『透明化』を使って廃墟の５００ｍほど手前まで近づき、上空から『望遠』と
『探知』で敵の配置を調べる。
なるほど、探知出来る数は９名、そのうち１名は確実にダークエルフだと視認出来た。
ワインレッドのプレートアーマーを着込んだ推定戦士のソイツが、えらそうにゴロツキ風
の６名に命令を下しているのが見えた。
でも、さすがにここからでは遠すぎてダークエルフが何名居るのかまでは判らなかった。

村を中心にぐるりと一回りし、伏兵が居ないか確認したが、敵は９

名だけのようだ。
そして、他に2名フードを被った推定ダークエルフが居るのも視認出来た。
これで3名のダークエルフが敵に居ることが確認出来たわけだ。
この人数を見る限り、こちらが6人パーティーなのも知っているようだ。

「ふ～ん？　変ね」

こちらの人数を把握しているのであれば、6人のそれぞれの職業も知られていると思って
良いだろう。それなのに彼等の態度と来たらどうだろう？　あまり緊張感が感じられない。
魔術師と精霊使い、偵察まで居るパーティーを相手取ってる割には余裕じゃないの？
彼等は、自分達の策によほどの自信があるのだろうか？？

そして、

「アレって一体何だろう？」

廃墟の南側、村の入口と思しき場所に黒い大きな岩のような物が在った。
黒曜石の様な？　磨かれた感じの岩なのだろうか？
廃墟に似つかわしく無い、そこだけ周りの景色から浮いて居た。

「ね～？　だからさ～、ここはわたしの長距離大規模攻撃魔術式で一発ドカ～ンとさ。
村ごと跡形も無くフッ飛ばしちゃえば良いのよ。そうしよう～よ～」
数ｋｍ離れたパーティーに戻り、わたしは見てきた敵の状況と、自分の意見を述べた。

「う～ん、出来れば僕もそうしたい所ではあるんだけどね？」
ウインは隣のジルを見る。

「ダメ」
ジルはにべも無い。

「我がリーベフェルマ家には暴露されて困るようなやましい事など一つも無い、とは言え、
そうと知った以上は確認しなければならない。万が一、そういった事実が在った場合には
彼等がどこからそれを知ったのか？　確かめて二度とこのような事にならないよう、適切
に処理しなければならない。私にはその責務がある。
そのような訳だからすまない。力を貸して欲しい」

「もちろんよ～っｖ　あたし達は一つのパーティー、家族のようなものじゃない！！
まかせてーっｖ」

レティ、アンタのその根拠の無い自信はどっから湧いてくるんだ！？

「廃墟とはいえ、開けた空間なんですよね？　それならレティの独壇場ですよ」
わたしは横に立ったスニージーを見上げる。

そう、この人ってば魔術師のクセにひょろ長くて１９０ｃｍはありそう。
ウインも同じくらいの背の高さなんだけど、向こうはガッチリした戦士体型。
スニージーはひょろひょろのモヤシみたいなのだ。

「そうなの？」
確かに鍛錬で見せてもらったレティの弓の腕は大した物だったが。

「屋外では僕もウインもレティに比べれば役立たずですよ。敵が接近するまでにレティが
全員倒しちゃうんですよ、今回も同じようになるんじゃないかな？」

「褒めたって何も出ないよ／／／／／」
そう言いつつ赤くなるレティ。
む～。ひそかにレティってば女子力あるのよね。見てると、しぐさが一々可愛いのだ。
比べて、ジルはタカラズカを見てる様だし、リアラは委員長みたい。

「そうは言っても邪神を奉じる一族が相手なのですし、敵に精霊使いや神官は当然居ると
想定しておくべきで、決して油断は出来ません」
だよねー。リアラはさすがに慎重派だ。

「リアラの言う通りよ。今はわたし達の周りには『探知』で引っかかる怪しい者は居ない
けど、居ないハズが無いの。どうやってか知らないけど『探知』から逃れてる。わたしは
そう考えてるの。どこかからわたし達を監視してるハズだって。」

「……そうすると、レティとスニージーの先制連携攻撃の直後に僕が突っ込むからリアラは回復を頼む。先制攻撃でザコはほぼ倒せると思ってるから、突っ込んでダークエルフの後衛二人を先に倒したい。ジルは手薄になったこちらの後衛陣の護衛と、見えない監視者からの奇襲を警戒してくれ。ファリナは支援魔法と敵が魔法を使って来たなら臨機応変で頼む。それと今回は僕が後衛二人を手早く倒せるかが重要だから、攻撃速度上昇の魔法を最初から掛けて欲しい。他に何かあるかい？」

「ジル、こないだ練習した連携技も忘れないでね」

「解ってる。それと何度もお願いするけど、敵のリーダーか、少なくともダークエルフの一人は必ず生かして捕まえることを忘れないで欲しい」

「はい、はーい」

レティはよほど自信があるのだろう。これまでにもこう言った敵拠点攻撃の経験があるのだろうか？　自然体で返事をする。ジルもレティと練習していた連携技が決まれば自信に結びつくだろう。

「……先制攻撃で撃ち漏らした人間は、わたしが追い討ち掛けるから。敵はダークエルフだけと言って良いだろうけど、奴らだって馬鹿じゃない。勝てると思ってるから戦おうとしてるのだろうし、くれぐれも伏兵と罠には注意よ」

ゴロツキ風６人はわたしから見れば戦力外。如何様にでもなるだろ

う。
やはりダークエルフをどう素早く処理出来るかが勝負の分かれ目になるに違いない。

廃墟の村入口が見えて来た。村を取り囲む石壁の外側に黒曜石の大岩が見える。
既に効果が持続できる支援魔法は全て実行済み。準備を整えた状態で村に近づく。

「探知によると村の一番奥の廃屋になっている壁の向こう、９人集まっているわ。
まだ動いて居ない。ん？　待って。６人動いた。廃屋から出てきたわ。表に出て来た所で止まった。……そこから動きが無い。どうやらこちらの到着を気付いてるようね。
今は廃屋の外に６人。中に３人よ。ここからおおよそ２００ヤンテね（約１８０メートル）」

「すでに気付かれてるなら５０ヤンテまで近づこう。そこから声を掛けて相手のリーダーを確認する。向こうが返事を返すなりしてリーダーらしきダークエルフを特定したら戦闘開始だ」

ウインはそう言って先頭に立ち村の中に足を踏み入れる。
その隣にはレティが並び、スカウトの目と精霊の力で罠発見に注意

を払って居るようだ。
その後ろにリアラ、スニージー、ジルと続く。
わたしは、

「ん～　どうしても、あの黒曜石の大岩が気になるのよね」

それならば、こうしちゃえ。「ポチっとな」

「この先だな」
ウインが敵の居る場所まで、通りを曲がれば直ぐの所でいったん停止してそう声を掛ける。
ここから敵まで約５０ｍ。
その時、

「隠れてても無駄だ、曲がり角を出た所で止まれ」
敵の方から先に声を掛けて来ました。

「ちっ、良いか？」
ウインはそう皆に声を掛け一通り顔を見渡すと
「行くぞ！！」

最初にウインとレティ、真ん中にスニージーとリアラ、最後にわたしとジルだ。

「手紙を受け取ってやって来「……」「ザタンよ御身に生贄を『サモン・スクリーム』」

くそっ　やるぞっ」

どうやら問答無用なのは相手も同じで、最初からそのつもりだったようだ。
ウインの口上を聞こうとする素振りすら見せず、ワインレッドのプレートアーマーを着たダークエルフが隣に立つフードを被った男に無言で頷くと、フードはイキナリ邪神の魔法を唱えて来た。

土中から大量のスケルトンが立ち上がって来る。骨戦士の只中に飛び込んだ形だ。
おそらく５０体は居るだろう。フード男はネクロマンサーだったようだ。
『『『『『　キャハハハハハ　』』』』』耳障りな笑い声を上げながら骨が迫ってくる。
正面から人間４人がこちらへ駆け出し、壁の向こうからはさらに敵の増援三人が飛び出して来たのが見えた。

わたしはすかさず『ヘイスト?』『ルーンシールド?』をウインとジルに掛ける。
レティは慌てず矢を2本取り出し、一本目を正面の敵中央に打ち込む。
放たれた矢には燃え盛る炎が纏わり付き、それが鳥の形を成しながら敵を蹴散らして行く。
レティの得意技、弓と精霊術の合体スキル『ファイアーバード』だ。
すかさず二の矢を放つ。『ダストアロー』。
放物線を描き敵を貫通後、地霊を操って空中に大量の粉塵を舞い上げ視界を妨げる技だ。

そこへスニージーの範囲攻撃が撃ち込まれる。レティとの連携連続技。
「ナーシェル・バーライクシェバー・ダーシャン・フラーテスト・リ・オークル
破裂の光よ、天空より魔力の炎を降らせ死を撒き散らせ『クラスター』」

一つの光が８つに分かれ、それぞれがさらに８つに分かたれ直径３０ｍの大地に降り注ぐ。
一つ一つの光の爆発力はそれほど大きくは無いが、計６４個が狭い範囲で同時に爆発するのである。その熱量と爆風はかなりの物。

すかさずレティが三の矢を撃ち込む。炎と風と大地を操る爆発の技『エクスプロージョン』
先のスニージーの『クラスター』の爆発で掘り起こされた大地の岩を巻き込みながら爆発するので、単独で使うよりも凶悪な威力を発揮する。

さらにスニージーが追い討ちを掛ける。
「『アシッド・ボルテックス』」

プニ神の信徒は、信徒にさえなれば特定のスキルを一つだけ授けられ、それを行使出来るようになるらしい。プニ神の神聖術は神官だけの専売特許では無いというのが面白い。
スキルはある程度自分で選べると聞いた。
スニージーが選んだのは空中に浮かぶ酸の渦巻きである。威力はさほど強い物では無いが

『クラスター』や『エクスプロージョン』で傷ついた敵の傷をさらに深める嫌がらせ効果
抜群の連携連続技となる。
そして、なんとプニ神は「大切なのは敬う心。長ったらしい祝詞なぞ不要」と言ったとかで、神聖呪文のキーワードだけ唱えれば術を発動してくれるんだって。便利～

その間、わたしとジルはそれぞれサイドの敵を『闇爪』『ソニックブレード』で蹴散らし、
ウインは『エクスプロージョン』が炸裂した後、ダークエルフへ向かって駆け出し、途中で進路上に居たスケルトン一体を盾の一撃で吹き飛ばして、ダークエルフの後衛を狙う。
その直後『アシッド・ボルテックス』に巻き込まれたが、傷ついてさえ居なければ大したダメージにならないと知っているからだろう、ウインの行動に躊躇は無かった。
ダークエルフとわたし達の間は、粉塵が舞い上がり、酸の渦巻き在りで視認出来ないほどで、当然特定の敵相手に魔法攻撃を飛ばせる状態では無かったし、味方への回復すら困難な状況ではあったが、神官戦士であるウインは自分で自分を癒せるので多少の無茶が効く。

だが、

「させん」

敵リーダーはそう言うと、ウインと敵後衛の間に割り込み
「偉大なるザタンよ、我等に加護を与えたまえ『デバフ・フレイム』」
そう邪神の呪文を唱えると、敵リーダーが暗い炎に包まれる。

ウインは敵リーダーを回避して後衛に向かおうとしたが炎が噴出して行く手を阻まれる。
そのまま斬り合いとなった。リーダーの鎧、あれも魔法の鎧のようだ。
そして全身から吹き上がる炎がウインを苦しめている。
それにどうした事かウインの『ヘイスト?』が本来の素早さ効果を発揮出来て居ない。
１８倍の速さとなるハズなのに、見た感じ2倍程度の速さだ。
どうやら炎は継続ダメージを与えるだけでは無く、ウインの行動・能力にマイナス効果を
及ぼすようだ。
さらに敵リーダーの鎧にもヘイスト効果があるらしく動きが早い。
能力を削がれたウインと同程度よりちょっと速い程度で動き、ほぼ互角の勝負となってる。
リーダーの武器は細剣と方形盾、スピードでウインを上回るが、力でウインが押している。

その時だった、

『ぎゃいいいいい～～ン』

わたしが意識するより速く、生きた鎧の自動防御が働き斜め後ろから突き込まれた短剣を弾いていた。

振り向いたわたしが視認出来たのは、ワインレッドの革鎧を着た短剣二刀流ダークエルフ。

さらに2撃、3撃目と短剣をわたしに突いて来るが、そのどれもが生きた鎧の自動防御に弾かれた。4撃目を加えようとした時に、ダークエルフに気付いたジルが斬りかかったが、

『ヘイスト?』付きジル渾身の刃を鮮やかに避けた!!

敵もヘイストを使ってるらしく、続けてジルが斬りかかるもある時は短剣で剣を受け止め、

ある時は受け流し、また、刃を避け続ける。

「いった〜い」

わたしはそう呟きつつ、自分の左肩に『回復』を掛けた。

最初の一撃目を避けるための自動防御で痛めたのだ。後で『再生』が必要だろう。

それだけ、わたしの意志とのリンクも許さない緊急事態だったという訳だ。

ジルは奇襲して来た革鎧ダークエルフと激しい攻防を続けている。

互いにヘイスト状態の彼等は周りからの手出しをしようが無いほど目まぐるしく動き回る。

革鎧はかなりの使い手らしく、また一瞬ではあったが短剣に毒が塗られているのが見えた。

ジルの魔法の鎧は外部からの毒を無効にする分泌物を出すため、毒に関しては心配無用だ。

だが、どうやらダークエルフの革鎧も魔法の鎧らしい。

ジルの魔剣が発するわたしが授けた『ソニックウェーブ』は風の追加ダメージ効果を持つ。
斬撃を避けても剣の周りに発生している高速振動する空気のダメージからは逃げられない
ハズだが、革鎧ダークエルフの動きは衰えることが無い。
どうやらあの革鎧は風系魔法付与された鎧のようだ。風の護りと高いヘイスト効果を付与
されているのだろう。
そしてリーダーの鎧は炎系魔法付与というわけね。

わたしは粉塵で視認困難な状況でも『パーティーセット』のメンバー位置探知で支援魔法
をジルとウインへ飛ばしつつ、粉塵に比較的影響を受けない精霊使いの目で戦況確認する。

最初にスケルトンを召還した敵ネクロマンサーは、次にゴーストを大量に召還して来た。
宙に浮かぶゴーストは『『『『『　ウラ～～　』』』』』と不気味な声を上げ襲って来る。
加勢に入った敵3人のうち、人間二人は状況にビビッタらしい。まごついていた。
範囲攻撃で人間4人は既に無力化され、周りは大量のアンデットである。それも当然か。
残った最後のフードは予想通りダークエルフで邪神の神官だった。

リーダーが傷つくと、すかさず癒しを掛けている。ウザイことこの上ない。

スニージーは冷静に周りのザコを次々と魔法で片付けて、スケルトンはほぼ壊滅出来たが、
新たにゴーストが呼び出されたのを見て、魔法の使い方を変えて戦っている。
物理範囲攻撃主体だった物を、単体魔法で魔力の塊で攻撃する術に切り替え、的確に倒すことにしたようだった。どうやらスニージーはゴーストへ効果的な魔法の手持ちが少ないようだ。

代わってゴースト退治の主役はリアラだ。
「ミラー神よ、不浄なる死したる者達に沈黙の掟を下したまえ『ターン・アンデット』」
たった一度の祈りで半数のゴーストを無に帰し、残りも逃げ出している。司祭様万歳!!
精霊術は使えないけれど、精霊使いの目を持つリアラは粉塵の中でもウインへ『癒し』を
的確なタイミングで掛けている。

もっとも、粉塵を物ともしないのは敵ダークエルフ達も一緒だ。

と、ジルと戦っていた革鎧ダークエルフが突然消えた！　『探知』にも引っかからない。

いや、数瞬後、少し離れた場所に姿を現すと後衛の二人へ叫ぶ。
「何をやっている！　早くアレを呼べ！！」

やっぱり『探知』に引っ掛からないあの術？　で、わたし達を監視していたのだろう。
悔しいなぁ。絶対後で秘密を解き明かすわ！　と心に秘めた。

革鎧に答えたのは敵の神官。

「さっきからやってるんです。なのに……くそっ、ダークミスリルゴーレムさえ来れば、
こんな奴等は直ぐに蹴散らせるのにっ」

ダークミスリルゴーレム！？
きゅぴ～～～ん（☆＿☆）

これは、ぐずぐずしていられないっ　あの神官の口を塞いでやるっ
『闇牙』

しかし、敵リーダーの暗い炎が噴出して『闇牙』から神官を防御してしまう。
「無駄だ、我が神ザタンの加護は破れん！」
ウインと斬りあいながら、敵リーダーは得意そうに言う、キーーーーっ、ムカツク！！

ザコ退治は予定通り進んだが、本命のダークエルフ達はやっぱりと言うか予想外に強い。
というか、チートな鎧を持ってるなんてズルイ。

……相手も同じことを思ってるのかしら？

ウインは敵の炎ダメージを受けながら、自分より速く動く敵リーダーと切り結んでいる。
リアラから回復を貰っているとは言え、凄い胆力と集中力だ。
そして円を描きながらリーダーとの互いの位置を上手く入れ替えた。
その瞬間、

「『バインド・トラップ』」

ウインは神官である前に一人の信徒だ。プニ神から授けられた特殊スキルを一つ保有する。
それは、地面に足で描いた円の中に居る人物の移動を一瞬拘束する神聖術だ。
敵リーダーの邪神の炎は精霊術は物ともしないが、神聖術まで無効化は出来なかった。
ほんの一瞬、リーダーの動きを奪う。

ヘイスト効果を持つウインにはその一瞬で十分だ、一気にリーダーから距離を取った。
そして本来の『ヘイスト？』の効果を取り戻したウインの目の前には敵神官が居る。
敵リーダーが慌てて駆けつけようとした時には、袈裟懸けに切り捨てていた。
ウインは続けて敵ネクロマンサーを斬ろうとしたが、これは敵リーダーが防ぐ。

敵革鎧はそれを見て、
「魔王軍に参加する大事の前の小事でっ。このままでは族長に顔向け出来んぞっ」
そう言うと、駆けつけたジルと再び斬りあい始める。

ネクロマンサーは神官が切り捨られ「ひ～」と言いながら、ウインから逃げて魔法を唱えようとしたが、ウインから必要以上に逃げようとしたせいだろう。リーダーからも離れてしまった。

レティはそれを見逃さなかった。矢が放たれる。
それでもネクロマンサーはさすがに素早いダークエルフだけあり、致命傷となるのはギリギリで避け、腕で矢を受けた。が、
「……」
口をパクパクするも声が出せないようだった。もちろん呪文も唱えられない。
レティの精霊弓術『サイレンス・アロー』だ。もはやネクロマンサーは戦力外だ。
それを見て取ると、続けてレティは「ジルっ」と一声叫び、矢を今度は敵革鎧へ放つ。

だが、革鎧は例の姿を消す術？　で矢を避ける。
避けられた矢は敵リーダーの後方の地面に突き立った。

敵リーダーが叫ぶ、

「ここまでだっ、撤退するぞ！！」

それを聞いた革鎧は、またもや姿を消し、そして一瞬後、リーダーの傍に現われる。
ジルは逃がすまいと革鎧を追い駆け走りだす。
革鎧はその瞬間を狙っていたのだろう、持っていた毒の短剣二本を続けざま投げた！！
狙いはリアラとスニージー！！

ジルは走り出した瞬間だったので、投げられた短剣に反応出来なかった。

でも、

「させないっ　『イージス』」
わたしの無敵にして不可視の盾が短剣を弾き飛ばす。

わたしの『イージス』は厳密に言えば魔力の盾でも無ければ、精霊の盾でも無い。
魔力によって変質された空間を通過する時『エーテル』は運動を妨げられ、衝撃波が発生
し、大量の特殊な荷電粒子『魔力子』を放射する。
この『魔力子』は空間では無く時間軸に対して影響を与える。
『魔力子』によって時間軸がズレた空間と、通常空間の境界線では世界との因果率が歪み、
外部からその歪みに力が加えられると、すなわち攻撃を受けると、世界は歪を修正すべく
加えられた力と逆の力を発生させる。
理論上、この盾を破れるのは世界を敵に回しても勝てる神様だけだ。

わたしは『イージス』を展開したまま、逃げようとする革鎧とリーダーに叩き付けた。
特別攻撃力を持たない唯の壁だが、不可視ゆえモロに喰らった二人は押されて後ずさる。
そこには、

先ほどレティが放った特殊神聖スキル『エクスプロージョン・トラップ』の矢が在った。
その矢が精霊術によるトラップであったなら、そこは精霊使いのダークエルフのことだ、
むざむざトラップに引っ掛かったりはしなかったろう。
だがその矢はトラップが発動するまで何の力も感じさせなかった。

『ズガ～～ン』
爆発としては小規模だったが、思わず後ずさった足元での炸裂である。
姿勢を崩した革鎧とリーダーは、ジルとウインに討ち取られた。

こうしてダークエルフとの戦いは終り、残ったネクロマンサーは呪文が唱えられないよう
拘束術に長けたレティに猿ぐつわを咬ませられ縛り上げられる。
二人残っていた人間達も降伏したので同じように拘束してある。

「みんなご苦労様でした、街に戻って父上の配下に引き渡しましょう。
後のことは父上が取り計らってくれます。レティ？　戻りましょう？」

レティはダークエルフの死体に背を向け、村の入口の方へ向いて、
俯いて地面をボンヤリ
と眺めていた。
「え？　あ、ああ。そうしようか」

街に戻ってリーベフェルマ伯爵配下へとダークエルフ達を引き渡し、
わたし達はそのままグランザールへと旅立った。

その夜、
思わぬダークエルフとの戦いで魔法の鎧２式を戦利品として得たわ
たし達。
祝杯をあげながら、この鎧のことを知ってるウインとリアラが由来
を話してくれる。

「これは邪神バルザタンが、高位の使徒１６人に下賜した『アビス』
の名前を冠した鎧に
違いありません」
そうリアラが説明し、

「アビスシリーズの鎧は４つの精霊の力を秘めた、それぞれプレー
ト、チェイン、レザー
そしてクロースの４種類あるらしい、ここに在るのはアビスフレイ
ムプレートアーマーと、
アビスウインドレザーアーマーだね」
ウインが補足する。

「ねね？　このレザーはレティが、プレートはウインかリアラだったら着れるんじゃない？
魔法の鎧はその大きさを装着者に合わせて変化するだろうから」
わたしがそう提案すると、

「う、着れるかも知れませんが……呪われそうでイヤです」
「同じく、あたしは邪神を崇めるダークエルフが着てた鎧なんて絶対着ないからねっ」
そう言って断るリアラとレティ。

「もったいない……あ、そうだ。邪神バルザタンにこういった鎧が在るって事はさ、善神
バルミラー神にも似たような鎧が存在するんじゃないの？」

「ありますよ。８色の名前を冠して、ホワイトミラープレートアーマーとかブルーミラープレートアーマー等と呼ばれてます。全てプレート鎧ですね」

「なるほど、リアラっ！！」

「は、はいっ！？」

「それを手に入れるのだ！！　ミラーアーマーを！！　理由は特に無い。わたしが見たいだけなのだー」

「むむ・無理ですよー、ミラーアーマーを授かる事が出来るのはたったの８人ですよっ！！
私じゃまだまだ届きませんっ」

「アビス鎧を全部奪い取った功績とかあれば別でしょ！？　わたしのコレクターとしての
性（サガ）が轟き叫ぶっ　アビスアーマーとミラーアーマーをゲットだぜっ！！」

「げっと？？　もう、確かにアビスアーマーを全てダークエルフから奪い取れれば、その
功績は計り知れません。ミラーアーマーも授かれるかも知れませんね。うふふ」
お酒が入ったリアラもその気になって来たようです。

「よーしっ！！　ミラーアーマーを目指してっ　乾杯！！」
「「「「「　かんぱーい　」」」」」

そうして夜は更けて行きました。

真夜中。

わたしには、まだやるべき事があったので宿を抜け出し、宿場町の入口を目指して歩く。
月が出てない静かな夜だった。星の光が真っ暗な夜空を彩り向こうの世界とは全然異なる
星座や星雲が、視力の良いエルフの目には圧倒的な神秘の輝きを持って映った。
なのに、

「やっぱり来たわね」
わたしがそう声を掛けると、家の蔭となった暗闇からレティが姿を現す。
こんな静かな夜に相応しくない物騒な弓を片手に持っている。
小首をかしげ「気付いてたんだ？」と聞いてくる。

「そりゃそうよ、アンタ、ダークエルフ達を倒した後、様子が変だった物ね」

綺麗に瞬く星空、星と同じく銀に光るレティの瞳には深刻な悩みの光が揺れていた。
「判ってるなら話が早いわ。あたしも色々と考えたの。自分が何を欲しているのかってね」

レティは、

レティはそう言って弓をわたしに向かって持ち上げる。
水平に握られた弓はまるでわたしに向かって捧げられているように見えた。

32ページ目

32ページ目

「魚心あれば水心、だと思うの」

内緒でこっそりダークミスリルゴーレムを回収すべく、宿から離れて『飛翔』を使おうと町の外を目指してた時、わたしの怪しい動きを気付いてたレティから、そう告げられる。

「最初に変だな？　と思ったのは、あたしやスニージーが範囲攻撃をした時。ファリナだったら一緒に混ざって魔法ぶち込みそうな物じゃない？」

気がかりだった廃墟の、その景色から浮いてた黒曜石の大岩。それがまさかダークエルフの切り札だったとはつゆ知らず。地霊操り『ディグダグ』で黒曜石の下に穴を掘り、地中深く埋めておいた。それが例え何であろうと、地中にあれば爆発しようが何しようが平気だから。

敵との戦い開始直後になにやら動き出した事は地霊からのお知らせを受けて知っていた。

単に「ああ、ゴーレムだったのか、あいつ等の伏兵だったのね」程

度に考えた、それでも
パワーだけはやたら感じたので地霊にお願いして、１００m程落下させて壊そうとしたら、
めちゃめちゃ頑丈で一回で壊れなかったために興味が湧いた。
そうして、地面の中で１００m持ち上げては落っことし、また持ち上げては落っことしを、
実に２３回繰り返して動かなくなった。
羽を持たないゴーレムは、どれほどパワーがあろうとも地霊が支配する地中からの脱出は
とうとう叶わず、一方的な戦いで終った。

ダークエルフ達と戦ってる間、わたしが大人しかったのは魔力の大部分を他で消費してた
からだ。１００m落っことせばストーンゴーレムだって壊れるのに、
それで壊れないとは
魔導師としちゃ、気になっても仕方ないでしょ？
短剣で刺されそうになったのは御愛嬌よね。
見込みではもっと手早くゴーレムを無力化出来るハズが思惑と違った事と、敵がヘイスト
効果を持つチートな鎧を持ってたのが大誤算。反省。えへへ。

「それまでほったらかしにしといたのに、神官がゴーレムの話をしたとたん、慌てて口を
塞ごうと攻撃したのも不自然だったわ。
なによりファリナの魔力があの程度のわけ無いもの。どこで無駄遣いしてるんだろう？
って考えて直ぐに判った。あー、これはダークミスリル狙ってるんだろうなぁって。

そうして地面を見てみれば、派手に地霊が動いてるんだもん。バレバレよね」

あの神官、ダークミスリルゴーレムの情報を教えてくれたのは嬉しかったけど、せっかくの独り占めチャンス。ぺらぺらと余計な事を話される前に倒したかったのはそのため。

でも、精霊使いにしてスカウトのレティは、地面の下でコッソリ行ってたつもりの地霊の動きも、しっかり感知されてたか。

『ダストアロー』やら『エクスプロージョン』やらで派手に地霊が暴れたから、気付かれないかなー？　と思ったのは甘かったらしい。ちぇっ。

戦い終わってから、じ～～っと地面を見られて居た時にはもう冷や汗だらだらだった。

レティは持ち上げた弓をわたしに手渡してから続けて言う、

「そこで考えたの。ウインとお揃いでダークミスリル武器を創ってもらうチャンスだって。

これでもね、ずいぶん悩んだのよ？　ウインの剣とお揃いの短剣も素敵だよねって。

でもやっぱり慣れ親しんだ弓が良いわ。

ファリナはスミスなんでしょ？　弓作りは初めて？　その弓と同じに創れば良いからv」

軽く言われたっ　え～ん。そんな事で悩んでたのかいっ！！　って

突っ込む気力も無く。
わたしのダークミスリル独り占め作戦は、こうしてレティによって阻止されたのでした。

もっとも、それで魔道具を創ってパーティーに還元するつもりだったから純粋な独り占めと言うのとは違うけどね。自分の好き勝手使えるかどうかってのは大事だと思うの。

い～～わよ、創ったろうじゃない！！　こんなシンプルで無骨な弓なんかじゃないわよ。
スカウトな精霊使いをギャフンと言わせる一品をね！！　魔道クリエイターなめんなっ。

「ふぅ、思ったより少なかったわね」

回収したダークミスリルゴーレムは原石のままゴーレム化してた物だったので、小山ほど在った鉱石も、インゴットへ精製してしまうとほんの一抱え程度になってしまいました。

「『ドマーニ神聖帝国』を滅ぼしたって言うダークミスリルゴーレムも、こうなっちゃうとおしまいだね。ずいぶん少なくなっちゃったけど、あたしが頼んだ物は創れる？？」

レティは依頼した物が出来るか気がかりで朝方まで徹夜でわたしに付き合ってた。

「大丈夫。これだけ有ればお釣りが来るわ。何？　こいつの事を知ってんの？」

「うん。むかし国に居た頃にね、偵察として周辺国の情報集めしてた時が在って、その時にコイツ……かどうかは知らないけどさ、ドマーニ神聖帝国って所がダークエルフの邪神神殿を滅ぼそうとして、神殿守護兵のダークミスリルゴーレムただ1体に1万人の騎士団が破れて、逆に国を滅ぼされたって話を聞いた事がある」

「ふ～ん、へぇ、こいつがねぇ」

わたしはインゴット精製するための魔道具『魔力子共振式縮退炉』を片付けながらレティの話を聞く。携帯出来る小型炉と侮るなかれ、2億度の超超高熱まで出せるのだ。
核を使った大掛かりな臨界プラズマ炉が5億度と聞けば、ここまで小型化されたこいつの性能の高さが判るだろう。
魔力子で時間を一定則の歪め方をすれば、擬似重力場を作り出す事が出来る。
擬似ブラックホールからエネルギーを引き出す炉なのだ。
ちなみに火の中位精霊イフリートが約2千度。高位精霊のフェニックスが約1億度だ。

今日の所は精製しただけで夜が明けたので、依頼された武器作りは

まずは寝てから。
もう眠～いよ～

「頑張れファリナっ！　ウインとあたしのために。
それに、ちょっと歩けば乗合馬車の駅だしさ、後は寝てて良いからっv」

もちろん、そうさせてもらうわよっ

次の日、駅から馬車に乗り込みグランザールへと向かう。
わたしは徹夜明けと炉を動かして消費した魔力を回復させるべく寝て過す。
目覚めた時には今日の宿場町へと到着していた。

夕食が済み、アレコレの雑用が終ると同時にレティがわたしに話しかけて来る。

「さー、ファリナ今夜も頑張ってね！！」

「アンタ、なんでそんなに元気なの？　寝てないんでしょ？」

「なんか、あたしさ、夜の間は自然回復力が高まるみたいでさ、徹夜しても次の日の活動
にさほど支障出ないんだよ」

なんですとっ！！

あらためてレティをじっと見る。
ダークエルフの黒い肌は闇の祝福では無く、邪神信仰によってもたらされた色だ。
夜の回復力に種族的な違いが絡んでいるとは思えない。
でも、たしかに闇の祝福とまでは行かないが、闇との高い親和性をレティから感じる。

「レティは闇霊操りとか得意でしょ？」

「……あー、闇かぁ。回復とかは別だけどさ。ダークエルフを連想させるから、あんまり闇霊は使わないようにしてるんだ、不得手じゃないとは思うけどね」

「無理にとは勧めないけど、闇霊使いとしては凄い素養があるよ。たぶん、闇絡みの守護精霊名を持ってるんだと思う。生まれた時に両親から守護精霊名をちゃんと付けて貰ってたのね。よかったじゃない」

「守護精霊名？　それって在るのと無いのとじゃそんなに違うの？」

「全然違うわね。それに守護精霊名を付けるって事は、付けた本人が精霊に対し儀式契約を結んでいる証拠でもあるわ。精霊に対するある種の制約も掛かるし、捨てる赤ん坊の為に契約結ぶなんて考えられないから、捨てられたんじゃなくて、親とはぐれたって事ね」

「……そう、そうだったんだ。　ねぇ？　あたしに付けられた守護精霊名って判る？」

「正確には判らないわよ。　……でも、そうね？　闇の他に風も感じるわね。その二つを組み合わせた名前じゃないかしら？」

「そっか。　……それならファリナがあたしの守護精霊名付けてくれない？　面倒な契約とか無しで良いからさ」

えーーーっ!?　なんでわたしがーー!?　自分の親に聞けよっ!!とは思うものの、言っても仕方ない事だから口には出さなかった。

「……親に付けて貰った正しい守護精霊名じゃないよ？　あくまでそれっぽいってダケになるけど？」

「うん。それで良いよっ」

闇と風、ダークエルフを連想するのは嫌がるだろうから、それなら、夜の風はどうだろう？
『ヴァン　デュ　ソワール』

「よし、決めた!!　アンタの守護精霊名は『ヴァンソワール』夜の風という意味よ」

「……ヴァンソワール。うん、良いね、今日からあたしはレティア ラ・ヴァンソワールか、ありがとう!!　ファリナ、嬉しいよーーーっ　ウインにも話して来るーーっ」

少し照れた優しい微笑を浮かべながらウインの所へ向かうレティ。

「さってと、気合入れて武器創りしますかねっ」

トゲエルフに優しい空気は毒なのだ。さっさと移動するに限る。
レティはもうしばらく暖かい空気を感じて居たいらしい。
どうやら、今夜はわたし独りの作業となりそうだ。

宿から出て行くわたしを見かけ、リアラとジルから声が掛かった。

「あらファリナ、これから武器創り？　また徹夜になるの？　頑張ってね」

「……なんで知ってんの？」

「レティから聞いたもの、ダークエルフ達の戦略兵器をファリナが気付いてくれて、地面
に埋めといたから私達は助かったんだって？　国をも滅ぼした強力なゴーレムだったから、
ファリナが気付いてくれなかったら私達全員危なかったって。
地面の下で動けないゴーレムを夜二人で一方的に攻撃して楽に倒したからって聞いたけど、
ご苦労様でした」

「あ、うん。その素材を使ってウインとレティに武器創ってるんだけど、それも聞いた？」

「ええ、珍しい素材だから創作意欲が刺激されちゃったんだって？
ファリナらしいって
話してたところなのよ」

「レティが昼間ずっと寝てたファリナの事を、疲れてるから起こさないであげてね、って
皆に言ってたよ。ダークミスリルについても、報告が一日遅れになってゴメンって謝って
くれてたけど、私とリアラは、ダークエルフの一味を一網打尽にしてもらって情報提供者
を確保出来たから、それで十分だしね」

「でも、いくら自信が有っても危険なゴーレムを倒すなら私達に一声掛けて下さいね」

「えへへ、おかげさまで元気になりました。うん。これからはそうするよ。
さくっと倒せると思ってたから皆の睡眠の邪魔するのもはばかれたんだよね。えへへ。
それじゃ武器創りに行ってきます」

ふーん、レティってば皆に上手く言っておいてくれたのね。
やましい所が在るわたしは、えへへ笑いを連発していたが、リアラの聖職者然とした透明
な微笑みと優しい声がわたしの胸にチクチク刺さった。

武器製作。ある意味、わたしが一番わたしらしく居られる時間だと思う。

まずウインの長剣。
デザインを決め、重さもウインが今使っている剣より破壊力を高めるため重くする。
永続に籠める魔術式は軽量化、強化、防錆、撥水、撥脂、鋭刃、自動復元、攻撃速度上昇。
基本的な魔術式を永続効果として籠めただけで、魔力があっぷあっぷだ。
『簡易儀式』の限界だろう。せいぜいもう一つくらいか。
それなら、最後の一つは最近考案したアレだ。

そして、剣そのものに込める魔力よりも、大事なのが宝玉。
この剣は切先部分だけが両刃で、片側は先から1／3あたりから刃の無い構造だ。
鍔は割と大きめ、ウインは抜刀術を使わず打刀系統の技を使うから、構えた後に剣を振るときの重量バランスが手元寄りの方が良いだろう。この鍔の部分は猫の耳を象っている。
なぜ猫かと言うと、プニ神の使いで聖なる獣なんだってさ。だから黒猫とした。
正眼で構えた時の左面の猫の左目には地の精霊界で手に入れたブラックオニキスを。
右面の猫の右目には水の精霊界で手に入れた黒真珠をはめ込んだ。
左面の右目、右面の左目、それに柄頭の3箇所には将来良い宝玉を手に入れた時のために空けて置いた。良い感じの手持ちが無かった事もある（汗

ダークミスリル、ブラックオニキス、黒真珠。

黒系統の力在る素材が言霊の力を借りて闇に好まれ、闇霊の力を引き寄せる。
その結果、使用者は闇・地・水を揃えたことにより普段より回復力が高まる。
この武器を持ってるだけで傷が癒されるのだ。まー気休め程度だけどね。

次にレティの弓。
わたしは鍛冶仕事がかつての本業だし、裁縫は生活必需スキルでもあるため修得している。
しかし、弓作りはクラフトマン（木工）の仕事であり、わたしには経験が無い。
レティから預かった（昼間は返却しているわよ）弓を参考に金属製で創ってみたものの、
今ひとつ自信が無かった。

ダークミスリルはピアノブラックの様に光沢のある黒色。
弓弦（ゆづる）はイチゴショートの遺体からガメた、もとい、形見分けの髭を使ってみた。
弓弭の部分は（弓の上下端ね）、猫の爪を模した近接武器となっていて薙ぎ払いで近接した敵と戦う事も出来るようにしておいた。
中仕掛けにはウインとお揃いの黒猫をモチーフしてみた。レティお揃いに拘ってたもんね。
瞳にブラックオニキスと黒真珠とをはめ込んでいる。
まず日の輪を末弭に掛け、弓をたわませて月の輪を本弭に掛けて完

成だ。
弓を引いて見ると、良い感じに仕上がっている。

さて、ダークミスリルは約半分を消費してしまったが、まだ余っている。
この際だし、あとの二人にも武器を創ってあげよう。
スニージーには両手持ちの魔術師の杖を。
リアラには片手用フレイルを。
それでダークミスリルは丁度使い切った。

自分用は創らなかった。
『簡易儀式』で創った武器ではこの双剣に込めた魔力との総合力比較で勝ることは難しい。
今夜創ったこの武器たちも、もし故郷の村に行く機会があれば、儀式魔法用の増幅装置を
使って永続魔法を籠め直した方が良いだろう。

４つの武器を創り終わる頃には、もうすぐ夜明けの時間帯だった。
武器創りの魔道具を片付け、最後に武器をもう一度手にとって確認する。
弓を何度かビヨンビヨンやったところでハタと気付いた。

生きた鎧を着た状態で良い感じって事は、生身じゃ引けないんじゃない！？
鎧を脱いだら案の定だ、引けなかった。

「ウガーーーッ」

怪しい雄たけびを上げて見たが全然ダメだった。ピクリともしやがらない。

冷や汗タラリ。―Ｄｉｅ死一杯（だいしっぱいです）Ｄｅａｔｈ。

えーと、もう朝だし。明日（？）にしよう。うん。

寝てスッキリすれば良い案も浮かぶさー。今日は寝ちゃえ寝ちゃえっ

次の朝。

朝食が済んだ頃を見計らって、創った武器を皆に披露する。

失敗は失敗として、笑い話にしてしまえ!!　と開き直ったのだ。

手直しは今夜行うとしても、皆でひとしきり笑うネタとするつもりだった。

「こいつぁ、凄い」

ウインは気に入ったようだ。

「こっちの杖は、先に取付ける力在る宝玉が手持ちでこの杖に合う良いヤツが無くてさぁ。

将来の楽しみに取っといて頂戴ね、それでも今までの杖よりダークミスリルの魔力伝導率

がずっと高いから、扱える魔術の威力も断然強くなるよ」

「僕にも創ってくれたんですか!?」

スニージーは予期しなかった贈り物に嬉しさを隠さない。

「これ!?　この紋章はまさか。……こんな素敵な贈り物は生まれて初めてです。
ありがとう。ファリナ。ぐすっ」

リアラにはリーベフェルマ伯爵家の家紋をデフォルメした紋章を武器に付けたのだ。
余計なお世話かと思ってたけど、喜ばれたようだ。

そして、

「うん、確かに失敗だねー、弓作りの初心者は必ず一回はやるんだよね。
きっと次は上手く出来るよっ　頑張れファリナっ」

レティは弓の弦をビヨンビヨンと軽く引きながら「うわーユルユルだ」とか言っている。

え!?　あれ〜??
ええーー??　夕べはあんなに固かったのにもうあんなに緩んじゃったの!?
弓本体が歪むはずは無いから（それくらいには自分の鍛冶仕事に自信あるのだ!!）、
イチゴショートの髭を使ったのが悪かったのかしら?
一晩で伸び伸びになってしまったようだ。
イチゴショート……アンタって、なんか色々とダメダメねぇ?　わたしは心の中で呟く。

今日は駅馬車を使わず、各自の武器の調子を見るため歩きながら目に付いた物で試し切りや、試し撃ちの場を探しつつ移動しよう。となった。

昼下がり。昼食前。

「それじゃ、スープを作りながら準備してて。獲物を見かけたら試し撃ちも兼ねて獲って来るー」

そう言ってパーティーから離れようとするレティ。と、そこへ森から顔を覗かせる鹿が居た。

「それじゃアレを狙って。悪く思いなさんな。鹿ちゃん」

レティは鹿へ狙いをつける。

「うーん、弦が軽すぎて届かない気がしまくり。しゃーない風の精霊に頼むとしますか。

『スパイラル・アロー』」

『『『『『』』』』』

そんな空気を貫く物凄い音を立てて矢が飛んで行き。

『『『『『』』』』』

狙い通り鹿の首に当たったのだろう。百歩譲ってそこまでは良かった。
問題は、鹿が跡形も無く吹き飛ばし、ついでに背後の森の木々も吹き飛んだ事だった。
太い大木すら千切れ飛んだかの様に空高く蹴散らされて、矢の通り道に従って森に空間が
出来上がった。

目が点となったわたしは「レティ、なに環境に悪いことしてんの？」と言うと、

「……え!?　ち・ちがっ　あたしじゃ無いって。どうなってんの!?　この弓」

そう言って、わたしを逆に見返すレティ。
つられて皆もわたしを見る。

「あれ？　わたしなの!?」

視界の隅では、矢にえぐられた森の大木が「バキバキバキ」という不気味な音を立てながら
遅れて倒れるのが見えた。

33ページ目

33ページ目

「あんな強力な威力を発揮するなんて、イチゴショートの髭と風霊の相性が原因かしら？」

そう言いつつ、レティから弓を借りて引いて見る。

「ん？？　あれっ！？」

さらに2ー3回ビヨンビヨン引いて見た。今は生きた鎧を着たままだ。

「変ね？　どこも緩んで無い。　ねぇ？レティ、これ普通に引いてたよね？」

「うん、軽いよね。やっぱ風霊に頼んだのが原因？」

なんか話がかみ合って無い気がするな。

「ねぇウイン。この弓引いて見て？」

「僕か？　どれ？　へぇ、構えた感じが何かピッタリ来る弓だね。じゃ引いて……アレ？
か・固いぞ、あれ？　くっこのっ　ぐぐっ　ぬ～～～っっ！！　ダメだ。固くて引けない」

「まったまたウインってば、今日は賢者の日じゃないよ？　芝居しなくて良いってば」

「私がやってみる」ジルが挑戦してみるも、「んっ　！！～～～～～～っ！！　ダメだ」

ジルのリキミ顔って可愛いデス。

「……／／／／／／あ、あ～、レティ、もう一度引いて見てくれ。い・イテっ　ナゼ蹴る？」

「自分の胸に聞いてみな。まったく、ウチの男共と来たら」

「どうしたんだ？」ジルは全く判って無いようだった。

レティのチェックは厳しいねー。それを知ってるスニージーはあさっての方を向いて居た。

でも、自分的に今のはアリだと思ったので、心の中で、ジルぐっじょぶ、と言っておいた。

「別に普通に引けるけどなぁ？」

レティは相変わらずビヨビヨと弓を軽く引いている。

それを見て、わたしは鎧の上だけ外し、レティからもう一度弓を借りた。

「んっ」

引いて見たがやっぱり引けない。

「ダークエルフだから？」

思いつくモノを挙げて見る。

「職業がスカウトだから？　弓の専門職だったから？　２５歳以上説……はウインがダメだったし、２５歳で女……は横に置いといて」

レティが凄い目で睨んで来た。歳の話は禁句にしよう。

って、アンタ一応エルフ種族なんだから適齢期は２００歳前後でしょうがっ。

「黒猫の祝福？　精霊使いなのはわたしも一緒だしなぁ。あっ！！」

思いつきで、弓を握る左手に闇霊を纏わりつかせてみた。

徐々に弦が引かれていく。それでもまだ固い。さらに風霊を引き手に纏わりつかせた。

それで弓を引き絞る事が出来た。

「ふ～～。闇霊と風霊の力が無いと引けないんだ」

それでもレティ程は軽く引けないな。それにアレほどの威力が出る理由も今ひとつ不明ね。

もしかしたら、ダークミスリルにはダークエルフに対する特別な恩恵があるのかも？

そして、さらにもしかしたら、黒猫を付けたことでプニ神の恩恵も

あるのかも？
疑問系なのは仕方ない。サンプルが取れる程ダークエルフの精霊使いでプニ信徒は居ない。
ともあれ、奇しくもレティ専用弓となってたわけね。

「何？　どうゆうこと？」

リアラが質問を投げてくる。

「レティは闇霊と風霊との相性がとても良いのよ。この弓は闇霊と風霊の力を持ってるとその力に応じて破壊力が増すのね。だからレティが使うとトンデモナイ威力となるわけ」

「闇霊と風霊との相性なんて事は、あたしもファリナから夕べ教わったんだけどね。
それにしても、これはちょっと威力強すぎだよ～　攻城兵器じゃないんだからさぁ？」

「風霊の力を使わなければあそこまでの威力は出ないわよ。……たぶん」

「ホントかなぁ。まぁ良いわ、さっきの騒ぎで動物も居なくなっちゃったし、獲物を探すついでに弓の扱いに慣れて来るね～」

そう言ってレティはわたし達から離れて森の中へと入ろうと駆けて行った。

「あ、待ちなさいよ。わたしだって弓の特異性には興味あるんだか

ら！！
そういう訳で、昼食の準備はスニージーとウイン、宜しくネ！！（エルフスマイルよっ）」

残る女衆に頼まず、どうして男衆に頼むのかは、言わずもがなよ。
リアラの前で守護精霊名の話をしなかったのは、リアラには精霊名が付けられて無いのが見て判ってるからだ。レティもそれを感じてたからだろう、わたしの微妙な誤魔化し話に合わせていた。

「『ウインド・ショット』」

レティは聞きなれない精霊術を使って弓矢で鳥を撃ち落した。
精霊の動きを見る限り、どうやらわたしの『エアミサイル』と同系統の術らしい。
元々精霊術は、個人と精霊との関わりで発展した術だ。
わたしの村ではあの術に『エアミサイル』という銘を付け、レティが習った系統では別な銘が付いたというだけだろう。
もっとも、同じ名前でも効果が異なる事も在り得るから完全に同じ術とは限らないけどね。

「風霊使って威力を落とさなきゃならない日が来るなんて、想像もしてなかったわよ」

レティはそうブツブツ言いながら、何羽かの鳥を落として居た。
わたしはそれを横で聞き流しながらダークミスリルの弓に循環する魔力の動きを眺めてた。

獲った獲物を持つレティに精霊術で血抜きを頼んで先に皆の所へ帰らせてから、破壊された森が一日でも早く元の姿に戻れるよう、精霊術で木々に力を注いでおいた。

皆の所へ戻り、水球を沸騰させてレティが準備した鳥を熱湯につけて羽をムシって解体、男衆が途中まで作っていたスープに混ぜたり、焼いたりして食べた。
全部は食べきれないから夕ご飯用に残す。

そして夕ご飯も二食続けて鳥御飯となった訳だが、旅の間はこんな感じが普通である。
ほんと、精霊使いのレンジャーってサバイバルに向いてるわね。
逆にレティが居れば、旅の間でも貧しくない食事が出来るってのは高ポイントだ。

わたし達が夕ご飯を食べ始める頃、商人のキャラバンがこの同じ場所へ到着し、賑やかになった。キャラバンにはちょうどこの辺りが帝都から一日の距離となるのだろう。
彼等は早朝から行動するため、一般の乗り合い馬車より一日の到達距離が長い。

いつの間にかスニージーが商人達と仲良くなっており、彼等から様

々な情報を得て居たのにはビックリだ。さすが商人の息子？

「ただのマネゴトですよ、見て育ちましたからね。それより、北の方はだいぶヤバくなるみたいですよ。なんでも、左大臣の息が掛かった四公がノースアイゼン砦に軍団を派遣することになったそうです。そのさらに北にある魔族のバルザック砦を攻め落とす為だとのことでした。予定では明日帝都を出発するという話でしたね」

「……ふーん。……ねぇ？ジル？　帝都からそのバルザック砦まで辿り着くのに、どれくらい日数掛かるの」

わたしは帝国と近傍の地理には詳しそうな貴族のジルに尋ねる。

「途中まで船で行くだろうからそれで三日。ノースアイゼン砦まで半日。バルザック砦はさらに一日の距離にあるから、軍団が移動するには全部で五日掛かるかな」

「明日出発するなら、戦うのは到着した次の日の夜明けとすれば七日後の早朝か……」

「どうしたの？　ファリナ？　気になるの？　……そういう私も実は気になっては居るのですけどね。派遣される軍団には神官団も居ますから」

リアラは同僚達が心配なのだろう。

「ん、私も本当なら国を護る一員として戦いに赴きたい気持ちはあるしね」

ジルも、そう気持ちを明かす。

「僕達も傭兵として活動して来たからね、戦争が起きると聞けば興味はあるよ」

ウインがそう言えば、

「もうすぐ地下神殿だし。ここまで来て戦争はイヤだよ僕は。他の時なら別だけどさ」

スニージーがある意味、普通の反応を返す。

「イヒヒ、ファリナってば深刻な顔しちゃって！　思い人でも遠征軍の中に居るの？」

わたしはレティの顔を見て呆れた風に返事を返す。

「は？　別に気になってる訳じゃないわよ」

あれ？　なんか返事を間違ってるような……ま、いっか。

皆が何か言ってるが、考え事をしだしたわたしは既に聞いて無かった。

ポシェットから大宝珠を取り出し宙に浮かべる。

「『ボイスコマンド、ＣＩＣ起動』」

アクセスコマンドやパスワードの音声は風霊がセキュリティを確保してくれるから他の人には聞こえない。

『ＣＩＣ』でカズヒサを久しぶりに眺めて見る。
『あの剣』がある限り、わたしにはどこに居てもヤツの居所が直ぐに判るのだ。
そのため即座に『ＣＩＣ』で姿を見る事が可能。
わたしの周りに、わたしにしか見えない映像が展開される。

わたしが感じる所によれば、『あの剣』はわたしから見て北に在る。
距離はおおよそアイゼンワードから故郷の村までの半分位だから約１０００ｋｍか。

カズヒサ達はどうやら徒歩の旅の途中らしい。映像には遠くに砦らしき物が見えている。
魔族の砦に５人で殴り込みをかける訳もないから、あれがもしかしたらノースアイゼン砦なのかも知れない。

カズヒサは黒い光沢のあるダークミスリルとは違った質感のプレート全身鎧を着ていた。
黒い、けれども、禍々しさは感じられない、どちらかと言えば神々しい鎧だった。
ジルの鎧は精神の精霊で焦点が合わない魔法が付与されているが、この黒い鎧からは闇霊

が光学迷彩を行っているのが見て取れた。
見えない訳では無く距離感を誤魔化す術で、空間……この場合それも暗闇に……ポツンと
鏡を置いたとしたら、その鏡までの距離感は掴みづらい物となる。
そんな感じの距離感が合わなくなる魔法が付与されている鎧だ。

そして腰に佩いたあの剣。
さらに背中には一風変わった形の盾を背負っていた。こちらは酷く禍々しい。
呪われそうという意味ではザタン鎧とドッコイに見える。
まぁバカヒサだし？　呪われても平気そうだから良いのか。

そして、
ニアとシャイア、オーリスは見覚えがある服を着て、その上に革鎧などを付けて居た。
シャイアとオーリスが着ている服は、『エルヴンエンジェリックトップス』と同スカートだった。

見覚えがあるのも当然で、故郷の村では女達が小遣い稼ぎ目的で定期的にやってくる商人
に卸していた物だ。
より付加価値を高めようと、わたしが魔力を籠め出してからは飛ぶように売れてたものだ。
まさかこんな所まで流れて来ていたとは。

しかも！！
なぜにニアがあの服を着てるのーーーーっ！？

あれは……あれは、わたしの黒歴史の一作ではないか！！

と、そこまで見て取った時に、カズヒサがわたしに向かって手を振っている映像が映った。
いや、カズヒサだけではなく、ニアやシャイア、ルーとオーリスまで手を振っている。
まさか！？　向こうからこちら側が見えているハズは……
わたしは振り返ってカズヒサが手を振っている方角を見てみたが、何も無い？？
試しに、カズヒサを中心にＣＩＣのカメラを逆側へ廻り込ませて見ると、カズヒサは背中
をカメラに見せたまま、何も無い方角へ手を振り続けていた。

……別に見えている訳じゃないのか。
半分ホッとしてＣＩＣをオフにした。

カズヒサ
「なんか誰も居ない方角へ手を振ってるのって、マヌケだなぁ。なぁ？　ホントにファリナがここを魔法で見てるのか？？」

エルファリナ
「ええ、でも今はアッチの方角から見てるわよ。
カズヒサのマヌケな姿を背中から見られちゃったわねぇ？　ふふふ」

ニア
「でも、向こうのファリナがここを見たとしたら、貴方も姿を見ら

れちゃったんじゃ？？」

エルファリナ
「それは大丈夫よ。わたしの姿はリアファリナからは見えないようにしてあるからv」

カズヒサ
「何でもアリだな。お前は。ファリナは元気にしてるのか？」

エルファリナ
「相変わらずね。今は面白いメンバーで旅を続けてるわ」

シャイア
「また、ファリナに会いたいな。あ、貴方じゃなくて向こうのファリナにね」

エルファリナ
「そうね？　どうやら今ので縁が繋がったみたいだしね。もうすぐ逢えるみたいよ？」

「何キョロキョロしてるの？　ファリナ？　赤くなったり青くなったり」

「ふぇ？　あ、うん。ボニョボニョ……。
……ねぇ？　提案だけど、向こうの商人のキャラバンの馬車に乗っけて貰えないかな？

グランザールまでの途中までででも良いから、時間の節約になるしね」

「おやおや？　さっきまでは旅を楽しもうって顔だったのに、いったいどうしたんですか？」

「……まぁ良いじゃないか。スニージー、商人にお願いしてみてくれないか？」

「はいはい。では行って来るね」

スニージーはそう言って、商人の元へ歩いていった。

「……ファリナ。魔族との戦いに気を取られる理由は聞かないよ。でもこれだけは覚えていて欲しい。地下神殿のクエストには集中して挑んで欲しいんだ。でないと攻略は難しいと思う、場合によっては皆の命を危険に晒す恐れがあるからね」

ウインはわたしにそう注意を促す。

「ええ、判ってるわ。そこは大丈夫よ」

「いよ～リアちゃ～ん、逢いたかったぜーぃ」

「うえ？　あ！！　ランサー、なんでここに？？」

そこには、よろず紹介所で特にわたしに色々と絡んで来る男が立って居ました。

「なんでって、俺はここで働いてるんだぜー、へへ、あと4日の短い旅だけどリアちゃんと一緒だぜーぃ！　こりゃ運命を感じるなー。このまま新婚旅行としゃれ込むか！？」

そこへ商人を連れてスニージーが戻って来た。

「快く承諾してもらえましたよ。もちろんグランザールまで護衛役を行う約束でね」

「いや～、貴方が帝都で有名な精霊使いのエルフ殿ですな！？このキャラバンを率います、エルロッドと申します。宜しく見知り置きくだされ」

「『トゲエルフ』のリアファリナです。宜しくね。（エルフ・スマイル）ところで、そんなにわたしって有名なの？」

「もちろんですとも、貿易商のハーマン氏とか、メイロー子爵様と御親交がおありとか？いやいや、何よりですなぁ、ははははは。して、グランザールまでの旅をしてらっしゃると聞きました。これもご縁と言うもの、御一緒に馬車で揺られて行こうではありませんか。もちろん腕っぷしの方も宜しくお願いしますゾ、はっはっは」

「そりゃ、リアちゃんの白パンツはあの辺りじゃ有名だからなっ！！」

……ランサーの馬鹿は無視よっ、ムシ。

今夜はここで野宿して、明日夜明けと共に移動となりました。
これで、もしかしたら、カズヒサの大規模な戦争に間に合うかも知れない。
……まぁ、そういう選択肢も残しておいたということで。

身体を横にして目を閉じ、わたしは先ほど見たカズヒサ達の姿を思い浮かべた。
特にエルヴンシリーズの服には思い出がある。染め方にエルフ村秘伝の技があるのだ。

服を染めているのはネリッサの一族で、村の中ですら一族の者しか伝授しないという秘匿
されている染め技を使って染められている。染料によって異なる精霊の加護を得られると
いう彼等独自の染め方をしているのが特徴だ。

型は作った人それぞれによって様々だった。見れば誰それが縫った物だと直ぐ判る。
シャイアが着ている緑の服は辻向かいだったマイリスアーゼの奥さんが作った物だ。
緑色は匂いの良い野草の一種、『ネフェス草』を煮詰めて作った材料で染められている。

地霊と風霊の加護を得られる効果を持っている。

オーリスが着ている薄紫の服は村の反対側に住んでるトリニーダの老婦人が作った物だ。
野いちごの様な『プラジュの実』を使って染めている。
地霊と火霊の加護を得られる効果が在る。

そして、エルヴンエンジェリックシリーズの服には魔力が籠められている。
籠める魔力は、回復、魔力回復、魔力上昇効果がそれぞれ少々得られる物だったが、それだけでも大人気となり、引き合いが途切れたことは無かったものだ。
わたしが村を離れる直前に、専用の魔力付与装置を村の縫製小屋に設置しておいたから、困っては居ないハズである。

村の女達は慎ましく暮らして居たがそれでもたまに入用な日も在って、魔法装置が無い頃には、わたしが頼まれて魔力を籠め、付加価値を高めて居たのだ。
そのお礼代わりにお茶とお茶菓子をご相伴に与ってた。……というのは表向き。

実は、ネリッサ一族の染め技を盗むためにセッセと通ったのである。
そこっ、技は習うものじゃない！盗むものよ！　という訳でわたしは悪くない。

……ニアが着ていた青紫色した服。見覚え在る所の話では無い。
わたしがその染め技で作った第一号なのだ。

その銘も『プロトタイプ・エルヴンデビニッシュチュニック』と同ミニスカ。
何を隠そう、わたしが今着ている青チュニと白ミニスカの原型である。
魔力もエンジェリックシリーズより強力な物が籠められている。
ナゼ色が違うかと言うと、其処には涙が出そうな黒歴史が存在するのだ。

何処が悪魔的なのかと言うと、国家殲滅級攻撃魔術式『大熱地獄』の触媒なのだ。
火霊と水霊という相反する精霊力を服に宿らせ、触媒として利用しようと目論んだのだ。
それでも女の子の着る服である。可愛いデザインとしようと頑張った。
目標は火霊と水霊、相反する精霊を結びつけるために風霊との三種類精霊力を服へ宿らせ、
薄緑色に染めようとしたのだ。

ニアが着ているプロトタイプでは、初めてにしてはまぁまぁ上手く行った。
火霊の力が漏れて紫色が混ざり、水霊の力が強すぎて青が強く、青紫となってしまったが。
本番では改良を加えて、それらのバランスを取った絶妙の魔術式となったハズ、だった。

スカートに火霊を押さえる魔術式を編み込み、チュニック含めた服全体の精霊力バランス
をスカートの魔術式から制御して上手に取る予定だったのだ。

しかし予想は大きく外れ、その魔術式は成立しなかった。

『押さえ役』となったミニスカは魔術式が強すぎたせいで、精霊力そのものが抑えられ、
結果、何の色にも染まらない白となり、『押さえられた側』のチュニックは水霊の青には
染まったが、ミニスカによって精霊力の全てが抑えられてしまった。

つまりチュニックもミニスカも精霊の加護が普段働かない代物になってしまったのだ。
もちろん、魔力を通しさえすれば加護を取り戻すので実使用上の問題は無い。

話を戻して、故郷の村では精霊加護の宿った服を着るのが当たり前となっている土地だ。
そこへ、いかにも自分で染めました～精霊力は働いてませ～ん、の服を着たトゲエルフは
村の皆から、『なんてミットモナイ服を着てるんだろう!?』という有難い視線を頂いた。
ほっといて頂戴っ

確かに見た目は失敗作以外の何物でも無い。しかし、強い精霊力を持っているのは自分が
一番よく知っている。そして存外、わたしはこの色の組み合わせが気に入ってしまった。
ドピーカンの青空の色。着てるだけで気持ちよくなれる色。
わたしのポシェットはお蔭様で青白の上下がお着替えとしてたくさんストックされている。

気分次第で、青白、白青、青青、白白の４つの組み合わせを楽しめているのよっ！！

……と負け惜しみ。

いつか薄緑色に染めてやるっ！！　と野望を持っているのだが、遠い気がするな。

３４ページ目　地の底へフェードアウト

３４ページ目　地の底へフェードアウト

「プニ神の立て札？　あぁ、アレを見にいらっしゃったのですか。アレは有名ですからなぁ。もっとも地元の人間は見に行かないんですがね。
いつでも見に行けると思ってると逆に行かないもんなんですわなぁ」
エルロッド氏は腹黒い所もあったが、話好きのオジサンで愉快な人だった。
わたし達はキャラバンでの４日間ですっかりグランザールの見所を教えて貰っていた。

４日目、商人エルロッドと、お調子者ランサーと別れ、その足でまずは現場の下見に行く。
グランザールは巨大な「コ」の字型の奥まった場所に滝があり、その滝壺へと圧倒的な水
が落ち込むところが雄大に見下ろせられる形で歓楽街が広がっている。
大自然の中に滝があるかと思いきや、歓楽街に囲まれて滝があるのは本場のナイアガラと
一緒なのね。

プニ神の立て札がある祠は、流れが滝へと落ち込む手前、中洲に建

っていた。
中州を経由して両岸へ橋が架かっており、滝の流れ落ちる所を上から眺めるスポットともなっている。　まだ昼間なので、この中州にも大勢の観光客が訪れていた。
時々、滝の上に虹が掛かる時があり、祠からその虹を見たカップルは幸せになれるという噂だった、すっごく眉唾な話だけれど、この祠を訪れている若いカップルは多い。

わたしにそれを語って聞かせたのはランサーだ。

「リアちゃん、一緒に行か「それより、アンタこの後どうするの？　街に戻るわけ？」
くは～厳しいな、でもそのＳッぷりがイイ。　あー、まだエルロッドの旦那にはここでの仕事が残ってるからな、それが終ったらアイゼリアに戻るさっ　まだ数日は居るぜー」

正直どうでも良いが彼は情報通だ。先のノースアイゼン砦への出兵の話もランサーが掴んで来た情報らしい。性格はおちゃらけてるが、その情報が正確なのは自他共に認める所。

その日は宿屋に泊まり、次の日、朝食を食べ終えて太陽が十分昇った時刻の頃、祠の洞窟

へと入った。
観光客が見物している「この先危険」という立て札を、わたし達は無視して奥へと進む。

「お、おい。　やめとけって。あぶないぞっ！！」

親切な観光客には「ありがと～」と言ってエルフ・スマイルをサービスしといた。
「ありがと～がと～と～」と残響音が響く中を、わたし達は奥へと歩む。

洞窟は程なく下り坂となり少し進むと１０ｍほどの亀裂が在った。
その上に吊橋が掛かっているが、橋の向こうに蠢く影が見える。
見た目は普通の人に見える、が、動きはゾンビのそれだった。
『影視』を掛けているのでこちらからは向こう岸が丸見えだ。
向こうからは見えないハズだが相手が死霊ならば暗くても視界は関係無いだろう。

先頭を歩くウインが右手で指を5本立て、すぐ2本にした。7体居るという合図だ。
横を歩くジルへ目で合図を送り、一緒に橋の手前まで移動する。
事前の話し合いで『ヘイスト』は敵が少なければ掛けないことに決めてあった。
身体への負担が大きいからだ。なのでここは『パーティーセット』頼みとなる。

緒戦では敵の強さを調べるのが第一の目的。
レティが対岸の一番手前に居るゾンビに矢を撃つ。
風系魔法は使わない。強力過ぎて大きな反響音が響くから。
死霊がどこまで賢いか判らない今は、緒戦から大きな音を立てるのは得策では無い。
それでもダークミスリル弓の一撃は強烈だ。一体目は胸を射られて上半身が吹き飛んだのが見えた。
洞窟の中ではあるが、風の宝玉も光の宝玉もあるので、精霊を呼び出す事への制約は無い。
ゾンビ達はこちらの攻撃に気付き、わらわらと寄って来るが橋は横にギリギリ2体並べる幅はあるのに、ゾンビ達はそれほど賢く無かったようだ。
まとまって来ずにバラバラのタイミングで橋を渡り、こちらに飛び掛って来る。
ウインとジルはそれぞれ一体ずつを余裕で受け持ち、さほど時間掛からずに倒しきった。

「思ったほど強くないけど、それにしても汚いなぁ」

わたしは手持ち無沙汰で暇だったこともあり、以前から研究中の魔術式を試してみた。
なんというか、ゾンビ系の色々と飛び散った物を踏みたく無いって気持ちも強いのもある。

『リニア』

この魔術式は『飛翔』の力場を利用して、周囲の障害物と力場の間に生まれる斥力を使い、

周囲の物体に接触しないでオートパイロットの様に飛べる術だ。
まだまだ改良の点が多く、のろのろした速度でしか飛べない事もあり名前負けしているが、
この場で使うにはうってつけなのだっｖ

「そうだね、だけど、敵は物量で押してくるみたいだよ」ジルはさらに奥を見てそう返す。

橋を渡ったＴ字路の右奥と左奥の両方からゆっくりと複数の影が近づいて来ている。

「全部で１０かな？」ジルは数を数えてわたし達後衛へ伝える為にそう言った。

「ここの死霊は何か変です。　次は、わたしに『鎮魂』を試させて下さい」

何かに気付いたリアラは皆にそう伝えて前に出る。

ボロボロの服を着たガイコツが両奥からリアラへと迫ってくる。

「ミラー神よ、不浄なる死したる者達に沈黙の掟を下したまえ『ターン・アンデット』」

しかし……何も起こらなかった。

「司祭様の『鎮魂』が効かないガイコツ。　へー？　ずいぶん気合入った死霊なのね？？」

わたしはフヨフヨと浮いた状態でプチ高みの見物モードだ。

「いえ、違います。ここに居るのは正確にはアンデットではありませんっ」

わたしと違ってリアラはどこまでも真剣だ。

「この人達は『カースド・エターリア』、神の罰を受けてこの地に縛られ、神の御許しが無い限り永遠に開放されない呪われた罪人達です。彼等に『鎮魂』は効きませんっ」

「ふ～、ファリナのスタミナ回復があるから今は疲れ知らずで良いけど、これ、ファリナが居なかったら相当厳しかったんじゃないかな？」

わたし達は橋を渡ったT字路をとりあえず右側を選んで進み、現われる新手を倒しながらさらに奥へと移動した所で、ジルがそう感想を言う。

「言えてるな。まださほど奥に来てないのに、既に僕達の１０倍近

い敵と戦っている」

ウインが返事を返し、「でも、ようやく次の段階に来たかな？」

わたし達の目の前には地下遺跡の様な石造りの通路が在る。

今までは自然の洞窟を利用していた作りだったのと好対照だ。

どうやら、ここからが本番らしい。

敵も激しさを増すと考えられる。

そこで、洞窟に入ってからは働きっぱなしだったウインとジルへの助けになる壁役を召還させて、前面に押し立てる戦法を取ることにした。

洞窟という地形ならうってつけだろう。『スイショウキ』を召還する。

精霊語で呼びかけると、透明なクリスタルで出来た３０ｃｍくらいの女の子が現れる。

以前聞いた所では、わたしを模して作った人型らしい。これ見るたびに複雑な気分になる。

「あ～ら？　あたしを呼び出すなんて久々ねー。　お久しぶりっｖ、リアファリナ」

うん。ここまでで『萌え～ｖ』とか思った人がもし居たら、ゴメンナサイって先に言わせて貰うわね？

言葉の最後に、カッコだみ声カッコ閉じる、を書き忘れたわ。

コイツは自称『水晶姫』、本名『水晶亀』という大地の精霊界の上

位存在だ。
手っ取り早く言えば、亀のオカマである。
この姿は精霊力で作った別身（エイリアス）なのだ。

「折角呼び出してくれたのに悪いけどさぁ。あたしはここでは役立たずなのよぉ。
ここって大地の精霊力が著しく制限されちゃっててね。神の神殿が傍にあるでしょ？
そういうとこってさぁ、神力で精霊力が制限されちゃうのよね（野太い声）」

「アンタを呼び出したのは前で戦ってもらいたいからなのよ。だから剣で戦って頂戴」

「気が進まないけど、せっかく久しぶりに呼ばれたんだものね、それくらいなら良いわよ」

水晶姫は、わたしと同じサイズまで大きくなると右手に水晶で出来た両手剣を生み出す。

遺跡の中はそれまでの人型と違い、獣の集団が巣食っていた。
カースド・エターリアって言いにくいから見た目そのままで、獣ゾンビと言うわね。
獣だけあって戦闘力が比例して上がっている。
水晶姫が壁役として最初に集団の中へと飛び込み、十分注意を引き付けてウインとジルが

切り込んで倒す戦法で、危なげ無く倒しながら先へと進む。
水晶姫は見た目と異なりかなり堅く、自己修復も出来るし、精霊力で作った別身が壊れても本体には何の影響も出ないし、壊れても次の瞬間には別の身体を再構築して戦いに復帰出来る。

これで召還の魔力コストがもう少し安ければ言うことないのになぁ。
大地の上位存在を呼び出して、現世に留める魔力は半端無いものが要求されるのだ。

そうして、遺跡の中でちょっとした広場のような所に出た。
そこから通路がさらに枝分かれしている。
わたし達はここを基点に探索しようかと話し合い、見える範囲の敵を掃除し終えた頃に、
それは聞こえて来ました。

『チリ～～ン……チリ～～ン……』

物悲しい鈴の音が小さく響いて、そして、その音は徐々に近づいて来る。

レティが音も立てずに音が鳴る方へと移動し様子を探りに行く、が、通路の曲がり角からそっと向こうを覗くと、少ししてこちらに急ぎ足で戻って来た。

「なんかヤバそうな集団が来るよっ、明らかにボス級」

こういう時、ウインの決断は早い。

「どんなヤツらなのか解らない以上、いったんやり過して様子見したいな」

ウインはそう言いつつ、周りをキョロキョロと見回し、

「よしっ、あそこに隠れよう！！」

と指差した。その場所は広場の隅、壁が崩れた場所でちょっとした窪みになっている。

広場の中心からはその窪みは崩れた壁の残骸が視線を妨げ、見えない位置になっていた。

その窪みに身を潜め、わたしは『宿泊セット』と『隠密』を、リアラは『結界』を唱えた。

これで精霊術による気配隠蔽と、神聖術による邪な存在からの隠蔽はほぼ完璧だ。

『チリ～～ン……チリ～～ン……』

それは異様な集団だった。

首に鈴の音を付けた、けれども頭が無い馬。『ヘッドレス・ホース』

というヤツだろう。
その馬に引かれる『チャリオット』、その御者はこれまた頭の無い騎士『デュラハン』だ。
デュラハンの両脇を固めるのは、禍々しく赤い透明な身体を持ち宙を飛ぶ霊体だった。
あれは……『スペクター』の一種だろう。
デュラハンの戦車に続いて、真っ黒な騎士が2体。おそらくは『シャドー・ナイト』。
その後ろから現われたのは、手の中に何か光る物体を持ったスケルトンだった。
さらにその後ろからヨタヨタと歩いている巨体は、腐った体を持つゴーレムだった。

その集団が広場に現われると、さきほど倒したハズの獣達が、次々と起き上がる。
あの光る物体！！　あの光を浴びると倒した敵が復活するようだ。
この集団は洞窟の中をたえず巡回し、あの光で仲間を復活させて廻っているのだろう。

隠れたのは正解だった。何の準備も無くあの集団に襲い掛かったとしても、倒した傍からあの光がある限り復活され続けただろう。
あの集団が巡回する限り、ダンジョンの探索は難易度がグッと高まったことになる。

集団が通り過ぎ、静けさが戻った頃にわたし達は再度広場を掃除し

てまず安全を確保した。

「あの光る玉を見ましたか!?、あれからは神宝の力を感じました。この地にカースド・エターリア達を縛りつけている力の源なのでは無いでしょうか?」

リアラが真っ先に思いつくところを話す。

「あいつ等、見た目は死霊だけど大地の奥底を流れる霊脈から完全に分離している存在よ。デュラハンもスペクターもシャドーナイトも、死霊のそれとは見た目同じでも中身が全然違うわね。あたし達地霊の浄化術が効かない存在だってことは確かよ（だみ声）」

水晶姫もそう補足する。

「あの光る玉、すごく欲しい所だけど、ここは優先順位を考えるべきじゃないかしら?」

わたしがそう発言すると、ウインも同意する。

「僕もそう思う。僕達はプニ神の地下神殿を探しに来たのであって、ここに居る死霊達、あえてそう呼ばせてもらうけど、彼等を解放しに来た訳じゃないし、神宝を強奪しに来た訳でも無い。ボスのような強力な存在との戦いは避けられるなら避けるべきだ」

「それで良いと思う」

ジルとリアラも頷く。

「僕達もここで死んだら、あの玉で連中の仲間入りになりそうだしね。そんなのまっぴらごめんだよ」

スニージーも危ない橋は渡りたくないようだ。

「勝てるか勝てないかで言えば勝てそうだけどね。　あたしはウインの判断に従うよ」

「ここが屋外だったら、わたしも戦う方に賛成するんだけどな。スニージーの言うように、こうはなりたくないしね～」

わたしは手を広げて、周りの散乱した獣ゾンビ達をぐるりと一瞥した。

「決まりだな。それじゃっ、ここからどうする？　道は４つの方角へ分かれているんだが？
さっきの集団が向かった方向は論外だろうし、一つは入口へ逆戻りだ。
そこの階段を下りるか、そっちの分岐をあの集団が来た方向へまっすぐ行くかの２択だね」

ウインが選択肢を提示する。

「私としては階段を下りてみたいかな？　根拠は特に無いけれど」

ジルがまっさきにそう意見を言った。
言ってから、でしゃばりだと思ったのか微妙に頬が紅い。

「ジル～？　もしかしてダンジョンが好きなの？　冒険モノの物語に出てきそうだものね？」

「えっ！？／／／／　いえ、あの……あぅ／／／／」

やっぱり！　妙に張り切ってるな、と思ったらそういう事だったか。

「他に意見が無ければ、それで行こうか。　それと各自で帰り道は覚えてくれよ？
万が一、逃げなければならない場合は、最後に頼りになるのは自分の記憶だけだからね」

ウインがダンジョンのイロハを今頃になって言う。

「水晶姫が居るから大丈夫だと思うけどね、わたしに何かあっても出口に着くまでくらいなら魔力が保つだろうから。そんなのでも大地の精霊。ダンジョンで迷ったりしないわよ」

「そんなの、ってアンタ……　それよりも、さっきから気になってるんだけどさぁ？
リアファリナ、その魔術って尖った物体をはじく魔法じゃない？

アンタとあたしの間に
もうずっと反発力を感じるんですけどぉ？　それってあたしに対する挑戦？（だみ声）」

うわちゃ、そうだったのか！？
確かに尖った物に対して強い斥力が生じるように『リニア』のバランスを調整してあった。

「もう少し後ろに離れなさいよね、敵に向かって押されてるみたいで気分悪いわよっ」

うぐぐっ　言い返せない。
ええーい、アンタがトンガッテル水晶だから悪いのよっっっ

階段を下りて１０ｍほど進むと

『足元危険』

また、プニ神の立て札が在った。ご丁寧にひとさし指が描かれ地面を指して居る。
その立て札から先にはこれまでの切り出した岩を並べただけの床と異なり、人工的な匂い
を感じさせる黒い床が続いている。
さらに日本庭園の飛び石の様に白く丸い飛び石が黒い床に等間隔で並んでいた。

「皆、止まって」

レティは全員を止め、自分ひとりで立て札の手前、黒い床の手前まで進む。
それからレティは、おもむろに洞窟の天井部分を見上げ、棒で天井部分を叩いて調べだす。

「プニってヤツはね、こういう立て札と如何にも何か意味ありげな黒い床や白い飛び石を置いて足元に注意を払わせといて、上からトラップを落としたりするんだよ。
昔さんざん騙されたからね」

「ふふっ、懐かしい話ですね。僕達の中でレティが一番騙されてましたよね」

「そう言えば、賢者の日には毎回騙されてたよな、レティは」

スニージーとウインが内輪ネタをばらす。

「「「　賢者の日？　」」」

わたしとジル、リアラがハモった。

「毎月の月初めの日は、賢者の日と呼ばれているんだよ。プニ神殿では。
その日は公然と嘘……まぁ他愛無い物だけだけど……嘘を付いても良い日で、騙される人

が悪いって決められた日なんだ。　プニ神は『人の言うことを真に受けて失敗したら馬鹿』
だと常々言ってる神様なんだ。僕達信者は賢者の日を通じて真実を見抜く目を鍛えるって
建前があるんだ、本音はただ楽しいからなんだけど」

「レティはイの一番に皆の標的にされてたんだよね、昔はレティもスレて無くて、直ぐに
騙されてたからね」

「……もう、ゴチャゴチャ煩いなぁーっ　ちょっとはダマっててよねっっ！！」

あ、レティが切れた。そりゃ真剣にトラップを探してる時に、昔の自分の至らなさを槍玉
に挙げらて、面白おかしく語られたら嫌だろう。

「ねぇ？　さっきからプニ、プニ言ってるけど、それって創生神バルシータのこと？」

水晶姫がそうウインに尋ねる。

「は？　いえ、違いますよ。　創生神？って初めて聞くけど。スニージー知ってるか？」

「創生神バルシータは、この世界を御創りになられたって神話に出てくる神様の名前だよ。
バルシータ神の下に、善神バルミラーと邪神バルザタンが居るって訳さ」

「創生神バルシータはお隠れになったと聞いてます。それ以後、この世界はミラー神と、
邪神バルザタンの2大神が秩序と混乱を司るようになったそうです」

リアラも解説してくれる。

「ねぇ？　なんでバルミラー神と呼んだり、ミラー神と呼んだりするわけ？」

「そういえば、ナゼでしょう？　ずっと子供の頃から神殿ではミラー神と呼ばれてましたから、言われて見れば神殿でバルミラー神という表現は使われて無かったですね」

「先日出逢ったダークエルフ達も邪神バルザタンの事を、ザタンと呼んでたよね……
それはそれとして、2大神ってことは、プニ神は入ってないんだ？」

プニ神って神々の中では亜流なのだろうか？

「ご、ごめんなさいっ、けっしてプニ神を侮った訳じゃなくてっそ、その、私はそう神殿で学んで来ただけで……」

リアラは慌てて言い訳する。

「バルミラー神と呼ばれたり、ミラー神と呼ばれたりするのはですねぇ」

スニージーだ。どうやら知識を披露したいようだ。

「かつてプニ神が『バルの名称を付けるのは禁止』だと神々相手に暴れたらしいですよ。
どうしてか、それで通ったみたいですね。以後バルを付けずに神の名が呼ばれるようになったという話です」

「神々がそれで納得したんだ!?」　おっどろきー。

「プニ神ってのは知らないけど、この周りに広がる神力は、創生神バルシータの物よ。
さっきの光る玉からも同じ神力を感じた。　間違いないわ（だみ声）」

水晶姫はずっとそれが引っ掛かっていたらしい。
神力の違いが解るなんてさすがは上位精霊。

「あ～～～～～っっっっ　もうっっっっ、静かにしててっっっ、それに近すぎるよ、もっとあたしから離れ……あっ」

『『『　ガタンッ　』』』

わたしの目の前で、人工的な黒い床の手前部分、洞窟の床が突然開いた。落とし穴っ??
レティ、ウイン、スニージー、ジルとリアラ、それに水晶姫の６人？　を飲み込み、穴は

すぐに元の床の状態に戻った。
一瞬の出来事だった。

わたしはさっき水晶姫に言われた通り、『リニア』の斥力が水晶姫に働かないよう離れていたので落とし穴に落ちず、一人取り残された。

レティが言った通り、意味ありげな飛び石も黒い床も、トラップに関係無かった。
落とし穴の仕掛けはそれらの手前に在ったのだから。
如何にもな場所と立て札を餌に、手前で立ち止まる事を想定して設置された罠だったのだ。

35ページ目

35ページ目

「水晶姫!?」

わたしは『土の宝玉』に問いかける。
契約を交わし召還者たるわたしと水晶姫は繋がっている。声は聞こえるハズだ。
少しして返答があった。

「ちょっとー？　アンタ一人取り残されてどうするワケ？　ほんとドジねぇ。
あたし達はダンジョン抜けて安全地帯みたいな処よー？
で、どうすンの？　助けが要るのぉ？」

「いや、それ逆だからっ！　無事なんでしょうね？」

わたしは話しをしながら、さっき開いた落とし穴の扉の上をぴょんぴょん飛び跳ねたり、
ドタドタ歩いたりしているのだけど、ちっとも開く気配がない。
6人じゃないと開かないのか、それとも、プニ信者が居ないと開かないのか……
トゲエルフじゃ体重が軽すぎて開かないのか？　それなら許す。

「はぁ？　当たり前じゃない。　折角足元の隠し扉開いてアンタ以外の全員が飛び込んだって言うのに、肝心のアンタがあたし達に付いて来ないってどういうこと？」

「ちょっ　落とし穴でしょ！？　落っこちたんでしょ！？」

「落とし穴って下に槍衾とか罠があればでしょ？　そんな物があったら扉が開いた瞬間に壁創って防ぐわよぉ。あたしを何だと思ってんの？　周囲への探査は神力で妨害されてるから扉に気付くのは遅れたけど、扉が開いた瞬間に罠だったらリカバリーするわよ。誰一人怪我無く移動したって時に、アンタが居ないのに気付いた時はビックリ仰天よぉ」

だめだ、話が通じない。
罠が無ければ足元でも隠し扉かい！？　その辺を小一時間問い詰めたいが。
力ある大地の上位存在にとって、害が無ければ罠と扉の違いは些細な事のようだ。
水晶姫の中ではわたしがドジ踏んだ扱いになってるし（涙

「とにかく無事なのね？　わたしも問題無いし、アンタの位置は感覚で判るからそっちへ向かって走って行くね。　皆には助けは要らないって伝えておいて？」

「了解。　それで、あたしはどうする？　そっちで身体を構築しても良いんだけど、この

ままこっちに居た方が良いみたいね？」

「そうして頂戴。　目印になるし、皆との会話でも間を取り持って貰えるから」

「はいな。迷子のドジっ子さんが一生懸命洞窟の中を走り回ってるところ、リアルタイムで状況を皆に中継してあげるわね？」

「いらないーーーっ」

さて。

問題無いとは言いつつも、ダンジョンの中で独りっきりかぁ。

とりあえず、『加速』で大地を走るには、邪魔となる浮遊術の『リニア』はオフだ。

そして、足元の斥力だけを排除した『劣化リニア』を即興で構築して試しに起動して見た。

先ほど水晶姫に言われて気付いた。

狭い場所で『飛翔』オートパイロット化を目指して創った魔術式だけど、視点を変えればなるほど言われた通り、これは全方位に働く『物理バリア』だった。

皆が現在居るのは、先ほど皆で降りた階段の真下おおよそ５０～１００ｍくらいの距離だ。

道が解らない以上、走り回って下へ降りる階段を探すしか無い。

『加速』を自分に掛けて準備が出来た。

「よしっ　行きますか！！」

道行く途中に獣ゾンビ達と出くわすが、スルーして通る。

獣本来のスピードが有ればわたしに追いついたのだろうけれど、コイツ等はゾンビ化して

疾る速度が著しく低下してしまっている。

わたしを追いかけては来るものの、攻撃出来る距離まで近づけた獣は居なかった。

時々、真後ろへ『イージス』を掛ければ追っ手を楽々と振り切れる。

これ、取り残されたのがわたしだったから良いようなものの他の誰かだったら死んじゃうシチュでしょ。

そうして走り回って死霊達を振り切りながら、道を探す。

簡単そうに聞こえるけれど、実際は簡単じゃ無い。主に気持ち的に。

色々と顔を背けたいデロリンチョな死体どもが次から次へと飛び掛って来るのだ。

夢でうなされたら、水晶姫へも夢の幻影を精神投影してやる！！

と決心した。

そんな風に考えながら走り回って、左右への分かれ道となるT字路に差し掛かった時だ、

『ふいいいいいいいい』

生きた鎧の自動防御機能『ジャミング』が働いた。魔法攻撃!?

『ズガーーーーン』　ちょっ!!??

洞窟という狭い場所で『ファイアーボール』を使って来ますか!?
『風の護り』と『炎の護り』が有るから何とかなっているものの、
直撃しなくても脅威だ。

ソレは、わたしから見て左側、宙に浮いて居た。

姿はスペクターに近い。　先ほど見た赤いスペクターを禍々しいと
言うならば、こちらは、
酷く『穢らわしい』というのがピッタリだった。
落ち窪んだ暗い目、半開きの口からはヨダレが垂れている。
元は金銀で飾られた立派な服装だったのだろうけれど、今では薄汚
れ擦り切れてボロボロ
となったローブを纏っている。　いや、問題なのはその下に着てい
る物だ。
かすかにワインレッドの色が見える。あれはもしや?
さらに、手に持つのはサイス……死神の鎌だ。
闇の中でも不気味に黄色く発光するその鎌には、魔法が付与されて
いるのが見て取れた。

『リッチ』

高位の魔法使いが邪神との契約で自らを不死の存在へと昇華させた、
危険な魔物だった。

そんなの相手に長々と戦うつもりは無い。一気に決める！！

『奪命』

存在力の全てを奪い取る光の魔術式。だが、
敵の身体付近で不自然に魔法がかき消された。
この消され方には覚えがある。あの時は暗黒の炎だった。
邪神バルザタンの鎧。それをあのリッチも保持しているに違いない。

リッチは次々と魔法を唱えて来る、炎、そして邪神の魔法。

邪神の魔法以外は全て直撃しないものの狭い洞窟の中で余波をどうしても受けてしまうが、
幸い、わたしの『炎の護り』と『魔法障壁』によってダメージは受けずに済んでいる。

『魔法障壁』、この世界では自分の身体を魔力で覆うことで、同じく魔力を用いた攻撃術
から身を護ることが出来る。
魔力を身に纏うのは何も特別に意識する必要も無い。
体力、精神力と同じく、この世界の人間なら誰もが持ってる自然の力だからだ。

『どりゃ～』と気合を入れれば魔力は強まるし、攻撃を受けた魔術式の属性を見極めて、
その属性、炎なら炎を、排除する気持ちを高めれば炎に対する抵抗力が自然に強まる。

こうしている間も、わたしの攻撃魔術式は次々とかき消されている。
暗黒の炎への対処法で想定してた通りだ。　炎、雷、闇、光の魔術式は通じない。
死霊相手に精神の直接攻撃が通じるとは思えない。　『精霊武装』なら違うだろうけれど。
ならばと、炎を少し離れた場所へ撃ち込んで、余波で削ろうとしても炎そのものが消えてしまう。
そうなると有効と思われる手持ちの攻撃魔術式は、地と水そして風、それもやり方次第だ。
しかし、ここで無理してリッチを倒す必要はわたしには全く無い。
でも、

「やられっぱなしで、このリアファリナが引くと思うな！！」

『エアミサイル』

から撃ちだ。
空気だけを動かしてリッチへぶつける。
洞窟内の狭い通路を砲身に、空気砲と化してリッチを襲う。

同時にわたしは双剣を抜いてリッチへと走った。
右手の剣に赤い魔力の刃を
左手の剣に蒼い霊力の刃を
剣の刃に纏わせることで、より強力な魔法剣と為す。

『霊力』、最初は精霊力を剣化しようと考えたのだが、出来上がったソレは体力と精神力

の両方を消費する『何か』だった。　故郷の村では誰もこの力を知らなかった。
直感で感じたその力は、心の力、魂の力なのだと思えた。　単純な精神力とは異なる力。
決まった名前が無いなら、この世界、名前を付けた者の勝ちだ。
だからその『何か』を『霊力』と名付けた。

わたしがこの双剣を手放さないのは、ひとえに魔力と霊力の刃が極めて強力だったからで、
未だにこの2つの力を超えた武器に出逢えて無いからである。

バルザタンの鎧は空気砲をかき消さなかった。
光や雷を防いでも、どうして唯の空気を防いでくれないのか。
わたしには、神の加護が及ぼす限界がなんとなく見えて来ている。

リッチが着ている鎧は大地の力が与えられた魔法の鎧だと見切って居た。
邪神の加護のせいで見落とされそうだが、『重力制御』を使っているからだ。
だからリッチは浮いていられる。
無重力下では対流が生まれず、炎はその場の酸素を消費すれば消えてしまうだけだ。
だからリッチは炎の魔法を多用して来るのだ、自分は炎の余波を食わないから。

空気砲で押されリッチは吹き飛ばされたが、直ぐに体勢を立て直す。
姿勢制御はわたしの『リニア』に近い方法を取っているのだろう。
そこへ、腕を交差させて右手の魔力の剣を左に構え、左手の霊力の

剣を右に構えた状態で
わたしが突っ込み、両手を勢いよく広げ、リッチを剣で挟むように斬る。
魔力の剣はその威力の幾らかが和らげられたようだが、霊力の剣はリッチへ直撃した！！

「ザマをみ」

そう捨て台詞を残し、思えば、わたしってそんなのばっかりよね、と思いつつ、
わたしはすかさず、リッチから距離を取り『イージス』を間に張って反対側へと走る。
邪神の魔法を操るリッチと独りで長期戦をするつもりは元より無い。
T字路をリッチと戦った左方向とは逆に、右方向へと一直線に走った。

と、わたしの走る前方に亀裂が現われる。
亀裂の縁に立ち、下を見ると下層階へ行けそうだったので、とりあえず飛び降りた。
この亀裂は上層へも通じているようだ。

『飛翔』

ゆっくりと数十メートル降りると、下層階が見えてくる。
そこには、

「ゲゲッ！！」

わたしは大慌てて上昇する。
まごう事なきボス、それもラスボスの部屋だった。

幸い、亀裂は小さい物だったし、まだ天井付近に居たわたしには気付かなかったようだ。
わたしは亀裂を上昇し続け、さっき飛び降りた場所を通り過ぎ、さらに上層まで飛ぶ。
と、そこは最初に吊橋が掛かっていた亀裂の所だった。
ここから下層のボス部屋までおおよそ２００ｍといったところか。

この場所にはまだ復活隊が訪れて無かったようだ。まだ死霊達は復活して居ない。
さっきはこの吊橋を渡って右へ行ったが、今度は試しに吊橋から左へ走って見る。

「アンタさっきから色んな所を走り回ってるみたいだけど、独りで探検してんの？」

おそらくわたしの居場所を感じて移動経路をチェックしているのだろう、水晶姫から確認
が入った。

「ついでだからダンジョンをぐるっとひとっ走りしてみようかと。
その後でそっち行くわね。安全地帯とやらを皆で先に調べててよ」

『飛翔』で『バリア』を上書きしちゃったので、再度『バリア』を

唱えて走り出す。
上位互換を目指して開発していたので、両立するように創られて無いのだ。
どちらか一方を唱えると、もう片方を上書きしてしまう。

最初の吊橋を左へ走るとすぐに長い下り坂となっていた。
下り坂で降りた距離と、１層から落とし穴層へ階段で降りた距離を比べると、階段の方が
短かったと思う。そしてその階から下層のラスボスまでの距離を思い描く。

なんとなく予想だけれど、この洞窟は５層構造で、吊橋を右に行くとＢ１、Ｂ３、Ｂ５層
に行けて、吊橋を左に行くとＢ４層、そこからＢ２層へと登れるのではなかろうか？

復活隊に出逢ったＢ１層、落とし穴の在ったＢ３層、ラスボスが居たＢ５層。
そして今現在、わたしが居るのはＢ４層じゃないかしら？
それなら、本命の地下神殿はＢ２層か？　と当たりを付ける。

Ｂ４層はまだハッキリと生前の面影がわかる程度の身体を持ったゾンビ達が徘徊していた。
しかも、全員が何らかの武器を持っている。
もう、もう、なんというか、うひゃーーーーな状況だ。　絶対、夢に出てきそう！！

さらに彼等はわたしを逃すまいと、わたしの前方へと廻り込もうとするのが見て取れた。
この層のゾンビ達は今までのに比べて明らかに賢かった。

もっとも、彼等の攻撃はわたしの『バリア』の斥力で全て軌道が反らされて当たらない。
この『バリア』は、足元へ攻撃して来る獣型の方が相性悪いのだ。

そうしてＢ４層を走り回っていると、

『チリ～～ン……チリ～～ン……』

わたしの進む道の前方から、またあの鈴の音が聞こえて来ました。
これは予想していたことだ。
復活隊の巡回がこのダンジョン内を隅々まで行っているのであれば、道は入り組んでいるように見えても、その実、一筆書きのように一本で全てが繋がっているのだろうから。

気にせず進む。

わたしに気付いた正面のデュラハン達が、わたしに向かって走り寄って来る。
けれど、直ぐにわたしは『イージス』をデュラハンとの間に、膝の高さで張った。
不可視の盾に足を取られてヘッドレス・ホースがマヌケな音を立ててコケる。
さらにその上にチャリオットが乗り掛かり、デュラハンはジャックナイフ状態で前方へと

両手をバンザイしつつ、両足を綺麗に揃えて宙を飛んで来る。

『ギャグ漫画みたいに綺麗に飛んでるなぁ』それが、わたしの感想だった。

顔からヘッドスライディングした（頭が無いのでそう想像した）エビゾリ・デュラハンのそれ何てシャチホコ？状態な背中をさらに足蹴にして馬とチャリオットを飛び越える。

シャドーナイト達は、剣を突き立てようとしたが『バリア』で弾かれる。

わたしはスペクターとシャドーナイトを無視してスケルトンとゴーレムの脇をすり抜けた。

スケルトンは無反応。ゴーレムが腕を振り上げた時には既に彼等の背後に抜けて居た。

これまた後方へ『イージス』を張り、シャドウナイトとスペクターの追撃を振り切る。

Ｂ４層から上層へ登る階段が見つかると、長い階段を躊躇なく駆け上がった。

そこは広い空間だった。このＢ２層にはダンジョン的な、いわゆる道は無かった。

全てがこの広い空間一つっきりのようだ。

天井は５０ｍ程だろうか？　他の層が２０ｍ位だったのに比べると

格段の広さが在った。
広い空間の真ん中には、マヤ文明を思わせるピラミッドが建って居る。
そして、
ピラミッドの入口には見覚えのある銀のゴーレムが2体並んで居た。

『『『『『　バッサバッサ……　』』』』』

空中からそんな音がして視線をそちらへ向けると、大きな蝙蝠がわたしに襲いかかろうとしている。ざっと数えて１０匹ほど。
血走ったような赤い瞳、口からは不似合いなほど尖った牙が飛び出ている。
『ヴァンパイア・バット』の一種なのだろう。
わたしは慌てず騒がず、魔術式を起動する。

『静寂』

シ～～～ン。

ヴァンパイア・バットは音響反射を封じられ、次々と方向と距離感を奪われて、壁にぶつかり床へと落ちた。
彼等は『静寂』の中では飛ぼうとしない。”目”を奪われたも同然だから。

「へ～？　その子達をそんな風にあしらった人は初めてよ」

いつの間にか、ピラミッド入口に女性が立って居た。
わたしがこの空間に掛けた『静寂』をものともせず話し掛けて来る。
只者では無い。

瞳は紅。綺麗に口角を上げて上品に笑った口元から覗く白い牙。
金と赤で彩られる模様で飾られたおそらくチェイン鎧を着た、蜂蜜色の金髪美人。

ヴァンパイア！？　よくもま～次々と！！
自分で意識するよりも早く、攻撃魔術式を放っていた。

『奪命』

さっきのリッチには通じなかった存在力を奪う単体攻撃魔術式、しかし、

『リィィ～～ン』

女ヴァンパイアの手前で『奪命』はどういう原理なのか不明だが、光の粒子となって散る。
キラキラと花火の様に、空間を彩る小さい粒子が散らばって大地へ落ちた。

「……おっどろいた。あたしの魔法障壁が破られて神宝の自動防御が働いたのは３５０年
の人生で初めてよ」

神宝!?

女ヴァンパイアは左腕を持ち上げ、腕に嵌められたガントレットを見せる。
それには、手首の部分に銀色の猫が意匠されていた。

「あたしはユミカ・ハヴァイラ。　このプニ第一神殿の神殿守護者よ」

女ヴァンパイアはそう、名乗った。

わたしが、ようやくダンジョンを抜けて安全地帯に辿り着くと、そこはパラダイスだった。

広大な、おそらくザワール湖の面積に近い土地がそこに広がっていた。
ザワール湖の湖底が全てこの地底空間なのだろうか?
見上げれば、湖の水底が不思議な青い空のようにユラユラと揺れている。
あれだけの水量が落ちもせずに、空中に留まっているのだ。それを可能にしている力とは
いったい、どのようなものなのだろう?
湖の水面から水の層は結構な厚みがあるにも関わらず、この地の明るさは何とした物なのか?　『影視』とは無関係に、真昼の青空の下に居るかのような光

量だった。

そして、ここは大地の恵みに溢れ、花の匂いが漂ってくる。
風!?　地の底であり、水の底であるハズなのに、ここには自然の風が吹いている!?
ジメジメしておらず、とても爽やかな風を感じる。
遠くの森には緑が生い茂り、とても色鮮やかだ。
湖の下だと言うのに、この大地には川が流れているのが見える。
川が流れ込む所、あれは湖!?　いえ、精霊使いの目で見ればそれは海だった。
元々、グランザールは海へ続く滝だ。この土地には地底であるが海と繋がっているようだ。

しかし、それは物理的におかしい。
昨日観光したグランザールの滝の高さは１００ヤンテ。９０m程しかない。
どう考えても、わたしが今立っている場所は海面より低い。
地底湖が海と繋がっているのなら逆流しないハズが。。。
いや、もとよりザワール湖の水が落ちてこない場所だ、海の水が逆流しないことを不思議
がっても意味が無いだろう。

ここはパラダイスだけれど、異常な世界だった。
あまりにも精霊力が満ちている土地。
それが自然に感じられること事態、どれ程不自然かは目を閉じても感じられた。

「ファリナ～、心配しました！　大丈夫ですか！？」
リアラが走ってくると、わたしに飛び付く様に抱きついて尋ねる。
少し涙目だ。

「無事でよかった、ファリナに何かあったらと思うと」
ジルも涙が滲んだ目で、わたしの無事を喜んでくれてた。

「何事も無くて良かったよ。ゴメン、僕の判断ミスだ。
6人集まると落とし穴が作動するようになっていたらしい」
ウインは罠に嵌った自分を責めていたようだ。

「あそこから独りで無事に脱出出来るなんて、やっぱりファリナは凄いですね。
僕だったらと思うとゾッとしますよ」
うん、スニージーだったら死んでたと思う。

「ごめんね、ファリナ。　あたしが罠に気付けなかったから」
レティ、何事も精進だよ！

「だ～～から言ったでしょ～？　その娘はあの程度のダンジョンなんてどって事無いって」
わたしはジロリと水晶姫を見やった、が、
とりあえず、水晶姫の事は後回しだ。

ウイン達と一緒に歩いてきた見慣れない女性が一人。
わたしはウイン達の後ろに立ってる可愛らしい女性、年の頃は二十歳くらいに尋ねた。

「そちらの人はどなた様？　この土地の人？」

何気にわたしが出会う女性達は皆美人だよね。

「地下都市『ニブルヘル』へようこそ。私はこの地で暮らす人達のまとめ役を務めている者で、ラーハイラと申します」

その女性はそう言うと、軽くお辞儀を寄越した。

36ページ目

36ページ目

こんがり肌のトゲエルフ　in　パラダイス。
水着とブルーハワイ片手にビーチで優雅に過したいわ。
忘れちゃいけないのは、寝そべるトゲエルフの横に山と積まれた魔法書よね！！

そういうのって夢のような、お素敵ライフだけれどもさ。
やっぱり現実は厳しいのよね。

「貴方達を助けて欲しい、と？」

ラーハイラからの依頼はこんな風に始まった。

「はい、既に他の方達には依頼の詳細についてもお話を致しております、答えは貴方様と
御一緒されてから、とのことでしたので」

「え～と、確認するけど？
貴方達は死霊に囲まれて生活するのがイヤで出来れば逃げ出したい、けれど、逃げるため

にはダンジョンに巣くってる死霊達が邪魔で、その死霊達を何とかするにはこの道を進んだ先のダンジョン内に居るボスを倒せば良い。ということなのね？」

「はい。ダンジョンの奥に居る死霊達を束ねている存在は、昼間～正午頃にこの先の入口からダンジョンへ入った場所に現われると噂されてます。というのも見た者が居るのです。夜はその場所に居ないと聞いてますが、確かめた者はおりません。なにせ夜は死霊達が活動する時間ですから」

「ふ～ん？　で、ウィン達はどうしたいの？」

「僕達の意見は先ほど言いましたが、ファリナが来たのでもう一度繰り返しますと、僕達がこの場所に来たのはプニ神殿を訪ねるためです。だから旅の第一目的としてまずは神殿を訪れたい。ラーハイラさん、貴方の願いはその後で余裕があれば考えたい。残念ながら、今の時点でお受けしますとは約束は出来ません」

「貴方がたにも事情はあるのでしょうから無理にとまでは言えないのは解っています。けれど私達も限界なのです。夜は死霊が街の中を闊歩し、この世ならぬ恐ろしい叫び声に耳を塞いで怯えて過すのは。私達はこのまま死ぬまで怯えながら生きなければならないのでしょうか？　そして死んだら彼等の仲間入りして……そんなの耐えられませんっ。

どうか、どうか、お願いします。死霊達を束ねる存在を倒すだけでもっ。
きっと神の御心にも沿うはずです。神官様」

ラーハイラは両手の指を組み、礼拝するようにわたし達へ依頼をする。
可憐な女性のそういう姿って絵になるなぁ。
わたしは冷ややかな目でラーハイラを見ながら、客観的にはそう感想を抱いた。

「ここにはウイン達のために来ている訳だから、どうするかはウイン達が決めて良いよ」

わたしは決断をウイン達に任せ、水晶姫の手を取り皆から離れた場所まで引っ張った。

「とりあえず、水晶姫はこっち来なさい」

声が皆に届かない程度に離れてから水晶姫を問い詰める。

「アンタ、ここを最初から知ってたでしょ！？
ううん、あの落とし穴、アンタは隠し扉と言ったけど、アレ開く前から知ってたわね？」

「な、なんの事かしら～？」

大地の上位精霊でもある水晶姫は嘘を付かない。
だけど真実を言うとも限らないのだ。
あの時、たしかに水晶姫は言った。落とし穴……隠し扉か？を発見するのは遅れた、と。
気付かなかった訳では無いのだ。ならば、いつから気付いてた？
それに、あの落とし穴の先に居たリッチは大地の魔法鎧を持っていた。
そんな物に大地の上位精霊たる水晶姫が気付かなかった？　地面の下のダンジョンの中で？

い～や、水晶姫は気付いて居たのだ。落とし穴にもリッチにも。
さらに落とし穴が安全地帯に通じていることも。
これ幸いとばかりに、リッチとの戦闘を回避しようとしたのだ。たぶんに親切心で。
邪神の加護を持つリッチに魔法攻撃は普通は効かない。ならば接近戦となるわけだけど。

無重力下の戦闘は慣れが必要だ。このパーティーでリッチと接近戦をまともに出来るのは
普段から『飛翔』で姿勢制御に慣れてるわたししか居ない。
復活隊を安全のためにやり過したのだ、ならば自分が黙っていれば落とし穴に引っ掛かり、
リッチも無難に回避出来ると踏んだのだろう。
戦えば、もしかしたら誰か危なかったかも知れない。そういうリスクがあったのは認める。

わたし独りを取り残したのはコイツなりの意地悪だろう。コンニャロめ。
心当たりは……有り過ぎる（汗

「とぼけるなっつの。アンタ言ったよね、扉に気付くの遅れたって。気付かなかった、じゃないよね」

わたしから目をそらす水晶姫。誤魔化しても無駄だっつの。

「そしてここよ。この広い土地には大地の精霊力が満ち溢れている。アンタが知らない訳が無いでしょ、さー白状しなさい！！」

「……認める。その通り。
でも、白状は出来ないわよ？　あたしだって大地の精霊として話せる事と、話せない事があるのよ。ここは神域だって言ったでしょ？　色々あるのよ」

「例えば、さっきのラーハイラって人が言ってた、この道の先からダンジョンへ入った所に居るドラゴンとか？」

「……アンタ、あれ見たの？」

「あはん。やっぱりね。わたしも見たときはビックリよ。あれ火竜でしょ？　すごい火の精霊力を感じたわ」

「危ないから近寄っちゃダメよ！！　あれは普通の火竜じゃ無いんだからっ！！
あたしも聞いただけだけど、創生神バルシータがこの地に閉じ込めたって話の始原の火竜よアレ。炎の上位精霊をも越える最上位に位置する存在よ」

「ふ〜ん」

「ちょっと、いくらアンタでもアレには勝てないわよ、手を出すのは止めときなさいっ!!
そもそも、始原の炎には耐えられないわ。あたしのハイ・オリハルコンですら一撃保つかどうかってくらいの超々高熱なのよ!?」

「へー？　一撃は保つんだ!?　良いこと聞いた!!　それなら何とかなるかな？」

「……アンタって初めて遭った時から無謀だったけど、時々、アンタが人の姿をした何か別の生き物じゃないかと思う時あるわ。フェニックスの炎で熔けないハイ・オリハルコンが保たない温度よ？　アンタなら容易に想像出来るでしょ……なのに挑戦するわけ？」

「とおっぜん。火の精霊界へ行かずとも契約出来そうな相手が人間界に居たのよ？　挑戦せずにどうしますか。ほれほれ、魔力炉に使ってる金剛晶石（ハイ・オリハルコン）を大きくしてちょうだいな。いざって時にわたしが中に入って炎から身を護れるように」

このハイ・オリハルコンって名前通り、堅くて、熱に強くて、衝撃に強くてとっても素敵な金属だけれど、同時にとっても残念な金属なのよね。

魔力伝導率がほぼゼロなのだ。おかげで加工も修理も水晶姫にしか出来ないし、魔法武器にも使えやしない。フェニックスの炎の5倍くらい熱耐性があるらしいから魔力炉の素材にはもってこいなんだけどね。そんな風にどっかヌケてるのは水晶姫の作らしいというか。

わたしがウイン達の所へ戻ると、ラーハイラって人との話し合いは終っていた。

「まず最初に神殿を訪れる。その後で協力するって事になったんだ。この街での宿泊所はこの方が提供して下さるらしい」

「はい。私達を助けて下さる方ならば泊まる所を提供する程度お安い御用です。
ただ、この街には宿屋と言うものがありません。基本的に外からこの街に来られる方など居ないからですが。なので場所は提供出来ても自炊となってしまうのですけれど、それで大丈夫でしょうか？」

「ええ、それで問題ありません。宜しくお願いします」

ウインはやはりこういう交渉事に慣れている。
知らない土地で地元の人達から協力を得られる事がどれ程難しいかを考えれば、宿泊所の

提供を得られ、ある程度は地元民の協力を引き出せたのは僥倖だろう。

そうして、もはや夕方といえる時間帯だったので、ラーハイラ曰く、
「夜は死霊達の時間ですから」
ということで、彼女に宿へと案内して貰った。
そこは都市というには微妙で、せいぜい街レベルではあったけれど。

街の中を宿まで歩いていると、子供たちが物珍しくわたし達を指差し、何か話したそうにして居たが、わたし達へ近づこうとしただけで大人達に注意されて引き離される。
いや、子供たちだけではない。
大人でも、わたし達が案内されて歩いていると、数人が集まってニヤニヤ笑いをしながら内緒話をしている。正直とても気分が悪いですっ。

案内してもらった宿は、普通の家の造りで街外れにあった。

その夜。
宿の部屋に、壁を静寂で覆い話が外に漏れないようにした上で話し合いを行う。

「さっきのラーハイラって女性の言うこと、どう思った？」

最初にウインが口火を切り、そう皆に話しかける。

「あたしは、彼女のこと信じられないな」

そう言うのはレティだ。

「プニは、そりゃ～好き勝手言うし、気まぐれだったけど、何の罪も無い人達をこんな風
に閉じ込めて苦しめるやつじゃないよ。　それに、気付いた？　リアラ？ファリナ？」

「私はあの方のお話に矛盾を感じました。
ここに居る死霊達は自らの未練で死に切れないのでは無く、神の呪いで存在させ続けられ
ているのです。　夜は死霊達の時間と言ってましたが、そもそも昼夜関係ないハズです」

リアラは神官としての視点で語るが、わたしはレティが聞きたい事を的確に回答する。

「レティが聞いてるのは、あのラーハイラって人が既に死んでる人だってことでしょ？」

「「「「　えええっ！？　」」」」

わたしとレティを除く４人が驚く。

「そう！　そうなのよ。彼女はもう死んでるのよ。　え～となんだっけ？」

「カースド・エターリア？」レティの疑問にわたしが答える。

「そう、それ。　自分も死者達の仲間のクセに、死者が怖いとか意味が不明だよ。
それに、この街の奴等も何か変なんだよ。　大多数の奴等は生きてるけど、何人かに一人は死んでるんだ。それなのに生きてるヤツも死んでるヤツも、同じように生活してる」

「案外、自分達は死んだと思ってないとか？」

「その可能性もあるか、でもさ、生きてる時と死んだ時でまったく同じに生活出来るハズが無いと思うんだけどなぁ？　周りの人間だって気付かないのは変でしょ？」

「生理・欲求が生者と死者とで同じだとは思えないわね」

わたしとレティが精霊使いとして気付いた事を言い合っていると、今まで蚊帳の外に置かれて居たウインが話しに混ざる。

「ちょ、ちょっと待ってくれ、あの女性がもう死んでるって！？　全然気付かなかった。
僕が疑問に思ったのは、レティと同じくプニ神官として感じた、流刑地としてのこの地の不自然さだったわけだけど」

スニージーも意見を言う、

「……僕も同じく気付かなかった!!　でも、それはそれとして。僕が思うには、この街の男達は少なくない数が居ましたよね？　ダンジョンの死者達はそりゃ数は多かったけど、この街に住む人間が一致団結すれば倒せない数ではありません。それに、街の子供たちが僕達に近づこうとすると、彼女はさりげなく子供たちを遮るように動き、大人達に指示して子供を僕達から引き離すように連れて行かせてました。彼女の話には、何か裏があるように感じたのですが？」

わたしは、ラーハイラを見て気付いた事を述べた。

「彼女は、おそらくだけど、アンデットだと思う。アンデットがさらに神の罰を受けて『鎮魂』が効かないカースド・エターリア化しているんだと思うのよね。アンデットは大地の奥底に在る霊脈から力を引き出してるから。これに関しちゃ、大地の精霊である水晶姫も同意見だったわ」

とりあえず、この場ではラーハイラって女性は信じず、注意深く様子を見ようとなった。
彼女の依頼では正午頃にダンジョンのボスの所へ行けば良いようなことを言っていたが、
依頼をこなすつもりがないなら正午に拘る必要は無い。早朝から活

動することになった。

そして、その夜のこと、

わたしはまだやることがあるので、皆が明日早朝から活動するために早々と就寝したのを
見計らい、宿を抜け出してダンジョンへと向か……おうとしたら、

「どこ行くの？　ファリナ？」

歩き出したわたしの背中へレティがそう声を掛ける。
手には愛用のダークミスリル弓を持っている。

何？このデジャブ？
前回と違って、今回はダンジョンの中でお宝なんて見つけてないからねっ！！

「脅かさないでよっ　レティ、どうやって気付いたの！？」

「どうって、宿の気配が乱れたから。　人が出入りすると家の気配って変わるのよ。
何か有ったのかと様子を見に来たら、ファリナが出かけようとしてるから」

何ソレ！？　アンタはどこの忍者ですか！？
ブラウニーなんてこの家には居ないハズよね？
ホンッと精霊使いのスカウトって侮れないなぁ。

少し落ち着いて真面目に話す。

「わたしってばダンジョンの中を走り回った時に、色々知りすぎちゃった所があってね。
ここは試練の地だから、知っても皆には話せない事が在るわけだけど勘弁して頂戴ね？
アンタ達が知れば挑戦権を喪っちゃうから」

レティは少し首をかしげ、でも、先を促すように口は挟まない。

「で、わたしが今から出かける用事は、アンタ達の試練に全然関係ない所で面白そうな物を見つけてね、そこに行ってこようかと。　言っておくけどお金とかそういうのじゃ無いからね」

「あぶない所？　なんなら一緒に行く？」

「ううん、これはわたし独りでやらないとダメな事柄だから。
言ってみればわたしだけの試練って所かな？」

始原の火竜との契約の場へは、皆を連れては行けない。
戦えば死者が出るのは無論のことだが、精霊との契約というのは厳粛なものだ。
大勢で押し掛けて行うものでは決して無いという思いもある。

「……わかった。大丈夫だと思うけど十分気をつけて。　行ってらっしゃい」

「ん。行ってきます」

『闇爪』

ラーハイラが指定した道なりに歩いてダンジョンへの入口から侵入し敵を倒しながら進む。
火竜が居るラスボス部屋は位置的にそう遠くないハズだ。

そう、このダンジョンのボスはドラゴンなのだ。
ラーハイラの依頼はそもそも実行不可能なのだ、あれは人が討伐出来る物では到底無い。
ウイン達にはわたしが居るから、普通のドラゴンなら倒そうと思えば出来ない訳ではない、
それは逆を言えば、わたしがメンバに居ること前提の試練などではあるわけ無いのだ。

ドラゴンを倒さないルートこそが試練の本筋だと考えれば、おのずとラーハイラの依頼を
行おうとすれば試練失敗ルートなのだと容易に予想できる。
走り回ったせいでラスボス部屋の位置を把握したわたしには、ラーハイラの依頼など最初
から疑いの目で見ていたが、それをウイン達へ告げる事は出来かねている。

あの神殿守護者であるユミカって人からその旨、釘を刺されているからだ。
独りでダンジョンを走破出来て、強力な魔法も操るわたしが全力でサポートすると試練にならないから適当に手を抜いてくれ、と。

考え事をしていても無意識のうちに敵を倒して奥へと進んでいたようです。
入口から２００mほど奥へ進んだ場所に、ソレは居ました。

始原の火竜。
普通のドラゴンの倍近い大きさを持ち、角の数、爪・牙の凶暴さ、鱗の強靭さは他を圧倒するのだと言う。

ただし、このラスボス部屋は神の作った檻でもあった。
熱気も、おそらくは始原の炎ですら封じ込めることが出来るのだろう。
すぐ近くで見ていられる距離まで近づいたにも関わらず、火竜からわたしが居る場所までは熱が全く伝わって来なかったのだ。

わたしは少し引き返し、ゾンビ達の掃除を済ませた部屋へ戻ると、いそいそと生きた鎧を脱いで、邪神バルザタンのアビスフレイムプレートアーマーを四次元ポシェットから取り

出して着る。以前ダークエルフ達から奪い取ったあの鎧だ。
着込む際に、呪われたり、そもそも着れないかと思いきや、あっさり着れたので拍子抜けだった。　が、そう思ったのは早とちりだったらしい。

『対価を払うがよい』

突然、頭の中に声が響いた。

「ツケにしといて」

わたしは誰とも為しに返事を呟くと、それ以後、声は聞こえなくなった。
なので、邪神からの言葉を頭の外へ追いやると、

「火霊お願い」

そう言って、火霊による『精霊武装』を行う。
同時に、わたしの全身が炎のように燃え上がった！！

これでわたしは火霊と一心同体。炎に対する耐性は極限まで跳ね上がった状態になる。
火霊と一体化が可能なのはアビスフレイムアーマーのおかげだと言える、普通は出来ない。
炎の中でも呼吸が出来るのはこの鎧のおかげだから。そうじゃないと窒息しちゃう！！

そして外部からの炎の精霊力による攻撃を無効化し、装着者へ炎のダメージの一切を伝えない神器でもある魔法の鎧が、わたしを火竜の炎からも護ってくれ

るだろう。

筋力を底上げしているからプレートアーマーを着て歩けるけれど、
やっぱり重くて動きが
鈍くなっているのは仕方が無いところだ。
『加速』も使って移動力を高めて、さらに『バリア』も張って、
『火の護り』『風の護り』『水の護り』『大地の護り』などなど、
手持ちの防護魔術式は
全て掛けられるだけ掛けた。

「よっし、行きますかっ」

わたしはラスボス部屋に突入する。
そのとたん、始原の火竜はわたしを睨みつけて来た。
同時にわたしに襲い掛かってくる、いや、ラスボス部屋内の全てが
白い炎の洗礼を受けた。

いまや、ラスボス部屋の中は、白く輝く絶対の死の世界だった。
フレイムアーマーの魔力と炎の精霊武装による炎抵抗力のおかげで
何とか保っては居るが、
例えるなら５０度のお風呂に入っているような感覚だ。熱いと言う
より絶え間なく痛い！！

『白光炎』

炎の上位精霊であるフェニックスが使ってくる1億度の超々高熱のスキル。
それをこの始原の火竜は、なにげに普通に使って来てる。
いま、この部屋に誰かが足を踏み入れたなら、その瞬間に何も残さず蒸発するだろう。
ラスボスの部屋には何も無かった。それは何物も存在出来ないからだ、この超々高熱で。
それでも、神力で創られた専用の檻でもあるこの部屋が、これだけの熱でなんとも無いのはさすがではあるのだが。

『始原の火竜よ!!　わたしの声が聞こえるか!?　お前と契約を結びに来たっ!!」

やがて火竜の声が聞こえてくる。

『か……だ……えせ……だ……か……』

最初途切れ途切れだったその言葉はやがてハッキリを聞こえてくる。

『カカエカダセエカダセカエカダエセカ、ダセ!!カエセ!!』

ダセというのはここからダセという事だろうか?　ならばカエセというのは?

「何を返せと言うの？　それを返せば良いの！？」

重ねて尋ねると、

『カエセ！！』

わたしに向かって大きく口を開き、息を吸い込む火竜。

いけない！！　ブレス！？

『水晶姫！！お願い！！』

わたしの召還に応じ、水晶姫のハイ・オリハルコンのシェルターがわたしを覆い隠す。

その直後、始原の火竜は蒼い炎と赤い炎を同時に吐き出した。

あれは……霊力と魔力の炎！？

それらは螺旋の渦を描き、混ざり合い『紫光炎』となってシェルターを直撃した。

その始原の炎に包み込まれ、シェルター越しでも気を保てないほどの高熱がわたしを襲う。

その時間は果たして一瞬だったのか？　永遠にも感じた永い時間だった。

ハイ・オリハルコンで出来たシェルターはよく保ってくれたが、やがて耐え切れず熔けて

始原の炎が溢れ出し、わたしは超々高熱をも越える超々々高熱の炎

に飲み込まれる。

ヤバイと思ったその次の瞬間には、もう意識は飛んでいた……

気付いた時には、わたしの目の前にドラゴンの口が在った。

いや、顔が在ったと言うべきか。

ギョっとして飛びのこうとしたが、炎による痛みで全身が引き攣り身動き取れなかった。

すぐさま『再生』を自分の身体に掛ける。

一瞬で、とは行かないものの、程なく動けるくらいには回復出来た。

火竜はその間、何もせず、わたしをじっと眺めて居たのだ。

ふと気付くと、わたしの足元にわたしの身長ほどもある巨大な角が折れて落ちていた。

これは……火竜の角!?　よく見ると、火竜の頭にある何本かある角のうち、一本が折れているのが見えた。

あいた!!　またやってしまったのか!?

『契約を望む者よ、お前からは我が愛し子と同じ匂いがする。それ

に免じて無礼を許そう。
久しぶりにその匂いを嗅いで、我も正気に還ることが出来た。
お前ならば、あの忌々しい創生神バルシータの元から我が愛し子を
我が手に連れ戻すこと
が出来るやも知れぬ。
我はここから出ること叶わぬゆえに、お前が我が愛し子をここへ連
れて来るのだ。
もしそれが出来たならば、その時は契約を交わそうぞ』

ふ～、不本意な所は在るものの、結果良ければヨシとしよう。
なんとか契約に漕ぎ着けるための条件を引き出すことが出来ました。
死ぬかと思ったよー。
それにしても、話が急すぎて付いていけてないけれど、子供を連れ
てくれば良いのね？？

『これを持って行くが良い、お前の力となろう。　だがお前が約束
を違えるならば……』

ぶるぶるぶるぶる
わたしは急いで首を横に振った。

落ちている角がひとりでに空中に浮かび上がり、ピシピシッと音が
響くと角が割れて行く。
それはあっという間に一振りの長剣となった。

剣がわたしの両手に納まる。　一瞬、重すぎて取り落としそうにな
ったのは内緒だ。

『我が名は、＃＄％＆！＆@＊＄♪だ』

やっぱりと言うか、ドラゴンの名前はそもそも存在力が強すぎるのと、人には発声不可能
な音で、到底名を唱えることが出来るとは思えない。
それでもあえて言うなら『シャヴァキャラン』が近いだろうか？

「始原の火竜よ！！　御身の名は人に発音出来そうにない。近い音で呼ぶことを許されよ」

『よかろう』

「では、御身のことを……『サバカン』と呼ぼう。　それで良いか？」

『構わぬ』

サバ缶ゲットだぜ！！　もちろん意味を教えたりはしない。

『では行くが良い。我はここでお前が我が愛し子を連れて来るのを待っている』

わたしは再び生きた鎧に着替えてからダンジョンを出て、宿に戻るために歩き出す。
火竜の剣は片手でも両手でも扱える物で、いわゆるバスタードソードという代物だった。
恐ろしいまでの火の精霊力を内包している。

もっとも、トゲエルフには重すぎて振れないのよっっっ！！　これをどうしろと！？
この剣を生きた鎧のパワーに任せて振り回すと、カウンターウエイトが取れずに身体ごと振り回されてしまう。それほどの重量だった。
おまけに四次元ポシェットに入らなかった。わたしの身から離されないよう条件付けされているようだ。後で鎧の背中にでも背負えるようにするしかないだろう。

けれど、

今頃になって、ジワジワと達成感が湧いて来ましたーーーーーーーーっ！！！！
やったやったーーーっ　まだ契約は取れてないけど、クエスト達成すれば本契約だー！！

「ファリナ？」

そう声を掛けて来たのは水晶姫だ。
今は召還してるわけじゃ無いので自力でこの場に姿を見せているのだろう。
ボンヤリした影の様に見える。

「あら、お迎えご苦労さま」

「生きて戻ったのね！！　凄いじゃないの！！」

「ありがと。ついでと言っちゃ何だけど、これ元通りに直しておいて？」

そう言うと、一部熔け落ちて元の形から崩れてしまっているシェルターを水晶姫に渡した。
これを直して貰えないと魔力炉が使えなくなる。

「うっぎゃぁぁぁあああああ～～～～～、あ・あたしのハイ・オリハルコンがっ
あ、アンタなんて事すんのよっ、えぐえぐ、あたしの金剛晶石～、
オニぃ～、アクマぁ～
今のアンタの姿みたいに性格も真っ黒よぉ～」

「火竜にこんがり焼かれたからね、さすがに煤けちゃったわよ。早くお風呂に入らなきゃ。
それにしても大げさねぇ。女は切り替え早くないとダメよ？　そんなだからアンタは……」

その時、わたしの『探知』にここから少し離れた場所に二人引っ掛かっているのが見えた。
街に近い所だし、普段なら気にしなかったかも知れない。
しかし、今は死霊の時間、誰だか知らないがなぜそんな場所に二人で居るのかが気になる。

「んじゃね？　水晶姫。また明日召還するからぁぁぁ……」

言い終わらないうちに『飛翔』でその場へと空から近づく為、水晶姫を置いて舞い上がる。
きっとこんな事ばかりしてるから、水晶姫からのイヤガラセが止まないのだろう。

『透明化』『影視』『望遠』

そうしてある程度の距離を置き、その謎の二人組みを遠くから拡大して見ると、
そこに居たのはラーハイラと、あのリッチでした。

ラーハイラは昼間の顔とは全く違う、言葉通り、夜の顔を見せていた。
いびつに歪んだ笑い顔は、昼に見た可憐さを微塵も感じさせなかった。

ラーハイラが試練に関係するのであれば、わたしが余計な介入を今の段階でするのは避けた方が良さそうだ。そう考えた時だ、

ラーハイラがこちらをキッと睨みつけると、何かを口ずさむ。
ラーハイラの周りに複数の青い光球が浮かびあがり、同時に、生きた鎧のジャミング機能が働いた。

どうやらラーハイラはわたしが見えて居るわけでは無いらしい、空中の怪しいポイントにそれぞれ散らばせた光球を広範囲に爆発させていたからだ。
だいたいのカンで撃ったのだろう。

2発ほどジャミング機能であらぬ方向へと逸らされ、地面に誤爆していたのが見えた。

わたしはすかさず距離を取る。

ラーハイラは魔術師だったのね。気配に敏感な所はもしかしたら偵察(スカウト)技能も持っているのかも知れないと考えた。

とりあえず、そのままその場を後にした。

宿へと帰り、『お風呂セット』で身体を洗ってる時に気付いた。

「え？　肌が……黒い？？」

ダークエルフ、とまでは行かないものの、わたしの全身は綺麗にこんがりと黒くなってた。

37ページ目

37ページ目

死霊都市二日目の朝。

「ファリナ、どうしたんですか！？　それ」

朝起きてから朝食の支度をしていると、朝の礼拝を終えたリアラが
食堂へ手伝いに現われ、
わたしを一目見るなり尋ねて来る。

聞きたい気持ちは判るけど、今はそっとしておいて欲しいのよね……
無理目な相手に挑んでその結果がこれってのはちょっと自己嫌悪。
過信し過ぎてました。
自分の中であの力に対する甘えがあったのかも、と突き付けられて
るようで凹みます。

とはいえ、今朝は顔をあわせた順に皆が一様に驚く。
そりゃそうだ。なんで……なんで……逆パンダなのよーーーっっ！！
全身焼けてるならまだしも、鏡を見てビックリさー。
顔の伊達メガネの形で、そこだけ真っ白なのでした。
ザ～タ～ン～め～～　おぼえてろっ

おかげで街を歩いてても子供にからかわれる始末。

「おねーちゃん、お顔のオメ目の周りだけ白いね？」

よけーなおせわですっ！！（涙

「あのね、人には触れられたく無い過去ってのがあるの？　判る？判ったら向こうで遊んでてね（滝涙のエルフスマイルっ）」

「う・うん、判ったよ。あのね？おねーちゃん。　夕べね、お空がピカって光ったの。
プニ様がおっしゃってたよ。そういうのって、ゆ～ふぉ～って言うんだよね？
サーシャね、お隣のね、レンちゃんとゆ～ふぉ～探しに行くんだよ。いーでしょ！？」

「ゆ～ふぉ～？」

ピカって光ったのは、わたしがラーハイラの魔法に撃たれた時のかしらん？

「サーシャ、だめよ。こっちいらっしゃい！！」

通りすがりの女の子は、そう言われてお母さんに手を引かれて行きました。

「あのお母さん、死者だね。　サーシャって娘さんは生きてるけど」

レティは母子が去った後、皆にそう教える。

「今日こそ神殿まで辿り着きたい。なんとなく今日はイケそうな気がするんだ」

パラダイスは今日も素晴らしい天気で。（地下だけど）
なんて清々しい朝なのかしら。（湖底の下だけど）

ほぼダークで一部ホワイトなトゲエルフを除いて、他全員パラダイスの夜は快眠を貪れたようで、気合の乗ったウイン達は早朝から気勢を上げている。

ラーハイラの言ったボスは放って置くことにしたわたし達は、ボスへと続く道とは別の、ダンジョンの入口その２へと続く道を進む。

なんの事は無い、わたしが昨日神殿から出てきたその場所だ。
そこから入れば、このＢ５層からＢ４層へと続く上り坂が在り、そこからＢ４層の反対側へ行けばＢ２層の神殿へと続く上り階段へと辿り着く。
わたしは守護者のユミカからこの死霊都市へと抜ける道順を教えて貰ったので、逆に辿ろうと考えれば楽勝ではある、が、ウイン達の試練なのでその辺りは口をつむぐ。

「ほい、水晶姫、今日も頑張ってねｖ」都合が悪いときは丸投げよっ

もっとも、

「な……なんだ!?　この死者の多さは!?」

ウインが驚く。

Ｂ５層からＢ４層へと続く上り坂は満員電車もかくやという程の半端じゃない死者が居る。

しかも、

※Ｒｅｐｅａｔ

「レティ、あの中の一人に弓を撃ってくれ、少しずつ誘き寄せて倒して行こう!!」

「ほい」　レティが矢を一番手前の死者へと放つと、

『『『『『『『『『『『『『『『　ギラリ☆　』』』』』』』』』』』』』』』』

そんな擬音が聞こえて来るほど、死者全員が一斉にこちらを振り返く。

「ウラ～～」と声を立てて、視界に入る死者全てがわたし達へと襲い掛かって来た。

もちろん、そんな数を相手に出来るハズも無く、わたし達は一目散

にその場から逃げる。

死者達はダンジョンの外までは追いかけて来なかった。
しばらく入口をウロウロすると、元の場所へと戻っていった。
わたし達は様子を見て、落ち着いた頃に再びダンジョンへと入る。

※Ｒｅｐｅａｔへ３度戻る。

そんなこんなで４回程繰り返し全く先へ進めないと判ると、とうとうウインも根を上げた。

「よしっ、判った。　このルートは通れそうにない」

「そうだね、別のルートを探そう」

ジルもそう返事を返す、それは他全員の気持ちでもあったから。
正直言うと、やりようはあるのだが。『イージス』で分断するとか。
事情をソレとなく気付いてるレティがこっちを向かないのもワザとらしく、それも含めて
ウシロメタイわたしは何時にもまして静かに皆の後を追いかける。
せめて心の中でエールを送るわね？

Ｂ５層の死者の数は先ほどの上り坂に比べれば断然少なかったが、
それでもＢ１層に比べて数多く、また、全員が武器を持って居た事で倒すにも時間が掛かり、調査は遅々として

進まない。

それでも少しずつ奥へと進み、
わたし達の目の前には魔法陣が一つ、少し離れて右奥にも似たような魔法陣が見える。

「これは何の魔法陣だろう？」

魔術師のスニージーが興味を持って調べ始める。

内緒だけど、わたしはその魔法陣がどういう働きをするか知っている。
その魔法陣で鍵となるアイテムを持って立てば、対となる魔法陣へと転送される仕組みだ。
行き先はＢ４層。右奥にある魔法陣が逆にＢ４層からここへと至る転送陣である。
わたしは昨日、ユミカが転送陣を起動してくれたのでこれを利用してＢ５層へと来たのだ。

Ｂ５層からＢ４層へ到達するには、先ほどの無茶振りな上り坂を強引に突破するか、この
魔法陣の鍵を入手しない限り神殿へは行けない構造となっている。
つまり、上り坂を諦めたわたし達はどうしても鍵を見つけなければならない訳だ。

程なく、スニージーも魔法陣を読み取り、鍵が必要だ、との結論を出す。
と、ジルがクルリと、わたしに向き直り、

「何か変。　どうしてファリナはその魔法陣を調べなかったの？」

ギクッ　この子ってば時々凄く鋭いわね。

「その理由は簡単。ファリナは昨日、独りでこのダンジョンを調べちゃったから。
その魔法陣も神殿の位置も全部知ってるのよね？　でもこの試練は、あたし達3人のために在る訳だからさ、知ってても話さなかったのよ。話したら試練にならないものね」

レティが答えてくれた。昨日の夜、ちょっと話しただけなのにホント、カンが鋭い。

ええーい、こうなったら、

「うん！！　その通り！！　そういう訳だからウイン、スニージー、レティ頑張って！！」

開き直っちゃえ！！

「あ、でも、鍵の在り処は知らないからねっ」

「うーん。正直ボスの方面には向かいたく無いんだが、もう調べてないのはそっちだけか」

魔法陣の所にこれ以上居ても手がかりが無い事を納得して、また移動を開始する。

「もうそろそろ正午になるね？」

レティは腹時計だろうか？　わたしの宝玉時計でもお昼だ。

そうしたところで、鈴の音がわたし達が今戻って来た方向から聞こえて来た。

『チリ～～ン……チリ～～ン……』

「あ、復活隊が来た。あの魔法陣を使ってここに来るのね。どうする？　あの光る玉が鍵なのかもよ？」

わたしがウインの判断を仰ぐため問いかける。

「復活隊？　良い得て妙だな。　確かにあのボス達が持ってる光る玉は怪しい」

ウインも賛成する。

「待って」

しかし、ここでジルが意見を言う。

「私達なら、確かにあのボス達、えと復活隊？に勝てると思う。けれど、なんでだろう。それが正解とは思えない。危険なだけで得

る物が無い気がする」

「あたしもジルと同感。あのプニが！　待ってればのこのこと勝手にやってくる復活隊に重要な鍵を持たせてるとは思えない。自分から知恵を出して積極的に取りに行ってこその試練だと言うんじゃないかな？　でさ、復活隊がこの時間にここに来た方が気になるよ」

「言えてますね、ただの偶然とも思えません。どうでしょうか？　ここは復活隊をもう一度やり過して様子見ませんか？」

レティとスニージーも復活隊が鍵を持つとは思ってないようだ。

「なら、いったん外へ出て、ラーハイラが言ってた入口に向かって見ませんか？
正午に何があるのか、あっちへ行けば判る気がするのですが？」

リアラはそう提案する。

「とりあえず二つ選択肢あるか。一つは、復活隊を監視して追いかけてみる。
もう一つは、ラーハイラの意図を確かめに言われた場所へ行く」

ウインがそう2つの案を提示する。

「あたしはラーハイラの言ってた入口へ向かうのは避けたいな。罠だと思ってるから」

「なら、復活隊をこっそり追いかけて見る？」

レティの反対意見に、リアラは自分の意見に固執せず、そう問いかける。

「そうするか、皆それで良いかい？」

ウインは全員が頷くの確認した。

そうして、わたし達はいったん入口の方へ引き返し、復活隊をやり過してから、その後で
死者達を倒しながら鈴の音を頼りに追いかけ始めた。
驚いたことに、復活隊の中にあのリッチもまじって居ました。

邪魔な死者達を手早く倒すため『ヘイスト？』などの戦闘支援魔法も惜しみなく掛けて、
わたし達は復活隊の後を追いかけ続ける。
ヘイスト持ちの二人に死者達は気付く間もなく一刀両断にされ、静かに追跡を行う。

そうして追いかけると、ちょうど正午を過ぎて一刻ほど過ぎた頃に
復活隊＋リッチの混成
パーティーは始原の火竜が居る部屋の前を通り、そこで方向転換して別な場所へと歩いて
行ってしまった。

「なるほどねぇ、正午にあの入口から入ると、丁度この火竜の部屋の前で後ろからやって来た復活隊＋リッチに、火竜との挟み撃ちを喰らう形になるわけだ」

わたしがそう言うと、

「ラーハイラの依頼通りに行動するとトンデモ無い目に遭ってたって事か。
レティとファリナが居なけりゃ、相手が死者だって知らずになんとなく矛盾を感じながらも依頼を受けてたかも知れないな」

「プニらしいって言うか、あたし達を罠に掛ける依頼をワザワザ用意しておくなんて」

ウインとレティも感想を言う。

「真に受けてのこのこ引き受けると全滅コースでしたね。でも依頼が嘘ならあからさまに怪しいのはラーハイラの立ち位置ですかね、彼女は試練にどう絡んでいるのでしょうか？」

「上り坂は死者が一杯で登れない。魔法陣は鍵が無いと通れない。ボスがあの火竜ならばちょっと勝てそうにない。ナイナイ尽くしで手詰まりなら戻ってラーハイラでも監視する？」

ジルが新たに提案を出す。

「……それが正解か？　この不自然な依頼が罠だと気付けば、次に来る疑問は、では何のために？だしね。　ラーハイラを調べることが先に進める条件なのかも知れない。
他に案も無いならそうするか。上り坂の強行突破はその後で必要なら考えよう」

街へと戻る途中、レティはわたしに夕べのことを聞いて来る、

「ね、ファリナが夕べ出掛けたのはあの火竜絡み？　その背中に背負ってる見慣れない剣はあの火竜のでしょ？　感じる精霊力が同じだもん」

皆も話を聞きたそうだったので、道すがら夕べの話を聞かせる……

話の流れで、夜中にラーハイラと出遭った事、リッチと一緒に居た事、魔法を使って来た事などや、偵察技能を持っているかもと言った推測も皆に伝える。聞かれもしないなら余計な情報は言わないようにしてるが、殊更に隠し立てするつもりも無いから。

街に戻ると、今朝出遭ったサーシャって娘の母親がなにやら慌てた様子で走っていた。

「どうしたの？」

わたしが声を掛けると、母親はハッとしたようではあるが、答えてくれる。

「サーシャが……娘がお昼をとうに過ぎたのに帰って来なくて、どこへ行ったのか……」

「あの娘かぁ。お隣のレンちゃんって子と、ゆ～ふぉ～探しに行くって言ってたね」

「お隣の？　判りましたお隣の奥さんにも聞いてみます。ありがとうございました」

そう言って母親はわたしにお辞儀すると足早く去って行った。

「……ああしてると、普通の母親に見えるね」

「ホントにね」

レティの呟きにわたしはそう返した。

偵察技能を持ってそうなラーハイラの監視は、レティ曰く、素人は邪魔になるとのことで
レティ独りで監視役を行い、わたし達は宿で留守番だった。

もっともレティには水晶姫を非実体化させて付き添わせて居るので、連絡には困らない。

「ラーハイラは家から出歩いて無い、街の連中がひっきりなしに出入りしてる」

そんな風にレティから水晶姫を通して定期連絡が入ってくる。
日が沈み、街が夜の闇に覆われる頃、レティから急を告げる連絡が入った。

「ラーハイラは家の中から動いてないけど、街の奴等が変だ。　全員が手に武器を持ってそっちへ向かって居るよっ　気をつけて！！」

『シャキン・シャキン……シャキン・シャキン』

死霊達が武器をリズミカルに撃ち合せながら、街の中を大挙してわたし達が居る宿へ押し寄せてくるのが見えた。見えるだけでも１００や２００ではきかない数だ。

「あの人数相手に狭い家の中は不利だ。ダンジョンの近くに広い原っぱが在った。あそこまで逃げよう」

わたし達のパーティーは全員がスペルユーザーだ。（ジルも魔法使えるんだよ）
家の中よりも、大規模な攻撃魔法や治療魔法を考えれば、見通しが

良い場所の方が有利。

街はずれから追いたてられる様に逃げ、ダンジョン傍の原っぱで戦うことに決めた。
そこは昨夜ラーハイラに魔法を撃たれた場所だった。
『干草積み』がいくつか置かれている物の、視野が広く取れる場所で戦うには最適だった。
しかし、先回りされていたようだ。あるいは最初から居たのか？
少し離れたいくつかの干草積みの陰に潜んでいる者が数人『探知』に引っ掛かっている。

『シャキン・シャキン……シャキン・シャキン』

死者達は走るでもなく、慌てることもなく、淡々と包囲を縮めるかのように迫ってくる。
そこへ、レティがわたし達と合流する。

「変だ、彼等がダンジョンの中の死者達と同じように無条件に僕達を襲うつもりなら、
夕べの内に襲って来ただろう。なぜ今になって？」

「やっぱりラーハイラの企みが失敗したから？　あのリッチって魔物がラーハイラの仲間
なら今日になってもあたし達を罠に掛けられなかったのは連絡するだろうから」

ウインの疑問にレティが思ってることを答える。
死者達の群れが１００メートルほどに迫った時、ウインが大声で話し掛けた。

「僕達は神殿への巡礼の旅でここに寄っただけで、街の住人に危害を加えるつもりは無い。
何かの人違いや勘違いでは無いのか？　それでも僕達を襲うと言うのであれば自衛のため、
こちらも武器を持って応戦する」

当然ながら死者達は応答しない。もうわたし達から５０ｍほどの距離まで迫っている。

「仕方ないね、やるよっ」

レティはそう言うと『ファイアーバード』を放つ。
わたしは前衛のウイン、ジル、そして水晶姫に『加速』と『ヘイスト？』などの戦闘支援
魔法を掛けた。

炎の照り返しで、すっかり暗くなった風景が紅く照らされた。

炎は草原の枯れ草に燃え移り、その辺りからゆっくりと燃え広がって行く。
『ファイアーバード』でなぎ倒された人々の中には、サーシャの母

親も居るのが見えた。
彼女も両手に包丁を持っていたが、服に炎が燃え移っているのを慌てて掃っている。

「ナーシェル・バーライクシェバー・ダーシャン・フラーテスト・リ・オークル
破裂の光よ、天空より魔力の炎を降らせ死を撒き散らせ『クラスター』」

スニージーの『クラスター』が投射され、死者達の頭上に到達し焼き尽くす、ハズだった。
だが、

「おかーさん！！」

幼い声があたりに響き渡り、子供が干草積みの中から飛び出して来た。
昼間行方が判らなくなっていたサーシャだ。ゆ～ふぉ～探しって、未だここに居たの！？
拙いことに『クラスター』の範囲内に掛かっている。　もう第一段階目の分裂が終って、
８つの光球がこれからさらに分裂してサーシャ達へ降り注ごうとしていた。

わたしが躊躇ったのは一瞬だった。
次の瞬間、わたしは『加速』『ヘイスト？』を自分に掛け、サーシャの頭上へ『イージス』
を広げると同時に、クラスターの分裂球を魔力と霊力の剣で薙ぎ払

う為に走り出す……
しかし、

わたしが走り始めたその時には、既に事は終っていた。

元から『加速』『ヘイスト?』が掛かってたウインとジルは女の子までのおおよそ５０ｍを０．２秒掛からずに走り切り、さらに０．２秒後には全ての分裂球を始末してました。

出遅れ感丸出しのトゲエルフは、自分に掛けた『加速』と『ヘイスト?』をコッソリ解除しましたとさ。

「ありがとうございます」母親から礼を言われるウインとジル。
サーシャは母親にしがみ付いて泣いている。
その頃にはわたし達６人と、死者達も周りを囲んで心配そうに声を掛けている。

「おいおい、大丈夫かい？　サーシャちゃん」
「心臓止まるかと思ったぜ、子供はもう寝る時間だよ、危ないから家に帰りなさい」
「もう止まってるって」
「うはは、その通りだなオイ」
「あぶねーなー、子供が怪我したら、俺ら贖罪どころの騒ぎじゃないぜ」

死者達の和やかなムードに思わず目が点です。

「レイシャ、今夜はもう良いからサーシャちゃんを連れて帰りなさい」
「は・はいっ、あ、あの、それではお先に失礼します」
母親……レイシャは子供の手を引いてペコペコしながら帰っていった……
それを見届けると、レイシャに帰るよう言った見た目は青年風の死者が、こちらを向いて話しかけてくる。
「えーと、それでは気を取り直して、今のは無かった事にしてやり直しで！！」
「いや、やり直し言われても……」
ウインは理由が判らず戸惑った声を返した。
青年風の死者はウインの戸惑いにお構いなしだ。
「えーと、先ほどそちらさんが撃った魔法からでヨロシク。　おーい、皆やり直しだ！！
さっきの位置へ戻ってくれ！」
「やれやれダゼ」
「さっきの魔法は老骨には堪えそうだわいな」
「いや、ホントに。おにーちゃんたち、もうちっと優しい魔法撃ってくれよなっ」
「逆にバッサリ逝った方が、手加減されるより痛みが無くて良いん

じゃゾ？　わっはっは」

なんなの？この死者達。　やとわれエキストラ？
なので、わたしはこう叫ぶ。

「それじゃ、さっきの続きからで良いのね？　あの魔法の後で、始原の炎で薙ぎ払うから
アンタ達を骨も残さず焼いてあげるわね」

背中の剣を抜いて霊力を剣に通すと……思ったとおり蒼い炎が噴き上がる。
重くて振り回せないけど、構えるくらいは出来るのだ。

この地の死者達にはさすがに、この蒼い炎は既知の物だったようだ。

「「「「　ちょっ　」」」」

「えー！？　そんな魔法を使うなんて聞いてないよっ！！」
「さすがに骨も残さず焼かれるのは勘弁じゃぞい？」
「いくら、俺らが死なないからってそりゃねーだろぉ？」
「ちょっ世話役、さすがにあれは無いって！！」

死者達も三々五々不満を述べる。
世話役と呼ばれたのは、先ほどの青年風の死者。

「参ったなぁ。俺もこんな予期しない出来事が起きたのは初めてだしなー。
ちょっと待ってくれよ、ユミカ様にお伺いするからさ」

そう言うと、彼は大声を出した。

「コウモリさーん、すんませーん、助けてくださーい！！」

『バサバサ……』

空にそんな羽音がし、目を向けるとソコには銀色のコウモリが飛んでいた。

『ポンッ』と軽い音がすると、色々と著作権的に危なげな美少女戦士が宙に立ってました。

左手に持った銀色のステッキ、あえて言うなら『シルバーバトン』か？

背中のマントは表が黒で裏地が赤。まんまじゃないの。もしかして魔女っ子かしら？

長い銀髪はツーテール。

主にピンク色でカラフルに彩られたパフスリーブなトップス。

大きな同色のリボンで飾られた胸元。

Aラインのフレアミニスカートはギリギリの長さ。

あれってマサカッ！？

美少女戦士は緩やかに空中から降りてくる。

わたしは思わず駆け寄ると、美少女戦士の周りをグルグル回りながら、しゃがんで見たり、

ミニスカの中を覗き込んだりしたが、下から見られているのにどの角度からもミニスカの

縁布に隠されて中身が見えなかった。

ガーーーーーーーッン！！！！！

わたしの摺りガラス&モザイクより仕組みが簡潔で、明らかにこちらの方が簡素な魔術式で同程度の効果をもたらせている。

「そっそんなシンプルで、かつ、効果的な方法で隠しているとは」

わたしが打ちひしがれて居ると、

「こらっ／／／／　そこのトゲエルフ。イキナリ何すんのっ」

ミニスカを押さえながら、かすかに紅潮した頬で可愛らしく睨みつけてくる美少女戦士。

「なんで、わたしのこと知ってんの？」

「「「　プニっ！？　」」」

ウイン達3人が驚いている。「え？神様っ？」

「違う違う。ちょいと事情有ってプニと同じ姿だけど、あたしがこの地のプニ第一神殿を任されている神殿守護者のユミカです」

正体は女ヴァンパイアのユミカは続けて、

「先ほどまでの事は見てましたが、事情が事情なのでやむを得ないでしょう。
こうなってしまった以上、そこのインチキ臭いトゲエルフ相手に戦えと言うのも酷だし、
ここで今夜は解散としましょう」

「はいな、助かったぁ！！」
「了解ですっ」
「やれやれ終ったおわった」
「あ、これは言っておかないと、えっと、『ぐぎゃ～、ラーハイラ様～（棒読み）』
んじゃ、確かに伝えたからなっ」

「何ですか、今の？」

リアラが問いかける。

「おおかた、わたし達にやられた時の断末魔にそう言うハズだったって、セリフかな？
あれで疑いを持ったわたし達がラーハイラを問い詰めるってシナリオだったんじゃない？
ねぇ？　ユミカ、これってベタすぎじゃない？　もうちょっとこう……」

「う・うっさいわね！！　そもそもアンタのせいで、予め用意して

た４つあるオモテナシ
の内、すでに３つまでを台無しにされちゃったわけでしょーが。
神殿の位置でしょ、火竜の罠でしょ、そして今夜の襲撃でしょ」

「ちょっと！　前２つはともかく、今夜の襲撃を台無しにしたのは
わたしじゃ無いでしょ！
子供が飛び出して来たからじゃないの！！」

わたしがそう言うと、ユミカはわたしをジト目で眺め、

「それだって昨日誰かさんがここで騒いだからでしょ？　あの子達
は戦いの跡を『探検』
しに遊びに来たわけだからさぁ」

「うっ」

「まったくもー、机上の試験じゃないんだよっ！？　大掛かりな舞
台を用意するには時間
と労力が掛かってるって事を知って欲しいわね」

ユミカがブツブツ言っていると、

「ならば、こういたしましょう」

その声が聞こえて来た方を振り向くと、老婆が一人。
いや……その姿が溶けるように変化して、そこに居たのはラーハイ
ラでした。
『幻影』かしら？

「普通なら、貴方がたはこのまま、私かダーリンを待ち伏せでもして倒すっていうのが、
これまでの試練での常でしたけど、今回は喪われた3つの台本の代わりに難易度を高めて
私とダーリンの二人掛かりで、本気のお相手を致しましょう。
神殿へ通じる鍵は私かダーリンが持ってますから。
それでよろしいですか？　ユミカ様」

「ふむ……」そう言って考えるユミカ。

「良いでしょう。　ではウインゾフィー、スニージー、レティアラの3人は特別仕立ての
舞台へ登ってもらいましょうか」

「ふふ、それでは明日の夜にこの場所で。　時間はそこの出歯亀エルフが知ってます」

ラーハイラは、優雅にロングスカートを指で持ち上げお辞儀をすると、きびすを返して、
ダンジョンの中へと入る道を歩いて行く。リッチへ相談にでも行くのだろう。
草原を歩いているのに、その足音はまったく聞こえなかった。

「……本気の彼女はかなり手ごわいよ、これまでの試練では待ち伏せ奇襲ありの武器無し

という条件でばかり戦わせていたからね」

ユミカは脅しなのかそんな風に言う。

「魔術師にして偵察技能持ちで、高位の邪神の使徒でアンデットなわけね。
それとリッチを二人同時に相手するのかぁ」

「ふふん、判ってるじゃないの。
あっと、それと、アンタのその黒い肌。それ邪神絡みでしょ？」

「……そうよ？だから？」

「べぇっつに～？」

ユミカはニマニマしている。
小声で「ただ、もう一つくらい保険が掛けられそうだと思ってね」
と呟いていた。

38ページ目

38ページ目

「良い歳した女が美少女戦士とか、在り得なくない？」

「この身体はプニの別身（エイリアス）だからさ、色々と便利なんだよ、ほぼ何でも出来るし。
ヴァンパイアの身体は太陽の下を歩けないし、人と一緒に生活するには制限あるんだよね。
困ってたらプニが、じゃこの身体使えば？　って言ってくれて。それ以来ずっと借りてる。
もっとも、服を選ぶ自由は無くて毎回プニの好き勝手に着せられちゃうんだけどさ」

「……アンタ神様の身体をもてあそんでるわけ？　なんて罰当たりな」

傷ついた死者には、ユミカが癒してあげた。死者専用の癒しの術らしい。
そして死者達は戦いの後始末を終え、草原の炎を消しとめてから各々街へと戻って行く。
それを見届けてからユミカも「じゃ、また明日ね。頑張って」と言い残して去って行った。

「んじゃ水晶姫？　居残り役宜しくねv」
「なんでよ！？」
「勝負はもう始まっているのよ！！　わたしだったら今夜のうちからトラップ仕掛けるし」
「……アンタ疑り深すぎ！！　人使い荒すぎっ！！」
「聞こえな～い。　あ、ちゃんと姿は消しといてねっ」

わたし達が街に戻ろうとすると、世話役という青年風の死者も一緒に帰ろうとする。
彼はランスと名乗り「君がリアちゃんかー、いつも孫がお世話になってます」などと言う。

「……どちらさま？」
「あいやー、俺は君のお爺様候補なんだよ～リアちゃ～ん。いや、いっそ俺の嫁に！？」
「はぁ～？」

なんなんだ？　この変な男は。

「そんな事より、いったい何がどうなってたわけ？　アンタ世話役なんでしょ？
説明しなさい！」

「そんな事！？うは、流さちまった。　オホン。そんじゃ説明しようか、ホントだったら
試練が全部終ってからネタばらしとなるんだけどね、おおよその処は気付いてるようだし、
試練の手順もすっとばされてるみたいだしさ。俺も少なくない数の

試練お手伝いして来た
けど、今回はブッちぎりの最短時間で試練達成するんじゃないかな？」

ランスの説明によれば今夜襲って来た死者達は、試練を受ける者達がラーハイラの依頼を
受けなかった場合には襲う手はずになっていたらしい。
わたし達が昼間の内に街に戻って来たので、このまま待ってても依頼を行わないと判断を
下したのだと。
この襲撃は試練の一つで、ほぼ毎回発生するイベントらしく、娯楽に欠けてる土地柄ゆえ
お祭りよろしく割とノリノリで死者達も参加するとのことだった。

街で暮らす死者達はプニ神から罰を受けているので、数年に一度、このように試練が開催
された時は『斬られ役』として試練のお手伝いを行うことで贖罪をしている。
やがて罪を償い切ったと神が判断すれば天に召されるのだという。

どんな罪を犯したのかを聞いたところ、子供に対して乱暴を働いた者なのだとか。
この地でもっとも重い罰は『子供殺し』でダンジョンの中に居る奴等はほとんどがその罰
を受けている。プニ神によってこの地へ連れてこられて呪われた存在と化した彼等は幽鬼
の様にたださまよい続ける運命なのだと。

次に重いのが『子供への虐待』で、罰を受けて地下都市に封じられはするが、運良く子供
が慕って迎えに来てくれれば罪を許される。
しかし、子供にも見捨てられた者は、やがて絶望から自由意思を手放し幽鬼と成り果てる。
街で暮らしている死者は、自分の罪を認め悔い改めたことで自由意志を持ち続けることを
許されているのだとか。

罪を許された者の中には元の土地へ帰る者も居るが、そのほとんどは許された後もこの地
に留まって生活していく者が多いそうだ。
この地下世界はプニの聖地であり、この土地に居る限り『子供は無事に成人出来る』のだ
と言う。木から落ちようが、川を流されようが子供は不思議と怪我一つ負う事が無い。
大病も患わず、それどころか、不治の病と診断された子供でもこの地で一年も静養すれば
野山を平気で駆け回るようになるのが常だと。

「……静養……？？　外から試練以外の目的で、この地下都市を訪れる者が居るわけ？」

「おおっぴらに宣伝はしてないけどね。この地から外の世界へ出て行った人達も居るし、
そういった人達は、子育てに困ったらこの地を訪れなさいって代々伝えていってるのさ」

「ふ～ん。……アンタは子供を虐待したクチなわけ？」

「俺の場合は、子供が生まれて里帰りした嫁さんを、家に連れて帰る途中で強盗に襲われてね。子供は嫁さんが抱きかかえてたから助かったけど、嫁さんはダメだった。

俺もバッサリやられて虫の息だったところを、ここ出身の商人率いるキャラバンが偶然に通り掛かって助けてくれてね。死ぬ直前でプニ神の祠に担ぎ込まれたんだ。

そこでプニ神が『生まれたばかりの赤子を残して死ぬようなダメ親には罰を与える』ってお告げになられて、こうなっちまったってワケさ。

この街には他にも大勢、似たような事情でプニ神に助けられ……、おっと、罰を受けて。

死んだ後でもこうして子供を育てて、無事成人するのを見届けられてるヤツは多いんだ」

宿へ引き上げ、ラーハイラとリッチとの対戦方法を皆で明け方近くまで話し合う。

いざ、就寝をと考え出した頃、水晶姫から連絡が入る。

「やっぱりトラップを仕掛けに来たわね」

ラーハイラとリッチは死者達を率いて荷物を幾つか運び込み、罠を仕掛けているとの連絡

だった。
土地勘有るラーハイラが罠を仕掛けて来るのは考慮済みだったので、水晶姫から得た情報で少々のプラン変更をするだけで行けそうだ。

明けて次の日、

わたしは『ＣＩＣ』の映像と水晶姫の証言から、罠の位置を特定しておく。
リッチは御丁寧にもわたし達の背後を取れる位置で地面に穴を掘り、その中に身を潜めていると言うことだった。
ラーハイラ達は準備が完了しているようで、罠を設置した後は姿を見せてない。

現地の地図と罠の位置を記しながら皆へ説明し、ラーハイラがおそらく一番最初に狙って来るだろう後衛のスニージーとリアラをどう護り切るかの確認を再度行う。
ウインと協力してちょっとした小ネタ技もリアラに授けた。

その後は各自武器の手入れをしたりして時間を潰す。
わたしは水晶姫と連絡し合いながら、邪神の加護を破るための武器創りだ。

今回用意したのは武器というより兵器かな。
邪神の鎧への対処法は既に幾つか見つけてあるけれど、算多きは勝利ってね。

武器創りと言ってるものの、魔力炉も兵器本体も水晶姫任せの外注だったりする。

時間は深夜、
戦いの場へと訪れたわたし達。
それを遠巻きにして、戦いを見守る大勢の野次馬達……

「リアちゃ～ん、頑張れ～！　応援してるぜ～ぃ」

ランスだ。エールを片手に持ちながら叫んでいる。
よく見れば野次馬達の間を売り子が忙しそうに動き廻っていた。

そして、

向こうには、ラーハイラと何か小さい子供のような人影。そして……リッチが居た。

「あの不気味な浮いてるヤツは何だ？あれがリッチ？　隠れてるんじゃなかったのか？」

ウインがわたしにそう聞いてくる。

「……偽者よ。たんなる幻影か、それともゴーレムをリッチに化けさせてるんだと思う。

あの小さいのも死者じゃないわね。ゴーレムかしら？　さすがに色々やってくるなぁ。
それじゃ作戦通り、ウインよろしくねv」

「来たぞっ」

ウインがわたし達全員と、ラーハイラまでもう少しというところまで移動し声を掛けると、

「そこで止まりなさい」

ラーハイラが返事を寄越す。
予想してた通り、そこは水晶姫から罠を示唆されていた干草積みの横になる位置だ。
もちろん、ウインはラーハイラの指示した位置から微妙に距離を置くことを忘れない。

「こちらは何時でも良い。そっちの準備が出来たら開始の合図をくれ」

相手に開始を任せるのはこちらの作戦。このセリフがわたし達の作戦開始を告げる合図だ。
わたしはウインとジルへ『ヘイスト？』『ルーンシールド？』を離れた場所から掛ける。
そう、ウインだけが本物で一緒に立っているわたし達は、わたしが創った幻影の偽者だ。
魔術式『インビジビリティ』を用いて本物のわたし達は隠れてこっそり移動している。

バレるかも知れないが、バレなかったらラッキー程度の小ネタ技パート2だ。

合図をラーハイラに任せたのは、ウインへこっそりとヘイストを掛けるため。
なんせ普通の速さで話せなくなるからバレバレになってしまう。

「開始の合図は花火が告げてくれるわ」

ラーハイラがそう告げる。
花火とはまた古典的でベタな合図ね、これで罠が爆発物である可能性が高まった。
ウインにも罠が開始と同時に発動するだろう旨は注意済みである。

今夜のラーハイラは革鎧を着用し、右手に短剣を持っている。
どちらも黄色く発光して魔法付与されているのが判る。
リッチが持つ死神の鎌は魔法の武器ではなく、普通の武器だった。
何よりリッチは邪神の鎧を着てない。偽者なのは明白だ。
ラーハイラの隣に立つ子供に見えるのは、やはりゴーレムか、もしくは、ホムンクルスだ。
どちらも魔法生物ゆえに、ただ立っている姿からだけでは区別が出来ない。

ラーハイラは左手を掲げた。何か持っているようだ。

「ザタンよ！！　我等に勝利を！！」

そう叫ぶと、左手に持った何かを地面に叩き付ける。

ラーハイラ達、3人（？）が輝きに包まれ……

『ドンッ』

ウインから少し離れた所に置いてある干草積みが爆発する。隠してある罠が発動したのだ。
が、ヘイストとルーンシールドで罠を上手くやり過したウインは開始と同時に突っ込んだ。
目標はラーハイラだ。レティとスニージーも姿を現して弓と魔法で攻撃を仕掛け始める。

しかし、ラーハイラ達も動きが速い！？
どうやら、さっき割った物はヘイストが籠められたアイテムだったようだ。
小型ゴーレムも素早い動きはラーハイラに劣らず、寄り添ってこちらへと駆け寄って来る。
狙いはやはりスニージーかリアラだ。
偽リッチはレティへ向かって来る。

ウインはあっと言う間にラーハイラへ肉薄し斬り合いとなった。
ジルは小型ゴーレムを相手取り、レティに近付いた偽リッチはそのまま……爆発した！！

わたしが状況を確かめたのはそこまでだ。
今、わたしの前にはリッチ（本物）が居る。

わたしがリッチ（本物）を押さえてる間に、他の皆でラーハイラを倒す作戦だ。

リッチ（本物）は、最初の爆発と同時に予想通り地面から飛び出して来た。
飛び出すと同時に強力な魔術を使う。あの大きな火の玉はおそらくは火球の上位呪文だ。
地面の中に居る時から呪文を唱えていたのだろう。
狙いはこちらもスニージーかリアラだ。リッチの視線が彼等を向いている。

『ジャミング・マジック』『イージス』

さすがに無詠唱とは言え、既に発動済みの魔術を妨害するには予め準備してないと厳しい
が、ここはわたしの読み勝ちだった。
リッチは現われると同時にもっとも強力な攻撃魔法を撃って来るだろうと予想してたのだ。
投射型の攻撃魔法なら目標誘導式をジャミング・マジックで妨害すれば、後の先が取れる。
スニージーかリアラに向かっていた大火球は途中で誤爆して消えた。
もちろん、スニージーとリアラの前には『イージス』を立て、爆風や火炎が行かないよう
配慮するのを忘れない。

さぁ！！ここからは、もうリッチにターンは渡さないわよっ！！

『全自動改』

わたしの魔術式に従って水球が現われ、リッチを包み込む。
次の瞬間、水球はリッチを内包したまま猛烈な勢いで回転し出した。
リッチは水流の流れに逆らえず、ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐると廻される。

こうなってはもはやリッチに逃げ場は無い。
元々が洗濯用に創った魔法だ。水霊は内包物が決して水球からはみ出さないよう常に監視しながら水を動かすので、リッチが逃げる方向へ水球も合わせて動く。
リッチは、魔法を唱えようにも激流の水中では発声すらままならないだろう。
何より激しく回転されて方向感覚を喪失した状態では攻撃魔法など撃ちようがない。

水をカッターの様にして攻撃したなら邪神の加護が働いただろうけれど、
邪神の鎧はただの空気を弾かなかったように、ただの水なら邪神の加護をすり抜けるのだ。
仮に、邪神の加護が働いて『全自動改』が破られても、既に次の策も用意済みだ。

わたしは計画通りにリッチを無力化したので、あらためて皆の戦況を確認する。

偽リッチの爆発に巻き込まれたレティは無事だったようだ。
自分の精霊術で回復出来るしリアラも居るのだ。そうそうヤラレはしないとは思ってたが
ちょっと心配したのも事実。今はラーハイラへ次々と矢を撃ち込んで居る。

そのラーハイラであるが、左右への素早くトリッキーな動きで矢を巧く避けている。
ラーハイラは地面を走ってはいなかった。一種の浮遊術のように地面の上を滑っている。
おのれの足で動いて無いので、右へ動くのか左なのかを身体の動きでは先読みが出来ない。
さすがのレティもあれでは矢を当てるのは困難だろう。
斬り合いではヘイスト付きのウインには押され気味ながらも、闘志は衰えて無いようだ。
ウインが円を描くように動くと、その場所からすかさずサッと離れて、

「あたしにプニの神聖術は効かないっ、伊達に何百年もプニ信徒と戦って来てないわよっ」

などと挑発して来る。
と、突然ラーハイラは左手を腰に廻して何かを取り出し、地面に叩き付けて割った。
ラーハイラの姿がその場から掻き消える。透明化の魔法を封じたアイテムを使ったのだ。
ウインはラーハイラを見失ったようだった。

「リアラっ」

わたしはリアラに警告を飛ばす、『探知』にはスニージーとその近くに立っているリアラの方向へと動くラーハイラを捉えていた。

ジルは小型ゴーレムを余裕で押しては居るものの、耐久性に優れているようで、なかなか倒しきるには至ってないようだ。

「ミラー神よ、光の加護を授けて下さいますよう、邪なる力が我が身に及ばぬよう、従僕へ力をお貸し下さい。『ディバイン・アーマー』」

リアラの足元に直径１０ｍほどの光の法円が浮かび上がり、リアラ自身の身体も光り輝く。

呼吸を３０回ほど行う間の短い時間だけではあるが、如何なる攻撃をも無効化するという、ミラー神の神官だけが唱えることが出来る聖なる鎧を発動させたのだ。

リアラはスニージーを庇うように前に進み出て来た。

ラーハイラはリアラに飛び掛ったところで姿を現した。

攻撃行動によって精神集中が乱れ、透明化の魔法が解けたのだ。

「ヒヒッ　死ねーーーっ！！」

ウインと斬り合いを演じ、レティの弓矢すらかわして見せた腕前のラーハイラである。
リアラとスニージーを切り裂こうとする短剣を誰も防げないかに見えた。
……が、

「『バインド・トラップ』」

ウインの神聖術がラーハイラを捉え、そして拘束する。

リアラの足元の光の法円。
それは、事前にウインが特殊神聖術でトラップの為に描いた円である。
わたしが予備宝玉へと丸ごとコピー保存し、光る法円の形で展開するようにした罠だ。
いかにもミラー神の神聖術であるかのように見せかけてるが、ホントはプニ神の神聖術。

ウインの神聖術では罠を仕掛ける事が出来る円は一つだけ。
つまり、先ほどまでウインが円を描いて見せていたのは、はったりのダミーである。
プニ信徒専門で戦っているラーハイラなら、ミエミエの円に足を踏み入れるワケが無い。

ダミーの円で注意を引いておき、本命のトラップはリアラの周りへと張る。
そうと気付かず、法円の中へ足を踏み入れたラーハイラは、まんま

と罠に掛かった。

「えいっ」

リアラは可愛らしい声を上げて、ダークミスリルフレイルでラーハイラに殴り掛かる。

「ヴぇっ」

フレイルは見事、ラーハイラのアゴを横っ面から捉え、憐れラーハイラは奇妙な声を上げ、
ぐりんと首が後ろを向き、一瞬遅れてから身体も後ろ向きに半回転してから倒れた。
完全に白目を剥いて居る。

ちょうどこの時、ジルも小型ゴーレムを真っ二つにしたのが見えた。
こうしてラーハイラとの勝負はわたし達の圧倒的な勝利で終った。

リッチ？　あ、まだ廻ってた（汗
水球を解除したらヨダレじゃない物を吐いてたけど、もう放置で良いよね？
今回用意してきた邪神の鎧対策の他もろもろは、また次の機会までおあずけだ。

「くー、またトゲエルフにしてやられた！！」

姿を現したユミカは開口一番そう言って悔しがる。

「む～、そこのインチキ臭いトゲエルフのせいで結局試練は４つともダメにされちゃった感じだよ～」

「そう言う事もあるのよね～」

「ふふんっ　まぁ良いわ。　それじゃ、明日の朝になったら神殿にいらっしゃい。
鍵はラーハイラが持ってるから」

ユミカはニヒヒと悪戯好きな顔の見せて、笑いながらそう告げて去っていく。
野次馬達の一部はラーハイラとリッチを担ぎ上げ、慌ててユミカの後を追う。
世話役のランスもイベントの終わりを告げ、残る野次馬達を解散させて居た。

あくる日、

わたし達は鍵を使ってＢ４層へ飛び、Ｂ４層から階段を上りＢ２層へ。
こないだは死者達がこれでもか！ってほど通路にひしめいて居たのに、今日はガラガラで

ほとんど邪魔されずに神殿へと辿り着いた。
神殿の入口が見えた。
そこには、

見覚えが無い小型の銀色ゴーレムが居た。身長は１５０ｃｍほどである。
それは銀色のビーチパラソルに腕が生えているような形だった。
からかさ小僧の足を極端に細くした造形だ。
なんとなくイヤ～な予感がしたわたしは、
「水晶姫、ちょっとアレに近寄ってみて？」
「なんなのよ、もう」
そう言って歩き出す水晶姫。
と、その時、小型銀色ゴーレムは右腕を真横に振るった。
特に何も見えない？　けれど、わたしの中で何かが警鐘を鳴らしている。
「みんなっ　臥せてっっ！！」
『カッ』
軽い音がしたと思った時には、頑丈な水晶姫が上下に真っ二つにされていた。

「「「「「「 なっ!? 」」」」」」

わたし達は慌てて物陰に隠れる。

「ななな、何!? アレは??」

わたしが発する疑問に、後ろから答える声

「あれは、神殿上級守護兵よ」

そこには、得意そうな顔したユミカがいつの間にか立っていた。

「アンタのその良い感じに焼けた肌の、染み付いた邪神の力に反応してるのよっv
さぁ、これが最後の試練だよっ!!」

ニカッと笑うユミカ。
そうキタか!!

３９ページ目　新たな試練と勇者の危機

３９ページ目　新たな試練と勇者の危機

「「　神殿上級守護兵!?　」」

スニージーは驚きの顔で、レティは何の事やら?な顔でハモる。

「知ってるのか?　スニージー?」

ウインがスニージーに尋ねると、彼は珍しく厳しい顔でユミカに詰め寄った。

「その話は本当なのですか!?　プニ神殿の上級守護兵と言えば、かつて、２５０年ほど前の魔王軍が攻め寄せた際に、通り道にあったプニ神殿が攻め込まれて、その時に魔王軍２万を返り討ちにしたってのは有名な伝説ですよっ!!」

「うん、そうみたいね?　第四神殿だったかな?たしか、それが元で魔王軍は勢力激減して撤退せざるを得なくなったのよねー。なにしろ祝福された液状の真銀で創られた身体は魔法を一切受け付けないし、斬られても、叩かれても直ぐに復元して決して倒れないっていう、神の尖兵だから当然の結果よね」

「いくら試練とは言え、これは度を越えていますっ！！」

「度が越えてるのはそこのトゲエルフも一緒よ～。　とにかく！
異議は受け付けません」

「わたしが居たらダメなら、わたしだけダンジョンから出てってみようか？」

そう提案してみると、ユミカは、

「ふふん、一度反応した上級守護兵は１０日は出っぱなしだからね。
それにレティアラはダークエルフだし、その武器ってダークミスリルでしょ？　本来なら反応しないそれらも、一度反応しちゃったからアンタ達も敵だって記憶されてるからね。
トゲエルフがここから居なくなったダケじゃ無駄なのよ～」

などと憎ったらしいことを言う。

「あの、突破するだけなら私の『ディバイン・アーマー』で攻撃を無効化して、ファリナの足が早くなるあの魔法があれば行けると思うのですが？
ディバイン・アーマーがプニ神の神聖術を無効化出来るのは、昨日

のバインド・トラップ
の拘束を受けなかった事でも証明されてますし」

「それで突破出来るのはリアラだけ、って事になるし、あの先でさらに何かあった時には
対処出来ないからマゴ付いてる間に効果時間が切れちゃって、ナマス切りにされちゃうよ。
それは最後の最後の手段だし、今の段階で選択するにはリスクが大きすぎるわね」

リアラの提案にわたしが答える。

「ま、最悪一ヶ月もあれば、焼けた肌も元に戻るだろうし、染み付いた邪神の力も抜けるだろうからね。とはいえ、そこで得意そうな顔してる誰かさんをギャフンと言わせたいし、どれ、いっちょヤ「ね、リアファリナ。あたしにもう一度挑戦させてくれない？」うえ？」

身体を復元させた水晶姫がそう言って進み出てくる。

「あたしもさ、いっくら神の尖兵相手でも、ああもあっさり真っ二つにされちゃったのに
このままやられっぱなし、ってのは大地の上位精霊として矜持に関わるのよね。
やるだけやって見たいワケ。そういうことで、リベンジに協力してちょうだい」

「良いけど。何か策があるわけ？」

「アンタ、足が早くなるヤツと動きが早くなる魔法を一度に最高何体まで掛けられる？
あたしの別身（エイリアス）は、能動的に動かせるのが４体と、ただ突っ込ませるだけならもう１６体は
同時に出せるのよね、それ全部に掛けられる？」

「合計２０体か。……支援魔法を全部オフにすればイケルかな？
んじゃ、ソレやってみましょうか。……ちょっと待ってね」

わたしはそこら辺に落ちてる石ころを拾うと、『簡易儀式』を起動する。

『クリエイト・ストーンゴーレム』

魔力の関係で永続魔法は籠められないものの、故郷の村に置いてきたヤツと同じタイプの
ストーンゴーレムを生み出すと、その体表に『強化』を掛ける。
これで、あの小型銀色ゴーレムの攻撃が魔法属性を帯びて無い通常攻撃なら、ゴーレムで
突破出来る……かも知れない。　気分はもうやれる事は全部やる、だ。期待はして無いが。

そうして、わたしは支援魔法で魔力関係以外は全てオフにし、魔力が再度溜まるのを待つ。

「それじゃ、行くわよ！？」

「こっちも準備はいつでも良いわ」

目の前に居る、水晶姫２０体それとゴーレムに『加速』『ヘイスト?』を掛ける。

「Ｇｏ!!」

支援魔法が切れる前に飛び込んで行く水晶姫ｘ２０体、プラス、ゴーレム。

ここからピラミッドの入口まで３０ｍ足らず。だから勝負は一瞬で着くだろう。

わたし達は通路出口から少し引っ込んだ場所からそっと顔を覗かせて勝負の行方を見守る。

小型銀色ゴーレムは、細い一本足を軸に物凄い勢いで回転し出した。

その次の瞬間、

全ての水晶姫とゴーレムがいくつものパーツに輪切りにされてしまったのが見えた。

「あっちゃ〜」

「もう、何なのよー、あの卑怯な攻撃力は!!」

元に戻った水晶姫がぶつくさと文句を言う。

「次の策行くしかないか、ちょっと魔力が溜まるまで待ってね」

「次はどうするの？　ファリナ」

ジルがわたしに問いかけるので、魔力を回復しながら答える。

「ん～、以前逢ったこと有るヤツは魔力の制御球か、魔力供給炉を壊せば倒せたんだよね。
そこの小型銀色のも、似たような構造かも？」

「おや？　その話振りじゃ、リアファリナは下級守護兵と出遭ったことがあるわけ？」

今度の問いはユミカから。

「ここからちょうど東へ五日ほど行った村で、そのゴーレムが壊れたことで事件が起きたのよ。依頼でそのゴーレムを撤去したんだけど、その時に戦ったのよね」

「あらま。そりゃ迷惑掛けたね。何十年かに一度だけどさ、ゴーレム達って神殿の守護を
入れ替わるために次の神殿へ赴くんだよ。ここの次は東にある第二神殿になるんだけど、
アンタが出遭ったヤツはその赴任途中で、壊れちまったヤツだったんだろうね。
ゴーレム達は入れ替わり、入れ替わりすることで、ある神殿で得た戦闘やその他の情報を、
他の神殿へも伝えて情報共有する役目を兼ねてるのさ」

「その村では、村人が水銀に侵されて大変な目に遭ってたけどね」

「……村人って、子供もかい？　……もしかして、アンタがその子達を助けたの？」

「成り行きでね」

そう答えると、ユミカは真剣な顔で考え込み、

「……ふ～ん。今までアンタはウイン達に誘われてこの試練に巻き込まれたんだとばかり思ってたよ。リアファリナ？　でも、そうじゃ無かったみたいだね。下級守護兵が子供を傷つけたんならプニが気付かないワケが無い。それが放ったらかしにされてたのなら、それには何か意味が在ったと考えるべキ」

「何ソレ？　子供達の苦しみようは酷かったわよ？　意味があろうと無かろうと、それが神のやることなの！？」

「……神さまの考える事はあたしには判らないわね。それにプニはこうも言ってるよ。歴史上もっとも人を殺しているのは神だって、人が生まれたら必ず死ぬのは神がそのように創ったせいだからだと。　プニが人を助けても殺した数からすれば極々一握りに過ぎず、しょせん自己満足でしかないんだとさ。　で？リアファリナちゃんは子供を苦しめたプニに怒ってるわけだ？　それはそれは……プニに気に入られるわけだわ」

「……気に入られなくて良いわよ。　ま、子供の話はもう良いわ。もともと、わたしは飛行機が欲しくてここまで来たんだから」

「飛行機？　あぁ、アレか。ときどきプニが乗ってるヤツだ」

「やっぱり有るの！？　よ～～し！！　俄然ヤル気が出てきたっ！！」

『プヨ探知改』を詠唱起動して、物陰から小型銀色ゴーレムの魔力を探ってみると、期待していた魔力供給炉の反応が無いことに気付いた。

「……あれ？　魔力炉が見当たらない？」

「ふっふっふ。下級守護兵と同じじゃ無いわよ～ｖ　上級守護兵はそういった弱点を改良してあるんだからね。『ブレスドアクアミスリル』っていう、神力と魔力を融合させて生み出した、それ自体が制御と魔力供給炉を兼ねてる神魔素材製で、どれだけ細かく砕かれようが、それら一つ一つでも独立して動けるっていう画期的素材なのよっｖ
もっとも、魔法を受け付けないからそもそも砕けたりしないけどねっ」

「だからかっ!?　モノワイヤーなんて物騒な武器を振り回せば、自分自身だって傷付く
ハズなのに一向に気にした風じゃないのは。　斬られた瞬間に修復してるからなのね。
……そんな物はもう、力技でなんとかなるレベルを越えてるわよ。
『強化』したゴーレムすら一瞬で切り裂くなんて。魔道学の常識外というか。
こんな物を試練に持ち出すなんて、大人気ないと言うか」

イヤミの一つも言ってやらんと。
当のユミカは、イヤミを聞こえない振りしている。

「ほほほ、あのワイヤーは目に見えないだけじゃなくて、『マジック・イレーサー』付き
だからね!!　防御魔法なんて突き破るわよ!!　邪神の鎧だろうが何だろうがあの攻撃
に耐えられるモノなんてこの世には存在しないのよ～っv」

「どうする?　これじゃ引き返して一ヶ月待つしか無いのか?」

ウインは目的地を目の前にして悔しそうだ。

「そうね?　足し算してダメになってるなら、引き算はどうかしら?」

「はぁん?」

ユミカはもう勝った気で居るらしい、余裕の笑顔だ。みてろよ～っ！！

わたしの黒い焼けた肌。ダークエルフのレティ、ダークミスリル武器。
これらが積み重なってあの上級守護兵が反応しているというのなら、その逆の要因を用意してやれば、反応しなくなる……かも知れない。

「よっと」

わたしはポシェットから取り出した物をゴーレムから見える位置に掲げてみせた。
すると、

小型銀色ゴーレムは一瞬光ったかと思うと、次の瞬間にはその場から消えうせて居た。
そして、ピラミッド入口の銀色の床が盛り上がり、ゴーレム……下級守護兵二体へと変化する。下級守護兵はわたし達に反応せず、静かに入口を護って立っていた。

「えぇっ！？」

驚くユミカの隣で、

「さっ、これで神殿に入れるようになったみたいよっv」

今度、満面の笑顔になったのはわたしだ。

「ちょっと！　何をしたワケ？　それいったい何よ!?」

「これ？　これはネヴィアシータが創った宝玉よ。下級守護兵の製作者でもあったから、もしかしたら?って思ってね」

わたしの手の中には、以前ジルの魔法剣のコアとなっていた赤い宝玉が在る。

なんでも取っとくものよねっ!!

「初代さまの？　何でそんな物を持ってるワケ？　……って言うかズルイ!!」

「ズルく無い!!　アンタのあの物騒な上級守護兵こそズルイでしょうが!!

そんで、こっちのリアラとジルはネヴィアシータの子孫なのよ、この宝玉は代々伝わってきた家宝の一部なんだってさ」

「……リーベフェルマ家の者なの!?　聞いてないよっ　う〜今回は情報不足極まれりね。

あぁ〜あ。　ま、こうなったら仕方ないわね。試練突破オメデトウ!!!!」

ユミカは幾分ヤケクソ気味に言い放つ。

神殿内部はこざっぱりしており、特に何か御神体と言えるような物も無かった。

「何かビンボ臭くない？」

ロマンチック街道のヴィース教会とまでは言わないけど、もう少し華美さが欲しいわねぇ？

「神殿に派手派手しさは不要よ、プニ神が訪れる場所だってだけで十分でしょ？
さぁ、ウインゾフィー、スニージー、レティアラの試練達成のご褒美を渡さなきゃね」

本来の自分の身体に着替えた（？）　ユミカは奥の棚から何かを取り出す。宝石箱のようだ。
宝石箱を開け、その中から……銀色のネックレスを取り出し、レティアラの首に掛ける。

「おめでとう、これは第一神殿の試練を終えた証でもあるの」

そう言い、スニージーとウインの首へも同じデザインのネックレスを掛けた。

「このネックレスはプニの祝福が掛かってるから、これを掛けてる限りあらゆる状態異常

を防ぐ効果があるよ」

……あらゆる状態異常？　何それ？アクセサリーが持つ付与効果にしては強力過ぎない？
ほ……欲しい……かも。

「さて、貴方達三人には次なる試練を受ける機会が与えられるわ。
もちろん、受ける受けないは貴方達の自由よ。では言うわね？

次の試練が行われる場所はプニ第二神殿となります。
そこは精霊宮と呼ばれる場所で、この世界のどこでもない異界に存在するの。
精霊宮の入口は誰にも知られることの無いよう秘匿された場所に在り、創世の光を宿した真白きエルフが守護しているわ。　その場所を運良く見つけることが出来たなら、プニ神の御心へさらに近付くことが出来るでしょう」

ん？　んん？？

「ねぇねぇ？　それって、もしかして……ハイエルフだったりするわけ？
そんでもって、生命の木のウロが精霊宮の入口だったりしちゃうんだ？」

わたしがそう言うと、ユミカはギョっとした顔で向き直り、そして笑いかけて来た。

「うふふふふふふ」

ユミカが不気味だ！　でもここで引いてなるものか！　なのでわたしも笑い返す。

「ふふふふふ」

「アッハッハッハッハ、そうか、またか！　またお前が試練をぶち壊すんだな！！」

「いや、だって、ソコってわたしの生まれ故郷だしっ！！」

わたしは身の危険を感じ、ユミカから逃げる。

「まてコラ！！」

「キャーーーっv」

ひとしきり、はしゃいで逃げ回ってから真面目さを取り戻し、ユミカに尋ねる。

「ね、ところで飛行機は？」

「工房だよ。隣の書斎から階段を下りた場所だね」

わたしは言われた通り、隣へ通じる扉を開け……

そこはお宝の山だった！！

そこに置かれてある全ての本・魔道書から力の波動を感じる。

思わず手が伸びると、

「はい、はーい、ここの本は禁書で～っすv。お手を触れないようお願いしま～っすv」

ユミカに注意される。

ちぇっ　ケチねっ！！

階段を下りると、そこはちょっと広めのスペースで、如何にも工房だった。

様々な、ちょっと見ただけではなんだかよく判らない工作機械が部屋の一画を占めている。

おそらくそれらも魔道具で宝具なのだろう。

そして肝心の飛行機は……無かった。アレ？

いや、よく見れば部屋の隅っこのほうに……ソレは置いてあった。

ぱっと見で、『メッサーシュミットＭｅ２６２』かと思った……が、よく見るとジェット

エンジンでは無い、プロペラエンジンが二基取り付けられている。

これ……これってマサカっ！？

『護鷹（ゴオウ）』

そう、その飛行機はかつてそう呼ばれた機種だ。世界に唯一つだけの戦闘機。

日本がドイツから世界初ジェット戦闘機メッサーシュミットＭｅ２６２の設計図を入手し、純国産ジェット戦闘機「橘花」が生み出されたことは有名だが、その影で作られた機体についてはあまり知られて居ない。

皇紀２６０５年、つまり、西暦１９４５年、設計図からデットコピーでＭｅ２６２を一機だけ製作している。

この、ある意味日本製Ｍｅ２６２には肝心のジェットエンジンが存在してなかった。

ドイツからの設計図には心臓部のジェットエンジン部が書かれて無かったためだ。

そのため、当時最新型の高性能レシプロエンジンを無理やりくっ付けてキ一１２７局地型戦闘機「護鷹」として生み出された、世界に一機のみ存在していた試作戦闘機。

全体的フォルムはメッサーシュミットＭｅ２６２であり、主翼下の本来ジェットエンジンが取り付けられるべき所にはプロペラ発動機ハ４５?型が二基取り付けられている。

計４２００馬力を得たこの機体は、皇紀２６０４年のキ一８４四式

戦闘機「疾風」が持つ
ハ４５型２０００馬力で叩き出した記録高度６６００ｍで６６０ｋｍ／ｈを大きく上回り、
実に８４０ｋｍ／ｈを記録したとある。
本家メッサーシュミットＭｅ２６２が高度６０００ｍで８７０ｋｍ／ｈだったことを考えれば護鷹の速度が驚異的だったことが解る資料だろう。

ハァハァ、興奮のあまり思わずオタク女の顔を覗かせてしまったわ。
そう、ここに置かれているのは護鷹……の１／１０スケールモデルだ。

って、フザケンナーっ！！
騙された！？　ゴルァ～！　プニ出て来ーーーーーい！！

「ちょっと、何吼えてるの？」

「どういう事よ！？　これじゃ乗れないじゃないのーーーっ！！」

「あれ？　プニはそれ大きくして乗ってたよ？　たしか笛吹いて。
その辺に落ちてない？」

笛？　その辺？　どこだどこだ？

見回すと、作業机の上に宝玉とインゴットが置かれてあるのを見つけた。
近づいてみると、それらからは物凄い魔力を感じた。
スターサファイアが二つ
スタールビーが二つ
ファイアーエメラルドが二つ
そして、大粒のアレキサンドライトキャッツアイが一つ
ひと抱えほど積まれたインゴットは、銀色に神々しく眩く輝いて居た。

「なっ　何これ……」

手を伸ばすと『ピカッ』と光り、宝石達は輝きに包まれて空に浮かび上がり……

『『『『『　ゴゴゴゴゴゴ　』』』』』

重い音が辺りに響き渡ると、部屋の一画の壁が大きく開いた。
そこは滝の裏側だった。壁が開くのと同時に、大量の滝の水も割れて行く……

輝きに包まれた宝玉達は開いた壁から外へ飛び出し、そのままどこかへ飛び去った。
後にはアレキサンドライト一つだけ残して。
唖然としていると、アレキサンドライトのキャッツアイ効果がキラリと輝き、壁が閉じた。

「……えっ？」

展開に着いて行けなかったわたしは、しばし呆然とした後、残されたアレキサンドライト
へ目を向けると、宝玉の下敷きにされてメモが置かれてあった。

「1／1スケール護鷹の召還笛は俺が持っている。後で取りに来い。
それと、今見せたお宝は精霊宮の試練を突破出来たらくれてやろう。
このアレキサンドライトは手付けだ。好きに使うが良い。

プニ」

あう。最初に良い物を見せて、それで釣ろうって魂胆なのね！？
でも、あのスターサファイアとスタールビーはぜひ欲しい……それにあのインゴット。
精霊宮が故郷の村に在るなら、置きっぱなしの魔道具を使って、あれで双剣を創れば……
むー、神の策略にハマッテル気がすれど、それでも抗いがたい魅力的な報酬だ。

ニブルヘルの街に戻ったわたし達6人と美少女戦士ユミカは、街人のお祭り騒ぎに出迎えられた。

「試練が終ったら宴を行うのがここの伝統行事なのよ。気兼ねなく

参加してちょうだい」

ユミカがそうわたし達へ言うと、世話役のランスが進み出てきて祭りの始まりを告げる。
わたし達、そして、街人達は山と振舞われた料理を食べ、山車や踊りを見て楽しむ。

街人の中には、ダンジョンで見かけた顔も幾つか見かけ、彼等は気軽に声を掛けてきたり
肩をすくめたりするも、斬られたことに対する恨み節は何も感じさせなかった。
そして、サーシャとその母親のレイシャとも顔をあわせたが、無邪気なサーシャの笑顔で
全てのわだかまりを取り払われた感じだった。
レイシャは夫がこの土地出身であり、結婚後直ぐに夫に先立たれ、お腹の中にサーシャが
居ることが判り、遺言に従ってこの街へとやって来たのだそうだ。
だが、重いお産で体力を失ったレイシャは危篤状態の時に、プニから罰という形の救いを
受け、死した後でもサーシャを育てられているのだと言う。

つらくないの？　と聞くと、彼女は言う。

「心臓が動いて無いだけで、自分でも生きてる時と違いが判らないくらい、何も変わらず
同じように生活出来るんです。　それに……いつかこの子が年老いた時には、あたしの方
が必ず先に往けるハズなんです。プニ神は子供の骨を親に拾わせたりはしませんから。
それにこの街は、困った時は街ぐるみで助けてくれるんです」

「リアちゃ～ん、おめでとーーーっ！！　さすが俺のリアちゃんだぜぃ」

「へ？　あ、ランサー、アンタなんでここに！？」

「なんでって、俺ら、ここの出身なんだぜぃ！」

彼の目線の先には商人のエルロッド氏も居た。
心なしか、エルロッド氏は顔が青ざめて、何やら慌てているようだ。
世話役のランスと真剣な顔で何か話し合っている。

わたしがそっちを見ていることに気付いたランサーは、

「ま、リアちゃんには伝えておかないとな。　実は……昨日の朝、バルザック砦を攻めた
帝国軍４万が敗走したと、さっき連絡が入ったんだ。魔王軍はそのままノースアイゼン砦
に攻め込む勢いで迫って来てる。砦を護る帝国軍は戦力のほとんどを失ってるからヤバイ
らしい。勇者と皇女殿下が砦を護っているらしいが風前の灯だってね。俺っちもこの国の
傭兵としてこれから船で砦へ応援に向かわなきゃならない。
この辺りもきな臭くなりそうで、街のお偉いさん達は対応に追われるだろうよ」

わたしの後ろに居たジルとリアラ、それにウイン達が息を呑んだ音が聞こえた。

「……自信満々に攻め込んだ割りにあっけなかったわね。負けた理由も入ってきてる？」

「ああ、なんでも単純に魔王軍が帝国軍より数が多かったらしいのと、なんて字なのかは判らんが、ソウゾウ魔術師とかいう精霊を使役する魔将軍が、毒を撒き散らす攻城兵器を使ったんだと。その毒には神聖術の『解毒』も精霊術の『清浄』も効かなかったらしい」

『解毒』が効かない毒かぁ。

カズヒサとニアの手には負えない事態かな？

３９ページ目　新たな試練と勇者の危機（後書き）

次話はクリスマスにはアップしたい。＜自分へプレッシャー掛けとこう。

４０ページ目

４０ページ目

「神の『解毒』が効かない毒など有るはずがありませんっ、何かの間違いでしょう？」

神官であるリアラがランサーに詰め寄る。そりゃ神さまの技に瑕疵を付けられちゃ司祭様としちゃほっとけないよね。

ランサーは詰め寄って来るリアラの勢いに押され上半身を仰け反らせながら、自分の前に両手を差し出してリアラをなだめようとしている。

……両者気付いてないようだけど、その両手の位置はリアラの胸の位置だよ……

ハタで見てると公然と猥褻行為をしようとしてるみたいに見える。

……見えるだけだけど。

「俺っちも伝聞だけだから詳しいことは判らないんだよ～」

ランサーが帝都に戻る傭兵から聞き出した話では、←←←こんな感じだったらしい。

夜明けと共にバルザック砦に帝国軍が攻め込んだ時には、砦はもぬけの殻だった。
彼等は驚きながらもこれ幸いとそのまま砦を乗っ取って立て篭もり魔王軍に備えた。
その直後、魔王軍が砦の外から攻め寄せて来たのだと。
魔将軍とか言うヤツが名乗りを挙げ、魔道の攻城兵器で帝国軍を全滅させる、と宣言し、
その直後から、夏だと言うのに白い雪が降り始め、砦に立て篭もってた帝国軍の中でも、
砦の中央部に居た上級指揮官達がバタバタと倒れ出した。
神官団が慌てて『解毒』やら、魔術師団が『清浄』を唱えたらしいのだが、倒れるヤツは
後を絶たなかった。
指揮官が真っ先にヤラレて、魔王軍に応戦する処では無くなった帝国軍は総崩れとなり、
生き残れたのは砦の外に居た下級兵士達だけだった。
軍を立て直す事も出来ず、帝都へ逃げ帰っている途中なのだと。

「馬鹿なっ、それではノースアイゼン砦を見捨てるようなモノではないかっ!?
帝都に引き返さずノースアイゼン砦へ向かうのがセオリーだろう。
指揮官は何を考えてるんだ?」

ジルは帝国貴族として軍団の行動を非難する。

「だから、その指揮官がヤラレちまったって話だからなぁ。俺達のような傭兵じゃ軍人の
指揮系統に口出し出来ないしな。向こうに生き残ってる傭兵団の奴等もどうにも出来ない
もんだから、こうして国中の傭兵達に檄を飛ばしたんだとさ。

向こうの港町で戦力を再集結させて、それからノースアイゼン砦に引き返すつもりらしい。
今の状況で砦に向かっても勝算が無いって見積もってるみたいだしな。
あとは帝国上層部のヤツラがどれだけ状況を理解出来て、素早く行動出来るかでこの国の未来が分かれるだろうぜ？　下手したら一気に魔王軍にヤラレちまうだろうなぁ」

「正直信じられない。これまで『解毒』が効かない毒なんて出遭った事も、聞いたことも無い。それにこの暑い夏真っ盛りに雪だって！？　まさか？」

ウインもこれまでの常識から信じられないようだ。

「神の力は無限だよ。『解毒』が効かないんじゃなくて、神官が魔法を唱えられなかった何かがあったんじゃないの？　白い雪に麻痺効果が付与されていたとかさ」

ユミカもそう否定する。

「「　ファリナ　」」

わたしを呼ぶ声。ジルとスニージーがハモってる。
スニージーはジルに発言を譲ったようだが、ジルはハモった事すら

気付いてないようで、
周りの事などお構いなしにわたしに近付き、質問を投げ掛けて来る。
「ファリナの意見は？　その白い雪が何だか判る？　私にも神の術である『解毒』が効かないなんて直ぐには信じられない。邪神の鎧の加護を破ったファリナなら何か判らないか？」
この娘は何時でも真っ直ぐで直球なのよね。そこがイイんだけど。
「そうね、今までの情報だけじゃ、なんとも言えないわね」
そう返答すると、ジルだけじゃない、スニージーもガッカリして肩を落とした。
そんなに期待してたのかしら？

「思いつく物が多すぎて、どれなのか絞りきれないわ」

「「「「「「えっ！？」」」」」」

ユミカとランサーも含めて全員が驚く。
ふふふ、一度落としてから持ち上げるのよ。
さて、ノンビリともしてられないみたいだから、簡単に説明しましょうか。
「ユミカやリアラ、ウインが思うほど神の御加護は万能じゃないのよ。
神の力は無限でも、それを願う人間の知識が有限だから。

精霊術の『清浄』にしても、万全というには程遠く、むしろ穴だらけ？と言えるわね。
今回の敵が使った魔道兵器とやらも、そういった盲点を突いて来たのでしょうよ」

「それじゃ、対処方法は？　何か無いのか？　神聖術や精霊術でも対処しきれねぇなどと
噂が広まっちまうと、傭兵団も逃げ出すぜ、こりゃぁ」

「そうね、手はあるけど。それが出来るのはわたしだけでしょうしね」

ここに至って、わたしの気持ちも固まった。
パーティーメンバー全員一人一人の顔を見回し、エルフ・スマイルと共に別れを告げる。

「これまで一緒出来て楽しかったわ。申し訳無いけど、ここでお別れね」

精霊宮と報酬には未練があるが、人生の選択には優先順位という物があるのだ。
カズヒサとニアを、そうと知ってて見捨てる選択肢はハナから無い。

誰からも返事が無いが……いや、

「行くの？　ファリナ？　言っとくけど、私とリアラも行くよ、一

緒に連れてって？」

ジルとリアラは微笑みながらうなずいてる。
暖かい空気が流れそうになったが、ブチ壊す者が居た。

「ハハハハハ、来るのか？　そう来なくてはな、混沌の化け物」

見なくても判る、この精霊力は……イケメン魔神。
皆から離れた場所に立っている。
全員が突然の闖入者に驚いている所を見ると、精霊使いでも無い者にまで見る事が可能となるほどに、人間界への干渉力を持ち得たということか。

「誰だ！？」

ジルが誰何する。レティとリアラは精霊を見ることが出来るのでコイツの強大さが判るのだろう……って、レティは既に弓に矢を掛けて放とうとしている。

「待った、待った！　下手にこんな所でその弓を放ったら死人が出ちゃうよ！！」

「ハハハハハ、撃たれてもオレは一向に構わんぞ。もはやオレにはそんなモノは効かん」

「……なるほど、ソウゾウ魔術師とやらと手を組んだという訳ね。
想像魔術師なのかしら？
魔道兵器を出したって事だから、さしずめ想造魔術師かしら？
やだぁ、なんかオタクっぽい名前ね？　脳内変換で自称世界最強なのかしら？　クスクス、

想いを力に換えて敵を討つ！とか、オラにオメェの力を分けてケレ！とか言うのかしら？
アハハ、ヤダ自分で言っといてツボに入っちゃった。キモそうだし行くの止めようかしら」

あれ？　イケメン魔神は笑ってくれない。

「オレが話す前に先読みされるのは不愉快だな。その情報どこから得た？　事前情報無し
でそこまで言い当てたとしたら、さすがだな。混沌の化け物」

「アレレ？　当たっちゃったの？　マジで？　キモいの？　自称世界最強なの？
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふふふふふふ、あはははははははははは。
ねぇ？イケメン魔神。アンタ、精神の上位精霊のプライドを無くしたワケ？
ヤレヤレだわ。志もヘッタクレも無くした精神の精霊なぞ見苦しいだけよ。
戦場で待ってなさい。綺麗サッパリ消滅させてあげるから」

喧嘩は売られるまでジッと待ってるなんて性に合わない。先にぶん殴った方が勝つのよ！！
それにここまでコイツが出張って来たという事は、よほど自信があるようね。
わたしに取っちゃ、ワザワザ情報運んでくれてアリガトウ、と言いたいところだけど……
カズヒサ達はいよいよもって容易ならざる状況下に置かれて居るよ

うだ。
思ってたよりも事態は重いのかも知れない。

「ふん。此方は準備万端だ。毒の魔道兵器など足元にも及ばぬ術の数々で、今度こそお前をぶち殺してやろう」

そう言い残してイケメン魔神は消えうせた。
ここでアイツに攻撃を仕掛けても無駄なのだ。
精霊は使役している精霊使いを倒さない限りは何度でも復活してくるから。

「なかなか愉快なヤツを敵に回してるわね？　あたしも見に行っちゃおうかな？」

ユミカだ。面白そうにニヤニヤしている。

「今のって鎧の魔神ですよね……あんな強大な精霊が敵方に付いたのですか？……」

「まぁ、精霊ってのは呼ばれれば敵も味方も無いんだけどね。ゴメン、アイツはわたしの個人的な敵なんだけど、そのせいで余計な危機を招いちゃった感じだね」

もう人前だとかで取り繕う時間的余裕も許されない感じがする。

ポシェットから大宝珠を取り出し宙に浮かべると、

「『ボイスコマンド、ＣＩＣ起動』」

『あの剣』を頼りにＣＩＣのスクリーンを展開すると、そこに映ったカズヒサは……

なんか判らないけど、大勢の前で踊ってた。

余裕の為せる業？　それとも四面楚歌な項羽の心境？

何だろう、あれは剣舞？

『あの剣』をめちゃくちゃ振り回して、あっちに走り、こっちに走りしている。

西日が当たる砦の真ん中で、カズヒサの変な踊りを前に大勢が集まり座り込んでいた。

座り込んだ人達の中にはアッチコッチ指差す人がいて、カズヒサはその人が指差した所へ

剣を振っているようだった。何かの遊びだろうか？　それにしては様子が変だけど。

自慢じゃないが、わたしは幼い頃から魔術と魔道具創りで日々過してたせいで、この世界

の遊びを全くと言っていいほど知らない。

カズヒサの踊りに何の意味があるのか判らなかった。

と、そんな事を考えていた時だ。ふとカメラ頭上に何かの視線を感

じた気がした。
見上げて、スクリーンの上部に映っている物を見て、驚いた。

砦の尖塔に女性が立っている。
尖塔のホントの先っちょ、尖った部分を右足一本でつま先立ちしている。
上空は風が吹いているハズだが、どういうバランス感覚をしているのか全く揺れもせず。

その女性は、一言で言い表すなら『ビッチ』だった。
細身の身体。ボディコンの服は胸までやたら開いた物で、ギリギリの長さのミニ。
カメラが下から見上げた形だったので、見えちゃダメな下着までも丸見えだった。
というか、なんであんな所に立っているのか意味不明だ。

わたしは、わたしの隣に居る神の別身（エイリアス）を借用中のユミカと、スクリーンの女性を見比べる。
なるほど、あれがそうなのか？

「ねぇ？ファリナ？　あちこち見て百面相してるけど、さっきから光の精霊力を凄く感じるのよね。　もしかして、どこか違う場所を見てるの？」

レティが精霊力の異常を感じてそう聞いて来る。
事ここに至って、言葉で説明するよりも実際に見せた方が早いと考

えた。

「ん、まぁ見てみて」

ＣＩＣの映像を、レティ、ウイン、スニージー、リアラ、ジル、それにユミカとランサーが見られるように、わたしが見る物の幻を届けた。

誰にも見せるつもり無かったが、見せても良いと思える仲間に出会えた事を喜ぶべきなのかしら。

「「「「「うわっ！！」」」」」

今、カメラ位置は尖塔の高さとほぼ同じだ。目の前５ｍほどの所に女性が立っている。

レティ達にしてみれば、３６０度の大パノラマが突然出現したのだから驚きだろう。

「プニ！」

レティがいち早く女性に気付き、声を上げる。

「ホントだ、どこよここ？」

ユミカが場所を尋ねてくる。他の皆も彼女に気付いたようだ。

「ここから北に馬車で５日くらいの距離かな？　たぶんノースアイゼン砦」

この国の地理に疎いわたしは皆にそう告げてから、映像のレイヤー優先順位を変更し、
わたし達足元の肉眼で見てる地面よりも、カメラ映像を優先的に”視える”ようにした。
そのとたん、今まで地面だったところが空中のカメラ位置からの映像に切り替わる。

「「「「「「「「 うわあっ!! 」」」」」」」」

突然空中に投げ出されたように感じたのだろう。先ほどより大きい声が上がる。
足元が消失して遥か下の広場に大勢が集まっている映像に切り替わったのだから。

スニージーが、つま先で”見えない”地面をトントンと叩いている。

「プニ神って、なんであんな扇情的な格好してるの?」

『これでも子宝の神だからな。こんなモノだろう?』

わたしの問いかけに、穏やかなメゾソプラノの綺麗で透明感がある声が答える。
その声は、スクリーンでこそ目の前に視えているが、実際はここから５００ｋｍほど離れた場所に居るプニ神の声だった。これが声優なら大勢の男性ファンが付くに違いない声だ。
視てる事に気付いてて、こちらの声も聞こえてるし、自分の声も届

けてくるとはさすが神。

「ちょっと！　プニ！　試練に顔も出さないで何やってんのよ！？」

ユミカだ。自分の神さまにそんな口の利き方して良いの！？

『ん？　ああ、ウイウイ、スニッジ、レティ。神殿を無事見つけたようだなオメデトウ。
こっちも困ったことになってるんだ。顔を見せられなくてすまない。許せ』

ちっともすまなそうじゃない声でそう答える。
さらに神さまはこう言いやがりました。

『そういうわけで、ウイウイ、スニッジ、レティ。お前達もここに来ることを命じる。
具体的には明日の夜明け前までにだ。間に合わなければ帝国は滅びの道を辿るだろう。
もちろんその場合、下に居る勇者を含めた３００名の帝国軍も全滅する。
リアファリナ。滅びの道を変えたいのならば、パーティーメンバー全員を連れて来い。
さらに、滅びの道を避け、かつ、勇者を救いたいのなら今日中に来なければならない』

「無茶苦茶だ！　ここからノースアイゼン砦までは船と早馬でも丸々二日は掛かるぞ。
今日中どころか、明日の夜明け前ですら間に合うはずが無い！！」

ランサーが叫ぶ。
普通ならそうだろう。それを知ってる全員がわたしに注目していた。
わたし独りだけなら余裕だ。『飛翔』で飛んでいけば1時間も掛からない。

「ファリナだけ先に先行して、後から僕達が行くのでは？」

スニージーがプニ神へ問いかける。

『最良の未来を得るための条件は既に言った通り』

「一つ聞きたいんだけど？」

わたしからプニへ問う。
プニは視線だけで言ってみろと返した。

「プニ神殿の上級守護兵貸してくれない？」

アレが在れば魔王軍を楽に駆逐できるだろうから。
すると、プニ神は目を細める。笑ったのか？

『この戦い、神々も注目している。
俺がお前に必要以上に肩入れすれば、敵方へもテコ入れしようとする厄介なお方が居る。
そういう訳で答えはノーだ』

ちぇー、ケチー

そもそも、今こうしていること自体が十分な”肩入れ”に思えるけど？

『問題無い。俺が肩入れしているのはピンクの方で、お前に無茶を言う分には構わない』

「心の中を読むなんて……ピンク？　……一久（ピンク）か！？」

『ケチとか言うからだ。そして今日中とは選択肢を選べるタイムリミットだ。
その間も、お前達がここへ到着する時間が遅れるほど死ぬ人間が増える。
最初の人間が死ぬのは、今から５４分２０秒後』

なんですって！？
足元に目を向ければ、まだカズヒサが変な剣舞を踊っていた。
いや……今のプニ神の言葉通りとするならばこれは……目には見えないが敵の攻撃！！？？
カズヒサ達にしか見えない敵なのだとすれば、この異様なカズヒサの踊りも説明が付く。

そういう風に捉えて見てみれば、集まった人達が指差す方向へカズヒサは一生懸命に剣を振っている。かなりヘトヘトの様子だ。いつからこれをやっていたのだろうか？
カズヒサだけが剣を振っているのは、敵に必ず命中する『あの剣』と何でもぶった切れる勇者の剣技ゆえだろう。他の大勢にはこの異様な敵への対処が出来ない状況のようだ。
あれではカズヒサの体力が尽きるのも、そう遠いことでは無いだろ

う。
今すぐにでも駆けつける必要がある。それも全員連れて５００ｋｍ先まで。
すんごい無理ッポイ。

喜んで困難に立ち向かうわけじゃないからと、イヤミの一つも言ってやりたい。
そう言えば、昔こういうシーンで歌を唄ったのを思い出した。
たしか……結婚を予定した男の子供ではない子を妊娠しちゃったのに、そのまま結婚して
子供を育ててもらえと、どう考えても無茶な提案を天使から言われた女性が出てくる劇だ。

今のわたしの状況に合ってる気がして、両手を逆ハの字にバンザイして唄った。

「♪神さまを～たた～えます　♪神さまを～たた～えます
♪おこと～ば～どおりに　♪なるよ～に」

『……なんてヤサグれた……。イメージ壊れるからヤメろ』

プニ神からの突っ込みに、

「神さまに無茶フリされた女の子の心境なんてこんな物よ。
当事者の、わたしが言うんだから間違いないっ」

『……ならばモチベーションが上がるように報酬を出そう。始原の火竜の仔の居場所だ』

「最初からそう言ってよぉv。　このリアファリナにド～ンと任せなさい！！」

とニッコリ返事を返してからＣＩＣをオフにした。

言ってみるものね？　まぁ、神さまには最初からお見通しだったのだろうけどさ。

「時間内にノースアイゼン砦まで行く策は？　ファリナ？」

スニージーが口火を切った、皆もそう思ってるのは顔から判る。

「ちょっと待って、考える」

『飛翔』で一人づつピストン輸送は？　ダメだ。往復１時間半では今日中に全員運べない。

ならば『ゲート』は？　欠点だった精霊界に出口を創る方法も最近考案したではないか？

……いや、わたし独りならどうにでもなるが、精霊界で不慮の事故があれば命に関わる。

十分な検証を行わないで一か八かに賭け、皆の命を危険に晒すわけには行かない。

疲れ知らずの土霊で馬型ゴーレムを創り、『ヘイスト？』では？

……魔力が持たないか。

それなら５００ｋｍを６時間で良いなら時速１００ｋｍ弱でも良いはず。

ならば『ヘイスト？』でもイケルんじゃ？　不整地を時速１００ｋｍって何の拷問かしら？

いくつかの方法を挙げてみるも、すぐさま否定材料が浮かぶ。

結局、思考は一番最初に思いついた、けれど一番イヤな方法へと回帰した。

『呼んだか？』

「ええ、お願いがあってね」

わたし達の目の前に突然現われた巨大な頭蓋骨。同時に吹き荒れる風。

『イチゴショート』かつて我が物顔で世界を駆け巡った風の上位存在。嵐の暴君。

何の取引材料も無くお願いなどすれば、何を要求されるか知れたものじゃない。

それでも、今はコイツにお願いせざるを得ない。

『いいだろう、その代わりにこちらも要求がある』

ホラ来た。

『風使いを一人要求する。なに取って喰うわけじゃない。風の精霊使いを一人連れまわすことで、より高度な技が出来ると気付いてな。だから紹介せい。ああ、お前はダメだぞ。お前の精霊力は混ざり物が多すぎる』

……そんなんで良いの？

「よしっ決まった！　ホラ！この娘、風を守護精霊名に持つ精霊使いで、ついでに妙齢の美女よっ　はべらして良し、愛でて良しの超優良物件だっ」

「えっ！？」

「ほらほら！　全員、準備が整い次第、この頭蓋骨に乗り込んで頂戴！」

わたしは皆を急かして出発の準備を整える。

イチゴショートは大きな頭蓋骨とは言え、一度に乗り込めるのは４人まで。

わたしは自分で飛んで行くとしても、一人余る。

「え？　えっ！？」

当然乗り切れない一人は最初から決まってる。レティだ。

ウイン、スニージー、リアラ、ジルが中に乗り込み、レティ一人を頭蓋骨の上に座らせる。

「ええ～～っ！？」

「そーれ、出発進行！　さよならっ　街の皆！　お世話になりました～～っv」

わたし達は別れの挨拶もそこそこに、地下世界から飛び立つ。
イチゴショートが『折角風使いを得たんだ、飛んで行くぞ！』と言い張ったからだ。

さすがイチゴショートのダッシュ力は凄まじい。
ぐんぐん上昇すると、ザワール湖の水底に風の結界を纏ったまま飛び込み、派手に水飛沫を撒き散らした。

「えええぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～・・・・・・・・・・」

レティの悲鳴が尾を引きながら……

イチゴショートが風の結界を張ってるので、落っことしたりはしないだろう。
わたしはあんな派手な真似は出来ないので、水霊へ頼んで水底にトンネルを開けて貰った。

イチゴショートはわたしを待つなどと言うことは無く、自分だけでさっさと飛んで行く。
ヤツの速度は、これまでなら『飛翔』でも追い付け無かったが、今は違うわよ？

背中に背負った火竜の剣（ブースター）に魔力を通す。
とたん、弾丸の様に加速するわたし。
イチゴショートと抜きつ抜かれつしながら、あっという間にノースアイゼン砦の上空へと
辿り着いた。まだ辺りはようやく暗闇に沈み始めた時間帯だ。満月が地平線に顔を出して
いる。速い速いｖ

高度を下げ砦の広場に降りて行くと、先ほどスクリーンで見たよりも疲れ果てたカズヒサ
がフラフラになりながら、それでも精一杯、剣を振るい続けてた。
ルーとオーリスは懸命にカズヒサへ声援しているし、ニアは泣きながら声も嗄れよと応援
している姿が見えてくる。

その他大勢もコッチだ、アッチだと指示を出すものの、指示の声を掻き消さないよう配慮
しているのだろうか？　声援は控えめだが皆必死の形相で、態度でカズヒサを応援してた。
と、その時、カズヒサの左足から血飛沫が上がり、誰かが悲鳴を上げた……
いや、広場に集まっている大勢の中でも血を流し倒れている人間が居た。
カズヒサの援護が間に合わなくなっているのだろう。

シャイアが神への祈りを捧げて、カズヒサの傷が癒され……切れて

ない。
魔力が切れ掛かっているのだろうか？　シャイアの顔は遠めでも真っ青だった。

さらに高度を下げ、魔術式の有効距離まで近付いたわたしは、すかさず支援魔法を掛ける。

『パーティーセット』

少しずつ改良を加え、魔力回復速度は以前より早く、スタミナ回復効果も追加されている。
自分達を包む支援魔法の効果光に驚き、辺りをキョロキョロと見回すオーリス達。
足を切られてひっくり返って居たカズヒサが一番始めに、わたしを気付いたようだったが、
なんだか目が朦朧としている。わたしだと認識しているかは怪しかった。
気付けば、広場に居る全員の視線が空中のわたしに注がれている。

その中を、わたしは次の魔法を唱えながら、ゆっくりとニアの隣に着地した。
この人達には見える敵がわたしには見えてない。
まずはソイツ等を引き摺り出さなきゃ。

唱えるのは、悪戯精霊の力を用いて一人が見ている幻を他の人間も共有できる魔術式。
『ＣＩＣ』でも採用しているヤツだが、違うのは効果範囲内の全員に掛かる点。

「銀の月に呼び覚まされた悪戯心よ、祭りの夜を楽しめ。
地獄より舞い戻りし死者と魔女と共に精霊と踊れ！『ハロウィン』」

詠唱の文言に他意は無い。そのまんまだ。ハロウィンの夜を楽しむ
ために創った魔術式。
故郷の村でこれをやった時は後でえらい怒られたものだ。

画面が切り替わるように、砦の広場中を埋め尽くすように黒い影が
いくつも現われた。
『ガイスト・ストーカー』人の精神の陰に潜み、宿主を呪い殺す怪
物。それがコイツだ。
数十体ではきかない。数百体は居る。
広場の人間一人につき、一体かそれ以上の数が取り憑いて居たのだ
ろう。
それが全て一堂に見えるようになったのだ。周りから悲鳴が上がる。

『闇爪』

目の前に見えているコイツ等は、実際には精神世界（アストラルサイド）に存在して居る。
有効な攻撃手段は、闇霊による精神系魔術でのアストラルサイドへ
の攻撃だ。
一度に複数の『闇爪』を八方へ飛ばし近場のヤツを全て片付け、続
けざまに魔法を唱えた。

「清なる水よ、暖かい光よ、大地の慈愛をもって傷付きし者に癒し
の手を与えよ、
猛き炎よ、安らぎの風よ、優しき闇を伴い心疲れし者に回復を『フ

ル・リカバリー』」

消耗が激しいカズヒサとシャイアに、わたしの持つ最大の回復術を掛ける。

ニアはわたしを見つめ、大粒の涙を浮かべ喉が詰まっているかのように口を痙攣させてる。

落ち着いて貰わないと、今は話にならないかな？

なので、その向こうにいる以前出逢った辺境騎士団長に大声で話しかける。

「アルゴン騎士団長さん？　お願いがあるんだけど？　今からここにわたしの仲間が降りて来るけどその中の一人がダークエルフなの。でも危険は全く無いから斬り掛かったりはしないでね？　他の皆も頼むわね？」

「へ？　あ、あぁ、判った。　……わしはアルゴスだっ」

上空から遅れてイチゴショートが降りて来た、良いタイミングだ。

地面に着く前に、ジルとウインは飛び出し、ガイスト・ストーカーに斬りかかる。

ジルの魔剣は精神系付与されているので、そのままでも斬れるが、ウインの黒剣は空振りしている。精神系の怪物相手にそのままではダークミスリル武器が通用しないのだ。

なので助言する。

「ウイン、それにリアラ、武器に魔力を通しなさい」

ダークミスリルの武器には、魔力を通すことで闇霊属性の付与魔法で追加ダメージ効果が得られるようにしてある。『簡易儀式』で籠めた永続効果魔法の最後の一つ。

リアラは器用に魔力を武器に通しているが、ウインはその点が下手だった。

まぁ慣れれば大丈夫だろう。

闇霊属性を纏った武器はガイスト・ストーカーに有効なダメージを与え出す。

ウインとジルの活躍で見る見るうちに砦の怪物達は数を減らしていく。

リアラは戦いながら目に付く怪我人に次々と回復魔法を掛けていた。

スニージーは……目を廻してグッタリしているレティを介抱している（汗

後で感謝しておこう。

間に合ったのはレティの生贄……もとい、献身のおかげだからと。

４０ページ目（後書き）

やれば出来るじゃん＞わたし
なんとかクリスマスに間に合ったよー。

とは言え、今年の小説アップはこれで最後となりまする。次回は来年ですっ
クリスマスとお正月は、溜まっている小説のアレコレを読み進めますね。
ではでは～

メリークリスマス＆来年も良いお年を～♪

41ページ目

41ページ目

ある程度『ガイスト・ストーカー』を倒し、減ったところでさらに数十体ほど増えた。
これは……敵の術者を倒さない限り、根競べとなりそう。

「こら！　バカヒサ、いつまで寝転がってるの!?　仕事しなさい」

「……ファリナ？　ファリナか!?　本当に？」

「夏だからって脳ミソ茹だってる？　見ての通りよ」

呆けてたバカヒサは体力が回復したようで、ようやく立ち上がると、

「助かったよ、ありがとう。　正直かなり厳しかったんだ」

「いいけど、まだ終ってないよ。　敵の術者を倒さないとね」

『ガイスト・ストーカー』は強さはハッキリ言って弱い部類だから倒すのは精神攻撃（アストラル）可能な武器を持ってさえ居れば楽勝だ。リアラでも一撃で倒せている。
そうして数が減り敵の間隙が広がってくると、倒すために敵へ走り寄る必要が生じ、退治するペースが下がる、敵は次々と湧いて出て来るのである程度減った所で拮抗し膠着状態

となった。ウインとジルが頑張ってるが倒しただけ新しく湧いてくる。

「体力が戻ったならアンタの、技を飛ばして離れた敵を倒すヤツ使ってちょうだいな。
目標は敵の『想造魔術師』よ」

「敵の魔将軍だな？　実はそれはもう試した。コイツらを操ってるヤツを目標に飛ばしたんだけど、どうやってか知らないが、技を防いでるみたいで攻撃が届いて無い感触なんだ。
以前、邪神の盾を持ってた魔将軍が居て、やっぱりあの飛び技が防がれた事があった。
直接攻撃なら通じたんだが、飛び技がダメだったんだ。
今回の敵もそういった物を持っているのかもな」

「……ふ～ん？　まぁ、もう一度やってみてよ。わたしにも策が有るから」

「……判った。んじゃ、いくぞ？」

「ん」

わたしが頷くと同時にカズヒサが気合を込めて剣を振ると、すっかり暗くなった夜空を横切り、光跡が何処とも無く伸びていく。

『全自動改』

大きい水球が光跡の後をついて飛んで行く。
光跡を追いかけて同じ敵を攻撃してくれるように水霊へ頼んだのだ。

相手の居場所が判らないので多めに魔力を注いだ、１０キロ程度離れていても届くはず。
物質化された水は魔力障壁を突破するし、激流が詠唱妨害も兼ねるので『魔術師殺し』としてはかなり優秀な魔術式だと思う。……見た目は地味だけど。

けれど、

「やっぱり防がれた、そっちはどうだ？」

「どうやら、力ずくで水霊を引き剥がしたみたいね。こっちも破られたわ。
だけど変ね？　わたしと同程度以上の精霊使いなら今の魔術式を破るのは可能なんだけどそれだったら、水霊に交渉してお引取りしてもらえば良いだけで、力づくで引き剥がしたのが謎だわね。魔術だったら詠唱が妨害されるから術を使えたとは思えないし」

敵も無詠唱を使えるのか？　それとも……考えられるとすれば、また邪神の鎧かな？？

「カズヒサ、もう一回やってみて。　それと今度はちょっと待って、準備があるから」

背中から火竜の剣を引き抜き、頭上に構え、魔力と霊力を剣に通す。
剣から紫色の炎が吹き上がり夜空を焦がす。

「良いわよっ！！」

わたしが合図すると、カズヒサは再び剣を振るう。
すかさず、

『ファイア・ストーム』

この『紫光炎』は邪神の炎鎧が持つ加護を先日破っている。今回の敵にはどうだろう？
精霊使いの感触では、どうやら敵に炎の嵐が直撃したようだ。
今度はさすがに火霊を引き剥がせないで居るらしく、そのまましばらく待つと……

わたし達の周りから『ガイスト・ストーカー』が全て消え去った。

「倒せたのか？」

「どうだろう？　なんとなく異空間に逃げ込んだっぽいわね。
おそらくだけど敵は邪神の鎧を着てるわ、それもたぶん水系の力を秘めた鎧を保有してる。
水霊を無力化したんじゃなく、同系統の力で無理やり引き剥がした感じだったから。
邪神の鎧は、邪神の加護で攻撃を無効化したり、異空間に潜り込める力を持ってるのよ。
こちらの攻撃を防いだり、異空間に逃げ込んで炎の嵐を振り切ったりね。
その代わり、向こうの魔術も中断されたからガイスト・ストーカーも消え失せたわね」

先日、風の鎧を着ていたダークエルフはこの力を使って、通常空間とは位相が異なる空間に身を隠していたのだ。
わたしが炎の鎧を着た時の感触ではソコは精霊界とも異なる場所で、この世界のどこでも無い場所ではあるが、完全な異世界というのとも違う、どことなくこの世界と繋がってるというならば『裏側』とでも呼べる場所だった。

と、そこへわたしの視界の外から人が飛び込んで来た。
生きた鎧とのリンクでそれがニアだと判ったため、鎧の自動反撃モードは止めたけど、危ないなー、もー。

「ファリナっ！！」

抱きつかれました。
いや、それはもう、シャイアにもルーにもオーリスにも。揉みくちゃにされました。
４人に抱きつかれてるのを見たバカヒサも瞳を輝かせてたので、そっちは先んじて断った。

「アンタは来なくて良いから！」

再会にひとしきり盛り上がった後で、ウイン達を紹介したら、中には顔見知り同士も居たようで、

ジルはフルフェイスのヘルメットを取り、

「御無事でしたか？　皇女殿下」

「貴方は……リーベフェルマ伯爵家のジェラルディさまですか？」

「はい、もっとも今は家を出て冒険者となりましたので、ただのジルとお呼び下さい」

さらに、

「無事で何よりでした。アスコット侍祭」

「カースティン司祭！　先ほどは危ないところを助けて頂いてありがとうございました！」

「私は何もしておりません。全てはファリナの頑張りと主のお導きによるものです」

彼女達にも積もる話があるようで、アッチはあっちで盛り上がってるのを横目にしながら、

わたしと男性陣は必要な情報を交換する。

「それで、さっきの影。アイツらは一体何だったんだ？
今朝辺りから砦の中で不審な死に方をする人が出始めたんだ。そのうち、変なのが見える
って言い出す人が出てきて、大勢が見てる前でも被害が出始めた。
襲われる人はその前に変なのが見えるって言い出した人で。
ところが、『ソコに居る！』って言われても誰にも何も見えないと来た。
本人が剣で切っても効果なし追い払うことも出来ない。何も抵抗できず一方的に殺されて。
この広場に全員を集めて、見えない敵を俺が全て切り倒す事で何とか凌いで来たけど……」

「アレはガイスト・ストーカーって言うヤツで、精神の精霊の一種よ。
人の精神の中に棲んでるから物理的な攻撃は通じない。正しい対処法を知らないと一方的
に殺されることになるわね。
わたし達はプニ神に、今日中に此処に来ないと勇者は死ぬ、って脅されて来たんだけど？
着いて見れば、誰かさんはノンビリ引っくり返って呆けてたしねぇ？」

さっきの一幕だ。わたしがニヤニヤ笑ってからかうと、カズヒサは真面目くさって

「プニ神？神さまがそう言ったのか？　へ～？今日中は保ったんだ？さっき引っくり返った時は、ココまでか！？って思ったもんだけどな。
まだまだそんなに頑張れたのか。なんせ神さま保証だもんな！　俺スゲー」

……バカヒサはからかい甲斐がちっともありゃしない。

「ところで、バルザック砦で帝国軍が壊滅したって聞いたけど、ここは平気なの？」

「ああ、昨日の夜明け早々帝国軍が敗走したって一報は、昼過ぎにはここにも届いてたよ。
それでファリナが敵の魔道兵器を壊さないとダメだって「ファリナ？」あ～、いや……
この剣の名前だよ、エルファリナ」

そう言って腰に佩いた剣に手を置くカズヒサ。

「何？アンタ、剣に名前付けてんの？　しかもわたしの名前じゃないの。キモッ」

「こういう剣には銘を付けるモンだろ？　ほら、繋がりを強くするとかなんとか」

「ナイナイ。そもそも銘は製作者が付けるモノでしょが。少女漫画じゃあるまいし、
モノに女性の名前付けるなんて一人前の男がやったら気持ち悪いだけよ」

カズヒサは少し落ち込んでから気を取り直して話しを再開した。

「あー、ファリナとピネの村と別れてから、オレ達に新しい仲間が加わったんだよ。
彼女が……女性なんだけど……バルザック砦で使われた魔道兵器を壊さないとダメだって
警告してくれて、昨日の昼間に奇襲を決めて夜に決行したんだが、
オレ達は彼女の手引き
もあって、その魔道兵器を運良く壊すことに成功したんだ。
と言っても、完全に壊すまでには至らなくて、せいぜい攻撃を遅らせる程度だったんだが。
その彼女が今朝、この砦で見たことも無いボディコン女と立ち話してたと思ったら、その
直後に突然、今回は手伝えないからって言い出して、そのまま姿を消してしまって……」

ボディコンの女？

「それって……プニ神かしらね？」

『幻影』でプニ神を等身大で目の前に創り出……そうとしたが、どうしたことか、
顔や細かい部分がユラユラと薄らボケて鮮明な像を結べなかった。
なぜなら……わたしがプニ神の顔の造作も髪の色も服の色さえ！思い出せなかったから。
尖塔の上に立ってた彼女はどんな瞳の色してた？顔のつくりは？もう一度会えば判るのに
思い出そうとすればするほど記憶の海に沈んで、細かい部分が思い出せない。

そう言えば、以前ウイン達が思い出話でプニ神を語った時も顔を思

い出せないって言って
たっけ？　これはアレか？存在力が強すぎて発音すら出来ないイチゴショートやサバ缶の
真名と同じように、神の姿はマネする事すら出来ないってヤツかしら？

そこへ、ようやく体調が復調してきたレティも話に混ざってきた。

「プニ？　あ、思い出した。ユミカに頼まれてたっけ。　コウモリさん！来て頂戴！」

『バサバサバサ……』

そして目の前に現われるユミカ（美少女戦士バージョン）。
わたしは呆れてユミカに尋ねる。

「ナニそれ！？　呼ばれれば何処にでも現われることが出来るワケ？」

「ご苦労ご苦労、レティアラ呼んでくれてアリガトね。
そうだよ？この身体の特典なのよ。なんせ自前の羽で飛んでくのって面倒じゃない？
現地に出向く人間に呼んでもらえば時間の節約にもなるってモンでしょ？」

「なんだなんだ？　どこから現われた！？」

カズヒサの疑問は無視して、

「バカヒサ、そのボディコン女って、この娘を大人の女性にした感

じだった？」

カズヒサはユミカの上から下まで眺めて、

「ああ、そんな感じだった」

「話を戻して、それじゃ魔道兵器は一応壊したけど、直されそうな壊し方だったわけね？
そうすると、一日経った今頃はもう直されてるかも知れないわね。
その魔道兵器は『解毒』が効かないって聞いたけど、その後、何か判った？」

「いや、魔法とかチンぷんカンぷんでさ。生暖かい風が吹いてきたと思ったら、白い雪が
降って来た。くらいしか俺達も情報持って無いんだ。スマン」

魔法が解りそうなニアは向こうでジルやリアラと話が盛り上がってるけど、情報そのもの
が少ないならニアを呼んでも無駄だろう。

「わたしなりにここ来るまで考えて見たんだけど、一番コレかな？
と予想するのが」

実際に現物を見てもらった方が早いだろう。
とは言うものの、この現象を引き起こす魔術式は創って無いので、
精霊に頼んでの力技。

視線を宙に向け、左手のひらを空に向けて風霊に意思を伝える……
このポーズに特に意味があるわけでは無いが、精霊に近しい場所へ
少しでも自分の身体を
近づける”意思”が精霊たちから好ましく映るらしい。
地霊ならば手を大地に、水霊ならば大量の水場で身を浸すなどの行
為も同じ意味だ。

直ぐソコに居るイチゴショートは『雑事に我を煩わせるな』とばか
りに明後日を向いてる。
もっとも、頼んで変な要求が返って来ても困るしね。
親切な（ここ重要）風霊たちは、わたしの意志を汲んで頼まれた通
りに動いてくれる。

「すごい力ね……」

レティが驚きの感想を述べる。
とは言え、強引に力ずくで精霊たちの動きを操るがゆえ大量の魔力
を消費しているに過ぎ
ない。こんなやり方は美しくないし、褒めてもらってもちっとも嬉
しくないなぁ。

やがて上空から生暖かい風が吹いて……
白い雪がパラついて来たと思ったら、直ぐに人口降雪機並みに雪が
舞い始める。

「「「「「「　雪だ！！？？　」」」」」」

バルザック砦の顛末を聞いているからだろう。
この場に居る大勢が悲鳴を上げるが、カズヒサが静めている。

ひとしきり降らせてから……あまり多くを降らせると二の舞になるだけなので……降るのを止めて、風霊にある程度の雪の量を一箇所に集めてもらった。

レティはさすがにこの雪の異常さが判ったようだ。

「何？この雪。水霊の力を全く感じない、風霊だけで作られている、そんなバカな事って」

「この雪が毒の雪なのですか？」

ニア達も井戸端会議をやめて、わたしの周りに集まって来た。

「リアラ、『解毒』を掛けてみて？　通じるかどうか確かめたいから」

「はい。
善を司るミラー神よ。ここに人を害する毒在り、全能なるその御力で我等を救いたまえ
『キュアー・ポイズン』」

神官の祈りの言葉は人によって異なる。
それに、リアラの『解毒』の詠唱文言は数パターン有るようだ。
シャイアの文言は毎回同じだった。性格の違いだろうか？
神さまってホント、そういう処はアバウトだ。

どうせなら、この雪も無効化してくれれば良いのにね？
そう思いながら、予想通り、何の効果も発揮してない『解毒』の結果を眺めた。

「何も変わってないね？」

精霊の目で観察していたレティがそう述べる。
雪を集めたここら一帯は、『解毒』では精霊の状態に何の変化も起きなかった。

それを確かめて、レティが精霊術による浄化術を詠唱する。

『清浄』

「……変わらないね？　ホントにこれ毒なの？　あたし達こうして平気だけど？」

「程度問題ね、もっと雪の量を多めにすれば影響出てくるよ」

わたしがレティの疑問に答えてから、カズヒサに問う。

「どう？雪の正体解った？カズヒサ」

「……ダメだ、わからん。教えてくれファリナ」

わたしは水球を召還し、一塊に集められている雪にぶつける。
すると音も無く、大量の白い煙が地面の上を流れ出す……

「「「「「「　うわっ　毒の煙が！！　」」」」」」

何も解らない大多数の人達がまた悲鳴を上げた。
が、さすがにカズヒサだけは解ったようだ。

「ドライアイス！？　……そうか！二酸化炭素か！？」

「バルザック砦じゃ、外から攻めて来た敵に慌てて、砦の門を閉めたんでしょ？
二酸化炭素は地表に溜まるから門を閉めたら砦の中に溜まる一方で敵の思惑通りだわね。
とりあえず、対処法としては砦の入口を開けっ放しにすること。
風霊を使って換気に気を付けること。その辺かな」

「だからバルザック砦では最初に明け渡したのか。廻りを壁に囲まれて無い唯の平地じゃ、
この手は使えないもんな」

「ま、敵のほうがうわ手だったってことね。こういうのも空城の計って言うのかしら？
二酸化炭素は人の体内でも作られるし、元々空気中に存在する物質だから、『清浄』じゃ
風霊は異物や危険な物と判断してくれないしね。神の『解毒』は人間の老廃棄物なんかを
分解してくれないし、そもそも体内に存在する物質で一定の敷居値を越えて人体に悪影響
を及ぼす物については例えば癌細胞、コレステロール、血栓、高血糖、尿酸などなど。
神さまは何もやってくれないモノでしょ？　寿命を延ばしてくれな

い事からも解るし」

「カズヒサとファリナが何を話しているのか、わたくしにはチンプンカンプンです。
けれど、毒の雪の正体は判って対処法も有るのですね？
……ありがとう、ファリナ。さっきの影も、毒の雪も……ぐすっ
わたくし、カズヒサが
倒れたらどうしようって不安で不安で……」

ニアは安心したのか緊張の糸が切れたようで泣き出してしまった。

「アンタその知識どこから手に入れたの？　さっきの話、あたしにも全然解んなかったわ。
これでも暇にまかせて世界中を旅して周ってるけど、聞いたこともない知識ばかり」

ユミカの疑問にわたしが答えるより先に、

『リアファリナとカズヒサの知識について詮索は無用。この世界で広めて貰っては困る』

砦中央に居るわたし達より少し離れた場所にいつの間にかプニ神が立ってた。

「うわ、まだ居たよこの神（ひと）。
それでどうなの？プニ神さま？　言われた通りパーティーメンバー

全員連れて来たわよ」

『今この地では神々の思惑が錯綜している。これ以上のお前達への助言は、敵方へも介入する格好の口実ともなるだろう。という訳でこれで最後だ覚えておけ、脅威となるのは敵勢力だけでは無い、敵は常に己の心の中にも居ることを忘れるな』

……そこで、なんでわたしをジッと見て言うワケ？御助言通り、イケメン魔神はじめ、精神の精霊には十分気を付けることにするわよ～だ。

『もっとも、トゲエルフならぬボケエルフには言っても無駄なようだ。では、明日の戦いが終るまで、高みの見物とさせてもらおうか。行くぞユミカ』

プニ神は言うだけ言うと、ユミカを連れて砦の宿舎へと歩いて行ってしまった。

「なに？あの女性（ひと）？　うわ、ファリナ顔真っ赤」

オーリスが誰にとも無く呟いてから、わたしの顔に驚く。ぬぬぬぬぬ～、ボケとは何だーーーーっ！！？？というか、護鷹の召還笛よこせっ！

自分勝手な神さまはほっといて、明日には攻めてくるだろう敵への準備をしないとね！
夜明けまであと8時間くらいしか時間が無い。ヤレルことは今のうちにやっとかなきゃ！！

「レティ、雪が降って来たら換気をお願い。ソコに居るイチゴショート使ってね。
イチゴショート、まさかイヤとは言わないでしょうねぇ？
アンタが手伝わない限りレティの身が危ないんだからね。せっかく手に入れた自分の巫女を直ぐに死なせちゃっりしないよね？　この砦の換気を行うほどの風を動かそうとしたら、アンタしか居ないんだから！！」

『……しかたあるまい、そのくらいならやってやろう』

しめしめ。レティねたはしばらく使えそうだ。次はっと。

「ニア、敵は邪神の力も使って来るし何より数が圧倒的に多いわ。わたしも攻撃魔術を全開で使う事になるだろうし、そうなると何かあった時に魔力が足りない場合も在り得るわ。そういった時は手伝ってもらう事になるから今の内に覚えといて欲しい物があるの」

ヨイショっと魔力炉を取り出し、さらに、水晶姫も召還する。

「これは魔力炉って言って、魔力を糧に力を得られる魔法装置ね。使い方は教えるから覚えてちょうだい。水晶姫アンタも手伝って」

そうしてニアに必要な操作法を教え、まだ時間があったからスニージーの武器を強化する。
スニージーの杖の先にプニ神殿で入手したアレキサンドライト・キャッツアイを付けた。

「良いんですか？　ファリナ。せっかく貴方が貰った物なのに？」

「この宝玉の性格上、わたしよりもスニージーの方が合ってるのよ。アレキサンドライト・キャッツアイ。プニ信徒に似合うし、風と炎それに大地属性が強いし、言霊の力で『瞳』に繋がる属性の恩恵があるから、心眼、魔眼、浄眼に代表される、精神属性攻撃の耐性も増えるわね」

夜明け前

ノースアイゼン砦には、つい先ほどからドライアイスの雪が降り始めた。

見上げれば砦の上空に目に見えない魔法陣が”視える”。魔道兵器が空へ投射しているのだ。

ここまで巨大な魔力で陣が構築されていると、『ジャミング・マジック』も焼け石に水。
すでに砦の３つある門を全て開放し、風霊が砦中央から門を通って外へ強制換気している。

砦の見張り台には、わたしの他に、ウイン達やカズヒサ達も揃っているが、なぜかプニ神とユミカまで居る。
砦の北側からは大地を埋め尽くすほどの魔獣、下級悪魔、そして使役兵が押し寄せて来るのが見えている。
今のところは雪の効果待ちで本格的な進軍は待機してるようだが、こちらは門を開放しているし、何より風霊がこれだけ派手に動いているのだ、程なく毒の雪効果に期待持てないと気付かれるだろう。

「敵の数、５万より多くないか？　戦場を埋め尽くすこの数、２０万じゃきかないぞ？」

ウインが疑問を口に出す。

「胸がザワザワする。凄い精霊力を感じるよ。昨日ニブルヘルに出たあの精霊だね」

「うん、レティが言うようにあの精霊だね。わたしはイケメン魔神って呼んでるけど。
精神の上位精霊の力を使って幻影を見せてるわね。
あれは幻、ニセモノの軍団ではあるけど……本物と区別出来ない大軍は脅威だね、普通は」

わたしはそういって背後の帝国軍を見やる。
カズヒサも同様に振り向いて、肩をすくめた。

「だな。どの道たった３００人じゃ応戦しようもないし大軍は関係無いな。例え少数でも
攻め込まれたら終りだからさ」

『あれは魔将軍のミラージュ・リージョネアという幻影魔法だ、５倍に水増し中だな』

「ついでに弱点も教えてちょうだいよ、プニ神さま～？ｖ」

『カワイコぶっても無駄』

「ちぇっ。ならなんで此処に居るの？」

『解説者が居た方が見物人的に便利だろ？色々とな。それより進軍が開始したぞ』

プニ神の言うとおり、大軍が一斉に鬨の声を上げていた。

「それじゃ、昨日打ち合わせした通り、わたしの大規模攻撃魔術式で大軍を蹴散らして、
その後で敵魔将軍を討ち取るために少数で突っ込むから準備しててね。ジル頼むわよ」

今回の作戦の要はジルだ。
敵の精神系魔術および大軍への対処法はジルが持っているアレ。

「どれ、一発カマしますか」

高速言語の『腹話術』を用いて多重召還炎獄魔術式『等活地獄』を詠唱起動する。
普通に音として聞くと時間軸がワヤだし、一音に複数情報を持たせているから、意味不明な雑音にしか聞こえないが、それでも敢えて文字にするなら←←←こんな感じだろうか？

「
す我よ大疾く掛ける我が声は　赤き炎　青き焔
べが我地風に拡散し消え失せ
　烈火の渦よ
て召がにようとも我が意思は　真白き陽炎よ
を還声火消えず火霊もまた我　焦土と化し　煉獄の中で
焼にがのが意思が続く限り炎　勝利と
き応届花の洗礼は尽きる事無　苦しみの焚き木を燃やせ
　絶望と
尽じきをく等しく数多を灰に　浄化の焔よ　黒き炎
く馳し咲我と火霊の契約に基　敵を滅ぼし
　爆炎の息吹き
すせ全かづき我が魔力を糧に　終わりを告げる者
炎参てせ業火の則を顕わせし　命を刈り取るもの
　永久の高熱を齎せ
よじのよ祈りを言葉に力を言霊に
　炎の地獄ここに在り」

押し寄せる大軍の前方、砦との中間に赤く輝く火霊が一つ、二つと浮かび上がり、
それは瞬く間に横一線に爆発的に増えて行く。
やがて……横一線にならんだ火霊達が今度は縦方向、すなわち敵軍団を縦断する形で増殖
し、一斉に火を噴き上げ、敵の大軍団を炎の中に埋め尽くしていく。

火霊の一つ一つは大した威力では無いが、これだけの数、等間隔で狭い範囲に並んだ火霊
が発する熱量は、トータルすれば相当なものだ。

「すげっ」
「凄いっ」

カズヒサとニアが感嘆の声を上げる。けれど、

「……でも、あれじゃ無理」

レティがつぶやく、それとほぼ同時だった。

『『『『『『『『ドドドドドッ』』』』』』』』

敵軍の後ろから広大な戦場を飲み込んで余りある程の大量の水が押し寄せて来た。
その大量の水は『等活地獄』の炎を消し去ってしまったのだ。

「精霊使いが居る限り、戦場で火計は通じない」

レティが親切に教えてくれる。御親切にドウモ。

「ファリナ、敵の大軍を前にもうドキドキは十分体験出来ました。これ以上もったいぶるのは止めて貰えると、僕のか弱い心臓が助かります」

「あたしもだよ、ファリナのその平気そうな顔はコレを読んでたんでしょ？」

そう、スニージーとオーリスが次の手を催促してくる。

わたしは肩をすくめると、

「今のは戦場に水を撒いて貰うための前振りだから。敵の中には邪神の水鎧を着てるのが居るからね。わたしが水系魔術を下手に使って無効化されるより、敵に水魔法使って貰うのが効果的かな？って」

「水なんかどうするの？」

ニアが尋ねる。

「うん。説明するより見た方が早いよ。水晶姫、出番だよ！」

わたしの隣に姿を現した水晶姫がイヤそうに言う、

「大量の水……あのエゲつないヤツ使うの？　アレはあたし的に気

が進まないんだけどぉ」

「いーから。ほら、チャチャっと三酸化硫黄をいっぱい作っちゃってくれなさい」

「サンサン界王？　なんじゃそりゃ？　元気玉か？」

バカヒサがボケる。ここはつっこむべキなのかしら？

「三酸化硫黄よ。Ｈ２ＯにＳＯ３を放り込むとどうなるかくらいは知ってるんでしょ？
大地の上位精霊たる水晶姫だったら大量の三酸化硫黄を生成出来るのよ。
今なら敵は足まで水に浸かってるから、その状態では邪神の加護が在っても意味無いわ。
素敵な事になるわよ～ｖ」

「Ｈ２……却下！！！！　そんな非人道的な術は認めないっ！！」

「なんでよっ！！？？」

「なんでもじゃない。とにかくっ　酸はダメ！！」

「「「「「「　酸！？　」」」」」」

「あ、あのファリナ、酸は出来れば止めて欲しいと……」

ニアまでそんな事を言い出す。

「だから、なんでよ？　なんか理由があるの？」

少し声の調子を押さえて質問する。
カズヒサ達は答えない……顔を伏せていたルーが、ふっと顔を上げて、

「この間、魔将軍の一人と戦った時にな。吐かれた酸をドジ踏んでかぶってしまったんだ。
シャイアが頑張ってくれたお蔭で、数日で治りはしたんだが……」

ルーは顔色が少し青褪めているし、シャイアは眉を顰めている。
女の身で酸をかぶったなんて良い思い出では無いだろうからね。

「わかーった。酸は使わない」

「すまん、ファリナ」
「すまない、ファリナ」
「ありがとう、ファリナ」

カズヒサ、ルー、ニアからは謝罪され、オーリスとシャイアは緊張が解け息を吐いた。

「次の策はあるの？」

ジルの質問に答える前に、わたしはカズヒサへ質問を投げ掛ける。

「炎は良いわけ？　酸も炎も大差ない気がするけど……」

「ああ、炎なら構わない。けど、火計は効かないんじゃなかったの

か？」

「平気よ。今度は水では消えない炎を使うから」

ポシェットから予備の服を取り出す。

とうとう、これを使う時が来たのね。

フッフッフッフ。

わたしがゴソゴソやってる間に、ニアがカズヒサへ質問している。

「さっきカズヒサが言ってた元気玉って何のことですか？」

「ああ、こう頭の上にそこら中に居る全員の元気……マナみたいなモンを集めて、攻撃用のデッカイ玉を作り、相手にぶつける技だよ」

「……それってあんな感じの？」

ん？？

ニアは敵の方を指差している。

わたしとカズヒサ達は全員、指差された方を見て……

「……ホントだ、元気玉だ……」

敵の大軍の上にボンヤリと輝く大きな魔力の塊が少しずつ大きくなって、眩くなって行くのが見えた。

『あれは『マナシェア・エナジーボール』という術で、精神の精霊の力で全員の心を繋ぎ、全員から魔力を集めて巨大な玉を生成する『マジックミサイル』の一種だ。
当たればこの砦は吹っ飛ぶぞ、発射まであと７３秒だ』

なんだって～～！？

むー、高みの見物中のプニ神は、わたしの苦労する姿がずいぶんと楽しそうね！！

41ページ目（後書き）

げふ、コレストロールとか書いてしまった。
あまりに恥ずかしいから修正シマスタ。

42ページ目

42ページ目

『大熱地獄』

時間も無いことだし、大宝珠に秘められた極大魔術式をサクっと起動した。

どうせなら真打ち宜しく、魔術式のアレコレをバカヒサに自慢してから披露したかったが、
敵の元気玉が完成する前に大慌てで起動してしまったよ。
走馬灯のように浮かぶ開発に苦労したアレやコレやらを面白おかしく聞かせたかったな～。

カズヒサ達は、視界全てを覆う炎と、肌を焦がさんとする熱量を前に言葉も無い。
上空の精霊力からの感じでは、どうやら元気玉は炎に飲まれて消え去ったようだ。

ノースアイゼン砦に攻め寄せた敵は、いまや天へと届くほどの巨大な炎の壁に飲み込まれ
ている。炎の壁そのものは砦から数百メートル以上離れてるものの、

圧倒的な熱量がここ
まで伝わってくる。

『大熱地獄』は、燃える炎より上層に存在する水を、水素と酸素に
分解しながら、それを
糧に燃え続ける魔術式だ。
この魔術式の恐るべき点は炎を消火するために、新たに水が撒かれ
ても、その水全て燃や
してしまう点にある。この世界では、消火法と言えば水を掛ける程
度の知識しか無いので
対処法を逆手にとって被害をさらに広める極悪な魔術式なのだ。

もちろんセーフティも備えている。術が発動した地表より下の水は
燃やさない。
じゃないと川や海の水まで燃やしちゃうからね。
触媒である所のわたしの服に、魔力が十分蓄えられているならば『
雨天』という条件付き
となるが、一つの国全体を焦土とすることも可能とする危険な魔術
式である。

敵の足元の水は直接は燃えてないものの、先ほど水が流された際に
付着した上半身やらの
水滴からは猛火が吹き上がっている。気体化した水素と酸素が燃え
てるので逃げ場は無い。
厳密に言えば水の中に潜ればセーフティが働いて火は消えるのだが
……魚でも無い限りは
やがて呼吸のために水から顔を出さなければならない。
その時、大量の水を浴びて濡れたまま顔をのぞかせたことを後悔す
るだろう。

『エルヴンデビニッシュチュニック』
わたしの身体から発散される余剰魔力を溜め込み、２４時間、３６５日間着続けることで
一国の国土全てを焼き払う国家殲滅級の魔力触媒として完成する、
ハズだったのだが……

「それって、計画倒れじゃないの？」

はぅ。
オーリスから突っ込み来た……

「だってファリナってば、服がちょっとでも汚れると着替えてたでしょ？
一緒に旅してた時だって、一日に２度、ううん、夜着も数えれば３度は着替えてたよね？
お洗濯を魔法で出来ちゃう人ってそういうトコロが贅沢だなぁ。って見てたのよ。
そんな服の使われ方で魔力が十分に貯まるには何年掛かるの？」

ざっくり計算すると、４日に一回、８時間着たとして……１２年。

「１２年ねぇ？　……あたしなんて、おととしの服ですら、もう着てないよ」

ふんっだ。本気で国を滅ぼしたい訳じゃないから、これで良いのだ。
それを、真面目に計算するほうが負けなのよっ！！

『　バッ　』

唐突に、炎の壁が不自然な形で消え失せた。
炎が燃えて居たただろう敵が居た辺りには、白い靄がかかっている。

……ふん、そう来たか。

『想いを現実に換える術だな。術者の想念を核とし、大勢の想いを束ねて、ただの夢想に
過ぎなかった幻を現実の世界へと具現化せしめている。
これはその応用で『ザタン・ファントム・ミストフォートレス』という術。
本来個人のみが得られる邪神の加護だが、軍団全てを加護下に置いている。
さっきの『マナシェア・エナジーボール』も同じような理屈だ』

わざわざプニ神が説明してくれるまでも無い。
見ただけで霧の術が普通の魔力で構成された術では無いことが解る。
精神の上位精霊を利用して魔王軍全体で一つの魔法陣を構成している。
これだけ強力で、かつ、細やか術式は術者一人の力では成り立たない。

魔将軍がどれだけ軍団員の信頼と協力を得られているのか、この術式を診ただけで容易く推察出来る。正直、こうして敵味方に別れてなければ話をしてみたい相手だ。

だけど、

「むっかつくー。無駄にしちゃったわたしの服カエセーっ！」

わたしは魔力炉を取り出して水晶姫に渡し、

「アレやるわよっ。炎で死んどきゃ良かった！！って後悔させてやるっ！！」

すると水晶姫はカズヒサに手を伸ばし、のたまった。

「ちょっと、そこの勇者。世界平和のために魔王倒すより先にコレ倒しなさいよっ！！」

「おだまりっ　ほらほら。チャチャっと準備なさいっ」

もとより無駄な抵抗を長々するつもりも無かったようだ。

水晶姫の頭の上に芽のような物が生えて来たと思うと、あれよあれよと言う間に茎が伸び、

その先に向日葵のような花が咲いた。

さらに水晶姫は後ろ手に魔力炉を抱えて、

「ほら、これで良いでしょ？」

先日、対リッチ用に外注しといた邪神の加護を打ち破る兵器の形態へと水晶姫は変化する。
だけど、わたしがイメージしてた物とだいぶ違うし……なによりカッコ悪い。

「もう少し、茎を伸ばして、花を前方に移動させて頂戴」

とりあえず多少注文をつけ、微調整で誤魔化すことにした。

「これって、花ガッｐ「あ～～っ！　聞こえないっ！！」はいはい」

はーはー、バカヒサの突っ込みは遮ってやったわよっｖ

魔力炉を左に動かすと向日葵は右を向き、魔力炉を右に動かすと向日葵は左に向く。
そんな風に向日葵の向きをこちらの意思通りに動かせることを確認してから、
とりあえず砦に一番近い場所、敵が隠れているだろう突出した霧の辺りに狙いを定める。
敵は霧にまぎれて徐々に砦へと押し寄せつつある。

魔力を魔力炉に注ぎ込むと、一瞬『キーーン』と音が聞こえたが、
直ぐに何も聞こえなくなった。しばらく待っても何も変化しない。むろん、敵の霧も変わらず。

「何してるんだ？　ファリナ？」

カズヒサの問いには答えず、というか、答えづらい。
炎の壁は言わばスイッチ一つで自分の見えない場所で勝手に敵が死んで行くようなゲーム
感覚に近い。比べると、この兵器は明確にわたし自身の意思で操っており大量の敵の命を
こうしている間も奪い続けているのだから。
イザという時に備えてニアにも魔力炉の操作を覚えてもらったが、
実際にやってみると、
彼女を巻き込まず、自分独りが手を汚せば済ませられそうなのは心の救いだ。

わたしは向日葵の向きを敵が隠れている霧に沿って横一線に動かす。
右から左へ。
霧の端まで動かすと、今度は少しズラして左から右へ。
そしてまた端まで来ると、また少しズラして右から左へ。

最初に気付いたのはレティだ。

「変だよ！？　敵の霧が近付いて来なくなった……というより薄れて来てる！？」

そこから先の変化は劇的だった。あっという間に霧が晴れていく。
そして、そこにあったものは……

「なんだ？敵が倒れているぞ？？」

敵を覆う霧は、敵軍団の先頭、砦に近い所からどんどん薄れて消えて行く。
同時に、霧が晴れて行く部分では、そこに居たハズの敵は全て倒れて伏し、それどころか、
敵兵が逃げ出している所すら見える。

霧が薄れた場所で敵兵がまだ立っている所に向日葵を向けると、立っていた者達から赤い
霧状のものが噴出し、そして倒れるのが此処からでも見えた。
さながら白い霧が晴れ、赤い霧が戦場を覆っていくかのように……

「まだ死んでないけど、体内の精霊力が目茶目茶になってる。アレじゃ、もう助からない」

レティが敵の精霊力を〝視て〟皆へ教える。

そうして、数十回、向日葵を往復させると敵軍団で目に付くところで立ってる者は居なくなった。

「何をしたんだ？　ファリナ」

皆はもう、わたしから質問の答えを聞いても、内容が理解出来ないと思ってるからだろう、
質問はカズヒサの役目になっている。

「水晶姫の身体はその名の通り水晶で出来てるのよ。ここに電気は無いけれど、その代り
魔力炉から供給した熱を大地の精霊が力に変換することで代用して

るの、だから……」

「水晶発振？　レーザーか！？」

「ちょっと違う。電磁波はこの世界には無い物だからレーザー兵器は敵邪神の加護で遮られちゃうわね。だから、周波数をもっと下げてる代わりに出力をトンデモ無いレベルまで上げてるワケ。この魔力炉はこう見えても小型の太陽並みの出力があるのよ」

「……メーザー兵器？」

「当たり。邪神の加護はただの音は遮らないから、超高周波で超出力の音をぶつけたの。白い霧は、いわば邪神の加護に対する軍団兵の絶対の信頼で成り立ってる術だからね。邪神の加護をもっても素通ししてしまう謎の攻撃を前にすれば動揺しないワケが無い。結果は見ての通り。文字通り霧散したわ」

わたしは魔力炉を操作するのを止め、皆を振り返り、

「さぁ！！　これから敵集団のど真ん中に突撃して、敵魔将軍を討ち取るよ！！
準備は良いわね！？」

ほぼ無人の野のごとく戦場のど真ん中まで皆を連れて移動する。
ここまでに、わたし達の行動を邪魔するような者は斃れ伏せており、存在してなかった。

「リアラ、『結界』を張って」

「はい。
善を司るミラー神よ。全能なるその御力で邪な力を断ち我等を御守り下さい、護りの壁を
築き、内なる我等に安寧をお与え下さるよう『セイクリッド・プラッズ』」

「ジル、やっておしまい！！」

「判った。ジェラルディ・エリザベス・リム・リーベフェルマの名において命じる。
魔剣に秘められし力を解放する。心の奥底に潜む世界を現世に具現し暴虐の祭りを開け！！
『ブラッディ・カーニバル』」

それは、魔剣に蓄積された使い手幾世代分の命で贖われた魔法陣を、現世に解き放つ呪文。
そして、今頃になってイライザは略称だったのだと判った。

世界が影に呑まれて行く……

召還された夢幻界がこの現実の世界に重なる。その範囲は戦場フィールド全てを覆う規模。
物理法則が異なる夢幻界が重なれば、現世の者では行動すらままならなくなる。

だが、召還者であるジルはもちろん平気だし、プニ神から贈られたお守りを持つウインとレティ、スニージーは「如何なる状態異常からも護られる」ので半現世と化したこの戦場でも動きを妨げられることが無い。

リアラの結界内は善神バルミラー神の加護が働いているので、カズヒサやニア達はこの中から援護を飛ばすことになっている。

戦場にまだ生き残っている魔王軍の軍団兵は、次々と襲って来る夢幻界の怪物に襲われ、さらに数を減らしている。
夢幻界の怪物達にはわたし達も襲われるが、カズヒサやウイン達が素早く片付ける。

魔王軍はすでに壊滅状態だったが、『ブラッディ・カーニバル』が止めを刺した。

「……来たわね」

狂乱の元がここである事は精霊の力を感じ取れればすぐに判る。
そうして待つことしばし、向こうから一見すると女性に見えなくもない青年が歩いて来た。
腰まで伸ばした髪、とても丁寧な顔の造り、体は痩身だがひ弱な感じは受けない。
二十歳そこそこに見える青年だが、人間とは全く異なる存在、皮膚が緑色だ。
植物の怪物、ウッド・マンなどと呼ばれる種族なのだろう。
右手に短槍を持っている。その穂先は紫色に眩く輝き、強力な魔力が付与されている。

植物はドライアードやアルラウネといった精神系の精霊・魔物と関わりが深い。
なるほど、イケメン魔神はそれなりの高位精霊。接触が難しい精神の精霊の中でもさらに
関わりを持つには難しい存在と、如何にして契約出来たのか謎だったが、植物ならば垣根
も低かろうと腑に落ちた。

青年は、少年のようなボーイソプラノの声で、

「やってくれたじゃ……ふん、手癖の悪い人間どもめ」

青年が話し始めると同時にレティが矢を放ったのだが、余裕の紙一重でかわして見せた。
矢が纏った精霊術は、身に付けたワインレッドの鎧から放たれた力で消し去られている。

「アンタが魔将軍ね？　今更細かいことを言うつもりは無い。ここ

で死んでもらうわ」

「是、お前達を皆殺しにして喪われた同胞への手向けとしよう」

わたしは双剣に魔力と霊力を通し、構える。
青年……魔将軍が魔法の槍を構えるのと、ウインが飛び出すのは同時だった。

カズヒサが光る刃を飛ばし、レティとオーリスが矢を放ち、ウインが縦横に剣を振るう。
なのに、魔将軍はそれら全てを最小の動きで避け、弾き、ウインへ反撃してくる。
マジックミサイルは必ず命中する術だが、ニアやスニージーが放つそれらの術は悉く鎧が
持つ加護によって阻まれてしまう。

「私も」

ジルが接近戦に参加するが、あろうことか魔剣の剣筋を見切り、刃が振り下ろされる途中
で弾かれ、弾かれたジルの刃がウインの黒剣を邪魔する形となった。
かろうじてウインがジルの体に体当たりし、ジル目掛けて走った魔槍の軸線から外した。
魔将軍の動きは明らかにこちらの動作の一歩先取りをしている。

……行動が読まれてる!?

「我が魔術の奥義は、敵の心の奥底から湧き出る思考を読み取り、先の先を取る事に有る。
お前たちの技なぞ当たらんよ」

そういうことか！！　ならば、

「わたしがやるわ、皆は手出ししないで」

向こうは短槍、こちらは刃の短い双剣、間合いは向こうが有利だが……

右・左・また右、単純な突きではない、相手の穂先を巻くように螺旋の動きを加え、槍の動きを片剣で抑え、あるいは弾きながらもう片剣でその隙を狙って突きを放つ。

敵も小円の動きで槍が封じられないよう、逆にこちらの剣を封じるよう動く。

己の間合い……制空圏の取り合い。だが、魔将軍の方がやはり動きの先手を取って来る。

左の剣で槍を強振すると同時に右剣を斜め右下から左上へ切り上げ、魔将軍の体を掠めた。

「なにっ！？」

さらに一歩踏み込み切り上げた右剣で槍の柄を捉えて戻せないよう壁を作り、左剣で敵の胴体を薙ぐが、右手首を中心に槍を回転させ、石突側の柄を用いて刃を防がれてしまった。

「な……んだと!?　攻撃の機先が読めないだと?」

精神の上位精霊を使い、相手の手の内を読んで、攻撃タイミングと剣筋を見切る彼の術は、わたしには通用しない。

「つまんない術ね、もう見切ったわ。次で終らせる」

双剣を腰に戻し、背中の火竜の剣を抜く。

『幻影』

わたしが動いた跡に、わたしそっくりな幻が浮かび、幻像はわたしが動く度に増えて行く。

さらに、摺り足で小さく円を描くような歩法を描きながら、敵魔将軍の周りを移動する。

単純な横移動ではない素早い小円の歩法は敵から見てふわふわと微妙に遠近感を狂わせる。

そして、

「ムーンウォーク?」

カズヒサが気付いて声を上げる。

そう、摺り足での移動に見せかけた『リニア』を使った浮遊術による移動法は、体捌きが

右移動でも左に動いたり、一歩の歩幅で数歩分移動したり、逆に全

く移動しなかったりと、
予測がつかない。身体の動きでの先読みは不可能。
魔将軍は槍を半身に構え、わたしの動きを注視していたが、

「ふっ。術におぼれたなっ……ハッ！！」

魔将軍の魔槍が繰り出され、わたしの胸が貫かれた。
口と胸から血を噴出しながら、全ての幻影と共に仰向けに倒れる……

「「「「「「「「「ファリナ！！」」」」」」」」」

皆から悲鳴の声を上がり、
魔将軍は得意げに語る、

「お前のその幻の分身術は、一瞬だが地面に影が映る時がある。
ようはその瞬間を狙って本体を捉えれば良……グハッ」

魔将軍の身体を後ろから貫く刃。

「ぎ……キサマ……」

「わたしの幻影術の綻びを見つけて勝った気になったようだけど、
ワザと隙を見せつけて

相手の行動を自分の思う通りに誘導する、これはそういう技術。
精神の精霊を使役し、敵の手の内を読む事に慣れてしまったアンタは、地面へ影が映るという初歩的なミスを疑いもせず飛びついてしまった。精霊に頼り過ぎたのが敗因ね、って、
もう聞こえないか」

火竜の剣で身体の内側から焼かれているのだ。異世界に逃げ込んでももはや助からない。
息が在ったとしても、もうじき死ぬ。

召還されてた夢幻界が薄れ消えて行く。『ブラッディ・カーニバル』の効果が切れたのだ。
もはや魔王軍は軍団の体を為して居らず、統率する魔将軍も斃れた。
わたしは魔将軍に背中を向け皆の所へ戻る。

「ファリナ！！」

皆が駆け寄ってくる。

「どうやって行動を読まれなくしたんだ？」

ウインの疑問に対し、

「ん？　わたしが着てる鎧がゴーレムだってこと、忘れてないよね？」

「あぁ？」

判って無いウインに代わって、カズヒサが答えを出す。

「つまり、あれか？　魔将軍はファリナの意思を正しく読み取っていたけど、ファリナの意思とは無関係に動く二人羽織のゴーレムが、勝手に魔将軍を倒したワケか？」

「その通り！！」

わたしはニッカリと笑った。

「相手の技をつまんねーとか言ってたけど、それこそ、つまんねーオチだな！！」

ふんっ　技ってのはそういうのの積み重ねなのよっ

砦に帰って来たわたし達を出迎える帝国軍の面々と、ユミカとプニ神。

「魔王軍に勝っちゃったんだ！？　凄いじゃないのリアファリナ」

ユミカがわたしに、コノコノーとばかりにウリウリしながら言う。

『やはり、ボケエルフだったか。こうならない未来も少しだけあったんだがな』

プニ神がそう言った瞬間だった。

『ドンッ』

砦の中央部に宙から何かが飛んで来た。
地面に蜘蛛の巣状のひび割れが走り、その中央に膝を突いた男が…
…立ち上がる。

あれは……魔将軍!?　生きてたの!?

魔将軍がユラリと動いた、その次の瞬間、
突然、わたしは左側から衝撃を受け、生きた鎧の左胸から左腰部分
が吹き飛ぶ。
わたし自身も吹き飛ばされながら、わたしの左腕が千切れているの
が視界に映った。

……致命傷!?

『止めを刺さなかったのは慢心だったな』

最後にプニ神の声が聞こえた気がした。

わたしの身体は宙を回転しながら跳ね飛ばされ、地面に落ちるより
も前に意識は深い闇の
底へと落ちていった。

42ページ目（後書き）

プニ
「魔王軍からピンクを救ってくれたのは嬉しいが、最後にこれではな。
問題は全問正解でも名前を書き忘れたに等しいチョンボだと思わんか？」

エルファリナ
「……」

プニ
「いつもならこっちで勝手に補完してやったが、前回からまだたったの4日だぞ？
抗議の意味も込めて記憶の補完はヤメだ。とりあえず記録取っとけエルファリナ」

エルファリナ
「なんでわたしがっ！？」

プニ
「ん？　お前が世界を元通りにしてくれるって言うなら俺が記録係やるぞ？」

エルファリナ
「……出来ない……」

プニ
「ったく。せめて出来るようになってから口ごたえしろ。これだか

らユトリは」

エルファリナ
「ユトリ関係ないし……それは一種のパワハラですよ”竜王の君”」

プニ
「……変な名で呼ばんで欲しいね、それを言うならお前さんが”深紅の君”だろ？」

エルファリナ
「わたしはわたしよ。……この話題は止めましょうか」

プニ
「俺はそんなモンじゃないが否定しても自分の潔白を証明出来んしな。まぁ良い。
記録係は俺が見繕ってやろう。お前には仕事がある」

エルファリナ
「聞きたくなぁ～～～っい！！　アレを抑えろって言うの！？無理っ！！
そもそも、なんで形の上では上司のわたしが仕事振られるの～～～っ！？」

４３ページ目　守護者ユミカの観察記その１０万飛んで？（前書き）

ここまで間をあけてしまって申し訳ありませんでした。
小説書くのって、わたしに取っては究極の癒しとなりました。
ほんわかエルフを待っててくださった方も、そうでない方にも、読んで楽しんで
頂ければ嬉しいです。
必ず終らせる決意で、毎日コツコツやってきますね。

４３ページ目　守護者ユミカの観察記その１０万飛んで？

４３ページ目　守護者ユミカの観察記その１０万飛んで？

……トゲエルフが地面に倒れ伏している。

斃したハズの魔将軍が突如として目の前に現れ、一瞬でリアファリナを倒したのだ。

リアファリナは……身体の左胸から腰にかけてが吹き飛び、左腕も千切れてしまっている。

こうしている間も彼女の周りには、見る見るうちに血溜まりが出来上がった。

誰がどう見ても即死。

……ある意味驚いた。

あの火竜に勝ったヤツがこの程度で死ぬの？？

この観察記を初めて見た者は、あたしが誰なのか知らないだろうから自己紹介しよう。

あたしは人間だった頃、カミーユ・ライヴァッハと呼ばれていた。

ブリューグフト大陸のはるか東に浮かぶスーザファト大陸の、とある小国の出身だ。

両親は割と裕福だったので、あたしが子供の頃は家庭教師を雇っていた。
その人は魔術師だった。
その事が、あたしの一生を決めたのかも知れない。

やがて冒険者となり、あたしは魔術師としてあちこちの国を渡り歩いた。
同じパーティーの神官を夫とし、子が出来たことで冒険者を引退した。
夫との結婚式の日に、夫の信仰するプニ神が祝福の為に降臨した事で、プニと知り合った。

夫が亡くなった後もプニは定期的にあたしを訪れて、寂しさを紛らわせてくれていた。
やがてあたしは歳をとり、死の病を患う。
好き勝手に行動し魔術を極め、世界を巡り知識を広げたあたしだったが、一つだけ心残りが在ったのだと、その時になって気付いた。

『あたしはプニの事を何一つ知らない』

とはいえ、死の淵でその事に気付いても後の祭りというものだろう。
あまりに時間が足りない、まだまだ生きたい。
なんだろうね？　自分がこんなに往生際が悪かったとは知らなかったよ。

プニは神だ。人の寿命に関与したことは、あたしが知る限りそれまで一度も無い。
だが、寿命を延ばさなくとも永遠を望む方法が、この世界には存在する。

アンデット。
禁忌と呼ばれるソレは、過去に大いなる災厄を世にもたらした最悪の存在として忌み嫌われてた。それでもプニと一緒に存在し続けるには、それだけがあたしの知る唯一つの方法。

無事に？　あたしはバンパイアとして転生した。契約神はプニ。寿命を延ばしはしないが、自己責任で人生を選択しようとする信者の願いは叶えてくれた。

気付けば、年老いたあたしの身体はいつの間にか若返ってた。禁忌とされるアンデットとなったからには人としての名前は忘れよう。
これを機に、名前を逆さにしてユミカと名乗ることにした。

バンパイアとして、プニの神殿守護者として何年が過ぎ去ったことだろう？
思い返せば一瞬だったようにも思える、充実した毎日。

そうしたある日のこと。
勇者が召還されたことは、神殿へ時折訪れるニブルヘル出身の子達から噂で聞いた。
ノースアイゼン砦に滞在する勇者が危険に晒された時には、魔法でプニと話したけれど、
あのシニカルなプニにしては珍しく、積極的に勇者を助けているな

ぁ？　と思ったものだ。
過去にも何度か勇者が召還されたことはあったが、直接介入したのはこれが始めてじゃ？

そうしてやって来たノースアイゼン砦で勇者の男の子は、プニの別身（エイリアス）を借用中のあたしのことをやけにジロジロ見た挙句、唖然として声には出さず、口は『シーータ』と動いた。

シータ、思い起こされるのは、創生神シータ。

この世界には、プニのことを創生神バルシータと呼ぶ人が少なからず居る。
また、プニがこの世界『ネイワース』を創ったのだと主張する人々も居る。
いまだに解けてない、プニの謎の一つ。

勇者を観察することで……あたしは今まで謎だったプニとシータの関係、ついでに勇者とプニの関係にも、近付けるかも知れない。

……勇者の名はカズヒサと言うらしい。
情報源は女エルフ。
自称がトゲエルフだというこの女エルフは、出会った時からとにかく常識を外れていた。

試練のダンジョンでは、雲霞の様に押し寄せる『永遠の罪人達』を蹴散らし、ただ一人で神殿まで走破してのけた。

あたしがダンジョン内に放っている密偵代わりのバンパイア・バットからの連絡によれば、邪神ザタンと契約してアンデット化したライトワンと途中で遭遇し、これも独りで退け、迷宮を巡回するゴーレム達を正面から単独突破し、あまつさえ、このあたしの魔法障壁をも破ってみせた。どれだけ高い魔力を保有しているのだろう？

さらには、その夜遅く火竜を打ち倒されたと緊急連絡も入った。おそらくは火竜を倒した時のものだろう衝撃は、神殿にも伝わって来ていた。

その衝撃でテーブルに置いた寝酒のコップが、目の前で床へ落ち割れてしまった、しかし、その次の瞬間、割れたハズのコップは、まるで時間を逆に回したかのように破片が一つに集まり、元通りのコップを形成し、浮き上がり、テーブルの上へ…元の位置へと戻った。

…まるで夢でも見ていたかのように寝酒が入ったコップは、揺れひとつない。

摩訶不思議な現象を突き止めるべく、あたしが出向いた先では在り得ない光景が広がっていた。

火竜が吐いたブレス攻撃によって超々高熱の嵐渦巻く部屋の中では、

『七色に輝く闇』と
しか言いようが無い、”何か”を纏って火竜を威圧するリアファリナが立っていた。
彼女の前には角を一本圧し折られて、大地に叩き付けられた火竜がいる。

……もうひとつ謎がある、コップを元に戻したのは誰がやったのか？

あとで判った事だが、不思議なことにこの時の衝撃による地震は誰一人覚えてなかった。
いや、ダンジョンの中は睡眠要らずで活動し続ける者達で一杯だ。
誰も地震に気付かないなどと言うことがあるわけ無い。
なのに、ニブルヘルの街でも誰もが口を揃えて言う、「あの夜に地震など無かった」と。

あたしの錯覚では無い、衝撃による地震は確かに起きたのだ。
割れたコップが元通りになったのも幻では無いのだ。

ならば答えは唯一つ、無かった事にされたのだ。時間が巻き戻されたのだ。
誰に？　あたしには解ってる、プニだ。
たまたまこのプニの別身（エイリアス）に乗り移ってたから、プニが行使する力の外に居られたのだろう。
巻き戻される時間の流れから取り残されたのだと思う。

結局そのリアファリナには、ライトワンとライハーラのアンデット二人組でも負けた。
あの調子では、あたしが本来の自分自身、バンパイアたる身体に戻

ってアンデット三人組で戦ったとしても勝てなかったに違いない。
いっそ、神の別身(エイリアス)であるこのチートな身体で戦っても良かったかも知れない。
規格外には規格外をと考え、ある意味嫌がらせと言える神殿上級守護兵をぶつけてみたら、あたしの悪足掻きをリアファァリナは軽くかわして見せた。
あそこでネヴィアシータの宝玉が出て来たのは予想外だったけど、それも彼女の運と実力のうちと考えるべきなのだろうか？

いま、そのリアファァリナは地面に倒れている。

「「「「「「「「「　ファリナっ！？　」」」」」」」」」

ファリナに駆け寄ろうとするウインゾフィーやカズヒサたち。
しかし、いつの間にか其処に居た、リアファァリナそっくりな、でも、どこか違う赤い女が
手を横に上げ、駆け寄ろうとする皆を押さえながら警告する。

「危ないから近寄ってはダメよ」

って言うか、アンタ誰よっ！？

「でもっ　でもっ　ファリナがっ！！」

サフィニア皇女は錯乱状態だ。
それでも見知らぬ赤い女に阻まれ近寄ることが出来ない。

「ヒトは滅び、光は闇に喰われ、希望は全て絶望に変わるがいい！」

魔将軍が空を仰いでナニやら叫えている。うわ、調子に乗ってるよ、こいつってば。

「なんだ？　なぜコイツが生きている？」

カズヒサが問いかけると、

『融合だよ。死の間際に精神の上位精霊と融合した。さらに、想いを現実とするその力で
己に残された全てを振り絞り、自らの身体へとザタンの降臨を願ったのさ。今のそいつは
邪神ザタンと上位精霊の力を併せ持っている』

プニが答えた。
あたしの前には魔将軍、その向こう側にプニとカズヒサ達が居る配置となっていた。

「此処に居る者どもに、死しても永劫に続く苦しみを与えよう！！」

魔将軍はあたし目掛けて巨大な、今のあたしから”視て”も尋常では無い魔力を拳に纏わせ
殴りかかって来る。踏み込みの力強さは地面を穿ち、圧倒的な力で

繰り出される拳の周り
は景色が歪んでいる。

ヤバッ、かわせない……

『バシッ』

拳があたしに届く直前。
光のカーテンが降りてあたしと魔将軍を分け、拳はカーテンを叩いただけに終った。

「なんだとっ!?」

驚く魔将軍。
続けて殴りかかってくるが、その拳は全て光のカーテンに遮られ、どれ一つとしてあたしには届かなかった。
ま、まぁ、プニが目の前に居るのに、あたしに危害が届くわけは無いと信じてたけどねっ。

『ザタンは創生神シータの従属神に過ぎない。シータの別身(エイリアス)であるその身体を傷付けることなど出来ないのさ』

この身体が創生神シータの？　どういう意味？　この身体はプニの別身じゃなかったの!?
困惑しつつも、プニの傍へと移動するあたし。

「くそっ　何だ今のは!?　キサマか、キサマがやったのか!!」

そう言って魔将軍は、今度はプニへと殴りかかる。
圧倒的な魔力を籠め、そのコブシ一つで山をも吹き飛ばしそうな破壊力を秘めたその拳は、
プニの顔に吸い込まれるように当たる、だが、赤ん坊がじゃれているかの様な可愛らしい
音しか立てなかった。

『ぺたっ』

プニは微笑みを浮かべ……顔をしかめることすらもしない。
魔将軍が何度殴ろうと、プニへダメージは伝わらない。

『ぴとっ』
『ぷにょ』

「なんだ……なんなんだ!?　これは」

邪神の力も併せ持ったという、魔将軍が繰り出す拳の一つ一つは砦を破壊し、踏み込みの
力強さは局地的な地震さえも生み出すことが可能なのだろう、本来ならば。

なのに、

プニは何もしていない。
拳を防いでもいない

魔力を放射してもいない。
何の力も見せていない。

だのに、何もして無いし、そこには何も無いのに、魔将軍の力はプニへ届かないのだ。
巨大で圧倒的な魔将軍の力は、プニに届く前にその全てが霧散していた。

「おのれ……おのれ～～！！」

魔将軍は宙へ手を伸ばすと、どこからとも無く魔法の短槍が手の中に現われる。
魔将軍はそれをプニの胸に突き立てた。と、同時に槍の穂先が眩く紫色に輝き、何かの術
を用いてプニへと攻撃したようだった。

「ふふ、ふはははは。どうだ！？　神殺しの術を喰らわしてやったぞ！！
いつかミラー神を倒すために創っておいた、ゼロ距離での無詠唱の術。
ザタンの破壊の力を持って為され、滅びの術を受けし者の魂は砕け散る！！
名付けて『ソウル・ブラスト』よ」

……プニは、
自分の胸の前で光り輝くナニかを、埃でも払い除けるように『パッ

パッ』と叩くと、
紫色の光は燃え尽きた線香花火のように、地面へ落ちる前に消えた。

『気持ちは判るが、こうあからさまに胸の先を狙うのはどうかと思うぞ？』

呆れたようなプニの口調。
と、そこへ声が掛かる。

「やるだけ無駄ね。神とそれ以外が戦えば、必ず神が勝つ」

リアファリナそっくりの、赤い謎の女が、静かな口調で説明する。

「神を越える圧倒的な戦闘力を相手が持ち、例え神の勝ち目が完全にゼロだったとしても、
そこから状況を引っくり返し圧倒的に勝つ。それが『無から有を生み出す』神という存在」

勝ち目が完全なゼロでも勝てる？　それが本当なら神に勝てる者はこの世に存在しない。

赤い女の説明はさらに続く……

「超必殺技だの、無限の魔力だの、神殺しの武器だのという勝つ為に条件を必要とする者
では神に勝つことは出来ない。そこの魔将軍もいま勝てねばこの先何年経っても勝てない。

なぜなら、力が無くても、経験が無くても、身体が虚弱でも、武器が無くても、勝ち目が

完全にゼロでも、それでも勝てなければ神には永遠に届かない」

赤い女は、首を横に振りながら言う。

「ゼロ距離での無詠唱？『無から有を生み出す』神相手に、それはどんな意味があるって言うのかな？」

最後にプニが補足する。

『神は理（ことわり）を創りだす者、お前達は理に支配される者。行動の全てが神技（かみわざ）たる神は、冗談でも比喩でもなく、ため息一つでお前達の心臓を止めることが出来る。剣を持って無双するなんて夢を持ってた時代が俺にもあったよ。現実には勝とうと思った瞬間に、戦わずして相手は勝手に全滅してしまうがな』

魔将軍はブルブルと震えながら、

「ゆ、ゆるさん、我より強いヤツなど認めないっ」

『主神と従属神の違いを知るべきだと思うが。それではもう一度だけチャンスをやろう』

プニが言うより早く、魔将軍は手の平をプニへと向け……

「我に宿りし『夢幻の魔神』と『邪神ザタン』の怒りを借りて、いま！！必殺の！！
『奈落破壊光（アビス・アタック）』」

しかし、プニは術が発動する一瞬前に魔将軍の右側に回り込むと、

『トンッ』

と魔将軍の手を押し、まさに発射されようとしていた破壊の光を逸らしてしまった。
そうしてその光は、倒れていたリアファリナへと直撃……は、しなかった。

光はリアファリナに当たるかどうかと言うところで、不自然に消え失せる。
いや……別なナニかの力で掻き消されてしまったのだ。
光が消えたその場所には、いつか見た『七色に輝く闇』が取り巻いている。

プニは、魔将軍の首根っこを引っつかむと、ぽいっ、と無造作に片手で投げた。
魔将軍は『なにっ　ぬのぉぉぉぉおおお……』と声を上げ、空のかなたへと消えて行った。

『ご苦労、ちょうどいい時間だ。　さて、スリーピング・ビューティーのお目覚めだぞ』

プニの異国風の言葉は、耳に入ったとたん『眠れる迷惑娘（スリーピング・ビューティー）』と聞こえた。
魔将軍、殺さないんだ？　あっけなかった退場にしばしポカンとしていたら、

『これから忙しくなるんでね、御退場してもらったのさ』

どういう意味？　とプニへ尋ねようとしたところで気付いた。
ふと気付けば、いつの間に立ち上がったのか？
リアファリナが立っている。

「「「「「「「「「「　ファリナっ！？　」」」」」」」」」」

全員が先ほどと同じ言葉を叫ぶ。
しかし、今度のは困惑を秘めた声で。

彼女のトレードマークとなっている眼鏡は、どこかに吹き飛んでしまったのか、無い。
邪神の力に触れて変色した黒い肌は、初めて出逢った時のように白く輝いている。
千切れたはずの左腕は、どうやったのか元通りになっていた。
服は破れているが胸の傷は見えない。すでに治っているのだろうか？　血の跡すらも無い。

だが、その瞳には何も映って居なかった。
その顔には何の表情も浮かんで居なかった。
ただ能面のように、光が消えた瞳で静かに佇んでいた。

彼女が、ただそこに立って居るだけで、あたしの本能が逃げろと叫んでいる。
目に映る姿は人のソレでも、バンパイアの超感覚がアレは異質なモノだと告げている。
そのあまりの異質さに肌が粟立ち、胃から何かがこみ上げ、吐きそうになる。
そうして空間が、世界が、悲鳴を上げているような気がした。

誰もが一瞬で悟っただろう。其処に居るのは……
ボ～っとしてる時ですら表情豊かで、常に百面相してるリアファリナとは別物だと。
赤い娘が危険だから近付くなと言ったその相手は、魔将軍なんかじゃぁ、ない。

そこに立っているリアファリナ……ヒトの姿を模した『何か』をだ。

「ファリナっ!?」　カズヒサが叫ぶ。
「ちょっと!?どうしたの?」　レティアラが怪訝の声を上げる。
「いったいファリナはどうしたと言うの!?」　皇女が赤い女に尋ねる。

「単純に言えば、意識を無くしてる状態ね」

赤い女は、リアファリナの僅かな動きすら見逃さないよう厳しい目で見据えながら、

「その娘は7歳の時に何でも出来る力を厭って、その力を捨てた。その事は以前話したわよね。　捨てられたその力が”わたし”を形取ったとも。
何でも出来る力を捨て、でも、捨てたその時に、力を全て失っても何とかするコツを身に付けたのよ。すなわち『無から有を生み出す』コツを。神の業(わざ)をね」

『リアファリナは、気絶して心を無にした状態の時だけ『無から有を生み出す』技を使うことが出来る。理性が働かないから主に破壊の力としてな。まったくハタ迷惑な娘だよ』

プニは、やれやれと首を振っている。

『それと、今、俺はこれ以上リアファリナにもエルファリナにも利する行動を取れない。
だからピンク(カズヒサ)。こそっとお前だけに教えてやるが、たった今しがた、アイゼンワード皇帝、
および、帝国神祇団は、バルザック砦へ派遣した帝国軍４万が敗走したとの知らせを受け、
魔王軍との交戦続行を断念し、和平交渉へ舵を切ることを決定した』

「え？」

エルファリナと呼ばれたリアファリナ似の赤い女は、ギョっとしたように皇女を見て瞳を
大きく見開き、驚きの表情を浮かべた……

「しまった！！　『勇者召還の儀』がっっ」

『その通り。　和平交渉に先立って、魔王との交渉の障害となる勇者を始末するために、
『勇者召還の儀』の契約解除を宣言した。それにより勇者をこの世界に留めていた術式は
効力を失い無効となった。　あと４分４７秒後にピンク（カズヒサ）はこの世界から放逐される』

「「「「　えぇっ！？　」」」」

勇者パーティーの女性組みはプニのその説明に驚愕する。

「まずいっっ　カズヒサっ　急いでリアファリナを叩き起こすわよっっ
このままだとニアはあと２分３８秒後に命の炎が消えてしまう！！
　さらに２分後にその
存在は完全に消去されちゃうのよっ」

「「「「　え？　」」」」

皇女を除く勇者パーティー全員が再度驚く、皇女は泣きそうな顔になっていた。

「な、なんで？」

カズヒサが信じられない、という顔つきだ。

「勇者サマをこの世界へと召還するにあたって、神と契約をしたのです。事が全て終ったならば、この命を差し出します、と」

皇女は、大粒の涙を目に浮かべ、そう返事を返した。

「で、でも、まさか、それが今だなんて……」

『創生神シータとの契約だ、つまり、今では俺との契約だがな。神とかわした約定を、恩恵を受けるだけ受けて、支払いの段になってからまさかイヤとは言うまいな？』

「そんな……プニ神、なんとかして、くださいっ　何すればニアを救ってくれ、ますか？」

カズヒサが一縷の望みを掛けてプニに詰め寄る。

あたしは見てられなくて顔を背けた。

きっとプニだって見捨てたいワケじゃないはずだ。

でも……あたしは神であるプニの答えを、もう知っている。

「カズヒサ、プニもあたしも、神が決めた事柄を人間に守らせる側なのよ」

エルファリナはそう言うが、それで納得出来る人間はここには居まい。

「なら、俺がニアに掛けられた契約とやらを斬ってやる。この剣なら切れるハズだな！？」

『その剣の必ず当てる事が出来る魔力では、無い物を斬ることは出来ない。皇女の運命は
契約を交わしたその時に既に決した。未来が消滅した人間の運命に関与することは不可能。
命の炎が消えるまで3分間を与えたのは、知人との別れの挨拶に使うための温情だ』

「そんなっ！？」

打ちひしがれるカズヒサへエルファリナは、

「まだよっ、まだ間に合うっ　カズヒサ、プニもあたしもニアの運命を今更変えることは
やらないけどっ　プニでもあたしでもない誰かが『無から有を生み出す』力を使って
創生神シータの契約に介入するのは構わない。それが出来るのはリアファリナだけよっ！！」

カズヒサは、顔を上げると、

「そうか。　なら、さっさとファリナを起こして、頼むとするか」

そう宣言したその顔は、ちょっと見とれるくらい男らしいイイ顔だった。

あらやだ、あたしとしたことが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8569l/

ほんわかエルフのダイアリー

2011年10月9日03時22分発行